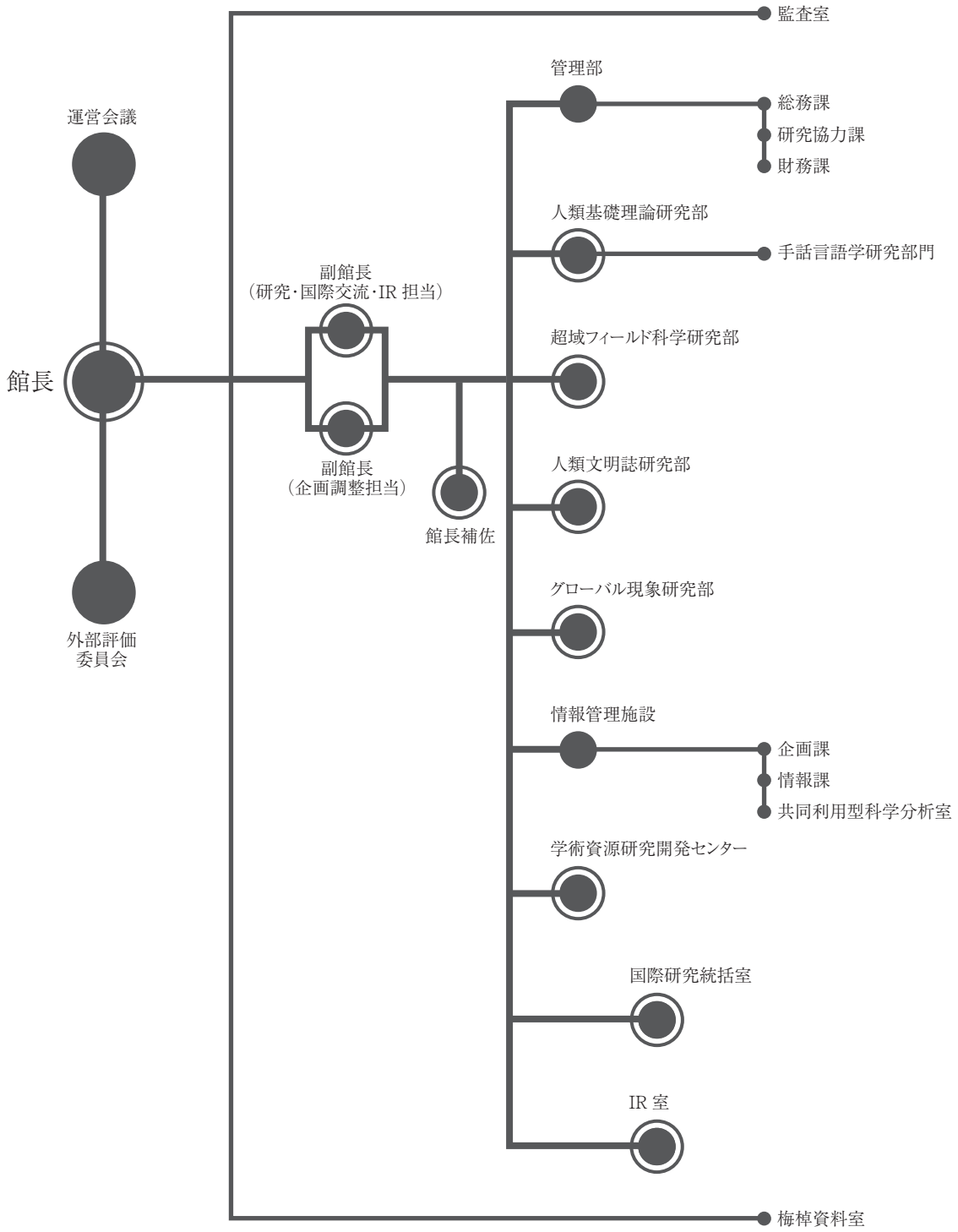
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

1．組織

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009596

1 組織

組織構成図 (2019年 3 月31日現在)



運営組織（2019年 3 月31日現在）

●運営会議

窪田　幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授*2
栗本　英世	大阪大学副学長*1
後藤　　明	南山大学人文学部教授*3
佐野　千絵	東京文化財研究所保存科学研究センター長*3
出口　　顕	島根大学副学長*2
富沢　寿勇	静岡県立大学国際関係学部教授*1
豊田由貴夫	立教大学観光学部教授*1
松田　素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨　俊夫	国立国際美術館長

（館内）

韓　　敏	超域フィールド科学研究部長*1*2*3
齋藤　　晃	総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長／人類文明誌研究部教授*1
關　　雄二	副館長（企画調整担当）*1*2
園田　直子	人類基礎理論研究部長*1*2*3
西尾　哲夫	副館長（研究・国際交流・IR 担当）*1*2
信田　敏宏	グローバル現象研究部長*1*2*3
林　　勲男	学術資源研究開発センター長*1*2*3
平井京之介	人類文明誌研究部長*1*2*3

注）*1　人事委員会委員
　　*2　共同利用委員会委員
　　*3　研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達　　淳	国立情報学研究所副所長
池田　博之	公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長
大野　　泉	独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所長
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部特任教授
堀井　良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長
水沢　　勉	神奈川県立近代美術館長
山極　壽一	京都大学総長
山下　晋司	帝京平成大学現代ライフ学部教授 東京大学名誉教授
山本　真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織（2019年 3 月31日現在）

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会
開館四十周年記念事業推進委員会
福利厚生委員会
安全衛生委員会
ハラスメント防止委員会
広報企画会議
特別研究運営会議
刊行物審査委員会
研究出版委員会
知的財産委員会
地域研究拠点運営委員会
大学院委員会
情報運営会議
文化資源運営会議
国際研修博物館学コース運営委員会
施設マネジメント委員会
危機管理委員会
大規模災害復興支援委員会
国際研究統括室会議
フォーラム型情報ミュージアム委員会
研究資料共同利用委員会

現員 (2019年３月31日現在)

区　　分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					28	28
情報管理施設					21	21
監査室					0	0
研究部		17(1)	20	3(1)		40(2)
学術資源開発センター		5	4			9
客員（国内）		7	4			11
客員（国外）＊		5	6			11
計	1	34(1)	34	3(1)	49	121(2)

注）（　）は特任研究員の人数を外数で示す
注）客員（国外）＊は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2019年３月31日現在)

●歴代館長

初　代／梅棹忠夫（故人）　1974年６月～1993年３月
第２代／佐々木高明（故人）1993年４月～1997年３月
第３代／石毛直道　1997年４月～2003年３月
第４代／松園萬亀雄　2003年４月～2009年３月
第５代／須藤健一　2009年４月～2017年３月
第６代／吉田憲司　2017年４月～

●名誉教授

祖父江孝男（故人）1984年４月１日
岩田慶治（故人）1985年４月１日
加藤九祚（故人）1986年４月１日
伊藤幹治（故人）1988年４月１日
中村俊亀智（故人）1988年４月１日
君島久子　1989年４月１日
和田祐一（故人）1990年４月１日
垂水　稔（故人）1991年４月１日
杉本尚次　1992年４月１日
梅棹忠夫（故人）1993年４月１日
大給近達（故人）1993年４月１日
片倉素子（故人）1993年４月１日
竹村卓二（故人）1994年４月１日
周　達生（故人）1995年４月１日
松澤員子　1995年４月１日
大丸　弘（故人）1996年４月１日
友枝啓泰（故人）1996年４月１日
藤井知昭　1996年４月１日
佐々木高明（故人）1997年４月１日
杉村　棟　1997年４月１日
和田正平　1998年４月１日
清水昭俊　2000年４月１日
黒田悦子　2001年４月１日
崎山　理　2001年４月１日
端　信行　2001年４月１日
小山修三　2002年４月１日
森田恒之　2002年４月１日
石毛直道　2003年４月１日
栗田靖之　2003年４月１日
杉田繁治　2003年４月１日
熊倉功夫　2004年４月１日
立川武藏　2004年４月１日
田邉繁治　2004年４月１日
藤井龍彦　2004年４月１日
山田睦男（故人）2004年４月１日
江口一久（故人）2005年４月１日
大塚和義　2005年４月１日
松原正毅　2005年４月１日
石森秀三　2006年４月１日
野村雅一（故人）2006年４月１日
大森康宏　2007年４月１日
山本紀夫　2007年４月１日
松園萬亀雄　2009年４月１日
松山利夫　2010年４月１日
長野泰彦　2011年４月１日
秋道智彌　2012年４月１日
中牧弘允　2012年４月１日
小林繁樹　2014年４月１日
田村克己　2014年４月１日
吉本　忍　2014年４月１日
久保正敏　2015年４月１日
庄司博司　2015年４月１日
八杉佳穂　2015年４月１日
朝倉敏夫　2016年４月１日
佐々木史郎　2016年４月１日
杉本良男　2016年４月１日
須藤健一　2017年４月１日
塚田誠之　2017年４月１日
竹沢尚一郎　2017年４月１日
横山廣子　2018年４月１日
印東道子　2018年４月１日

研究部教員の紹介（2019年３月31日現在）

組織図に基づく現員一覧

館　長		吉田憲司		
副館長（企画調整担当）		關　雄二		
副館長（研究・国際交流・IR担当）		西尾哲夫		
研究部	職名・研究部門	教　授	准教授	助　教
人類基礎理論研究部	研究部長	園田直子		
	第一超域	日髙真吾	福岡正太 山本泰則	
	第二超域		川瀬　慈	吉岡　乾
	第三超域	出口正之	丸川雄三 菊澤律子	八木百合子
附置	日本財団助成手話言語学	※飯泉菜穂子	菊澤律子（併）	※相良啓子
超域フィールド科学研究部	研究部長	韓　　敏		
	第一超域	樫永真佐夫 小長谷有紀	太田心平	
	第二超域		菅瀬晶子 松尾瑞穂	
	第三超域	ピーター・J・マシウス 宇田川妙子	新免光比呂 丹羽典生	
人類文明誌研究部	研究部長	平井京之介		
	第一超域		卯田宗平 藤本透子 寺村裕史	
	第二超域	池谷和信	上羽陽子	
	第三超域	關　雄二（副館長） 齋藤　晃	鈴木　紀	
グローバル現象研究部	研究部長	信田敏宏		
	第一超域		河合洋尚 廣瀬浩二郎	
	第二超域	西尾哲夫（副館長） 三尾　稔	相島葉月 南　真木人 三島禎子	鈴木英明
	第三超域	鈴木七美 森　明子		
学術資源研究開発センター	センター長	林　勲男		
	第一超域	野林厚志 笹原亮二	齋藤玲子 佐藤浩司	
	第二超域	寺田吉孝 飯田　卓	山中由里子	
	第三超域	岸上伸啓（併）	伊藤敦規	
	人文知コミュニケーター			大石侑香（併）
国際研究統括室		西尾哲夫（室長）（併） 池谷和信（兼務） 野林厚志（兼務）	卯田宗平（兼務） 河合洋尚（兼務） 山中由里子（兼務）	八木百合子（兼務）

※は特任研究員を示す。

吉田憲司［よしだ　けんじ］――館長

1955年生。**【学歴】**京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）**【職歴】**大阪大学文学部美学科研究生（1980）、ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2000）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）、国立民族学博物館長（2017）**【学位】**学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**博物館人類学、文化人類学**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

［単著］

吉田憲司

2014　『宗教の始原を求めて――南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999　『文化の「発見」――驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992　『仮面の森――アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004　第１回木村重信民族藝術学会賞

2000　第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993　日本アフリカ学会研究奨励賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

本年度は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」の一環として、南部アフリカ、ザンビアのチェワ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査を実施し、とくに博物館建設を介した伝統的首長制度の再構築のプロセスを検証する。

あわせて、博物館による文化の表象のあり方について、2000年以降の世界の博物館の動向を踏まえて、実践を通じて新たな提言をおこなう。

さらに、2016年度から開始した科研費による研究基盤リソース支援プログラム「地域研究画像デジタルライブラリ」の構築を通じて、写真や映像による世界各地の自然と文化の記録と表象について多角的な分析をおこなうとともに、分野横断的な新たな展開の可能性をさぐる。

・成果

チェワ社会を含む南部アフリカの文化の伝統とその創造的継承に関する研究については、チェワ社会に隣接するンゴニ社会で10年を費やして公開に至った、同社会のコミュニティ・ミュージアム、ンスィンゴ・ミュージアムの形成過程を追跡し、文化の継承にむけたコミュニティ・ミュージアムの貢献の内実を明らかにすることができた。その成果は、上記のルサカにおけるワークショップで公開している。

また、より広く、南部アフリカ全域を覆う宗教運動に絡んだ文化の継承・創造の過程については、これまでの作業で、その大要を把握しえたが、現在、その成果の欧文出版に向けた作業を進めている。

さらに、2000年以降の世界の博物館の動向に関する研究成果を踏まえて、広範囲な読者を対象とした博物館学の啓発書の刊行準備を進める一方、民博の所蔵する世界の仮面をもとに、世界の無形文化遺産の創造的継承のありかたを総覧する刊行物の編集を進めている。

「地域研究画像デジタルライブラリ」については、同プロジェクトの試行期間が本年で終わり、これまでの成果を受けて向こう３年間の本格実施が承認された。すでに蓄積されたデータの公開を開始したところである。

◎出版物による業績

［論文］

吉田憲司

2018 「岡本太郎と民博――70年万博の遺産（レガシー）の現在（いま）」特集「岡本太郎の民俗学」『季刊民族学』165：8-21。

2019 「ヨーロッパとアメリカにおける博物館の歴史と現在」『博物館概論』pp.52-73，東京：放送大学教育振興会。

2019 「アジア・アフリカにおける博物館の歴史と現在」『博物館概論』pp.74-94，東京：放送大学教育振興会。

2019 「日本における博物館の歴史と現在」『博物館概論』pp.95-114，東京：放送大学教育振興会。

［その他］

吉田憲司

2018 「現代のことば　『太陽の塔』のレガシー（遺産）」『京都新聞』５月１日夕刊。

2018 「インタビュー　日本とアフリカ、自己と他者」『M.L.J』1：100-119。

2018 「ごあいさつ」『国立民族学博物館コレクション 貝の道』p.6，神奈川：神奈川県立近代美術館。

2018 「現代のことば　新たな祭りの創成競争」『京都新聞』６月28日夕刊。

2018 「みんぱく開館40周年にあたって」『国立民族学博物館研究報告』43(1)：79-82。

2018 「現代のことば　遺伝的均質性と文化的多様性」『京都新聞』８月28日夕刊。

2018 「ごあいさつ」『特別展　工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在』pp.2-3，大阪：国立民族学博物館。

2018 「インタビュー　人類学からみた『色彩と認識』」『ART in EDUCATION 教育美術』79(10)：14-21。

2018 「現代のことば　オリンピックと博物館」『京都新聞』10月29日夕刊。

2018 「『南方共筆――継承される台南風土描写特別展』によせて　ごあいさつ」『南方共筆』pp.6-9，台南：国立台湾歴史博物館。

2018 「文明の転換点における博物館」『中国社会学学会中日社会学専門委員会2018年度年次例会・「トランスネーション――東アジアの知的生産、文化コミュニケーションと融合」国際シンポジウム』pp.17-25，杭州：中日社会学専門委員会。

2018 「インタビュー　『あゆみつつよむ　よみつつあゆむ』」『CLasism』12：60-61。

2018 「現代のことば　来訪神とサンタクロース」『京都新聞』12月21日夕刊。

2019 「日本人の忘れもの知恵会議『次世代のメッセージ』『異界』の存在を可視化した『仮面』力への憧れ、期待は変わることはない」『京都新聞』１月１日。

2019 「近代の『忘れ物』見つめ」『毎日新聞』１月23日夕刊。

2019 「現代のことば　津波をめぐる記憶の継承」『京都新聞』２月27日夕刊。

2019 「ごあいさつ」『特別展　子ども/おもちゃの博覧会』p.3，大阪：国立民族学博物館。

2019 「『民博通信』のオンライン化にむけて」『民博通信』164：27。

2019 「地域コミュニティと博物館」『れきみんきょう』(50)，広島：広島県歴史民俗資料館等連絡協議会。

2019 「文明の転換点におけるミュージアムの可能性」『2017年度 全国美術館会議 第32回学芸員研修会 報告書　社会状況の多様化に美術館はどう向き合うか』pp.118-134，東京：全国美術館会議。

2019 「会長就任挨拶」『民族藝術』35：6。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年９月28日　「パネルディスカッション」国際シンポジウム『ミュージアムの未来――人類学的パースペクティブ』グランフロント大阪北館ナレッジシアター

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月16日　「文明の転換点における博物館」岡山県博物館協議会総会2018年度総会、岡山県立美術館

2018年６月15日　‘The Museum: A Place of Transmitting and Creating “Memory”.’ The 23rd Science in Japan Forum “Memory and the Museum”, National Museum of the American Indian, Washington, D.C., United States

2018年９月７日　「国立民族学博物館の展示――新しい民博の本館展示のできるまで」展示論講座、日本展示学会、国立民族学博物館

2018年10月27日　「アート（美術）とアーティファクト（器物）――美術館と博物館のあいだ」第８回研究会シンポジウム『文化資源と〈もの〉がたり』お茶の水女子大学

2018年11月17日　「文明の転換点における博物館」中国社会学学会中日社会学専門委員会2018年度年次例会、浙江大学、中国

2018年11月23日　「フォーラムとしてのミュージアム、フォーラムとしての学術研究」総研大文化フォーラム、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年12月16日　「ザンビア・チェワの村での暮らし」第527回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年４月18日　「『太陽の塔』から民博へ――70年万博のレガシーの現在」ナレッジキャピタル大学校、グランフロント大阪

2018年５月12日　「美術館の過去、現在、未来――ミュージアムの可能性を考える」福岡ミュージアム連絡会議、福岡市科学館

2018年７月23日　「アートと人類学『イメージの力』展から」東京藝術大学大学院　『アートプロデュース特論』東京藝術大学

2018年８月30日　「民族の祭りと博物館の創成競争」国際協力塾、JICA 会議室（ザンビア）

2018年９月18日　「民博の新しい本館展示ができるまで――調査、収集、そして展示作業の記録」神戸市シルバーカレッジ、国立民族学博物館

2018年10月４日　「文化の展示の現在」JICA、国立民族学博物館

2018年10月11日　「仮面舞踏が明かす森のイメージ　ザンビアチェワの仮面結社ニャウの活動から」財団公益法人　丹波の森協会「丹波の森大学」、丹波の森公苑

2019年１月20日　「文明の転換点における博物館・人文科学そして医学」伏見医師会、京都ホテルオークラ

◎調査活動

・海外調査

2018年５月30日～６月４日―イギリス（王立人類学協会（英国）・大英博物館・ロンドン大学東洋アフリカ学院主催シンポジウム「アート、マテリアリティ、表象」シンポジウム参加・人間文化研究機構会議）

2018年６月13日～６月18日―アメリカ合衆国（日本学術振興会・日米学術フォーラム「記憶と博物館」（民博主催事業）参加・基調講演）

2018年７月24日～７月27日―韓国（国際シンポジウム「Intangible Heritage and Video Archives」に招待参加）

2018年８月12日～９月２日―ザンビア（ザンビア東部州における文化遺産の継承についての調査研究ならびにザンビア国立博物館機構との学術協力協定の締結）

2018年11月16日～11月19日―中国（国際シンポジウム「トランスネーション――東アジアの知的生産、文化コミュニケーションと融合」に参加）

2019年２月14日～２月17日―台湾（博物館ネットワークにもとづく、台湾の歴史記録の共同利用の可能性の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健

一）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」研究支援代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人京都服飾文化研究財団評議員、大阪府第26回山片蟠桃賞審査委員、日本民族藝術学会会長、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、ICOM 京都2019組織委員会委員、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、ASEMUS（Asia-Europe Museum Network）Executive Committee、African Arts（UCLA）Consulting Editor、Museum International（ICOM）Editorial Board Member、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員会委員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、公益財団法人日本博物館協会参与、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、日本展示学会評議員、独立行政法人国立美術館国立国際美術館評議員、関西サイエンス・フォーラム理事

・他大学の客員、非常勤講師

放送大学客員教授

關　雄二［せき　ゆうじ］――――――――――――――――――――――― 副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

1956年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程退学（1983）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授・部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2016）、国立民族学博物館先端人類科学研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館・副館長（2017）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院 1982）**【専攻・専門】**アンデス考古学、文化人類学　古代アンデス文明の形成過程、現代ペルーの文化行政、考古学と国民国家形成、世界遺産と国別の文化遺産との相互関係**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

［単著］

関　雄二

2010 『アンデスの考古学　改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス――権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

［編著］

関　雄二編

2017 『アンデス文明　神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2016　外務大臣表彰

2015　ペルー文化功労者表彰

2008　濱田青陵賞

2008　科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008　クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金基盤研究（A）をあてる予定である。

・成果

科学研究費補助金基盤研究（A）を用いて、パコパンパ遺跡第３基壇に位置する半地下式パティオの儀礼に関する新たな証拠を得ることができた。また、こうした成果を、共著書１冊、論文５本として出版した。このほか、56° Congreso Internacional de Americanistas（ICA）でイェール大学の Lucy Salazar とともにシンポジウム “Vogt y Rowe Reconsiderados: Arquitectura y Cosmovisión en Mesoamérica y los Andes” を組織したほか、内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて “La formación de la ideologia en los Andes mediante la renovación de la arquitecutra ceremonial”（56° ICA）、“La estrategia de los lideres del sitio arqueológico Pacopampa en la sierra norte de Perú desde una perspectiva de la arquitectura ceremanial”（ 56° ICA）、“Establishment of Power in the Formative Period of the North Highlands of Peru”（Dumbarton Oaks Pre-Columbian Studies Symposium “Reconsidering the Chavín Phenomenon in the 21st Century”）をふくむ計14本の研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

［共著］

大城道則・青山和夫・関　雄二

2018 『世界のピラミッド大事典』東京：柊風舎。

［分担執筆］

関　雄二

2018 「試探遺址管理中居民參與之意義：來自國際合作的現場（2013『遺跡管理における住民参加の意味を問う――国際協力の現場から』の翻訳）」張維安・何金樑・河合洋尚主編『博物館與客家研究』pp.183-200，苗栗：客家委員會客家文化發展中心。

2018 「南米のピラミッド」大城道則・青山和夫・関雄二編『世界のピラミッド大事典』pp.453-568，東京：柊風舎。

Seki, Y.

2018 El período Formativo en la sierra norte del Perú. In Luis Jaime Castillo y Elías Mujica （eds.） *Perú Prehispánico: Un estado de la cuestión*, pp.99-122. Cusco: Dirección Desconcentrada de Cultura de Cusco.

［論文］

関　雄二

2018 「モニュメントは権力の象徴なのか――南米アンデス文明の事例を中心に」『考古学研究』65(2)：26-38。

2018 「アンデス文明におけるモニュメンタリティ：権力とモニュメント出現の関係」『歴博国際シンポジウム「日本の古墳はなぜ巨大なのか？――古代モニュメントの比較考古学」予稿集』pp.21-27，佐倉：国立歴史民俗博物館。

2019 「文化遺産の持続的活用――南米アンデスの事例から」『第24回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会　文化遺産とSDGs』pp.20-28，東京：文化遺産国際協力コンソーシアム。

2019 「ラテンアメリカにおける文化遺産に関する日本の国際協力（2019 Cooperación internacional de Japón al patrimonio cultural en América Latina の翻訳）」『El proyecto Impulso en la recuperación de los museos afectados por el “Terremoto de Ecuador de 2016”』（Civilizations Special Issue 2018）：25-33，平塚：東海大学文明研究所。

Seki, Y.

2019 Cooperación internacional de Japón al patrimonio cultural en América Latina. *El proyecto Impulso en la recuperación de los museos afectados por el “Terremoto de Ecuador de 2016”* （Civilizations Special Issue 2018）: 175-185. Hiratsuka: Research Institute of Civilization, Tokai University.

Nagaoka, T., M. Takigami, Y. Seki, K. Uzawa, D.A. Paredes, P.S.A. Roldán and D.M. Chocano
2019 Bioarchaeological evidence of decapitation from Pacopampa in the northern Peruvian highlands. *PLOS ONE* 14(1): e0210458.［査読有］

Takigami, M., K. Uzawa, Y. Seki, D. Morales Chocano and M. Yoneda
2019 Isotopic Evidence for Camelid Husbandry During the Formative Period at the Pacopampa Site, Peru. *Environmental Archaeology*. online.［査読有］

Villanueva, J.P.H., Y. Seki and D. Morares
2018 La tumba del "Sacerdote de la Serpiente-Jaguar" en el centro ceremonial Formativo de Pacopampa. *Actas del III Congreso Nacional de Arqueología*（*CD-ROM*）volumen 1: 271-281.

［その他］

関　雄二
2018 「日本のアンデス考古学調査60年」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』57：3-4。
2018 「海外での考古学の厳しさ」『高梨学術奨励基金年報』（2017年度）：寄稿文，高梨学術奨励基金。
2018 「研究環境の限界」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』58：3。
2019 「国立民族学博物館の収蔵品㊾ 民族衣装は伝統的？」『文部科学 教育通信』453：2。

関　雄二・清岡央（聞き手）
2018 「パコパンパ遺跡――権力生成のプロセスを求めて」大貫良夫・希有の会編『アンデス古代の探求――日本人研究者が行く最前線』pp.83-106，東京：中央公論新社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年６月23日　「日本のアンデス調査の継承と発展――パコパンパ遺跡の発掘」日本アンデス調査60周年記念シンポジウム『日本アンデス調査団と山形大学ナスカ・プロジェクト』（主催：山形大学、共催：国立民族学博物館）山形大学人文社会科学部

2018年12月22日　「パコパンパ遺跡の発掘――権力生成の探求と遺跡保護をめぐる地域住民との共創」日本アンデス調査60周年記念シンポジウム『アンデス文明の成り立ちを追って――日本調査団の継承と発展』（主催：日本アンデス調査60周年記念シンポジウム実行委員会、山形大学、共催：国立民族学博物館）東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホール

2019年３月21日　'Expansión o consolidación ?: La transformación de la sociedad desde el Formativo Medio al Formativo Tardío en la sierra norte del Perú.' Simposio Internacional "Nuevas Perspectivas a la Formación de Civilización Temprana en Los Andes: Cronología, Interacción, y Organización Social", National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年４月21日　「モニュメントは権力の象徴なのか――南米アンデス文明における事例を中心に」考古学研究会第64回総会・研究集会『権力とは何か――祭祀・儀礼と戦争から考える』岡山大学

2018年５月27日　「ペルー北部山地パコパンパ遺跡複合の社会プロセス――出土土器の分析から」日本考古学協会第84回総会、明治大学（中川渚、ダニエル・モラーレスと共同発表）

2018年６月15日　'Incorporation of the Social Memory with the Cultural Heritage Management in the Peruvian Highlands.' The Twenty-Third "Science in Japan" Forum: Memory and the Museum, Smithsonian National Museum of the American Indian, Washington, D.C., United States

2018年７月17日　'La estrategia de los líderes del sitio arqueológico Pacopampa en la sierra norte de Perú desde una perspectiva de la arquitectura ceremonial.' 56° Congreso Internacional de Americanistas, Simposio "Vogt y Rowe reconsiderados: Arquitectura y cosmovisión en Mesoamérica y los Andes", Universidad de Salamanca, Salamanca, Spain

2018年７月17日　'La formación de la ideología en los Andes mediante la renovación de la arquitecutra ceremonial.' 56° Congreso Internacional de Americanistas, Simposio "Vogt y Rowe reconsiderados: Arquitectura y cosmovisión en Mesoamérica y los Andes", Universidad de Salamanca, Salamanca, Spain

2018年８月14日　'El proceso del complejo arqueológico Pacopampa.' V Congreso Nacional de Arqueología, Ministerio de Cultura del Perú, Lima, Perú（Nakagawa N., Villanueva J.P.H., Ordoñez M., Alemán D., Morales D.C.と共同発表）

2018年８月15日　‘Descubrimiento de la tumba de los Sacerdotes de la Serpiente-Jaguar y el festin ritual en Pacopampa.’ 1ra Jornada de Investigaciones Arqueológicas en la Región Cajamarca, Cajamarca, Perú

2018年８月22日　‘Cooperación internacional de Japón en América Latina relacionada al patrimonio cultural.’ Simposio Internacional Repensar el Patrimonio Cultural: Intercamio de Experiencias Post Terremoto entre Japón y Ecador, Instituto Nacional de Patrimonio Cultural, Quito, Ecuador

2018年10月５日　‘Establishment of Power in the Formative Period of the North Highlands of Peru.’ Dumbarton Oaks Pre-Columbian Studies Symposium “Reconsidering the Chavín Phenomenon in the 21st Century”, Washington, D.C., United States

2018年11月４日　「文明研究と地域社会との共生・共創」国立大学法人総合研究大学院大学創立30周年記念シンポジウム『人類はどこへ向かうのか――人類社会の未来』東京大学駒場Ｉキャンパス 21 KOMCEE EAST K011

2018年11月17日　「アンデス文明におけるモニュメンタリティ――権力とモニュメント出現の関係」歴博国際シンポジウム『日本の古墳はなぜ巨大なのか？――古代モニュメントの比較考古学』明治大学アカデミーコモン

2018年12月１日　「パコパンパ遺跡における土器以外の人工遺物の時期変遷」古代アメリカ学会第23回研究大会調査速報の部、専修大学生田キャンパス（荒田恵、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、ディアナ・アレマン、マウロ・オルドーニェス、ダニエル・モラーレスと共同発表）

2019年１月11日　「文化遺産の持続的活用――南米アンデスの事例から」第24回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会『文化遺産とSDGs』東京文化財研究所地階セミナー室

・研究講演

2019年３月22日　「神殿を掘る――文明研究の変貌と展開」国立民族学博物館/毎日新聞社、オーバルホール（大阪市）

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年１月６日　「食のグローバル化――アメリカ大陸からの発信と受容」第528回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年４月14日　「古代アンデス文明展　ギャラリートーク」新潟県立万代島美術館

2018年７月９日　「世界遺産チャビン・デ・ワンタル」池田市中央公民館

2018年７月11日　「古代アンデス文明の形成」芦屋川カレッジ、芦屋市民センター

2018年９月26日　「日本のアンデス考古学調査60年」尼崎市中央市民大学（教養講座）、尼崎市中央公民館

2018年10月２日　「アンデスの先住民と文化遺産――インカをめぐる葛藤」兵庫県阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2018年10月２日　「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」兵庫県阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2018年10月25日　「日本のアンデス考古学調査60年」宝塚市国際理解ゼミナール、宝塚市立南口会館

2018年11月26日　「世界遺産マチュ・ピチュ――神秘のベールを剥ぐ」阪急生活楽校、阪急うめだホール

2018年11月30日　「アンデスの文化遺産をめぐる問題――盗掘の実態」兵庫県阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2018年11月30日　「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」兵庫県阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2018年12月８日　「アンデスの世界・神殿のひみつ（南米・ペルー）」京都で世界を旅しよう！2018　地球たんけんたい７（主催：マナラボ環境と平和の学びデザイン（京都府受託事業））、京都大学東南アジア地域研究研究所 稲森財団記念館２Ｆセミナー室

◎調査活動

・海外調査

2018年７月25日～９月10日―ペルー、エクアドル（中央アンデス地帯における発掘調査およびエクアドル地震・文化庁委託プロジェクトに参加）

2018年10月４日～10月８日―アメリカ合衆国（「2018 Dumbarton Oaks Pre-Columbian Symposium」への参

加、研究発表）

2019年２月27日～３月13日―ペルー、エクアドル（パコパンパ発掘調査出土遺物の分析および保存遺構のモニタリング、エクアドル先住民考古学者の実態に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（３人）、副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（特別研究員奨励費）「現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究」受入研究者、科学研究費（基盤研究（A））「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」（研究代表者：鵜澤和宏（東亜大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「先住民の視点からグローバル・スタディーズを再構築する領域横断研究」（研究代表者：池田光穂（大阪大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会ユネスコ「世界の記憶」選考委員会委員、大阪大学文学部外部評価委員、ペルー全国学長会議編集局理事、公益財団法人高梨学術奨励基金選考委員、金沢大学研究域附属研究センター外部評価委員、古代アメリカ学会会長、文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、金沢大学国際文化資源学研究センターアドバイザー、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、Boletín de Arqueología PUCP（ペルー）編集委員

西尾哲夫［にしお　てつお］――――――― 副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

1958年生。**【学歴】**大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（1984）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士後期課程満期退学（1987）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第２研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部教授・部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館国際学術交流室室長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部教授・部長（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館副館長（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館副館長（2016）**【学位】**文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）**【専攻・専門】**言語学・アラブ研究　アラブ遊牧民の言語人類学的研究、アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究**【所属学会】**日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

［単著］

西尾哲夫

2013 『ヴェニスの商人の異人論――人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト――文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2011　第28回田邉尚雄賞（東洋音楽学会）

1992　オリエント学会奨励賞

1992　新村出記念財団研究助成賞

1992　流沙海西奨学会賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と中東地域の民衆文化

・研究の目的、内容

「アラブの春」を主導した新興の都市部中流層が用いた「中間アラビア語」と呼ばれる新生の共通アラビア語は、新たなコミュニケーション空間を創出した。この空間では差異化された社会的アイデンティティ獲得をめぐり、グローバルな動向に感応する社会運動の場が確立しつつある。本研究では、民衆、大衆、地域住民という概念の再構築を通じて彼らがグローバル化されたコミュニケーション空間に感応している状況を具体的に分析することによって、「中間アラビア語」が創出した公共的コミュニケーション空間において民衆文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、および個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個々の人間の社会的動員作用として働くメカニズムを解明する。また「中間アラビア語」による文学的社会位相の中で成立した、シンドバード航海記に焦点をあてて分析することによって、グローバル化の観点から多元的共創文学の可能性について考察する。

・成果

① 研究成果として『季刊民族学』に、キリスト教徒によって書かれたシンドバード航海記の新発見写本の分析をもとにした中間報告として、「キリスト教徒が伝えたシンドバード航海記」を寄稿した。また『国立民族学博物館研究報告』に「Un document inédit à propos des ouvrages de François Pétis de La Croix（1653–1713）」を寄稿し、ド・ラ・クロワによるシンドバード航海記校訂のための予備作業をおこなった。

② 研究発表として、「現代中東地域研究推進事業」と共催で国際シンポジウム「フランス語によるアラブ＝ベルベル文学における多声／多言語性（ポリフォニー）」（民博で2019年２月27～28日に開催）にて、「極小化される言語の民族性――ニューカレドニアのアラブ人とフランス語の場合」と題して基調講演した。個人と社会をテーマにしたシンポジウムの第二回目として多言語状況における個人に関する議論を深めた。

③ 研究発表として、民博共同研究「個－世界論――中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」の研究会（2019年２月17日に開催）で「アラブ音楽研究における〈民衆〉概念――Guillaum André Villoteau（1759～1839）とSimon Jargy（1919～2001）」と題して発表し、現在校訂中のVilloteau著フランス語手稿本を紹介するとともに、ナポレオンのエジプト侵攻時に同行した学者の〈民衆〉概念について検討した。

④ 新たに民博共同研究「グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス」を共同でたちあげ、第一回研究会（2018年11月11日に開催）で「アラビアンナイトからシャイロック、そして異人学にむけて――女嫌い・反セム主義・イスラモフォビア」と題して基調となる研究発表をおこない、従来の説話・物語研究を超えたグローバル化時代のナラティヴ研究の可能性について考察した。

⑤ 一般向けの研究成果公開として、第35回人文機構シンポジウム　レクチャーコンサート「中東と日本をつなぐ音の道（サウンドロード）――音楽から地球社会の共生を考える」（東大寺総合文化センター金鐘ホールで2019年３月23日に開催）を企画し、基調講演「なぜベリーダンスは世界にひろがったのか？――音楽が創りだす地球社会の可能性」をおこない、国家や民族の境界をこえた地球社会で共に生きることについて考察した。本シンポジウムにあわせて、『アラブ音楽』（文庫クセジュ）を白水社より刊行した。

⑥ 科学研究費助成事業基盤研究（B）（特設分野）「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（代表・西尾哲夫）ならびに科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」（代表・西尾哲夫）による海外および国内での調査をおこなった。

◎出版物による業績

［共著］

黒田賢治・西尾哲夫

2019　*Research Source Guide for Museums in the Middle East: Islamic Republic of Iran*（Resources for Modern Middle East Studies 3). Osaka: Center for Modern Middle East Studies, National Museum of Ethnology.

［翻訳］

西尾哲夫・岡本尚子

2019 『アラブ音楽』（文庫クセジュ）水野信男監修，東京：白水社。

［論文］

西尾哲夫

2018 「キリスト教徒が伝えたシンドバード航海記」『季刊民族学』164：73-78。

2018 「イスラームの語源は『平和』か――中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化の研究に向けて」『民博通信』163：73-78。

西尾哲夫・岡本尚子

2018 Un document inédit à propos des ouvrages de François Pétis de La Croix（1653-1713）.『国立民族学博物館研究報告』42(4)：411-433。［査読有］

［その他］

西尾哲夫

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊷ イスラーム書道」『文部科学 教育通信』446：2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年２月９日 「中世から近代におけるアラブ民衆文学の中国表象――アラビアンナイト異本の比較分析から」『シルクロードと文化交流――人の移動、表象、物語』国立民族学博物館

2019年２月27日 ‘Minimisation du caractère ethnique de langues: le cas des Arabes et leur français en Nouvelle-Calédonie.’ “Polyphonie en littérature arabo-berbère de langue française”, National Museum of Ethnology

・共同研究会での報告

2018年11月11日 「アラビアンナイトからシャイロック、そして異人学にむけて――女嫌い・反セム主義・イスラモフォビア」『グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス』国立民族学博物館

2019年２月17日 「アラブ音楽研究における〈民衆〉概念――Guillaum André Villoteau（1759～1839）とSimon Jargy（1919～2001）」『個－世界論――中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム』国立民族学博物館

・研究講演

2019年３月23日 「なぜベリーダンスは世界にひろがったのか？――音楽が創りだす地球社会の可能性」第35回人文機構シンポジウム レクチャーコンサート『中東と日本をつなぐ音の道（サウンドロード）――音楽から地球社会の共生を考える』東大寺総合文化センター

・広報・社会連携活動

2019年２月11日 「登美彦氏、『千一夜物語』に分け入る――西尾哲夫先生と探検するアラビアンナイトの世界 in 国立民族学博物館」文藝春秋社、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・海外調査

2019年１月25日～２月５日―フランス、ベルギー（シンドバード航海記の資料調査と研究成果編集作業および民博図書館所蔵 Villoteau 手稿本校訂のための情報収集）

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」拠点代表者

人類基礎理論研究部

園田直子［そのだ　なおこ］―――部長（併）教授

【学歴】 Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学文学部美術史と考古学・美術史卒（1980）、Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学/U.E.R Art et Archéologie/Maîtrise des Sciences et Techniques: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques 修士課程修了（1982）、Ecole du Louvre エコール・ド・ルーブル卒（1983）、Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学 /Histoire de l'art 美術史博士課程修了（1987）**【職歴】** Direction des Musées de France /Laboratoire de recherche des musées de France/アメリカ・ゲッティー財団との共同プロジェクト研究員（1987）、Direction des Musées de France/Service de restauration des peintures des musées nationaux/assistante scientifique（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院文学文化科学研究科併任（1999）国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部研究部長（2017）**【学位】** 博士（美術史）Doctorat de 3ème cycle en Histoire de l'art（Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学 1987）、科学技術修士 Maîtrise des Sciences et Techniques - Specialité: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques （Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学 1982）、文学士 Licence es Lettres（Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学 1980）**【専攻・専門】** 保存科学 **【所属学会】** ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）、文化財保存修復学会

【主要業績】

［編著］

Sonoda. N. (ed.)

2016　*New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010　『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

［学位論文］

園田直子

1987　*Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l' étude de quelques tableaux d'art contemporain,* Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010　文化財保存修復学会第4回業績賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

持続可能な資料管理に向けた収蔵庫再編成

・研究の目的、内容

本館における収蔵庫再編成は、単なる収蔵スペースの狭隘化対策ではなく、保存科学研究と連動した持続的な資料管理の一環として、総合的有害生物管理（IPM）研究の延長線上に位置づけている。モノ資料に関する収納・保管方法のプロトタイプは、小型・中型資料に関しては特別収蔵庫（毛皮）、特別収蔵庫（絨毯類）、第3収蔵庫、大型資料に関しては多機能資料保管庫、第1収蔵庫、それぞれにおける収蔵庫再編成で確立してきた。本年度は、昨年度にひきつづき、まだ収納・保管方法のプロトタイプ作成にいたっていない衣類資料を対象に調査を進め、問題点を整理する。また、生物被害にあいやすい資料を対象に、予防保存の見地にもとづいた新

たな保管方法の検証と条件改良をおこなう。最終的には、長期的視点にたった収蔵庫再編成の基本的な考え方をまとめ、民族資料全体の配架および収納・保管方法のプロトタイプをつくりあげることを目的とする。

・成果

収蔵庫の狭隘化対策は本館において大きな課題であり、これまでも計画的に収蔵庫再編成に取り組んできた。本館の収蔵庫再編成においては、資料にとって安全な配架・収納であることは当然ながら、研究者が調査・閲覧しやすいことにも留意している。

収蔵庫再編成の活動のうち、生物被害にあいやすい資料を対象とした、不活性雰囲気での資料保管法の研究開発については、2018年6月に開催された文化財保存修復学会第40回大会で成果発表した。また、本館での10年以上にわたる収蔵庫再編成の成果については、2018年9月、イタリア・トリノで開催されたIIC（国際文化財保存学会）大会で口頭発表をおこない、高い評価を得た。海外の研究者と議論を深めることができ、新たな交流が始まっている。

◎出版物による業績

［論文］

Sonoda, N., S. Hidaka and K. Suemori

2018 Continuous Efforts over 10 Years for Storage Re-organization at the National Museum of Ethnology. Japan. *Studies in Conservation*, Supplement 1, 63 (S1): 234–241. London: The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC).［査読有］

Sonoda, N.

2018 Stratégie de contrôle des insectes et des moisissures au musée national d'ethnologie. *Support/Tracé* (18): 139–146. Paris: Association pour la Recherche Scientifique sur les Arts Graphiques (ARSAG).［査読有］

［その他］

河村友佳子・日髙真吾・園田直子・和高智美・橋本沙知

2018「ハンディ型3Dスキャナーによる大型民俗文化財の形状記録とその検証――大津祭曳山『神功皇后山』からくり岩の事例から」『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.172–173。［査読有］

橋本沙知・河村友佳子・日髙真吾・園田直子・和高智美・岡岩太郎・川勝頌太

2018「展示期間と温湿度環境が掛け軸装絹本絵画に与える影響についての検証」『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.118–119。［査読有］

日髙真吾・園田直子・末森薫・橋本沙知・和高智美・河村友佳子

2018「米原曳山祭『松翁山』の保存修復事例――地域密着型の保存体制の構築を目指して」『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.132–133。［査読有］

岡山隆之・宇都宮颯・小瀬亮太・関正純・殿山真央・園田直子

2018「真空乾燥処理を用いた微細セルロースファイバー塗工による劣化紙の強化」『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.40–41。［査読有］

園田直子・日髙真吾・小関万緒・西澤昌樹・橋本沙知・和高智美・河村友佳子

2018「生物被害の予防措置を目的とした低酸素濃度環境下での封入保管――アシ舟の事例から」『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.108–109。［査読有］

園田直子

2018「世界と日本をつなぐ――博物館学の国際研修とそのネットワーク」『博物館研究』53(10)：4–5。

2018「21世紀の博物館における保存科学」『民博通信』162：18–19。

2018「世界の資料を保存する」『milsil（ミルシル）』11(6)：12–13。

Sonoda. N. and S. Hashimoto

2019 Characterization of Asian paper using Py-GC/MS: Application of the method at the National Museum of Ethnology, Osaka. *JSPS/CNRS Bilateral joint research - Development of a new analytical method using pyrolysis and comprehensive two-dimensional gas chromatograph mass spectroscopy (PyGCxGC/MS) for the characterization of Japanese paper, washi*, pp.116–141. Tokyo: Tokyo University of the Arts & The Center for Research on Preservation (CRC).

Sonoda, N.

2018 Preservation of cultural heritage in a changing world. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 46:

6-7.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年２月８日　「国立民族学博物館における大阪府北部地震による収蔵庫の被害状況」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月30日　'Stratégie IPM au musée national d'ethnologie, Japon.' Rencontres thématiques 2018 – Insectes et moisissures: une course aux armements, Auditorium du Muséum national d'histoire naturelle, Paris, France.

2018年８月24日　「映像音響資料の保存の概要――国立民族学博物館での取り組み」第13回映画の復元と保存に関するワークショップ、国立民族学博物館

2018年９月13日　'Continuous efforts over 10 years for storage re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan.' IIC 2018 Turin Congress, Politecnico di Torino, Italy

2018年11月16日　「アジア紙のPY-GC/MSによる繊維分析――国立民族学博物館における適用例」国際シンポジウム（日本学術振興会二国間交流事業共同研究）『アジア紙のPY-GC/MSによる繊維分析』東京芸術大学

2019年３月２日　「博物館展示・収蔵と科学分析」科研費Ａ「歴史的な漆器の科学分析」に関する講演会、明治大学お茶の水キャンパス紫紺館

2019年３月17日　「資料の保存について」「資料と保存」展特別シンポジウム『近現代資料の保存からみる記憶の継承――舞鶴の取り組みから』舞鶴引揚記念館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年２月24日　「収蔵庫を窓からのぞいてみよう」第534回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年４月13日　「世界の文化に親しむ科　はじめに」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、アネックスパル法円坂

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年２月14日「博物館の防災対策（収蔵庫）」ICA国別研修『トルコ 博物館及び文化財の自然災害からの保護に係る能力開発』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2018年５月２日～５月８日―フランス（フランス国立自然史博物館・コレクション保存研究所にて生物被害をテーマにした国際研究集会での発表および人類博物館での資料の保存と活用に関する実態調査）

2018年９月４日～９月16日―フランス、イタリア（紙の保存活用および分析手法に関する調査、IIC（国際文化財保存学会）トリノ大会での発表と参加による保存関連ネットワーク形成）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日髙真吾）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都橘大学「国立民族学博物館での資料管理」、京都橘大学「民族資料の収蔵と保管」

出口正之［でぐち　まさゆき］ 教授

1955年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）**【職歴】**ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）**【専攻・専門】**NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学**【所属学会】**国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［著書］

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

［共編著］

Vinken, H., Y. Nishimura, B.L.J. White, and M. Deguchi（eds.）

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York, Dordrecht, Heidelberg, and London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

【受賞歴】

1995 ESP大来佐武郎賞

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

トランスフォーマティブな非営利研究／サイバー空間のフィールドワーク

・研究の目的、内容

トランスフォーマティブな非営利研究は、科学研究費補助金挑戦的研究（開拓）「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」を中心にした研究である。新しい分野の研究に積極的に挑戦して行く。あわせて、「民都・大阪」フィランソロピー会議議長として、「ビジネスセントリズム」に基づかない文化人類学的な視点により、本研究の成果として、地域社会貢献の実績を積んでいく。研究は、Shore & Wright（1999）が主張する「地理的フィールド」ではない「社会的かつ政治的空間としてのフィールド」を研究対象としたものであり、実際の政策に適用していくことによって一層の研究を深めていく。また、その一環として今年度からは、21世紀社会の新現象である「サイバー空間」もShore & Wrightのいう「フィールド」として捉えることで、萌芽的に「サイバー空間」のフィールドワークにも挑戦していく。Budka, P., & Kremser, M.（2004）などがすでに端緒を開いているが、方法論が定まっているわけではなく、まずは試行錯誤的にフィールドワークを行っていく。

・成果

［論文等］

出口正之

2018 「『理念の制度』としての財務三基準の有機的連関性の中の収支相償論.」非営利法人研究学会誌，20, 1-13。

2018 『公益認定の基準と実務』全国公益法人協会。

2018 「東京都認定等審議会『議事要旨』公開に見る審議の実像.」公益・一般法人，（962），41-46。

2018 「有識者による独立した認定委という制度の根幹に戻れ」（特集 新公益法人制度誕生10年を振り返って）公益・一般法人，（977），24-29。

2018 『「非営利ワールド」の分断化を、地域という「面での一体化」によって克服せよ――「民都・大阪フィランソロピー会議」の持つ意味』NPO CROSS

2018 「フィランソロピー黄金時代と寄付宣言」フィランソロピー、公益社団法人日本フィランソロピー協会　December 2018 No.389 22-22

2018 「官民協働の原点――行基と大仏」フィランソロピー　公益社団法人日本フィランソロピー協会 February 2019 No.390 22-22

出口正之・兪祖成

2018 日本非营利法人制度改革及启示．北大政治学评论，2018（4）：102-119．中国語。

出口正之，早川真悠＆大貫一

2018 「知的興奮を惹起するトランスフォーマティブ研究：共同研究：会計学と人類学の融合」民博通信 =Minpaku Tsushin, 161, 12-13。

池内啓三，久保井一匡＆出口正之.

2018 「民都・大阪」フィランソロピー会議発足記念 非営利ビッグ３鼎談：非営利再結集で新時代を．公益・一般法人：(968)，16-23.

［口頭発表］

2018 The Comparative Qualitative Data Studies from the Statutory Inquires in the UK and the Statutory Kankoku in Japan. *The 13rd International Society for Third Sector Research*（*ISTR*）on 10-13th July.

2018 「公益法人税制改革における政府税制調査会の役割」第22回非営利法人研究学会全国大会、武蔵野大学、2018年７月10～13日

2018 「休眠預金等活用法と指定活用団体について：指定活用団体に申請してみて分かる休眠預金等の活用の課題と可能性」非営利法人研究学会関西部会＆NPO法人部会、大阪NPOセンター、2018年10月20日

2018 「なぜ日本の財団はこんなに自由がないのか――その異常さを明らかにする」連続研究会、日本と世界の財団社団、2019年２月25日

◎出版物による業績

［単著］

出口正之

2018 『公益認定の判断基準と実務』東京：全国公益法人協会。

［論文］

出口正之・兪祖成

2018 「日本非营利法人制度改革及启示（中国語）」『北大政治学评论』4：102-119，北京：北京大学。［査読なし］

出口正之

2018 「『理念の制度』としての財務三基準の有機的連関性の中の収支相償論」『非営利法人研究学会誌』20：1-13，東京：研究学会。

［その他］

池内啓三・久保井一匡・出口正之

2018 「『民都・大阪』フィランソロピー会議発足記念 非営利ビッグ３鼎談――非営利再結集で新時代を」『公益・一般法人』968：16-23。

出口正之・早川真悠・大貫一

2018 「知的興奮を惹起するトランスフォーマティブ研究：共同研究：会計学と人類学の融合」『民博通信』161：12-13。

出口正之

2018 「東京都認定等審議会『議事要旨』公開に見る審議の実像」『公益・一般法人』962：41-46。

2018 「出口正之『非営利ワールド』の分断化を、地域という『面での一体化』によって克服せよ――『民都・大阪フィランソロピー会議』の持つ意味」『NPO CROSS』。

2018 「有識者による独立した認定委という制度の根幹に戻れ」『公益・一般法人』(977)：24-29。

2018 「フィランソロピー黄金時代と寄付宣言」『フィランソロピー』389：22。

2019 「官民協働の原点――行基と大仏」『フィランソロピー』390：22。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月10日　'The Comparative Qualitative Data Studies from the Statutory Inquires in the UK and the Statutory Kankoku in Japan.' The 13rd International Society for Third Sector Research（ISTR), Vrije Universiteit Amsterdam, Netherland

2018年９月９日　「出口正之 公益法人税制改革における政府税制調査会の役割」第22回非営利法人研究学会全国大会、武蔵野大学

2018年10月20日　「休眠預金等活用法と指定活用団体について――指定活用団体に申請してみて分かる休眠預金等の活用の課題と可能性」非営利法人研究学会関西部会・NPO法人部会、大阪NPOセンター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年６月３日　「みんぱくの元気なボランティア―― MMPとみんぱく」第514回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年２月25日「なぜ日本の財団はこんなに自由がないのか――その異常さを明らかにする」連続講演会『日本と世界の財団社団』東梅田TKPガーデンシティ

◎調査活動

・海外調査

2018年７月９日～７月17日―オランダ（第13回ISTR（国際NPO・NGO学会）世界大会出席・発表及び博物館調査）

2018年10月27日～11月４日―アメリカ合衆国（文化人類学者のフィールドの現場（ニューヨーク自然史博物館）を会計学者等とともに訪問する）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」研究代表者

川瀬　慈［かわせ　いつし］――――――

【受賞歴】

2013　第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008　最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前景化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を発展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させうる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を基軸に提示する。

8月には、エチオピア北部ティグレ州の女性の儀礼“アシェンダ”を対象とした映像民族誌制作プロジェクトをスタートさせる（完成は2020年3月予定）。

・成果

報告者は7月に韓国国立民俗博物館において開催された国際映像民族誌会議において報告者の民族誌映画制作手法の変遷に関する講演『Methodology of Ethnographic Filmmaking and Voices in the “Field”』を行った。本講演の内容は、英語論文にまとめ、同館刊行のプロシーディングスにおいて発表した。

8月には、エチオピア北部ティグレ州の女性の儀礼“アシェンダ”を対象とした映像民族誌制作プロジェクトをスタートさせ、撮影者・被写体間の相互作用を基軸に据えた制作方法論をベースに、同儀礼の記録を行った。本作の完成は2020年3月を予定している。

10月には、代表を務める科研・基盤研究（C）「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」プロジェクトの一環としてエチオピアに渡航。メケレ大学にて開催された第20回国際エチオピア学会研究大会において、民族誌映画パネル『Ethiopian Studies Through Image, Sound and Beyond: Perspectives from Ethnographic Films』を代表者として企画、実行した。本パネルでは、エチオピアの無形文化を対象に長年研究を行う人類学者、民族音楽学者が制作した、最新の学術映画8本の上映・討論を行った。研究関心を共有するエチオピア現地の、あるいは欧米各地の研究者と制作アプローチについての意見交換を行い、アフリカ無形文化を対象とした映像人類学に関する国際的な共同研究ネットワークの礎を築いた。

さらに報告者は、エチオピアの音楽職能集団や、エチオピアにおいて社会的に周縁に位置づけられている人々との交流を軸にした単著『ストリートの精霊たち』（世界思想社、2018年）を出版し、在日エチオピア大使館をはじめとする、国内各地で本著に関する講演と、本著に関連する職能者を対象とした拙作民族誌映画の上映を行った。本著についての書評は、学術雑誌、新聞、一般雑誌他、数多くの媒体に掲載され、一定の成果を得られたと考える。

◎出版物による業績

［単著］

川瀬　慈

2018 『ストリートの精霊たち』京都：世界思想社。

［論文］

Kawase, I.

2018 Methodology of Ethnographic Filmmaking and Voices in the “Field”. *INTANGIBLE HERITAGE AND AUDIO-VISUAL ARCHIVE*: 58–68.

［その他］

川瀬　慈

2018 「特集　アートと人類学――多元化する「世界」の描き方」（企画協力：執筆者選択、座談会参加、原稿執筆）『美術手帖』70, 東京：美術出版社。

2018 「巻頭座談会　アートと人類学のクロスポイント」（特集　アートと人類学――多元化する「世界」の描き方」『美術手帖』70：12–21。

2018 「映像人類学を知るための最新トピックス（川瀬　慈監修）」（特集　アートと人類学――多元化する「世界」の描き方」『美術手帖』70：70–77。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年11月24日　「トークセッション」みんぱく映画会『映画が拓く新たなバリアフリーの世界』（映画『もうろうをいきる』上映）国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月25日　‘Methodology of Ethnographic Filmmaking and Voices in the “Field”.’ International Conference “INTANGIBLE HERITAGE AND AUDIO-VISUAL ARCHIVE”, National Folk Museum of Korea, Seoul, Korea

2018年10月１日　‘Ethiopian Studies Through Image, Sound and Beyond Perspectives from Ethnographic Films.’ The 20the International Conference on Ethiopian Studies, Mekelle University, Ethiopia

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年４月８日　「東アフリカ民族資料収集の舞台裏」第506回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2018年４月28日　講演「川瀬　慈が語るエチオピアのストリートの仲間たち」『ストリートの精霊たち』出版記念、駐日エチオピア大使館

2018年５月４日　対談：川瀬　慈、環ROY「ストリートの音、イメージ、語りをめぐるとりとめのないセッション」『ストリートの精霊たち』刊行記念、下北沢Ｂ＆Ｂ

2018年５月26日　対談：川瀬　慈、服部滋樹（graf代表）『ストリートの精霊たち』刊行記念、北加賀屋 KITA-KAGAYA FLEA 2018 SPRING & ASIA BOOK MARKET

2018年６月１日　対談：川瀬　慈、山城大督『ストリートの精霊たち』出版記念、名古屋 パルル /Parlwr

2018年６月27日　対談：川瀬　慈、港　千尋『美術手帖』2018年６月号「アートと人類学」刊行記念、銀座 蔦屋書店

2018年７月２日～７月４日 連続講演「映像で物語ること」『2018年度文化庁・大学における文化芸術推進事業』京都市立芸術大学ギャラリー ＠KCUA（アクア）

2018年７月６日　対談：川瀬　慈、松田美緒「ストリートの吟遊詩人たち」『ストリートの精霊たち』刊行記念京都、誠光社

2018年10月15日　映画上映・討論“When Spirits Ride Their Horses”（I. Kawaee, 2012）“Room 11, Ethiopia Hotel”（I. Kawase, 2007）Guramayne Art Center, アジスアベバ、エチオピア

2018年10月20日　講演「アズマリ音楽の世界的展開」『Dereb the Ambassador Japan Tour』SUPER DELUXE 港区西麻布

2018年10月26日　鼎談：川瀬　慈、池間由布子、永江　大、他「野となり、山となる 大阪編」アートギャラリー・千鳥文化

2018年11月22日　講演「The Art of Audiovisual Storytelling」Global Education Interactive Seminar, 熊本大学グローバル教育カレッジ

2018年11月24日　対談：川瀬　慈、石川直樹『読書の学校 第二講、旅と冒険――世界を撮る』梅田、蔦屋書店

2018年12月21日　講演「アートのアーカイブを考える」『障害のある人のアートの「橋渡し」を考えるためのセミナー』奈良障害者芸術活動支援事業 Good Job！センター

2019年１月６日　鼎談：今福龍太、川瀬　慈、阪本佳郎『黙示の時代の詩魂詩人シュテファン・バチウ生誕百年によせて』Impuct Hub Kyoto、京都

2019年１月25日　対談：川瀬　慈、永方佑樹「不在の痕跡、そのポイエーシス〈詩×映像人類学〉」詩集『不在都市』刊行記念、スタンダードブックストア、大阪

2019年２月２日　対談：川瀬　慈、ふくだぺろ「詩と人類学――アートを超えて」『flowers like blue glass』（Commonword、2018）刊行イベント、誠光社、京都

2019年３月12日　講演「Visual Anthropology and Africa」アートギャラリー1983、香港

2019年３月26日　対談：川瀬　慈、瀬尾夏美「陸前高田とゴンダールのストリートを歩く――歌と旅人の話」Calo Bookshop & Cafe、大阪

・広報・社会連携活動

2018年７月20日　「映像で文化を撮る・理論編、実践編」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年７月27日　「映像で文化を撮る・理論編、実践編」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・海外調査

2019年８月９日～８月29日―エチオピア（エチオピア、ティグレイ族の祭り“アシェンダ”を対象とした映像民族誌の制作）

2018年９月27日～10月17日―エチオピア（第20回国際エチオピア学会発表、エチオピア音楽芸能の都市的展開に関する調査）

2019年２月４日～２月15日―エチオピア（民博所蔵エチオピア資料の活用に関するエチオピア人人類学者との研究会合）

2019年３月11日～３月14日―香港（民博所蔵エチオピア資料の活用に関するエチオピアン・ディアスポラとの意見交換）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」研究代表者

菊澤律子［きくさわ　りつこ］―― **准教授**

1967年生。**【学歴】**東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程退学（1995）、ハワイ大学大学院言語学部言語学専攻博士課程修了（2000）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2005）、総合研究大学院大学人文科学研究科准教授（2006）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**Ph.D.（Linguistics）（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）**【専攻・専門】**言語学　音声言語と手話言語の対照言語学、言語学　記述言語学、フィジー語諸方言、マラガシ語諸方言、他分野との協働による研究２　オセアニアの先史研究、ヒトの移動誌、動植物のドメスティケーション、文化接触・文化交流、他分野との協働による研究１　言語情報と地理情報システム（GIS）、フィジー語諸方言、言語学　歴史（比較）言語学、言語類型論、オーストロネシア語族、歴史（比較）統語論**【所属学会】**日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society（UK）、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics、日本手話学会、Sign Language Linguistics Society、関西言語学会

【主要業績】

［単著］

Kikusawa, R.

2003　*Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

［編著］

Kikusawa, R. and L.A. Reid (eds.)

2013　*Historical Linguistics, 2011: Selected Papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25–30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

［論文］

Kikusawa, R. and K.A. Adelaar

2014　Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480–516.

【受賞歴】

2015　2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞
2014　2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞
2009　ラルフ・チカト・ホンダ優秀研究者賞
2008　第４回日本学術振興会賞
2005　第４回日本オセアニア学会賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム（GIS）の応用

・研究の目的、内容

本研究では、2017年度に構築をはじめたフィジー語諸方言データの地理情報システム（GIS）化の成果を活用し、言語情報とその地理情報を組み合わせることで、当該言語の史的変遷についてどのような研究ができるのか、その手法の研究を行う。

GISは近年、考古学や歴史学等の人文科学系分野にも応用されるようになり、成果をあげているが、言語データへの適用は限られている。その理由のひとつに、言語データはその分布域の特定が難しく、そもそも地図上にデータを落とすことが困難であることに加え、その手続きを踏むことの利点が見えにくいことがあげられる。特に、言語データの比較がマクロレベルで行われる場合には、地理情報・地形情報と言語との結びつきはゆるやかであり、人間の目でみて分析することができた。ところが、近年、現地調査による詳細なデータが報告されるに従い、ミクロレベルでの比較再建が必要となってきた。言語は、垂直伝播と水平伝播が入り組んで発達するが、今のところ、これらを組み合わせて動的な史的変遷の模様を解明するツールはない。これを、地面情報を媒介とし、音対応、語彙や文法現象の共有・非共有といった言語情報と、地形や行政や文化にかかわる区域を組み合わせた分析を可能にすることで、新しい研究手法に結び付けられる可能性があると考えている。本研究では、そのためにどのような情報をどのような形でシステムに組み込んでゆく必要があるのか、昨年度に引き続き、基盤整備を進めつつ、合わせて理論的な裏付けについても取り組む。また、国際共同研究、学際共同研究の一例として、課題や解決法について発生の都度、報告をまとめること、また、地図として成果物の博物館展示への応用や社会還元の方法などについても検討することで、学界および社会貢献にも結び付ける。

・成果

本研究は、国際共同研究プロジェクト「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」（2017.4-2019.3、研究代表者：菊澤律子、りそなアジアオセアニア財団共同研究助成金）の最終年度として、フィジー語GISデータベースのプロトタイプを作成した。また、継続プロジェクトとして、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「時空間を融合する：GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」（2018.10-2023.3、研究代表者：菊澤律子、日本学術振興会科学研究費補助金）を確保し、完成したプロトタイプを操作しながら、言語学、地理学、統計学、文化人類学、それぞれの視点で評価を行い、今後の研究計画をたてた。具体的な進行状況等については、以下のふたつの国際シンポジウムにて報告。そのうち、大阪開催分については、2019年度にSESに報告書を投稿予定で準備を進めている。

国際シンポジウム「フィジー諸語と地理情報システム、および博物館展示への応用」（2018年９月20日）およびサテライト・ワークショップ（2018年９月18，19，21日）を館長リーダーシップ経費研究成果公開プログラム１（フィジーのiTaukei Trust Fund Boardおよび日本財団助成手話言語学研究部門からマッチングファンド提供）にて、国立民族学博物館で開催。

詳細　http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20180920

国際シンポジウム「フィジーの諸言語と地図：フィジー語GIS（地理情報システム）プロジェクト中間報告シンポジウム」（2019年３月26日）およびサテライト・ワークショップ（2019年３月25・27日）を、りそなアジア・オセアニア財団助成金および科研費、南太平洋大学言語学部および地理学部、フィジー iTaukei Trust fund Boardの協力により、フィジー・南太平洋大学法文教育学部（ラウザラキャンパス）他で開催。

詳細　http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20190326

◎出版物による業績

［分担執筆］

菊澤律子・相良啓子

2019 「日本手話の方言」木部暢子編『明解方言学辞典』pp.114-115, 東京：三省堂。

［論文］

菊澤律子

2018 「特集シンポ '17『歴史言語学における樹形図モデルの応用――オーストロネシア歴史言語学の事例より』」『歴史言語学』7：43-60。

田口義久・菊澤律子

2018 「はじめに」特集「シンポ '17『言語系統論の過去（これまで）と未来（これから）』」『歴史言語学』7：35-36。

［その他］

菊澤律子

2018 「声の言葉と手の言葉⑩ モードの違いと『ある』と『ない』」『ミネルヴァ通信「究」』85：20-23。

2018 「声の言葉と手の言葉⑪ 言語学習と写像性」『ミネルヴァ通信「究」』86：20-23。

2018 「文字の博物館 Museum of the Alphabet／アメリカ」『月刊みんぱく』42(5)：16-17。

2018 「声の言葉と手の言葉⑫ 通訳と翻訳(1)」『ミネルヴァ通信「究」』87：20-23。

2018 「マダガスカルの言語が『オーストロネシア系』といわれるのはなぜ？」『SERASERA』39：1-9。

2018 「声の言葉と手の言葉⑬ 通訳と翻訳(2)」『ミネルヴァ通信「究」』88：20-23。

2018 「言語展示学――ことばの宇宙を届けたい｜第１回　言語展示って？(1)」『ひつじ書房ウェブマガジン「未草」』。

2018 「声の言葉と手の言葉⑭ 盲ろう者のコミュニケーション」『ミネルヴァ通信「究」』89：20-23。

2018 「声の言葉と手の言葉⑮ 言語の起源」『ミネルヴァ書房「究」』90：20-23。

2018 「言語展示学――ことばの宇宙を届けたい｜第２回　言語展示って？(2)」『ひつじ書房ウェブマガジン「未草」』。

2018 「声の言葉と手の言葉⑯ 学術会議での使用言語(1)」『ミネルヴァ書房「究」』91：20-23。

2018 「声の言葉と手の言葉⑰ 学術会議での使用言語(2)」『ミネルヴァ書房「究」』92：20-23。

2018 「声の言葉と手の言葉⑱ 言語の運用・受容と認知評価」『ミネルヴァ書房「究」』93：20-23。

2019 「声の言葉と手の言葉⑲ コトバの理解に必要な要素」『ミネルヴァ書房「究」』94：20-23。

2019 「声の言葉と手の言葉⑳『通じる』と『通じない』」『ミネルヴァ書房「究」』95：20-23。

2019 「声の言葉と手の言葉㉑ コトバの変化(1)」『ミネルヴァ書房「究」』96：20-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年９月20日　'About the Fijian Language GIS Project: Why Fijian Languages, Why GIS?' International Symposium Fijian Languages and GIS Project, and Its Application to Museum Exhibits, National Museum of Ethnology

2019年３月26日　'Language Mapping and Historical Analysis: Linguists' Wish List'. Fijian Languages, Maps and Beyond: An Interim Report of the Fijian Language GIS（Geographic Information System）Project, University of the South Pacific, Suva, Fiji

・共同研究会での報告

2018年６月16日　「手話通訳を含む多画面ウェブ配信の配信アプリの制作とユーザビリティ評価」電子情報通信学会 リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）第３種研究会第11回研究会、霧島国際ホテル、鹿児島

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月18日　'Linguistic Mapping and Historical Analysis: A Progress Report of a Fijian Language GIS Project.' The 14th International Conference on Austronesian Linguistics, University of Antananarivo, Madagascar

・広報・社会連携活動

2018年４月22日　「ことばについて考える――『手話』は『言語』か、『言語』とは何か」MMP ステップアップ講座、国立民族学博物館

2018年８月23日　「知っているようで知らない『ことば』の話――脳の中の言語の世界へ」奈良アクティブシニアの会、奈良市西部公民館
2019年１月24日　「言語を徹底解剖する――ことばの成り立ちとその応用」ナレッジサロン、ナレッジサロンプレゼンテーションスペース
2019年２月１日　「手話言語とろう文化について考える――概説」NPO法人高齢者大学校、大阪市教育会館
2019年２月８日　「手話言語とろう文化について考える――ディスカッション」NPO法人高齢者大学校、大阪市教育会館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年１月31日「手話ってなに？　言語学ってなに？――まとめのディスカッションへ」大阪大学

◎調査活動

・海外調査

2018年６月17日～６月22日―イタリア（Formal and Experimental Advances in Sign language Theory（FEAST）参加）
2018年７月14日～７月23日―マダガスカル（第14回国際オーストロネシア言語学会参加）
2018年11月21日～11月28日―スペイン（手話言語の分析に関する学術交流　国際巡回展示「脳と言語」に関する打合せ）
2019年２月28日～３月29日―フィジー（「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」に関する言語調査および研究打ち合わせ）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的萌芽研究）「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明――歴史社会言語学の方法論の確立に向けて」（研究代表者：相良啓子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」（研究代表者：坊農真弓（国立情報学研究所））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「時空間を融合する――GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」研究代表者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

日本財団助成金「手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進」研究代表者、りそなアジア・オセアニア財団調査研究助成「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

「日本言語学会」常任委員、「日本歴史言語学会」会長、「大阪大学2017-2019年度全学教育リレー講義『手話の世界と世界の手話言語☆入門』」コーディネーター、「Brill's Studies in Historical Linguistics」編集顧問委員、「Journal of Historical Linguistics」編集顧問委員、「Journal of Historical Syntax」編集顧問委員、「日本歴史言語学会」理事、「International Society for Historical Linguistics（ISHL）国際歴史言語学会」理事 Board member

日髙真吾［ひだか　しんご］――准教授

1971年生。**【学歴】**東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）**【職歴】**㈶元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**文学博士（東海大学 2005）**【専攻・専門】**保存科学、保存修復**【所属学会】**文化財保存修復学会

【主要業績】

［単著］

日髙真吾

2015 『災害と文化財――ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。

2008 『女乗物――その発生経緯と装飾性』平塚：東海大学出版会。

［編著］

日髙真吾編

2012 『記憶をつなぐ――津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

【受賞歴】

2016　文化財保存修復学会業績賞

2009　日本文化財科学会第４回ポスター賞

2008　文化財保存修復学会第２回奨励賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを節目で感じることができるプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表　日髙真吾）および、科学研究費補助金基盤Ｂ「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（代表　日髙真吾 18H00760）の研究プロジェクトと関連づけながら実施する。

・成果

2018年度は、大学教育と地域文化の再発見、保存と活用を連結させる活動として、京都造形芸術大学において連続講座「民俗文化財の保存・活用入門」をおこない、大学教育における地域文化の再発見、保存と活用のあり方を検証し、成果について来年度に取りまとめて出版する準備を整えた。また、台北芸術大学との協定のもと、地域文化の保存に着目した国際フォーラム『地域文化を保存する――実践者の視点から』を開催した。また、枚方市旧田中家鋳物民俗資料館および村上市教育委員会の民俗資料を対象として、小学校の授業で使用可能な教育キットのプロトタイプを製作した。加えて、地域博物館、大学間連携の体制のもと、2018年９月13日から11月27日にかけて特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」を実行委員長として開催した。なお、本展示会は静岡文化芸術大学で2018年12月６日から19日にかけて、金沢美術工芸大学で2019年１月11日から２月28日かけて巡回展を開催した。また、大妻女子大学との協定のもと、特別展「子ども/おもちゃの博覧会」に実行委員として参加した（開催期間：2019年３月21日から５月28日）

◎出版物による業績

［編著］

日髙真吾編

2018 『地域文化の再発見――大学・博物館の視点から』京都：Knit-k。

日髙真吾・小谷竜介編

2018 『工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在』大阪：国立民族学博物館。

是澤博昭・日髙真吾編

2019 『子どもたちの文化史――玩具にみる日本の近代』京都：臨川書店。

［共著］

日本展示学会編

2019 『展示学事典』（第７章）東京：丸善出版。

［分担執筆］

日髙真吾

2019 「大型博物館の展示場管理」日本展示学会編『展示学事典』pp.334-337，東京：丸善出版。

2019 「展示場の殺虫処理」日本展示学会編『展示学事典』pp.346-347，東京：丸善出版。

2019 「時代玩具コレクションの整理と活用」是澤博昭・日髙真吾編『子どもたちの文化史――玩具にみる日本の近代』pp.18-33，京都：臨川書店。

［論文］

日髙真吾

2019 「日本における被災文化財の保存と活用について」大平秀一編『文明』特別号：55-60。

2019 「大規模災害時における文化財レスキューの課題」川村清志編『国立歴史民俗博物館研究報告』214：47-61。［査読有］

Hidaka, S.

2019 Conservación y el uso social de los bienes culturales en Japón. In S. Oodaira（ed.）*Civilizations Special Issue 2018,* pp.210-220. Kanazawa: Tokai University.

Sonoda, N., S. Hidaka and K. Suemori

2018 Continuous Efforts over 10 Years Storage Re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan. *IIC 2018 Turin Congress - Preventive Conservation: The State of the Art,* pp.10-14. London: The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC）.［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年７月20日 「環境から考える博物館運営――国立民族学博物館からの取り組み事例」国際シンポジウム『台湾および周辺島嶼地域を生態学的、文化的にとらえる』、国立民族学博物館

2018年８月22日 「日本における被災文化財の保存と活用について」日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念国際シンポジウム『文化遺産とは何か――エクアドルと日本の自然災害を通して考える』、エクアドル文化遺産庁ホール（Salón de los Escudos）

2018年12月15日 「地域文化の保存を考える――日本の視点」国際フォーラム『地域文化を保存する――実践者の視点から』、台湾高雄市立歴史博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月７日 「3Dスキャナーを活用した津波碑の文字情報取得についての検証――高知県地震津波碑の事例から」日本文化財科学会第35回大会、奈良女子大学

2018年７月７日 「展示期間と温湿度環境が掛け軸装絹本絵画に与える影響についての検証」日本文化財科学会第35回大会、奈良女子大学

・みんぱくゼミナール

2018年９月15日 「特別展『工芸継承』からのメッセージ」第483回みんぱくゼミナール

2018年10月20日 「工芸を語る――宮城の職人からのメッセージ」第484回みんぱくゼミナール

・研究講演

2018年６月13日 「文化財レスキューの意義と課題――東日本大震災の経験から」観音寺市教育委員会、観音寺市ハイスタッフホール

2018年７月19日 「災害と文化財保存」第４回文化財保存・復元技術展実行委員会、東京ビックサイト

2018年９月28日 「工芸継承展から考える日本インダストリアルデザイン」吹田市町づくりセンター・浜屋敷

2018年10月24日 「国立民族学博物館における文化財の生物処理の考え方と実践」九州国立博物館

2018年10月30日 「被災した民俗文化財の応急処置」奈良文化財研究所

2018年11月８日 「被災文化財の保存と活用――能登半島地震の事例から」都城市立博物館

2018年12月11日 「生物被害対策――国立民族学博物館の事例から」文化財虫菌害研究所、国立民族学博物館

2019年１月８日 「大阪北部を震源とする地震による国立民族学博物館の被害と対応について」奈良国立博物館

・研究公演

2018年10月28日　「東北の復興を願って――夢、希望、想いをこめて」国立民族学博物館

・展示

2018年９月13日～11月27日　特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」国立民族学博物館

2018年12月６日～12月19日　特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」静岡文化芸術大学

2019年１月11日～２月28日　特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」金沢美術工芸大学

2019年３月21日～５月28日　特別展「子ども／おもちゃの博覧会』」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年４月１日　「『田の神（タノカンサァ）』について」第505回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

2018年９月23日　「平成の百工比照コレクションについて」第518回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

2018年10月14日　「漆芸の業を受け継ぐ――北村家４代の作品から」第520回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

2018年11月25日　「市民参加型ワークショップ『現代に活かす伝統の手わざ』から考えるインダストリアルデザイン」第524回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年９月13日　「オリジナル木製スプーンをつくってみよう（京都造形芸術大学との共同プロジェクト）」国立民族学博物館

2018年９月26日　連続講座みんぱく×ナレッジキャピタル第１回「特別展『工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在』を振り返る」ナレッジキャピタル、グランフロント大阪

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2018年６月16日「ハンディ型3Dスキャナーによる大型民俗文化財の形状記録とその検証――大津祭曳山『神功皇后山』からくり岩の事例から」文化財保存修復学会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月16日「生物被害の予防措置を目的とした低酸素濃度環境下での封入保管――アシ舟の事例から」文化財保存修復学会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月16日「米原曳山祭『松翁山』の保存修復事例――地域密着型の保存体制の構築を目指して」文化財保存修復学会、高知市文化プラザかるぽーと

◎調査活動

・国内調査

2018年４月25日―能生白山神社（宝物収蔵庫に関する環境調査）

2018年６月２日―能生白山神社（宝物収蔵庫に関する環境調査）

2018年６月13日～６月14日―観音寺・神恵寺、観音寺市ふるさと学芸館（観音寺・神恵寺所蔵の涅槃物について、2017年度に調査して試作復元品の検証と細部情報の取得を目的とした3Dスキャン調査及び地域に残された民具を中心とした展示活用の調査）

2018年７月11日―京都造形大学（京都造形芸術大学の協定事業の一環として企画していう特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」関連ワークショップ「オリジナル木製スプーンをつくってみよう」関連調査）

2018年８月10日～８月11日―岡山県倉敷市および広島県広島市（７月の西日本豪雨被災地の調査）

2018年９月27日―株式会社データ・デザイン（教育キット開発に伴う3Dスキャン技術に関する調査）

2018年10月６日～10月７日―滋賀県大津市および米原市（大津まつりおよび米原祭りの調査）

2018年11月４日～11月５日―宮崎県都城市及び日南市（日本展示視覚障害者パックで使用予定のやごろうどんの調査）

2018年11月６日―能生白山神社（宝物収蔵庫に関する環境調査）

2018年12月９日―静岡文化芸術大学（静岡文化芸術大学における工芸継承展関連ワークショップに関する調査）

2018年12月10日―新潟県村上市縄文の里朝日（地域文化の宝箱奥三面パック関連の調査）

2018年12月22日―太宰府天満宮（日本展示視覚障害者パックで使用予定のうそ人形の調査）

2019年２月１日―枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館（地域文化の宝箱奥三面パック、枚方パック関連調査及び意見交換）
2019年２月５日～２月７日―新潟県村上市縄文里朝日（地域文化の宝箱奥三面パック関連の調査）
2019年２月９日―金沢美術工芸大学（金沢美術工芸大学における工芸継承展関連ワークショップに関する調査）
2019年３月１日～３月３日―高知県香南市（夜須観音山碑の 3D スキャン測定の調査）
2019年３月９日～３月10日―福島県いわき市（いわき市の津波碑の調査）
2019年３月27日―高知県南国市（琴平神社津波碑の 3D スキャン測定の調査）

・海外調査

2018年５月26日～５月27日―台湾（2018年度国際シンポジウムおよび国際フォーラムに関する打ち合わせ）
2018年６月23日～６月25日―台湾（台湾歴史博物館主催の「扛茨百人走渓流」のワークショップの調査）
2018年８月20日～８月29日―エクアドル（国際シンポジウム「文化遺産とは何か――エクアドルと日本の自然災害を通して考える」での発表とエクアドル地震で被災した文化遺産の現状調査）
2018年10月８日～10月12日―中国（国際シンポジウム「激変する生態環境におけるリスク認知と災害対応」への参加）
2018年12月12日～12月19日―台湾（国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」への参加）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流――博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、科学研究費（挑戦的研究（萌芽））「被災地芸能の二次創作に関する実践研究」（研究代表者：橋本裕之（追手門学院大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」研究代表者、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：小池淳一）メンバー、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

一般社団法人文化財保存修復学会理事、日本展示学会理事

福岡正太［ふくおか　しょうた］―――― 准教授

1962年生。**【学歴】**東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）**【職歴】**国立民族学博物館第２研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）**【専攻・専門】**民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスンダ伝統音楽についての研究**【所属学会】**東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

［論文］

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160，東京：ドメス出版。
2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究――民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28（2）：257-295。

Fukuoka, S.
2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J.S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95–110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることはできない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化発展が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、音楽関連資料をいかに活用可能な形でアーカイブ化するかが大きな課題となっている。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響および情報メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀のアジアにおいて、レコードやラジオなどのメディアが音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。民博が所蔵する日本コロムビアレーベルの外地録音金属原盤資料について、台湾大学等との研究協力に基づき、録音発売された音楽の傾向などを明らかにする。また、録音再生メディアがインドネシアの音楽におよぼした影響について研究を進める。②楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアム「世界の音楽と楽器」を活用し、通文化的な広がりをもつ双方向的データベースにより、楽器に関する学術的な知識の蓄積と活用の可能性を探るとともに、音楽関連資料のアーカイブ化における諸問題を明らかにする。③科研費研究「島嶼社会における芸能伝承の課題――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」により鹿児島県徳之島および三島村の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。

・成果

①共同研究「音盤を通してみる声の近代――台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」（代表者：劉麟玉、2011～2014年度）の成果として、日本コロムビアが台湾でのレコード販売に本格的に乗り出した時期に日本で流行していた草津節を取り上げ、当時の日本のレコード音楽の状況を明らかにする論考を執筆した。日本コロムビアは、1930年頃、台湾向けのほか朝鮮向けにも草津節のレコードを制作した。これは、日本で流行していた音楽が当時、台湾および朝鮮向けのレコードの素材に含まれていたことを示している。いくつかの草津節の録音を通して、台湾の人々が触れたであろう1930年ころの流行音楽の一端を明らかにした。また、台湾大学の研究者と協力し、民博所蔵金属原盤のうち再生録音のないものを再生し、録音をおこなった。②寄贈受入を目指している楽器コレクションの整理作業を進めた。その成果の１つとして企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」の実行委委員会委員として展示の企画、関連情報の執筆（『季刊民族学』『月刊みんぱく』ほか）をおこなった。③徳之島において小学校の協力を得て、授業にフォーラム型情報ミュージアム「徳之島の唄と踊り」を活用する試みを進め、教室での利用を前提としたシステムの改良等について検討をおこなった。また、集落における年長者から子どもたちへの伝承活動を阻害することなく支援する方法について、小学校教員の皆さんと議論をおこなった。

◎出版物による業績

［その他］

福岡正太

2018 「ボロブドゥールに描かれた弦楽器――東南アジアとインドの交流」『季刊民族学』166：59–66。
2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊸ 東南アジアの棒ツィター」『文部科学　教育通信』447：2。
2019 「インドネシアのルバッブ」『月刊みんぱく』43(2)：5。
2019 「シネ倶楽部Ｍ　歌を発見し、収集した音楽学者」『月刊みんぱく』43(3)：18–19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年11月24日　「民俗芸能の映像記録——どのように伝承の過程に位置づけるか」シンポジウム「ひろがる知、つながるひとの輪」、総研大文化フォーラム2018「知をわかち、ひとをつなぐ——研究成果の共有と還元」国立民族学博物館

・研究講演

2018年６月４日　「国立民族学博物館における民族音楽学資料のフォーラム型情報ミュージアム構築の試み——その目的と可能性」ソウル大学東洋音楽研究所、ソウル大学中央図書館ヤンドゥソクホール

・広報・社会連携活動

2018年４月20日　「世界のリズムの多様性⑴——足し算のリズム」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

2018年４月27日　「世界のリズムの多様性⑵——おしりで合わせるリズム」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」、大阪府社会福祉会館

◎調査活動

・海外調査

2018年６月３日～６月５日—韓国（ソウル大学校東洋音楽研究所フォーラムにて講演）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（３人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」（研究代表者：野澤豊一（富山大学））メンバー、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」（研究代表者：寺田吉孝）メンバー

◎社会活動・館外活動

・その他の社会活動・館外活動

東洋音楽学会理事、日本民俗音楽学会理事

◎学会の開催

2018年12月８日～12月９日　日本民俗音楽学会「日本民俗音楽学会第32回大会」国立民族学博物館　第５セミナー室ほか。

丸川雄三［まるかわ　ゆうぞう］——准教授

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】**東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構CREST研究員（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）**【専攻・専門】**文化財情報発信、連想情報学**【所属学会】**アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

［論文］

丸川雄三

2018　「美術関係資料アーカイブズにおける情報管理発信システムの研究」『アート・ドキュメンテーション研究』25：3-17。［査読有］

2017　「ミュージアムの情報発信力を高める文化遺産オンラインの活用法」『情報の科学と技術』67(12)：628-

632。［査読有］

丸川雄三・阿辺川武

2010 「横断的連想検索サービス『想―IMAGINE』――データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53（4）：198-204。

【受賞歴】

2017　第11回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞（身装画像データベース）

2011　文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2018年度は、引き続き美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS科研費基盤B「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2017年度）の助成を受け実施してきたものであるが、研究成果をふまえ、継続して研究を進める。さらに文化庁の「文化遺産オンライン」や東京国立近代美術館フィルムセンターの「日本アニメーション映画クラシックス」など、これまで国立情報学研究所高野明彦研究室と共同で進めてきた文化財情報の活用と発信に関する研究を進める。

・成果

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究として、無形文化財に関する動画などを配信する手法とその活用について検討を進めた。その成果の一部を2018年6月に「アート・ドキュメンテーション学会研究大会」等で発表した。またデジタル技術を活用した展示場情報発信の研究として、聖心女子大学と共同で「アジア・アフリカの難民・避難民展」における写真と動画のデジタルビューアを構築し一般公開した。この研究は、「2018年度国立民族学博物館公募型メディア展示」事業の一環として実施したものである。さらに美術情報分野の情報統合手法の研究として、東京文化財研究所と美術雑誌『みづゑ』を対象とした美術研究資料アーカイブズ発信環境の研究として、ウェブサイト「『みづゑ』の世界」の開発を継続して進めた。

◎出版物による業績

［その他］

丸川雄三

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊻ 麦わら帽子（かんかん帽）」『文部科学 教育通信』440：2。

2018 「写真のデジタル化とデータベースの構築」特集「デジタルライブラリ DiPLAS」『月刊みんぱく』42(6)：4。

2018 「新世紀ミュージアム　台東区立下町風俗資料館」『月刊みんぱく』42(11)：4。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年5月19日 「デジタルアーカイブズの構築支援とライブラリへの展開」シンポジウム『デジタル写真データベースが拓く学術活動の未来――蓄積された画像資料をいかに活用するのか』一橋講堂中会議場

2018年11月8日 「映像・画像資料とデータベース――その実際と可能性」2018年みんぱく若手奨励セミナー『時空間を超える知識の共有――タテにつながる、ヨコにつながる』、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年6月17日 「文化遺産オンラインにおける動画配信機能の拡充と活用」アート・ドキュメンテーション学会年次大会、国立歴史民俗博物館

2018年7月6日 「地域研究画像デジタルライブラリにおける情報化と編集環境の構築」国際シンポジウム『デジタル時代における人文学の学術基盤をめぐって』一橋講堂中会議場

2018年８月28日　「地域研究デジタルライブラリのデータベースと統制語彙」科学研究費研究成果公開促進費（データベース）研究会、国立民族学博物館

2018年９月19日　「地域研究画像デジタルライブラリにおけるデータベース協働構築の実際」第１回SPARC Japanセミナー2018『データ利活用ポリシーと研究者・ライブラリアンの役割』国立情報学研究所

2018年12月22日　「美術館における所蔵作品情報の発信と活用」日本アートドキュメンテーション学会・第96回研究会『美術作品情報発信のシステムと運用』東京富士美術館

2019年２月６日　「写真原板情報のデジタル化――利活用の範囲を広げる」page2019オープンイベント「日本写真保存センター」セミナー『写真フィルムのデジタルアーカイブ――デジタル化による利用・検索の可能性』池袋サンシャインシティー文化会館

・展示

2018年９月17日～2019年３月15日　「アジア・アフリカの難民・避難民展」聖心女子大学４号館／聖心グローバルプラザ（メディア展示）を担当

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、2018年度国立民族学博物館公募型メディア展示プロジェクト「アジア・アフリカの難民・避難民の社会と暮らしを伝えるメディア展示の開発」（代表者：石井洋子（聖心女子大学））共同提案者、国立情報学研究所客員准教授、国立美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本写真家協会「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」諮問委員

山本泰則［やまもと　やすのり］――准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物工学分野博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物工学分野博士後期課程退学（1983）**【職歴】**国立民族学博物館第５研究部助手（1983）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（併任）（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授併任（2007）、国立民族学博物館人類学基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）**【専攻・専門】**博物館情報学**【所属学会】**情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

［論文］

Yamamoto, Y., F. Adachi, and K. Hachimura

2013　Common Metadata to Search for Non-Digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.224-225. IEEE Computer Society.［査読有］

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012　「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。［査読有］

山本泰則

2011　「国立国会図書館PORTAと人間文化研究機構統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』pp.53-68, 東京：人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館資料・情報・展示の関係性について

・研究の目的、内容

本研究では、博物館資料（モノ）とそれがもつ情報、情報提示としての展示の３者の関係性について考察をおこなう。博物館では所蔵資料を情報化し、データベースに蓄積している。一方、博物館でおこなう展示は、モノを直接観覧者に提示する行為で、それに資料解説が補われる。民博が所蔵する民族誌資料について、記述に必要不可欠な情報項目や音楽展示・言語展示、ドキュメント展示の方法を分析することにより、モノ資料がもつ情報と展示を介してモノから観覧者に伝わる情報の本質を明かにする。

今年度は、国の分野横断統合ポータルをめざす「ジャパンサーチ（仮称）」の異分野連携のためのメタデータモデルと人間文化研究機構の統合検索システム（nihuINT）の共通メタデータ、以前我々が提案した「博物館コアメタデータ」の比較を通して、モノ資料がもつ情報と記述される情報の関係性について考察する。

・成果

民博の標本資料データベースをジャパンサーチを通して公開するために，ジャパンサーチ向けにデータを変換し、登録をおこなった。これを通して、異分野連携を目的とする共通メタデータでは、メタデータ間の直接の形式変換は適切でなく、オリジナルデータベースのより詳細な情報をそれぞれの共通メタデータに変換する方がデータの意味を損うことなく共通メタデータに変換できることを明かにした。

一方、「ドキュメント展示」を提唱する宇陀准教授（民博客員）と議論を重ねた結果、図書資料と博物館資料に対するメタデータの考え方のちがいを再認識することができた。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2018年６月16日　「データベースのはしご」第481回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年１月27日　「ラフラン諸島をさがす」第531回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2018年12月６日～12月７日　「Databases at Minpaku」（博物館とコミュニティ開発コース 個別研修Ｆ：Documentation and Databases）国際協力機構、民博社会連携室

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」（研究代表者：岡田浩樹）メンバー

八木百合子［やぎ　ゆりこ］――助教

【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究科修士課程修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学（2011）**【職歴】**在ペルー日本国大使館専門調査員（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）、国立民族学博物館助教（2018）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2012）、修士（人文科学）（三重大学 2004）**【専攻・専門】**文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

［単著］

八木百合子

2015　『アンデスの聖人信仰――人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

［論文］

八木百合子

2012　「聖女に捧げられた大聖堂――近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關雄二・網野徹哉編『アンデス世界――交渉と創造の力学』pp.243-267，京都：世界思想社。

2009　「サンタ・ロサ信仰の形成と発展――20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』

5：5-28。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代アンデス地域における宗教的なモノの所有と継承に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、宗教的なモノに焦点をあて、現代のアンデス地域における宗教の展開について人類学的に追究するものである。ペルーを中心とするアンデス地域では近年、カトリックの聖像をはじめとする宗教的なモノの商品化が著しい。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拝あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、人びとが容易に入手・所有することが可能になっている。本研究では、こうしたモノの生産・流通・消費の拡大を視野に、それが現代のアンデス地域の人びとの宗教実践に及ぼす影響をについて検討する。本年度は特に聖像の所有と継承の局面に着目することで、モノを介して展開される信仰のネットワークについて明らかにする。

研究の遂行にあたっては、科研費（若手研究Ｂ）「現代アンデス地域における聖人信仰の展開に関する人類学的研究――聖像の所有と継承に注目して」をあてる。

・成果

本年度は、私的空間における聖像の所有状況と継承に関する実態を解明すべく、ペルー南部のクスコ市において聞き取り調査をおこなった。各家庭が所有する聖像の来歴等を詳細に調べた結果、聖像の譲渡とその方法に関して、この地域のみでみられる複数のパターンと特徴が明らかになった。また、この結果から、モノを介して広がる信仰のネットワークも浮かび上がってきた。

本研究にかかる成果の一部は、日本ラテンアメリカ学会第39回定期大会およびスペインで開催された国際アメリカニスト会議のパネルにおいて報告をおこなった。これらの報告内容については、Senri Ethnological Studies および京都大学出版会より刊行される著作物にスペイン語と日本語で投稿した。また、報告者が代表をつとめる本館の共同研究会「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」で発表した内容については、宗教とモノをテーマにした『月刊みんぱく（７月号）』の特集記事に寄稿した。

◎出版物による業績

［その他］

八木百合子

2018 「宗教的なモノをめぐって」特集「モノに願いを」『月刊みんぱく』42(7)：2-3。

2018 「みんぱくワールドシネマ『彷徨える河』」『社会科 NAVI』20：14-15。

2018 「ビジュアルが勝負？ ペルーの政党名」『月刊みんぱく』42(11)：20。

2019 「旅・いろいろ地球人　アンデス開運グッズ① 黄色い下着」『毎日新聞』３月２日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人　アンデス開運グッズ② 赤い種子」『毎日新聞』３月９日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人　アンデス開運グッズ③ 屋根の上の牛」『毎日新聞』３月16日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人　アンデス開運グッズ④ 福を呼ぶ男」『毎日新聞』３月23日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人　アンデス開運グッズ⑤ ミニチュア雑貨」『毎日新聞』３月30日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年２月23日　「アンデスの箱型祭壇――モノのポータビリティと信仰」共同研究会『モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相』国立民族学博物館

・民博研究懇談会

2018年12月12日　「アンデスにおける宗教的なモノの所有と継承――聖像をめぐる事例から」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年６月２日　「アンデスにおける宗教刺繍の展開と作者性――ペルー・クスコの事例から、パネルＢ『中南米における伝統芸品の資源化に関する研究』」日本ラテンアメリカ学会第39回定期大会、愛知県立大学

2018年７月　‘Entre lo religioso y lo histórico andino: cambio de una festividad y participación de nuevos actores.’ 56º Congreso Internacional de Americanistas, Salamanca, Spain

・広報・社会連携活動

2019年２月２日　「アンデスの箱型祭壇が伝えるもの――農村の生活から歴史記憶まで」第485回国立民族学博物館みんぱく友の会講演会、千里文化財団、国立民族学博物館

・海外調査

2018年７月13日～７月22日―スペイン（国際アメリカニスト会議（ICA）への参加）

2018年８月17日～９月19日―ペルー（アンデス地域における奉納品の制作に関する調査および中南米のフォーラム型情報ミュージアム構築のための現地機関との打合せ）

2018年10月13日～10月25日―ペルー（中南米のフォーラム型情報ミュージアム構築にかかる情報収集）

2018年12月27日～2019年１月23日―ペルー（アンデスにおける聖像の所有と継承に関する調査および中南米のフォーラム型情報ミュージアム構築にかかる現地機関との調整）

2019年３月４日～３月28日―ペルー（中南米のフォーラム型情報ミュージアム構築にかかる情報収集および成果公開にむけた打合せ）

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2018年11月３日「『彷徨える河』解説」（みんぱくワールドシネマ）国立民族学博物館、千里阪急ホテル

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（B））「アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究――聖像の所有と継承に注目して」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラリティ」（研究代表者：田沼幸子）メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

龍谷大学「ソーシャルキャピタル論」、神戸市外国語大学「ラテンアメリカ文化特殊講義２」（集中講義）、神戸市外国語大学「中南米文化史２」（集中講義）、神戸市外国語大学「ラテンアメリカ文化特殊講義１」、神戸市外国語大学「中南米文化史１」

吉岡　乾［よしおか　のぼる］――助教

1979年生。**【学歴】**東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2012）**【職歴】**国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員 PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2017）、神戸大学国際教養教育院非常勤講師（2017）**【学位】**博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）**【専攻・専門】**言語学　記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、南アジア（パキスタン）研究**【所属学会】**日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会、Societas Linguistica Europaea

【主要業績】

［論文］

吉岡　乾

2015「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ハイコ ナロック編『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』pp.321-334, 東京：くろしお出版。［査読有］

2014「格配列パタンを決める動詞的要素と名詞的要素――パキスタンの言語を対照して」『東京外国語大学記述言語学論集 思言』10：159-202, 東京：東京外国語大学記述言語学研究室。［査読有］

Yoshioka, N.

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan.『国立民族学博物館研究報告』41(2): 109-125。［査読有］

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、系統的孤立語であるブルシャスキー語、北パキスタンの消滅の危機に瀕した言語であるドマーキ語を中心にしつつ、シナー語、コワール語、カラーシャ語、カティ語、カシミーリー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。この研究は主に、科学研究費補助金（若手研究（A））「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」により進める。

・成果

2018年度は４月にパキスタン北東部へ現地調査に行き、ブルシャスキー語、ドマーキ語の調査をした。夏以降も調査を予定していたが、５月に左足腓骨下部の剥離骨折、11月に右手豆状骨の断裂骨折と、調査に支障を来たす怪我が相次いだため、見送った。

研究の成果は、国際学会での発表という形で公表した。ブルシャスキー語スリナガル方言に関して７月に国際学会で発表をした。その他、投稿中の論文、校正中の論文、公開待ちの一次データ（どちらもブルシャスキー語について）もある。科研費研究課題の最終年度ということもあり急ピッチで進めたブルシャスキー語の参照文法（日本語版）は、冬に第一稿を完成させ提出したのだが、企画側・出版元の事情により先送りになった。ブルシャスキー語の参照文法（英語版）は、現在執筆中である。調査に思うように行けなかったこともあり、ドマーキ語の文法スケッチ（参照文法の骨組みとなる簡易な文法解説）の執筆は遅延しているので、来年度の追い上げが必要である。

◎出版物による業績

［その他］

吉岡　乾

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊵ 聖典大聖」『文部科学　教育通信』434：2。

2018 「ニホン語かニッポン語かジャパン語かジャパニーズ語か」『月刊みんぱく』42(5)：20。

2018 「旅・いろいろ地球人　世界の屋根で言葉歩き①　5,500,000」『毎日新聞』５月12日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　世界の屋根で言葉歩き②　100,000」『毎日新聞』５月19日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　世界の屋根で言葉歩き③　30,000」『毎日新聞』５月26日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　世界の屋根で言葉歩き④　100」『毎日新聞』６月２日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年５月６日　「専門家が専門外に手を伸ばすとき――アフガニスタンから来た偶像」第510回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年４月６日～４月19日―パキスタン（北東部にてドマーキ語、ブルシャスキー語に関する調査）

2018年６月30日～７月９日―南アフリカ共和国（第20回国際言語学者会議（ICL20）での発表）

2019年３月22日～３月29日―フィジー（フィジー語GISプロジェクトの会議）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（A））「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

飯泉菜穂子［いいずみ　なおこ］――特任准教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1985）、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了（1989）**【職歴】**日本アイビーエム株式会社入社（本社人事部）（1989）、NHK手話ニュースキャスター（1990）、フリーランス手話通訳、手話講師（1993）、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長（2002）**【学位】**家政

学修士（お茶の水女子大学、1989）**【専攻・専門】**手話通訳論、手話通訳養成**【所属学会】**日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

［著書］

飯泉菜穂子

2013 「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等に関する検討会』pp.64-72。

［共著］

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子

2011 「新しいリベラルアーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」『手話学研究』20：19-38。

［映像教材］

飯泉菜穂子

1995 『DVDで学ぶ手話入門講座』http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092（構成、テキスト・スクリプト執筆、演出、ナビゲーターとしての出演）産業能率大学通信教育講座。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

・研究の目的、内容

2018年度は、研究（事業展開）の目標をこれまでの「質の高い言語通訳としての学術手話通訳者養成」という広いものから、より成果評価をしやすいものに絞り込んだ。具体的には「みんぱくで学術手話通訳養成（研修）事業を展開することで、将来的に、関西地区における学術手話通訳ニーズを関西地区の手話通訳で担う（まかなう）ことが出来る最低限度の通訳人数の確保・質の担保に寄与すること」とする。その目標をクリアすべく、1）学術手話通訳研修事業については、伸びしろの見込まれる若手通訳者が参画しやすい環境作りを行う。また、関連講座のうち、通訳技術系の講座を研修の一部に組み込むことにより、年間を通じてコンスタントに研修を提供出来る環境に近づけていく。2）関連諸団体との連携をこれまで以上に広げ・深めることで、より多くの学術手話通訳OJTの場を確保する。OJTでは、メンター制を本格的に導入することで、本事業の研修を修了した（研修には最長3年間という条件を設けている）元研修員に指導技術を身につけてもらうための卒後研修という意味合いも持たせていきたい。3）関連講座についてはより1）の研修事業との連動性を重視して運営していく。今年度実施予定の関連講座は以下の4講座である。①『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』②『みんぱくで手話通訳士を目指そう！』の2講座は昨年度踏襲の内容で継続する。③『みんぱくで手話通訳技術を磨こう！』は1）の研修本体に組み込んで継続実施する。今年度新規の試みとして④『手話話者から専門領域を教わろう！』：手話話者（ろう者）の様々な専門家を招いての手話による専門領域講座を実施する。4）研修および関連講座、特に学術手話通訳OJTのより良い環境担保のため、今後、外部資金（なんらかの助成金または科研費）の獲得も（2019年度に向けて）検討していきたいと考えている。

・成果

上記「研究の目的」1）から4）について、それぞれ以下の成果が得られた。

1）学術手話通訳研修事業研修員の選考段階から、直ぐに手話通訳OJTに対応できるメンバーと伸びしろに期待して時間をかけて育成する対象とするメンバーの2グループに分けて対応した。その結果、OJTメンバー、伸びしろメンバー共に効率よく通訳技術検証を実施することができるようになった。また、関連講座と研修本体を連動させたことで、「年間を通じてコンスタントに研修を提供する」環境に、大きく近づけることができた。2）関連諸団体、特に、NPO法人手話教師センター、民博博物館事業部、大阪府との連携をこれまで以上に強めることができた。3）開講を予定していた①②③の3講座については予定通り実施し大きな成果を得た。④については実施による「研修本体への寄与」の有無を年度途中で見直したため、2018年度の実施は見送りとした。次年度に、連続講座とは形をかえて「ろうネィティブ（専門家）」から学ぶ講座を実施する予定である。4）大阪府との連携強化により、2019年度以降、大阪府手話言語条例実施項目のひとつである「手話通訳養成事業」の一部を国立民族学博物館学術手話通訳研修事業に委託する方向を明確に打ち出していただけた。

◎出版物による業績

［その他］

飯泉菜穂子

2018 「みんぱくでの学術手話通訳養成事業の取り組み・５」『翼』315(4)：3-5。

2018 「みんぱくでの学術手話通訳養成事業の取り組み・６」『翼』316(5)：3-4。

2018 「みんぱくでの学術手話通訳養成事業の取り組み・７」『翼』317(6)：6-8。

2018 「みんぱくでの学術手話通訳養成事業の取り組み・８」『翼』318(7)：6-8。

2018 「今日を生きる私たちの物語」『月刊みんぱく』42(9)：18-19。

2019 「世界で唯一のユニバーサルシアター」『月刊みんぱく』43(2)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年６月17日～2019年３月９日　『学術手話通訳研修事業』（全10回：スクリーニング、年度末評価会、定期研修会）全体コーディネート、研修員スクリーニング（運営全般・評価・選考）、年度末評価会（運営全般・評価）、全回の研修実施（運営・通訳技術検証講師）、国立民族学博物館

2018年７月１日～９月２日　部門事業『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』（全12回）全体コーディネート、講義・ワークショップ講師、ろう通訳・フィーダーコーディネート、国立民族学博物館

2018年８月11日～８月13日　部門事業『みんぱくで手話通訳士を目指そう！』全体コーディネート、課題解説講師、技術検証講師

2018年９月29日～11月24日　学術手話通訳研修事業における外部依頼通訳OJT　全体コーディネート、課題解説講師、技術検証講師

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年10月７日　「バリアフリー映画を楽しむ」第519回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年11月24日　「アフタートーク司会」みんぱく映画会『映画が拓く新たなバリアフリーの世界』（映画『もうろうをいきる』上映）国立民族学博物館

・研究講演

2018年４月21日　定例会『みんぱくでの学術手話通訳研修事業について』NPO法人手話教師センター、国立オリンピック記念青少年総合センター、東京都

2018年６月12日　ろうあ者市民講座『手話は言語――手話に関わる皆さんへ』NPO法人神戸ろうあ協会、兵庫県神戸市

2018年12月13日　特別講義『ことばの仕組み――手話通訳を目指す立場から音声言語と手話言語の違いを考えてみよう』（朝クラスおよび夜クラス）手話通訳養成講座手話通訳Ⅱ、兵庫県神戸市

2019年１月20日　公開講座『伝えることの大切さ』岡山県手話通訳士協会、岡山県岡山市

◎調査活動

・海外調査

2018年10月29日～11月５日―アメリカ合衆国（CIT（手話通訳養成者会議）2018への参加）

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

手話通訳技術指導：

大阪府東大阪市登録手話通訳研修会（講演通訳における実技・ふるまい評価 2018年６月）、学術手話通訳のための実践セミナー（大阪大学キャンパスライフ健康支援センター・みんぱく手話部門共催企画：2018年８月）、横浜市登録手話通訳者現任研修（聞き取りワークショップ：2018年11月）、岡山県手話通訳士協会現任研修（読み取りワークショップ：2019年２月）

手話通訳士・者養成担当講師向け講義・研修：

大阪府手話通訳者養成講習会講師現任研修（2019年３月）

名古屋市登録手話通訳者選考委員（2007年度-）

NPO法人バリアフリー映画研究会理事（2015年度-）

大阪府障がい者施策推進協議会意思疎通支援部会 手話通訳ワーキンググループ委員（2018年度-）

相良啓子［さがら　けいこ］―――――――――――――――――――――――――――――――― 特任助教

【学歴】筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修士課程修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 修士課程修了（2014）**【職歴】**株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）、国立民族学博物館特任助教（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任助教（2017）**【学位】**手話言語学修士（M. Phil.）（セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）、修士（筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻 1999）**【専攻・専門】**手話言語学類型論・聴覚障害児教育**【所属学会】**日本手話学会、日本言語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

［編著書］

Zeshan, U. and K. Sagara（eds.）

2016　*Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

［論文］

Sagara, K. and U. Zeshan

2016　A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara（eds.）*Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3–37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A., K. Mesh, and K. Sagara

2015　Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57–85.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話と台湾手話における歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて

・研究の目的、内容

本研究の目的は、日本手話と台湾手話の歴史変遷の解明に取り組み、具体的な分析を通して、科学的な比較研究を行うことである。本研究は、３年度計画の最終年である。まず、これまで収集したデータを音韻、形態、そして意味の変化に着目し、具体的な例をあげながらそれぞれの変化の特徴についてまとめる。まず、比較的分析しやすい数詞を取り上げ、日本手話話者及び台湾手話話者それぞれ20名から得られた数量的データの分析を通し、２桁から４桁の表現の表現に着目し、台北・台南の分布状況と東京・大阪での分布状況を比較する。また、日本手話から影響を受けた韓国手話のデータについても同様に変化の特徴を把握しておくことで、台湾手話と韓国手話の変化の方向性の違いがつかみやすくなると考えられるため、夏頃に韓国へのフィールド調査を実施する。研究成果発表としては、手話言語学の国際会議において発表を行い、そこで得られたフィードバックを参考にしつつ、まとめとしての論文執筆を進める。

・成果

７月20日から８月６日にかけて、韓国にてフィールドワークを行った。８月22日から25日にワルシャワで開催された「SIGN9 conference」で研究成果を発表した。11月18日に、第157回日本言語学会で「日本手話、台湾手話、韓国手話の語における意味の変化」について発表を行った。「Variation, change and historical relationships among signs for days of the week in the Japanese Sign Language family」のタイトルで執筆した論文が、『Calendric Terms in Sign Languages』（Mouton de Gruyter：2019年発行予定）に、掲載される予定である。

◎出版物による業績

［分担執筆］

菊澤律子・相良啓子

2019 「日本手話の方言」木部暢子編『明解方言学辞典』pp.114–115，東京：三省堂。

［その他］

相良啓子

2018 「国立台湾美術館」『月刊みんぱく』42(10)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年８月24日 ‘Diachronic Changes in the Lexicons of Japanese Sign Language.’ Taiwan Sign Language and Korean Sign Language, SIGN9 conference, University of Warsaw, Poland

2018年９月７日 ‘Diachronic Changes in the Lexicons of Japanese Sign Language.’ Taiwan Sign Language and Korean Sign Language, Sign Prop-up, Radboud University, Netherlands

2018年11月17日 「日本手話、台湾手話、韓国手話の語における意味の変化」第157回日本言語学会、京都大学

2018年12月３日 「日本手話、台湾手話、韓国手話の語の比較を可能とするコーパスのあり方を探る」HCGシンポジウム2018、伊勢市シンフォニアテクノロジー響

・広報・社会連携活動

2018年９月22日 「世界の手話における数のしくみ」神戸市ろうあ協会、神戸市総合福祉センター

2018年12月12日 「『ろう者のツアーコンダクターから手話言語学の研究者へ』前例を超えて社会を変える人々に学ぶ――生きた教科書『でんぐりがえしプロジェクトⅢ』」国際医療福祉大学大学院

◎調査活動

・海外調査

2018年７月20日～８月６日―韓国（ソウル・釜山・済州島における韓国手話の方言調査）

2018年８月21日～９月17日―ポーランド、イギリス、オランダ（SIGN9 Conferenceでの研究発表、研究打合せ等）

2018年１月18日～１月26日―ベトナム（ベトナムの三地域における手話語彙の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的萌芽研究）「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「アジア太平洋諸国における手話の対照言語学的研究：外国手話事典の編集をめざして」（研究代表者：加藤三保子（豊橋技術科学大学））研究分担者

超域フィールド科学研究部

韓　敏［ハン　ミン］――部長（併）教授

1960年生。**【学歴】**中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）**【職歴】**武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、Harvard University Fairbank Center for East Asian Research Visiting Scholar（2002）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長（2012）、人間文化研究機構国立民族学博物館運営会議委員（2012）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2017）、人間文化機構国立民族学博物館運営会議委員（2017）**【学位】**学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）**【専攻・専門】**社会、歴史と象徴に関する人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

韓　敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』（フィールドワーク選書18）京都：臨川書店。

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology.

［編著］

韓　敏編

2009 『革命の実践と表象――現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会、歴史と象徴に関する超域フィールドの研究

・研究の目的、内容

本研究は、近代社会における食のガバナンス、社会記憶と歴史の資源化に焦点を当て、超域フィールドの視点から国家と社会の多様な関係性を考察する。

具体的に特別研究「食糧問題とエコシステム」（代表者　野林厚志）の分担者として、グリーンツーリズムや食育などの側面から人間と食べものの関係性、農村部と都市部の多様な関係性を考察し、日本と中国における食のガバナンスの特徴を明らかにする。

昨年度に引き続き、人間文化研究機構北東アジア地域研究（代表者　池谷和信）の分担者として、中国北部のシボ族における歴史と文化の資源化の動態を調査する。

終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」について、まだ公開されていない研究成果をまとめ、代表者として日本語論文集の出版を準備する。

・成果

本年度は、特別研究の分担者として「Making Food in Human and Natural History」の国際シンポジウムの開催に協力し、Strategy and Governance of Cuisine　食の戦略とガバナンスというタイトルの第４セッションを企画した。また、人間文化研究機構北東アジア地域研究の分担者として、中国北部のシボ族における歴史記憶と文化の資源化の実態について継続的に調査した。さらに機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の代表として成果をまとめ、日本語論文集を出版した。その主な成果は以下の通りである。

＜刊行物＞

2019年３月『家族・民族・国家――東アジアの人類学的アプローチ』東京：風響社　総383頁「査読あり」

2019年３月「「歴史に関する集団的記憶とその資源化――中国東北地域瀋陽のシボ（錫伯）族の事例を中心に」『『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』長谷川清・河合洋尚編　東京：風響社　pp.117-142「査読あり」。

2019年３月「近代中国の指導者ゆかりの聖地構築」『聖地のポリティクス――ユーラシア地域大国の比較から』杉本良男・松尾瑞穂　東京：風響社　pp.147-166「査読あり」。

2018年４月　「乗り物からみる文化の継承――花嫁の輿」『文部科学　教育通信』。

2018年７月14日「祝意をこめる」「旅・いろいろ地球人」中国の食(1)『毎日新聞』夕刊

2018年７月14日「元気で長生きのために」「旅・いろいろ地球人」中国の食(2)『毎日新聞』夕刊

2018年７月21日「庶民の心身をいやす菓子」「旅・いろいろ地球人」中国の食(3)『毎日新聞』夕刊

2018年７月28日「この世とあの世をつなぐ」「旅・いろいろ地球人」中国の食(4)『毎日新聞』夕刊

＜口頭発表等＞

2019年３月「家族の記録と記憶のかたち――民博における東アジアの標本と文献資料の分析」超域フィールド科学研究部国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力」（国立民族学博物館）

2018年12月「毛沢東バッジの過去と現在」みんぱくゼミナール第486回（国立民族学博物館）

2018年11月「知の共有、伝承とイノベーション――人類学研究博物館の歩み」中国社会学学会中日社会学専門委員会2018年年会国際シンポジウム「トランスネーション：東アジアの知的生産、文化コミュニケーションと融合」（中国・浙江大学）

2018年５月「构筑城郷共生的文化発展模式――一日本郷村旅游（グリーンツーリズム）的実践及課題」International Conference of Rural Tourism 郷村旅游の国際学術シンポジウム（中国・中山大学）

◎出版物による業績

［編著］

韓　敏編

2019 『家族・民族・国家――東アジアの人類学的アプローチ』東京：風響社。［査読有］

［論文］

韓　敏

2019 「中国文化における家族・民族・国家のパラダイム」韓敏編『家族・民族・国家――東アジアの人類学的アプローチ』pp.1-22，東京：風響社。［査読有］

2019 「文字と権威――中国の公共的社会空間における毛沢東題字の可視化」韓敏編『家族・民族・国家――東アジアの人類学的アプローチ』pp.305-338，東京：風響社。［査読有］

2019 「近代中国の指導者ゆかりの聖地構築」杉本良男・松尾瑞穂編『聖地のポリティクスーユーラシア地域大国の比較から』pp.147-166，東京：風響社。［査読有］

2019 「歴史に関する集団的記憶とその資源化――中国東北地域瀋陽のシボ（錫伯）族の事例を中心に」長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』pp.117-142，東京：風響社。［査読有］

［その他］

韓　敏

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊴ 乗り物からみる文化の継承――花嫁の輿」『文部科学 教育通信』433：2。

2018 「旅・いろいろ地球人　中国の食① 祝意をこめる」『毎日新聞』７月７日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　中国の食② 元気で長生きのために」『毎日新聞』７月14日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　中国の食③ 庶民の心身をいやす菓子」『毎日新聞』７月21日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　中国の食④ この世とあの世をつなぐ」『毎日新聞』７月28日夕刊。

2018 「24日は中秋の名月 愛でる 味わう 形いろいろ」『朝日中高生新聞』９月23日。

2018 「月見の楽しみ方 さまざま」『朝日小学生新聞』９月24日。

2019 「ソフィア 京都新聞文化会議652 毛バッジと文革から半世紀」『京都新聞』３月29日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月11日 「构筑城郷共生的文化発展模式――一日本郷村旅游的実践及課題」乡村旅游国际学术研讨会暨第五届旅游高峰论坛、中山大学、広州、中国

2018年11月16日 「智识的共享、传承与创新――人类学博物馆的学术实践」中国社会学学会中日社会学専委会2018年年会、杭州、中国

・みんぱくゼミナール

2018年12月15日 「毛沢東バッジの過去と現在」第486回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2018年９月21日 「自然と文化を食べ物からみる――中国の婚礼」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年９月28日 「自然と文化を食べ物からみる――アジアの婚礼」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（５人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎調査活動

・海外調査

2018年５月11日～５月16日―中国（国際シンポジウムにおける招待講演とシボ族の歴史と文化の資源化に関する調査）

2018年11月16日～11月19日―中国（国際シンポジウム「トランスネーション――東アジアの知的生産、文化コミュニケーションと融合」に参加・発表）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「グローバル時代における『寛容性／非寛容性』をめぐるナラティヴ・ポリティクス」（研究代表者：山　泰幸）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

宇田川妙子［うだがわ　たえこ］―――― 教授

1960年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1990）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、国立民族学博物館第３研究部併任助教（1997）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1984）**【専攻・専門】**文化人類学　イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究、ジェンダーとセクシャリティ研究、ヨーロッパ近代をめぐる問題群**【所属学会】**日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

［単著］

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア――ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

［共編］

宇田川妙子、中谷文美編

2016 『仕事の人類学――労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

2007 『ジェンダー人類学を読む――地域別・テーマ別基本文献レヴュー』京都：世界思想社。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、昨年度に引き続き、特に地域性との関わりから考察をしていくが、なかでも食という観点からの研究調査を本格化させる。

・成果

本年度は、昨年度より本格化させている食という観点から調査研究の分析段階に入った。ことにイタリア社会を具体的な事例としながら、公共性（とくに地域社会と国家レベル）と私的領域（家族）における食の役割を考察するとともに、食から見えてくる公共性と親密性について論ずる作業を行った。その主な成果は以下の通りである。

◎出版物による業績

［その他］

宇田川妙子

2018 「地中海料理の過去・現在・未来」『vesta』110：58-63。

2018 「料理と男らしさ・女らしさ」『vesta』111：54-59。

2018 「『フェミサイド(女性殺し)』に声をあげる人々――イタリア」『みんぱく e-news』205：巻頭コラム。
2018 「イタリアにおける食研究からみえるもの」『民博通信』162：25。
2018 「トマトとイタリアの浅くて深い関係」『vesta』112：54–59。
2018 「聖人信仰とカトリック」『文部科学　教育通信』423：2。
2019 「グローバル時代における食の選択のゆくえ」『vesta』113：54–59。
2019 「新世紀ミュージアム　食の博物館 Musei del Cibo」『月刊みんぱく』43(1)：16–17。

Udagawa, T.
2019 The Significance of National Cuisine in Today's Globalized Society. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 47: 5–7.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年３月１日 「イタリアにおける食と市民運動」学術潮流フォーラムⅡ　超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力――世界のフィールドから」国立民族学博物館

2019年３月19日 'Rethinking a Complex Connection between Commensality and Family: Through Japanese Cases and Italian Ones.' International Symposium "Making Food in Human and Natural History", National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年９月 「地中海料理の創成？――『国民料理』という補助線とともに考える」2018年度味の素食の文化フォーラム「国民料理の形成をめぐって」味の素食の文化センター

・広報・社会連携活動

2018年６月22日 「イタリアの文化にふれる――家族」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年６月29日 「イタリアの文化にふれる――地域の生活」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・海外調査

2018年10月20日～11月２日―イタリア（イタリアの農業協同組合に関する調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（４人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」（研究代表者：出口正之）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会評議員

樫永真佐夫［かしなが　まさお］――教授

1971年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1997）、ベトナム民族学博物館客員研究員（1997）、放送大学学園非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、総合研究大学院大学教授併任（2016）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）**【学位】**学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）**【専攻・専門】**文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」――村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記――「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀――家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010　第６回日本学術振興会賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイ（ベトナムではターイの地方集団として分類）の伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。黒タイ文字の創成に関する近代史的考察と、および伝承のテクスト分析に基づく黒タイの自文化イメージを考察する。

また、スポーツとしてのボクシングの受容と発展について、日本と東南アジア（ベトナム、タイ、ラオスを中心とする）を中心とした現地調査と文献調査を継続する。

・成果

ベトナムのターイの移住開拓伝承の時代変化を追った論文「ベトナム、マイチャウにおけるターイの移住開拓伝承の資源化」が、共同研究の成果として『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』（長谷川清、河合洋尚編、風響社）に発表した（283-328頁）。

展示に関わるものとしては、『文部科学 教育通信』449号に「国立民族学博物館の収蔵品(55) ムエタイの展示品のひみつ」が掲載された。

いずれも外部資金との関わりはない。

◎出版物による業績

［論文］

樫永真佐夫

2019 「ベトナム，マイチャウにおけるターイの移住開拓伝承の資源化」長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』pp.283-330，東京：風響社。

［その他］

樫永真佐夫

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊺ ムエタイの展示品のひみつ」『文部科学 教育通信』449：2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年10月21日 「ベトナム、黒タイの暦」第521回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年３月15日～３月23日―ベトナム（ベトナム、黒タイ村落における儀礼の現状の調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

神戸親和女子大学「『ベトナムの人間関係モデル』神戸親和女子大学共通教育科目『アジア文化研修（ベトナム）』事前指導」

小長谷有紀［こながや　ゆき］ 教授

1957年生。**【学歴】**京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）**【職歴】**京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第１研究部助手（1987）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）、人間文化研究機構理事（2014）**【学位】**文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学**【所属学会】**国際モンゴル学会、日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ――変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書9）京都：臨川書店。

［編著］

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」――緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀――社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2016　第３回ゆとろぎ賞

2015　モンゴル国科学アカデミー　名誉博士

2013　紫綬褒章

2013　教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009　大同生命地域研究奨励賞

2007　モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

調査記録写真の分析による地域像の再構築――モンゴル高原へのエクスペディション

・研究の目的、内容

＜目的＞これまで「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」以前の映像記録を用いて、グローバルな関係性の束を復元し、より多角的に地域像を描く。

＜内容＞19世紀から20世紀にかけて実施された、布教・軍事・商業・学術など多様なエクスペディションの記録写真を用いて、社会変容を分析する。

分析にあたっては、科学研究費補助金基盤研究（A）17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」により、ハンガリー、ポーランド、ロシア、モンゴルなど資料整備にあたっている研究者たちと協業する。

・成果

海外調査等については、科学研究費補助金基盤研究（A）17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」を利用した。

スウェーデンにおいて、スウェン・ヘディン学術調査隊および国教協会宣教師団の資料整備にそれぞれあたっている研究者たちと協業体制を構築した。また、サンクトペテルブルグにあるコズロフ博物館においてワークショップを開催し、古写真の分析手法について多様な角度から議論した。その成果を踏まえて、ポータルサイトを改良した。

◎出版物による業績

［論文］

小長谷有紀・鈴木康平・堀田あゆみ・篠田雅人・山中典和

2018 「モンゴルにおける宿営地集団の研究―― A.D. Simukov の『ホト』論文の紹介」『沙漠研究』28-3：217-227。

鈴木康平・小長谷有紀・堀田あゆみ・篠田雅人・山中典和

2018 「モンゴルにおける宿営地集団の研究―― A.D. Simukov の『モンゴル人民共和国の住民の遊牧生活に関する資料（第一部）』論文の紹介」『沙漠研究』28-3：229-241。

小長谷有紀

2019 「日本霊長類学の黎明期に関する資料――国立民族学博物館の民族学研究アーカイブズから」『ヒマラヤ学誌』20：119-128。

［その他］

小長谷有紀

2018 「みんぱく、こぼれ話㉑ 天山山脈から映画がやってきた！（ネタバレ注意？）」『TOYRO BUSINESS』180：30。

2018 「みんぱく、こぼれ話㉒ フィールドワーク選書』が外国語に！」『TOYRO BUSINESS』181：30。

2018 「みんぱく、こぼれ話㉓ 男は度胸、イネ科は頭？」『TOYRO BUSINESS』182：30。

2019 「みんぱく、こぼれ話㉔ 役に立ちますかしら？」『TOYRO BUSINESS』183：30。

◎調査活動

・海外調査

2018年４月26日～４月28日―韓国（韓国中央博物館におけるモンゴル展の開会式参加）

2018年４月30日～５月７日―中国（中国中央民族大学との共同研究「鳥居龍藏・きみ子夫妻のモンゴル調査」）

2018年５月29日～５月31日―中国（中国中央民族大学との共同研究「鳥居龍藏・きみ子夫妻のモンゴル調査」）

2018年６月15日～６月17日―韓国（韓国中央博物館における特別企画「モンゴル展」の実態調査）

2018年７月22日～８月16日―モンゴル（草原劣化に関する聞き取り調査および古写真タグ付け作業、モンゴルにおける世界遺産と遊牧民の生活文化、古写真タグ付け追補作業）

2018年８月24日～８月27日―中国（カルピス100周年記念国際シンポジウム2019の企画準備）

2018年11月14日～11月18日―中国（民博と内蒙古大学の学術協定に基づく集中講義）

2018年12月９日～12月17日―スウェーデン、ロシア（モンゴルに関するスウェーデン所蔵画像資料とロシア所蔵画像資料の調査）

2019年３月３日～３月６日―台湾（台湾におけるモンゴル人の仏教信仰の実態調査）

2019年３月20日～３月26日―モンゴル（モンゴル国における開発と保全に関するプロジェクト形成のための予備調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）、副指導教員（１人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究」（研究代表者：島村一平（滋賀県立大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「スウェーデンモンゴルミッションの研究」（研究代表者：都馬バイカル（桜美林大学））研究分担者

MATTHEWS, Peter Joseph［マシウス、ピーター・ジョゼフ］―――――――――――――――――――――――― 教授

1959年生。**【学歴】**オークランド大学生物科学部人類科学部植物学卒（1981）、オークランド大学大学院生物科学植物学修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院先史考古学遺伝学博士課程修了（1990）**【職歴】**科学技

術庁農水産省野菜茶業試験場特別研究員（1990）、日本学術振興会 Plant Science 特別研究員（京都大学理学部）（1993）、Freelance Editor/Self-employed Editor（1994）、国立民族学博物館第 4 研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）**【学位】**Ph.D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）**【専攻・専門】**民族植物学、先史学**【所属学会】**Society for Economic Botany、Indo-Pacific Prehistory Association、International Aroid Society、European Association of Science Editors、World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

［単著］

Matthews, P.J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

［編著］

Spriggs, M., D. Addison, and P.J. Matthews（eds.）

2012 *Irrigated Taro*（*Colocasia esculenta*）*in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historica Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Ahmed, I., P.J. Matthews, P.J. Biggs, M. Naeem, P.A. McLenachan, and P.J. Lockhart

2013 Identification of Chloroplast Genome Loci Suitable for High-Resolution Phylogeographic Studies of *Colocasia esculenta*（L.）Schott（Araceae）and Closely Related Taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929–937.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1. Mapping Genetic Diversity in Taro to Test Domestication Theories. This project is financially supported by the Japan Society for the Promotion of Science（JSPS Kakenhi No.17H04614). Project period: 1st April 2017 – 31st March 2021. I am the Principle Investigator for this project, which is being carried out in collaboration with several colleagues outside Japan.

2. Plant genetic resources and related traditional knowledge in semi-autonomous ethnic minority areas with political and geographic isolation. JSPS Kakenhi No.17H01682. Project leader: Dr K. Watanabe, Tsukuba University.

3. The Asaeda Toshio Collection: Construction of a database with a focus on Asaeda's ethnographic work in Oceania, an Info-forum Museum project of the National Museum of Ethnology. Project leader: Norio Niwa.

・研究の目的、内容

1. Mapping Genetic Diversity in Taro: The genetic structure of wild taro populations Taiwan and the Philippines will be analysed for a publication comparing diversity in wild and cultivated taros. Further fieldwork will be carried out in China and Thailand, in collaboration with the Ethnobotany Laboratory, Minzu University, Beijing, and Kasestart University, Bangkok. Analysis of samples from Vietnam and China will begin. Project website: http://colocasia.net

2. Plant Genetic Resources: For this project, I will revisit India, to discuss local research initiatives related to taro and local cusine.

3. The Asaeda Toshio Collection: For this project I will assist establishing working relationships with relevant institutions in the USA, Europe, and Pacific. A visit to the American

・成果

See publications.

Public outreach & exhibition

I continued to serve as lead curator the Oceania Gallery, Minpaku, and as administrator for The Research Cooperative（http://researchcooperative.org）- an international social network for better research communication. I also continued to serve as a board member for the New Zealand Studies Society - Japan（http://nzstudies.org), and contributed four short essays for an edited volume “New Zealand Today”（2019), for a general audience.

◎出版物による業績

［論文］

Bammite, D., P.J. Matthews, D.Y. Dagnon, A. Agbogan, K. Odah, A. DANSI and K. Tozo

2018 Agro Morphological Characterization of Taro（*Colocasia esculenta*）and Yautia（*Xanthosoma mafaffa*）in Togo, West Africa. *African Journal of Agricultural Research* 13(18): 934–945.［査読有］

2018 Constraints to Production and Preferred Traits for Taro（*Colocasia esculenta*）and New Cocoyam（*Xanthosoma mafaffa*）in Togo, West Africa. *African Journal of Food, Agriculture, Nutrition and Development* 18(2): 13388–13405.［査読有］

Grimaldi, I.M., S. Muthukumaran, G. Tozzi, A. Nastasi, N. Boivin, P.J. Matthews and T. van Andel

2018 Literary Evidence for Taro in the Ancient Mediterranean: A Chronology of Names and Uses in a Multilingual World. *PLoS One* 13: 6.［査読有］

Nguyen, V.D. and P. J. Matthews

2018 Rediscovery of Alocasia decumbens, a Rare Endemic Species in Northern Vietnam, and its Conservation Status. *Aroideana* 41(1): 127–138.

Prebble, M., A.J. Anderson, P. Augustinus, J. Emmitt, S.J. Fallon, L.L. Furey, S.J. Holdaway, A. Jorgensen, T.N. Ladefoged, P.J. Matthews, J.-Y. Meyer, R. Phillipps, R. Wallace, and N. Porch

2019 Early Tropical Crop Production in Marginal Subtropical and Temperate Polynesia. Proceedings of the National Academy of Sciences（doi: 10.1073/pnas.1821732116).

◎調査活動

・海外調査

2018年４月25日～５月３日―中国（雲南におけるサトイモ科植物の野外調査、研究打ち合わせ）

2018年６月27日～７月５日―中国（中央民族大学生命与环境科学学院において収集したサトイモの標本からDNAを抽出し、その量・質を検定、研究打ち合わせ）

2018年９月21日～10月１日―ベトナム（フエで開催される第21回IPPA学会への参加、フエ近郊にてサトイモ科植物の野外調査）

2018年10月31日～11月５日―ベトナム（植物標本のベトナムへの差し戻し、現地での検疫証明書の入手、日本への持ち込み、および研究打ち合わせ）

2019年２月７日～２月21日―バングラディシュ、タイ（バングラデシュにて野外調査および研究打ち合わせ、来年度の野外調査のため、タイにて研究打ち合わせ）

2019年３月４日～３月28日―アメリカ合衆国（フォーラム型にかかわる情報収集と成果公開に向けた打ち合わせ）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存」（研究代表者：渡邉和男（筑波大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」研究代表者

太田心平［おおた　しんぺい］――― **准教授**

1975年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）**【職歴】**文部科学省アジア諸国等派遣留学生（2000）、（韓国）ソウル大学

社会文化研究院比較文化研究所研究員（2003）、（韓国）暻園大学歴史・哲学部非常勤講師（2003）、（韓国）ソウル女子大学教養教育部非常勤講師（2003）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、京都産業大学文化学部非常勤講師（2004）、天理大学国際文化学部非常勤講師（2005）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、同志社大学社会学部嘱託講師（2007）、大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員（2007）、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、宮崎公立大学人文学部非常勤講師（2010）、（米国）アメリカ自然史博物館人類学部門上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2014）、大阪大学大学院人間科学研究科非常勤講師（2014）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学 2000）**【専攻・専門】**北東アジア研究、博物館学、社会文化人類学**【所属学会】**日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会、American Anthropological Association（米国）

【主要業績】

［分担執筆］

太田心平

2012 「国家と民族に背いて――アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学――21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都：昭和堂。

［論文］

오타 심페이

2006 「료한：일본에서의 한국문화 표상양식에 관한 지식인류학적 연구 ,」『한국문화인류학』39(2): 85-128. Seoul: 한국문화인류학회（Korean Society for Cultural Anthropology）。［査読有］

Ota, S.C.

2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. In K. Hirai（ed.）*Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia*（Senri Ethnological Studies 91), pp.179-193. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に２つの柱を立て、両側面から研究を推進した。

第１の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ――ミクロ双対性をもっていたのか、その一貫性と非連続性を明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとした。この期間には、これまでに公刊した研究成果を整理しなおしつつ、新しい関連研究とつきあわせて再検討し、総括する作業をおこなった。

第２の柱は、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」を研究代表者として受諾した。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業するが、この兼業も同プロジェクトのためだった。なお、総合研究大学院大学文化科学研究科の授業科目「博物館研究演習Ⅰ」は、この研究のための理論的研究を大学院生とともに加速させる前提のもとで開講した。

・成果

第１の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ－ミクロ双対性の研究に関しては、これまで日本語で公刊した研究成果のうち、核となる部分を整理しなおし、新しい関連研究とつきあわせて再検討したうえで、２本の英語論文として英文専門誌に投稿するため準備した。１本は査読中である。もう１本は、本館で開催された学術潮流フォーラム（2019年３月）での発表を経て、投稿前の調整段階にある。

第２の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しては、本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」の成果物たるデータベースとして結実させようとした。データベースの完成度を高めるため、予想より時間を要している。他方で、その過程で得られた知見を、米国およびベルギーの研究者と共著で執筆し、『国立民族学博物館研究報告』42巻４号（2018年６月）に掲載された。さらに、英文書籍の１つの章として執筆し、編者による査読を受けている。『文部科学 教育通信』445号（2018年10月）、『民博通信』163号（2018年12月）により、このプロジェクトの発信にも努めた。また、総合研究大学院大学文化科学研究科の授業科目「博物館研究演習Ⅰ」により得た理論的知見は、受講生と共有するとともに、英文専門誌に投稿する方向を模索してきた。

このほか、各個研究で深めてきた知見を活用しつつ、さらに推進させる目的を兼ねて、本館で２つの行事を企画・運営した。１つ目は日韓共同若手研究者育成セミナーである。これは、日韓の若手研究者を集め、そのうち研究内容が両国の近い者どうしをペアとして、４ペアに研究発表をさせ、その分野ですでに第一線を走っている日本の中堅研究者から指導・助言を受けるというもので、2019年２月23日に開催した。２つ目は北東アジア特別セミナーで、同25日に開催した。北東アジア地域研究において世界をリードする中堅研究者を、米国、デンマーク、韓国からそれぞれ１名ずつ招聘し、彼／彼女らが博士学位論文を提出したあとに、その研究をどう発展させているのかを講義してもらう内容であり、上記の日韓共同若手研究者育成セミナーの参加者たちも聴講した。これら２つの事業は、人間文化研究機構の地域研究推進事業と、韓国政府の委託事業BK21プラスを受けたソウル大学大学院人類学科との共催によりおこなった。

◎出版物による業績

［論文］

太田心平

2019 「歴史主体と帰属意識の罠――韓国プロテスタント教会における内部共生と物語の断絶」国立民族学博物館超域フィールド科学研究部編『歴史のロジックと構想力――世界のフィールドから（学術潮流フォーラムⅡ予稿集）』pp.61-68, 大阪：国立民族学博物館。

de Voogt, A., S.C. Ota and J.W.B. Lang

2018 Work Ethic in a Japanese Museum Environment: A Case Study of the National Museum of Ethnology. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 42(4): 435-448. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［その他］

太田心平

2018 「ニューヨーク三者三様――るつぼのなかで日本茶を飲む」『vesta』110：49-51。

2018 「Association for Asian Studies とその年次大会」『民博通信』162：24。

2018 「国立民族学博物館の所蔵品㊶ 天然痘の痕」『文部科学 教育通信』445：2。

2018 「キムジャンが続くとき――女性たちの協働から、家族行事、都市型イベントへ」『vesta』112：38-41。

2018 「食文化のサステナビリティによせて」『vesta』112：46-47。

2018 「データベースの自由検索が不自由なとき――標本資料の検索を変える一試み」『民博通信』163：10-11。

井野瀬久美恵・太田心平・小池一子・高田公理・藤本憲一・斎藤光

2019 「嗜好品とデザイン［討論］第16回嗜好品文化フォーラム（2018.5.12）報告」『嗜好品文化研究』4：107-121。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年３月１日 「歴史主体と帰属意識の罠――韓国プロテスタント教会における内部共生と物語の断絶」学術潮流フォーラムⅡ　超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力――世界のフィールドから」国立民族学博物館

・機構の連携研究会での報告

2018年５月31日　「AAS（Association for Asian Studies）の概要とその2018年大会の参加報告」北東アジア地域研究拠点月例研究会、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2018年11月17日　「韓国の若者層がみた現代韓国――生きづらさを個人レベルでどうするか」第485回みんぱくゼミナール

・研究講演

2018年５月12日　「嗜好品とデザイン」（井野瀬久美恵・小池一子・高田公理・藤本憲一・斎藤光と共演）嗜好品文化研究会、京都新聞社

・展示

2018年６月１日～2019年３月31日　「企画展『旅する楽器――南アジア、弦の響き』ワーキング」国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2018年７月６日　「韓国のいまを考える――仏教と儒教」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年７月13日　「韓国のいまを考える――世界の韓国系移民」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年11月12日　「リベラル・アーツのススメ――不確かな未来を切り開く人びとのために」大阪桐蔭高等学校、大阪産業大学５号館大教室

2019年２月６日　「近くて遠い国⑴――韓国人はどうして大統領を罷免できたのか」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2019年２月13日　「近くて遠い国⑵――韓国の親日と反日は矛盾しない」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2019年３月９日　「キリスト教で読み解く韓国の歴史と文化」第486回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2018年４月21日　「出口のない入口――21世紀ニューヨークのニューカマー・コリアンから東アジアの都市性を再考する」東アジア人類学再考研究会、大分大学

◎調査活動

・海外調査

2018年７月27日～10月15日―アメリカ合衆国（アメリカ自然史博物館との標本資料データベースの共同利用化にかかる作業）

2018年10月19日～11月９日―アメリカ合衆国（文化人類学者のフィールドの現場（ニューヨーク自然史博物館）を会計学者等とともに訪問）

2018年11月29日～12月５日―韓国（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトにかかるソースコミュニティとの協働）

2018年12月20日～2019年１月22日―アメリカ合衆国（本館とアメリカ自然史博物館がもつ朝鮮半島県連の民族資料データベースの接合にかかる作業）

2019年３月17日～５月９日―アメリカ合衆国（本館とアメリカ自然史博物館の朝鮮半島関連資料データベースの接合にかかる作業）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習Ⅰ」、「地域文化学基礎演習Ⅱ」、「比較文化学基礎演習Ⅰ」、「比較文化学基礎演習Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（強化型）「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

AHRC International Placement Scheme, Art & Humanities Research Council, UK “Identifying the Urban in the History of Premodern Northeast Asia”（研究代表者：PURSEY, Lance（University of Birmingham, Doctoral Student））Research Advisor

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

CDI 嗜好品文化研究会メンバー、日本文化人類学会日韓合同パネルタスクフォース、韓國文化人類學會海外理事、味の素食の文化研究所責任編集委員

・他大学の客員、非常勤講師

American Museum of Natural History・Research Associate

◎学会の開催

2019年２月23日　Center for Northeast Asian Studies, National Museum of Ethnology & Ex-CCEA at Department of Anthropology ‘Workshop for Young Researchers in Japan & South Korea’, National Museum of Ethnology

2019年２月25日　Center for Northeast Asian Studies, National Museum of Ethnology & Ex-CCEA at Department of Anthropology ‘Center for Northeast Asian Studies Special Seminar Series’, National Museum of Ethnology

新免光比呂［しんめん　みつひろ］　准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（1992）【職歴】帝京大学非常勤講師（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、東方研究会専任研究員（1992）、国立民族学博物館第３研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東方研究会

【主要業績】

［単著］

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国――ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

［共著］

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途３　人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

［論文］

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教――民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

ルーマニアの社会主義体制下での知識人について

・**研究の目的、内容**

ルーマニアの社会主義体制下の知識人は、共産党によるイデオロギー支配と限られた資金源をめぐって互いに競合しあい、さまざまな生き残り戦略をこうじていた。こうした戦略を中心に戦間期から民主化までのあいだの知識人のありかたを研究する。

・**成果**

研究成果は「悪魔祓い騒動からレジオナール運動まで――ルーマニア社会の変動と連続性」（『世俗化後のグローバル宗教事情』責任編集藤原聖子、岩波書店、2018年。）などで発表された。

◎出版物による業績

［分担執筆］

新免光比呂

2018 「悪魔祓い騒動からレジオナール運動まで――ルーマニア社会の変動と連続性」池澤優・藤原聖子・堀江宗正・西村明編『世俗化後のグローバル宗教事情』pp.80-101，東京：岩波書店。

［学位論文］

新免光比呂

2019 「キリスト教・ファシズム・社会主義を『民族』とともに生きる――ルーマニア知識人と民衆の歴史的実践と『農村世界』」筑波大学大学院。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年５月20日 「自由への渇望と抑圧――1960年代の東ヨーロッパ」第512回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習 I」、「地域文化学演習 II」、「比較文化学演習 I」、「比較文化学演習 II」

菅瀬晶子［すがせ　あきこ］――准教授

【学歴】東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2006）**【職歴】**総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）、滋賀県立大学非常勤講師（2012）、神戸女子大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）**【専攻・専門】**文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）**【所属学会】**日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

［単著］

菅瀬晶子

2012 『豊穣と共生への祈り――パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る６　新月の夜も十字架は輝く――中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒――その社会とアイデンティティ』広島：渓水社。

【受賞歴】

2006　長倉研究奨励賞

2006　総研大研究賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半、歴史的パレスチナで活躍したナジーブ・ナッサールやアラブ・ナショナリストの活動について調

査する。宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒であった彼自身の宗教的アイデンティティが、彼の執筆活動に与えた影響をさぐる。また、平行して彼らがおもな活動の場としていたアラビア語紙に寄稿していた中東系ユダヤ教徒に注目し、アラビア語によるアラブ・ナショナリズムとシオニズムの議論とその影響を調査する。

・成果

昨年度は初夏以降、報告者に健康上の問題が発生したため、本来の研究課題を進めることは困難であった。治療による休職前、2019年度に開催予定の片倉もとこ収集資料をもとにした企画展の準備にかかわり、そのときに得た知見をみんぱくワールドシネマにおけるサウジアラビア映画の解説（6月9日実施）と、同映画についての月刊みんぱくの記事（10月号）に活用した。また、参加していた共同研究「驚異と怪異」の成果公開論文集に寄稿した。こちらは2019年夏に刊行予定である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年11月3日　「一神教における怪異の語りと場――パレスチナ・イスラエルの事例から」公開シンポジウム『驚異と怪異の場――＜自然＞の内と外』慶應義塾大学

◎調査活動

・海外調査

2018年4月28日～5月10日―サウジアラビア（片倉もとこコレクションのデータベース化、および企画展計画推進についての打ち合わせ）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

丹羽典生［にわ　のりお］――准教授

【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2005）**【職歴】**法政大学経済学部教育補助員（2004）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、日本学術振興会特別研究員PD（2005）、国立東京工業高等専門学校非常勤講師（2006）、首都大学東京非常勤講師（2006）、ハワイ大学マノア校人類学科客員研究員（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、法政大学非常勤講師（2008）、国際基督教大学非常勤講師（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）**【専攻・専門】**社会人類学、オセアニア地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

［共著］

丹羽典生・石森大知

2013　『現代オセアニアの〈紛争〉――脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。［査読有］

［単著］

丹羽典生

2016　『＜紛争＞の比較民族誌――グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』横浜：春風社。［査読有］

2009　『脱伝統としての開発――フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。［査読有］

【受賞歴】

2010　第9回オセアニア学会賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相

・研究の目的、内容

本研究は、＜応援＞という視角から人類の諸文化を通文化的に比較することを通じて、利他性という人間性の根源について文化人類学的に考察することを目的とする。＜応援＞の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。日本の事例では、大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。

・成果

本館の共同研究「応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」を通じて、研究会を２回開催した。成果としては、『国立民族学博物館研究報告』へ論考（「日本における応援組織の発展と現状――四年制大学応援団のデータ分析を中心とする試論」）及び『民博通信』へエッセイ（「応援におけるノリと近代――沖縄の高校野球を中心に」）を寄稿した。

◎出版物による業績

［論文］

丹羽典生

2018 「日本における応援組織の発展と現状――四年制大学応援団のデータ分析を中心とする試論」『国立民族学博物館研究報告』43(2)：189-268。

［その他］

丹羽典生

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(4)：21。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(5)：21。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(6)：21。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(7)：21。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(8)：21。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(9)：21。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(10)：21。

2018 「旅・いろいろ地球人　日本から遠く離れて① 朝枝利男とは誰か」『毎日新聞』10月６日夕刊。

2018 「日本から遠く離れて② ガラパゴス探検」『毎日新聞』10月13日夕刊。

2018 「日本から遠く離れて③ スナップ写真」『毎日新聞』10月20日夕刊。

2018 「日本から遠く離れて④ 収容所体験と戦後」『毎日新聞』10月27日夕刊。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(11)：21。

2018 「カヴァの最新動向――その広がりと商品化から健康論争まで」『みんぱく e-news』210：巻頭コラム。

2018 「編集後記」『月刊みんぱく』42(12)：21。

2018 「○○してみました世界のフィールド いのししのかたち」『月刊みんぱく』42(12)：10-11。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(1)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(2)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(3)：21。

2019 「応援におけるノリと近代――沖縄の高校野球を中心に」『民博通信』164：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年９月20日　「民博におけるフィジー人演劇パフォーマンス」国際シンポジウム「フィジー諸語と地理情報システム、および博物館展示への応用」国立民族学博物館

2019年３月１日　「我々は、先住民の一部だ――フィジーの少数民族の歴史実践とその特徴について」学術潮流フォーラムⅡ　超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力――世界のフィールドから」国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2018年４月21日　「EEM という『運動』」第479回みんぱくゼミナール

・展示

2018年３月８日～５月29日　「国立民族学博物館開館40周年記念特別展　太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料」国立民族学博物館

2018年12月６日～2019年１月22日　「年末年始展示イベント『いのしし』」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年４月15日　「収集団の見た独立期のオセアニア」第507回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年12月18日　「野次から応援へ――応援の比較文化論の試みから」第124回みんぱく友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2018年８月11日～８月27日―ソロモン諸島、フィジー（フォーラム型にかかわる情報収集と成果公開に向けた打ち合わせ）

2019年２月11日～２月17日―イギリス（フォーラム型にかかわる情報収集と成果公開に向けた打ち合わせ）

2019年３月４日～３月18日―アメリカ合衆国（フォーラム型にかかわる情報収集と成果公開に向けた打ち合わせ）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事

・他大学の客員、非常勤講師

同志社大学「アジア・オセアニア地域の文化16」

松尾瑞穂［まつお　みずほ］―― 准教授

【学歴】南山大学文学部人類学科卒（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士（名古屋大学大学院国際開発研究科 2002）**【専攻・専門】**文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

［単著］

松尾瑞穂

2013　『ジェンダーとリプロダクションの人類学――インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013　『インドにおける代理出産の文化論――出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

［編著］

杉本良男・松尾瑞穂編

2019　『聖地のポリティクス――ユーラシア地域大国の比較から』東京：風響社。［査読有］

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南アジアにおけるリプロダクションとサブスタンスの変容に関する研究

・研究の目的、内容

•研究の目的

本研究は、南アジアにおける遺伝子というサブスタンスとそれにまつわる諸実践を検討することを通して、人、家族、親族、カースト、宗教といった自他のカテゴリーの生成や囲繞、他者とのつながり（relatedness）の様

態の変容について明らかにすることを目的とする。特に、サブスタンス（身体構成要素）の共有がいかに個と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するのかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目する。また、これまで行ってきたリプロダクション（性と生殖）研究を基盤として、グローバル化、近代化のなかでいかにリプロダクションが変容しているのかを把握し、人の生成に関する社会文化的実践についての総合的研究を目指す。

・内容

⑴ 現地調査

リプロダクションの変容をとくに生殖医療技術との関わりにおいて考察するうえで、南アジア地域におけるサブスタンスの概念は重要な出発点となる。人の形成に関しては、南アジアの文脈でいえば象徴的な民俗生殖理論がよく知られており、また、血液や体液のような身体部品や食、環境の共有を通してつながりが生み出されるということも長らく議論されてきた。生殖医療がもたらす遺伝子のつながりと、身体のサブスタンスを介したつながりはどのように接合、あるいは断絶しているのか、という研究テーマは、昨年に引き続き考察している課題である。今年度は、配偶子に注目し、遺伝的つながりと血のつながりの間の類似性と断絶について、現地調査を通して考察を深めるとともに、出産から家族計画、不妊にいたるまで南アジアにおけるリプロダクションの実践とその変容を把握する。

⑵ 理論的研究

サブスタンスは個から派生するつながりを超えた、より集合的な集団形成にも関わっている。特にインドでは20世紀初頭にインド＝アーリア人を標榜し、社会の浄化を求める優生学運動が、産児制限や社会改革との関わりのなかで繰り広げられてきた。植民地官僚やインド学の学者によって古代インドの輝かしい遺産（とそれの反転としての堕落したインド）として喧伝されたアーリア人説は、インドのエリート層にとっては、植民地経験のなかで古代と近代的科学性が接合しながら、自他の区別と自己アイデンティティの確立に寄与する思想として受容された。19世紀末から20世紀にかけての優生学については、ヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本に関して膨大な蓄積があるが、インドを含む第三世界での波及と展開に関する研究は、きわめて限定的である。今年度もインドにおけるアーリア人説と優生学の接合に関する先行研究の検討と分析を中心に行うことで、現地調査で得られたデータ（共時性：水平の軸）を歴史化する文脈（通時性：垂直の軸）を検討する。

また、南アジアにおけるリプロダクションに関する最新の研究を渉猟し、研究動向を把握する。

・計画の概要

サブスタンスに関する調査は、主に松尾が代表を務める科学研究費助成事業 若手B)「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」の一環として行う予定である。現地調査のほか、インドより専門家を招聘し、研究交流と成果公開を目的として民博にて「Eugenics in Indian society: From Ancient to Contemporary」をテーマとしたワークショップを開催予定である。また、日本南アジア学会において分科会を組織し研究報告を行い、研究の深化に努める。さらに、松尾が代表者となっている民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」とも連動し、他地を専門とする研究者との共同研究を通して、本研究課題についても考察を深める。

リプロダクション実践に関しては、松尾が研究分担者を務める科研費（B)「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究：ジェンダーの視点から」（研究代表：白井千晶）および「グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表：杉田映理）の一環として実施する。インド、スリランカで女性の出産、家族計画、不妊、月経、性教育に関する量的な調査を実施し、比較研究のための基礎的データを収集するとともに、南アジアのリプロダクションの全体像を把握するよう努める。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、現地調査、共同研究会の組織・運営、国際ワークショップ「Progeny and Eugenics in Indian Context」の主催、日本南アジア学会でのパネル「Revisiting ‘caste’ and social cohesion in Marathi region」での報告をはじめとする学会や共同研究会での研究報告、論文の刊行を実施した。これらを通して、配偶子（卵子や精子）がインド社会で有する文化的な特徴と、生殖医療（代理出産や配偶子提供など）の現場における卵子のような新たなサブスタンスの可視化、顕在化について検討するとともに、カーストや階層といった社会区分とサブスタンスとのかかわりについて、考察を深めた。

調査研究にあたっては、以下にあげる科学研究費助成事業の助成を受けて実施した。

まず、松尾が代表を務める科学研究費助成事業の若手研究（B)「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」のため、インドにおける遺伝的つながりと血のつながりの認識における差異と類似、お

よび民俗生殖論の観念などについて、文献調査およびインド・マハーラーシュトラ州での聞き取り調査を行った。本科研の成果公開の一環として、インドより２名の研究者を招聘し、2018年９月26日に民博にて「Progeny and Eugenics in Indian Context」を主催した。本ワークショップでは、松尾による優生学とインドに関するイントロダクションに続き、インド文献学の視点から古代ヴェーダ文献に描かれる良い子孫を得るための積極的優生学思想と、歴史学の視点から19世紀～20世紀のマハーラーシュトラにおけるカーストと優生学をめぐる論争についての報告があり、これまで研究蓄積の少ないインドの優生学の歴史的展開について、議論を深めることができた。さらには、日本南アジア学会において「Revisiting ‘caste’ and social cohesion in Marathi region」というパネルを共催し、本科研からはサヴィトリバーイー・フレー・プネー大学のS. Kumbhojkar 准教授と松尾が報告を行った。

また、研究分担者として前年度より継続している基盤研究（B）「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究：ジェンダーの視点から」（研究代表：白井千晶静岡大学教授）のプロジェクトのため、スリランカにおいてリプロダクションの変容に関し、産婦人科、助産師など専門家への聞き取りと出産経験女性12名へのアンケート調査を実施した。それらをすべて文字化し、昨年度のインドでの同調査とあわせて、来年度のデータ分析のための資料として準備した。

さらに、今年度より分担者となった基盤研究（B）「開発のアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表：杉田映理大阪大学准教授）の一環で、インドとシンガポールにおいて、教育現場における月経・性教育に関する政府およびNGOの取り組み、教材開発とローカルな社会の習俗の変容に関する調査を行った。

研究会活動としては、民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置の比較研究」を研究代表として組織し、開催するとともに、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（MINDAS）として、松尾がリーダーを務める「社会変動と親密圏」班の組織・運営を行った。さらに、「現代南アジア地域研究」の一環で、学術協定を結ぶ連合王国・エディンバラ大学南アジア研究センターにおいて、研究報告および研究交流を行った。

論文等の成果としては、共編者、執筆者として、杉本良男・松尾瑞穂編『聖地のポリティクス――ユーラシア地域大国の比較から』（風響社）が刊行されたほか、チットパーヴァン・バラモン高齢者女性のライフヒストリーを分析した論文が『キリスト教社会と文化』第22号、毎日新聞の連載、エッセイ、小論を執筆、刊行するとともに、学会等での研究報告を８回、一般向け講演会を１回実施した。

◎出版物による業績

［編著］

杉本良男・松尾瑞穂編

2019 『聖地のポリティクス――ユーラシア地域大国の比較から』東京：風響社。［査読有］

［分担執筆］

松尾瑞穂

2019 「インド・ヒンドゥー聖地の複数化する宗教資源とその正当性」杉本良男・松尾瑞穂編『聖地のポリティクス――ユーラシア地域大国の比較から』pp.311-330, 東京：風響社。［査読有］

杉本良男・松尾瑞穂

2019 「序論」杉本良男・松尾瑞穂編『聖地のポリティクス――ユーラシア地域大国の比較から』pp.1-20, 東京：風響社。［査読有］

［論文］

松尾瑞穂

2019 「公的経験を支える家族ネットワーク――西インド高齢女性のライフストーリーから」『多民族社会の宗教と文化』22：33-45。

［その他］

松尾瑞穂

2018 「ジェンダーとリプロダクションの人類学――インド農村社会における不妊を生きる女性たち」澤野美智子編『医療人類学を学ぶための60冊――医療を通して「当たり前」を問い直そう』pp.191-193, 東京：明石書店。

2018 「新世紀ミュージアム　ドクターバウ・ダジ・ラル・ムンバイ市博物館」『月刊みんぱく』42(9)：16-17。

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊾ 出産する女性たち」『文部科学 教育通信』443：2。

2018 「サブスタンスの人類学に向けて――サブスタンス論とサブスタンス研究の整理」『民博通信』162：16-17。
2019 「旅・いろいろ地球人　多文化の中の子育て① 名前のつけかた」『毎日新聞』 2月2日夕刊。
2019 「旅・いろいろ地球人　多文化の中の子育て② 国籍を選ぶ」『毎日新聞』 2月9日夕刊。
2019 「旅・いろいろ地球人　多文化の中の子育て③ 食のあれこれ」『毎日新聞』 2月16日夕刊。
2019 「旅・いろいろ地球人　多文化の中の子育て④ 言葉と教育」『毎日新聞』 2月23日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2018年7月24日　'Surrogacy and gamete donation: Rethinking blood relations through ARTs in India.' 第1回 RINDAS/MINDAS/KINDAS 研究グループ2共催国際セミナー『The Fragmented Body and Corporeal Reality in Contemporary』京都大学

・共同研究会での報告

2018年10月27日　「科学と歴史のもつれあい――インドのアーリア人論争」『人類学を自然化する』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年6月3日　「ジェンダー化された身体の被傷性――インドにおけるリプロダクションと人工妊娠中絶」日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学
2018年6月16日　「西インドの高齢女性にみる親密圏とネットワーク――新たなエイジングの模索」宮城女子学院大学キリスト教文化研究所研究会、宮城女子学院大学
2018年9月26日　'Politics of Progeny and Eugenics in India.' Workshop "Progeny and Eugenics in Indian Context", National Museum of Ethnology
2018年9月29日　'The formation of Class identity in Modern Maharashtra: Debate on Eugenics, Sexuality and Birth control.' 日本南アジア学会第31回全国大会、金沢歌劇座
2018年11月22日　'Imagined relatedness: corporeal reality in third-party assisted reproductive technologies (ARTs) in Western India.' Seminar of Centre for South Asia Studies, University of Edinburgh, Scotland
2019年1月30日　'Medical Termination of Pregnancy and Female Infanticide in India.' 第74回歴史人口学セミナー、麗澤大学東京研究センター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年1月20日　「インドの子育て――授乳編」第530回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年8月10日～9月11日―インド、スリランカ（リプロダクション及び生殖医療に関する科研調査）
2018年11月20日～11月29日―イギリス（エジンバラ大学南アジア研究センターでの研究報告及び MINDAS 関連用務）
2018年3月3日～3月21日―インド、シンガポール（インドにおける月経実践に関する調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（その他）「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」研究代表者、科学研究費（若手研究（B））「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表者：杉田映理（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究――ジェンダーの視点から」（研究代表者：白井千晶（静岡大学））研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

平井京之介［ひらい　きょうのすけ］――教授

【学歴】東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）【職歴】国立民族学博物館第１研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、総合研究大学院大学比較文化学専攻長（2016–2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2018）【学位】Ph.D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M. Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）【専攻・専門】社会人類学　水俣病被害者支援運動の人類学的研究、タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

［単著］

平井京之介

2011 『村から工場へ――東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT 出版。

［編著］

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ――移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

Hirai, K.（ed.）

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia*（Senri Ethnological Studies 91）. Osaka: National Museum of Ethnology.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、熊本県水俣において、水俣病という悲惨な出来事を伝える場所やモノがいかにして「負の遺産」として保存されるようになったか、水俣病紛争が沈静化した現在の水俣社会においてそれらはどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。

本研究では、①水俣病被害者が運動のなかで収集してきたモノや記録が1990年代以降になって、いかにして「遺産」と認識されるようになったか、②行政がどのような経緯でそれらを「負の遺産」として保存・活用するようになったか、③「負の遺産」は社会においてどのような役割をもつか、を解明することを具体的な研究目的とする。

なお、当研究に関わる現地調査においては、科学研究費助成事業基盤研究（C）を利用する。

・成果

相思社および水俣病歴史考証館を中心に、教育旅行を企画する環不知火プランニング、水俣病を語り継ぐ会などを含め、被害者関連団体の「負の遺産」の保存・活用の実態とその歴史的経緯を把握するために、科学研究費助成事業基盤研究（C）を利用して、約２ヵ月間の現地調査を実施した。相思社の組織や活動の概要についてはこれまでの調査で基礎的なデータを得ているため、水俣病歴史考証館設立の経緯と、それに関連する博物館活動の歴史に絞って調査をおこなった。また、水俣病を語り継ぐ会が実施する熊本県水俣病保健課の教職員を対象とした水俣病問題啓発事業に同行し、活動内容とその問題点、可能性についての調査をおこなった。

さらに、本研究の今後の理論的展望をまとめ、民博通信162号に「水俣病を伝えるという運動――ブルデュー理論によるアプローチ」として発表した。

◎出版物による業績

［論文］

平井京之介

2018 「水俣病を伝えるという運動――ブルデュー実践理論によるアプローチ」『民博通信』162：4-9。

［その他］

平井京之介

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊹ 女工と托鉢僧」『文部科学 教育通信』448：2。

2018 「学生運動から水俣病闘争へ」特集「1968と人類学」『月刊みんぱく』42(12)：8-9。

2018 「水俣病の経験を伝える博物館活動――手作り資料館のすすめ」『地域文化の再発見――大学・博物館の視点から』大阪：国立民族学博物館。

2018 「ピエール・ブルデュー」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学』pp.193-198, 京都：ミネルヴァ書房。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2018年12月16日 「総合討論コーディネータ」国際フォーラム『地域文化を保存する――実践者の視点から』高雄市立歴史博物館、台湾

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年11月25日 「博物館と地域文化――タイのコミュニティ博物館の事例から」台北芸術大学博物館研究所セミナー、台北芸術大学博物館研究所、台湾

2018年11月25日 「博物館の社会的役割――水俣病歴史考証館の事例から」台北芸術大学博物館研究所セミナー、台北芸術大学博物館研究所、台湾

2018年11月29日 'Minamata Disease and Two Museums.' 台北芸術大学博物館研究所セミナー、台北芸術大学博物館研究所、台湾

◎調査活動

・海外調査

2018年11月10日～12月10日―台湾（「負の遺産」の生産過程に関する博物館人類学的研究）

2018年12月14日～12月18日―台湾（国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」への参加）

2019年１月29日～２月５日―タイ（タイのコミュニティ博物館についての情報収集）

2019年２月27日～３月11日―連合王国（負の遺産の展示に関する人類学的研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト紛争期の水俣における『負の遺産』の生成過程に関する博物館人類学的研究」研究代表者

池谷和信［いけや　かずのぶ］―― 教授

1958年生。**【学歴】**東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）**【職歴】**北海道大学文学部附属北方文化研究施設文化人類学部門助手（1990）、国立民族学博物館第１研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009-2011）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2014-2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）**【学位】**理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）**【専攻・専門】**環境人類学、人文地理学、地球学、生き物文化誌学、世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、植民地時代における民族社会の変容に関する研究、地球環境問題および地球環境史に関する研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、

ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会、International Society for Hunter Gatherer Research（ISHGR）、日本考古学協会

【主要業績】

［単著］

池谷和信

2014 『人間にとってスイカとは何か――カラハリ狩猟民と考える』（フィールドワーク選書５）京都：臨川書店。

2003 『山菜採りの社会誌――資源利用とテリトリー』仙台：東北大学出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民――カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書４）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2007 日本地理学会優秀賞

1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

狩猟採集民からみた地球環境史

・研究の目的、内容

本研究は、人類文明誌研究の一環として「狩猟採集民からみた地球環境史」を把握することを目的とする。具体的には、アジア地域を中心にして、狩猟採集民の食、生業、社会の歴史的変遷を明らかにする。主な調査地としては、北アジアはベーリング海峡に面する村にくらすチュクチ、東アジアはアイヌ、東南アジアはタイのムラブリ、南アジアはアンダマン島民を選んでいる。これらの４地域の比較をすることでアジア型の生業論、社会論、定住化論を構築することができ、世界の狩猟採集民を対象にした理論的研究に貢献できるものと考えている。なお、この研究を進めるにあたり、新学術領域研究「パレオアジア文化史（B01：人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築）」研究分担者としての経費を使用する。

・成果

2018年７月23-27日に開催された第12回国際狩猟採集民会議（CHAGS12 マレーシアのペナン）にて、筆者が代表とする以下のようなパネルを組織した。（P15）Comparative studies of hunter-gatherers in Asia: from nomadic to sedentary lifestyles for long-term periods（https://chags.usm.my/index.php/p15-asia）このパネルでの趣旨説明と研究報告（「アジアの狩猟採集民と文明」）を行った。また、オーストリアのウィーンで開催された第11回国際狩猟採集民会議（CHAGS11）の成果として、以下のような論文集を刊行した。R. Fleming Puckett and K. Ikeya（eds.）*Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates,* Senri Ethnological Studies 99, National Museum of Ethnology. この論集は、カラハリ狩猟採集民に関する現状を多角的分析したものであり、今後、この分野の必読書になるものと考えている。

◎出版物による業績

［編著］

Puckett, R.F. and K. Ikeya（eds.）

2018 *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates*（Senri Ethnological Studies 99). Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Ikeya, K.（ed.）

2019 *The Spread of Food Cultures in Asia*（Senri Ethnological Studies 100). Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［論文］

池谷和信

2018 「The Cowrie Road: Shells Inscribed by Human History」『国立民族学博物館コレクション　貝の道』pp.46-49, 葉山：神奈川県立近代美術館.

2018 「タカラガイの道――貝に刻まれた人類史」『国立民族学博物館コレクション 貝の道』pp.41–45, 葉山：神奈川県立近代美術館。

2018 「ミュージアムからみえる生き物と人」『BIOSTORY』29：7–9。

2019 「アフリカの民族文化の多様性――民族・言語・宗教に注目して」『地図情報』38(4)：20–23。

2019 「日本の山々は何に使われてきたか――『温帯山地』における多様な環境開発」山本紀夫編『熱帯高地の世界――「高地文明」の発見に向けて』pp.127–172, 京都：ナカニシヤ出版。

2019 「アジアにおける豚の飼養形態――遊牧、日帰り放牧」『All about SWINE』54：3–7。

Ikeya, K.

2018 Settlement Patterns and Sedentarization among the San in the Central Kalahari (1930–1996). In R.F. Puckett and K. Ikeya (eds.) *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates* (Senri Ethnological Studies 99), pp.177–196. Osaka: National Museum of Ethnology.

2018 Introduction. In R.F. Puckett and K. Ikeya (eds.) *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates* (Senri Ethnological Studies 99), pp.1–28. Osaka: National Museum of Ethnology.

2019 Utilization of Wild Plants as Food and Commodity in Japan. In K. Ikeya (ed.) *The Spread of Food Cultures in Asia* (Senri Ethnological Studies 100), pp.223–230. Osaka: National Museum of Ethnology.

2019 Food Cultures in the World Represented by a Museum Exhibition. In K. Ikeya (ed.) *The Spread of Food Cultures in Asia* (Senri Ethnological Studies 100), pp.65–79. Osaka: National Museum of Ethnology.

2019 Introduction. In K. Ikeya (ed.) *The Spread of Food Cultures in Asia* (Senri Ethnological Studies 100), pp.1–8. Osaka: National Museum of Ethnology.

［その他］

池谷和信

2018 「人と家畜のエピソード73 ボツワナで人や物を運ぶロバ車」『JVM 獣医畜産新報』71(4)：319。

2018 「リチャード・リー」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学――人物・古典・名著からの誘い』pp.89–94, 京都：ミネルヴァ書房。

2018 「長期間におけるアジアの狩猟採集民の社会変化と持続性」藤木利之・北川浩之編『パレオアジア文化史学第５回研究大会予稿集』pp.42–43, 東京：東京大学総合研究博物館。

2018 「アフリカのビーズとグローバルヒストリー」『日本アフリカ学会第55回学術大会研究発表要旨集』p.79, 京都：日本アフリカ学会。

2018 「人と家畜のエピソード74 ラオスのアヒル」『JVM 獣医畜産新報』71(5)：399。

2018 「人と家畜のエピソード75 猫と人のかかわり」『JVM 獣医畜産新報』71(6)：479。

2018 「人と家畜のエピソード76 極限の環境に生きるベドウィンの山羊」『JVM 獣医畜産新報』71(7)：559。

2018 「ビーズに秘められた可能性(3) 貝殻」『Bead Art & Embroidery』26：62–65。

2018 「ウィットウォーターズランド大学 オリジンセンター・ミュージアム」『月刊みんぱく』42(7)：16–17。

2018 「人と家畜のエピソード77 エピオルニスと人とのかかわり」『JVM 獣医畜産新報』71(8)：639。

2018 「人と家畜のエピソード78 養殖されるピラルク」『JVM 獣医畜産新報』71(9)：645。

2018 「人と家畜のエピソード79 アザラシと人」『JVM 獣医畜産新報』71(10)：799。

2018 「ビーズに秘められた可能性(4) ガラスビーズ」『Bead Art & Embroidery』27：pp.54–57。

2018 「人と家畜のエピソード80 動物の家畜化、鳥の家禽化、魚の養殖」『JVM 獣医畜産新報』71(11)：804。

2018 「佐々木高明の世界 その１――五木村からみた日本の焼畑」『日本民俗学会第70回年会研究発表要旨集』p.117, 東京：日本民俗学会。

2018 「イノシシと人――人類にとってのイノシシとは何か」『生き物文化誌学会「イノシシ例会」講演要旨』p.2, 東京：イノシシ例会実行委員会。

2018 「人と家畜のエピソード81 人類と家畜の未来――イノシシと豚から考える」『JVM 獣医畜産新報』

71(12)：885。

2018 「北東アジアにおける地域構造の変容――越境から考察する共生への道」（研究成果の公開――最近開催されたシンポジウム等から）『民博通信』163：26。

2019 「ビーズに秘められた可能性(5) 鉄ビーズ」『Bead Art & Embroidery』28：pp.64-67。

2019 「インドのアッサムにおける在来豚と人」田中一榮・黒澤弥悦・東京農業大学「食と農」の博物館編『アジアの在来豚――写真と史料でみる』pp.104-105, 東京：東京農業大学出版会。

池谷和信・野林厚志

2018 「民族学からみる狩猟採集社会同士の接触と交替」『日本考古学協会第84回総会研究発表要旨』pp.120-121, 東京：日本考古学協会。

野林厚志・池谷和信

2018 「民族学からみる狩猟採集・農耕社会の接触と交替」『日本考古学協会第84回総会研究発表要旨』pp.118-119, 東京：日本考古学協会。

門脇誠二・池谷和信

2018 「中部旧石器時代から上部旧石器時代への居住移動行動の変遷――南ヨルダン、カルハ山域の資源利用に注目して」西秋良宏・野口淳編『パレオアジア文化史学第６回研究大会予稿集』pp.2-3, 東京：東京大学総合研究博物館。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

池谷和信監修

2018 『みんぱく映像民族誌 第29集 カラハリ砂漠の狩猟採集民』（日本語・84分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年９月22日 'Introduction.' "Regional Structure and Its Change in Northeast Asia: In Search of the Way to Coexist from the Point of View of Transborderism (NIHU Area Studies Project for Northeast Asia)", National Museum of Ethnology.

2019年３月18日 'Comments.' International Symposium "Making Food in Human and Natural History." Minpaku (National Museum of Ethnology) Special Research Project Series 2 'Human and Natural History in the System of Food Production.' National Museum of Ethnology.

・共同研究会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月13日 「長期間におけるアジアの狩猟採集民の社会変化と持続性」パレオアジア文化史学第５回研究大会、名古屋大学

2018年５月26日 「アフリカのビーズとグローバルヒストリー」日本アフリカ学会第55回学術大会、北海道大学

2018年５月27日 （池谷和信・野林厚志）「民族学からみる狩猟採集社会同士の接触と交替」日本考古学協会第84回総会、明治大学

2018年５月27日 （野林厚志・池谷和信）「民族学からみる狩猟採集・農耕社会の接触と交替」日本考古学協会第84回総会、明治大学

2018年６月11日 'Sustainable Utilization of Non-Timber Forest Products in Japan.' Sustainable Utilization of Forest Resources and Ecological Sciences in Japanese Mountains (Norway-Japan Exchange Program Workshop in Toyama), University of Toyama.

2018年７月26日 'Hunter-gatherers and Civilization in Asia.' CHAGS12 (12th International Conference on Hunting and Gathering Societies) School of Social Science, Universiti Sains Malaysia, Penang.

2018年７月27日 'Introduction.' CHAGS12 (12th International Conference on Hunting and Gathering Societies) School of Social Science, Universiti Sains Malaysia, Penang.

2018年10月７日 「民族誌からみた技術、資源利用、行動圏」パレオアジア文化史学 A01/A02/B01合同研究会『温帯更新世の狩猟採集民の実像を求めて――寒帯・温帯・熱帯での狩猟採集民の資源利用と移動・移住パターンの比較』国立民族学博物館

2018年10月14日 「佐々木高明の世界 その１――五木村からみた日本の焼畑」日本民俗学会第70回年会、駒澤大学

2018年11月18日　（門脇誠二・池谷和信）「中部旧石器時代から上部旧石器時代への居住移動行動の変遷――南ヨルダン、カルハ山域の資源利用に注目して」パレオアジア文化史学第６回研究大会、東京大学

2018年12月17日　'Human Dispersal and Adaptation for Livelihood - Hunting Style Changed with Dogs.' Paleo Asia 2018（The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia), Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto

2019年２月１日　'Hunter-Gatherers and Beads in Africa and Asia.' SOKENDAI International Symposium "Integrated Anthropology from Genetics to Ecology, Biodiversity: Conservation of Organisms, Cultures and Ethnicities", 総研大葉山キャンパス

2019年２月16日　「アジアの先住民族――現状と人権問題」桃山学院大学国際教養学部開設10周年記念シンポジウム『アジアの先住民族と人権――フィリピン ママヌワ族の方をお招きして』桃山学院大学

2019年３月21日　（渡辺和之・池谷和信）「趣旨説明」シンポジウムS6『自然と人間の関わりの地理学――環境研究と社会連携』2019年日本地理学会春季学術大会、専修大学

2019年３月21日　「コメント」シンポジウムS6『自然と人間の関わりの地理学――環境研究と社会連携』2019年日本地理学会春季学術大会、専修大学

・研究講演

2018年８月４日　「タカラガイと貝の道」神奈川県立近代美術館葉山館

2018年10月27日　「人間にとってビーズとは何か？――つなぐ・かざる・みせる」世界のビーズ講座、岡山市立オリエント美術館

2018年11月４日　「ビーズ展示からみえるホモサピエンス像」世界のビーズ講座特別版「文化のビーズ、文明のビーズ――縄文、エジプト、現代社会」岡山市立オリエント美術館

2018年11月10日　「素材から見たビーズの道」みんぱく友の会・オリ美友の会相互企画トーク・イベント、岡山市立オリエント美術館

2018年11月25日　「知られざる遊牧ブタの世界」『ブタになったイノシシたち展』講演会、東京農業大学「食と農」の博物館

・展示活動

神奈川県立近代美術館葉山館 企画展「国立民族学博物館コレクション 貝の道」学術協力（2018.6.23～9.2）

岡山市立オリエント美術館 特別展「国立民族学博物館コレクション ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」監修（2018.9.22～11.25）

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年９月16日　「ビーズからみた人類史」第517回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2018年８月18日～８月19日―熊本県五木村（焼畑の調査）

2019年２月26日～２月27日、３月23日～３月24日―北海道網走市（フォーラム型情報ミュージアム「中央・北アジア」プロジェクトに関わる資料調査）

・海外調査

2018年６月２日～６月９日―ヨルダン（アカバ県ヒュメイマ地区にて先史時代の狩猟採集民の生業に関する調査）

2018年７月21日～７月29日―マレーシア（ペナンで開催された第12回国際狩猟採集社会民会議（CHAGS12）に参加）

2018年９月11日～９月15日―タイ（熱帯アジアにおけるニワトリ利用に関する調査）

2018年10月19日～10月21日―中国（北京で開催された第８回アジア食会議に参加）

2018年12月８日～12月15日―ラオス、タイ（森の民に関する調査）

2019年２月３日～２月13日―ボツワナ、南アフリカ（カラハリ狩猟民の物質文化に関する調査）

2019年３月８日～３月13日―バングラデシュ（在来家畜の利用に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（３人）、副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（基盤研究（A））「乳文化の視座からの牧畜論考――全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘（帯広畜産大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「低生産性品種・形質に向けられる心象の学融合解析と品種継承施策のパラダイム転換」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：ピーター J. マシウス）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」拠点代表者、総研大・先導科学共働プログラム・国際共同研究「遺伝学から生態学、生物多様性に至るまでの統合人類学の構築――生物、文化、民族の保全について」（研究代表者：田辺秀之）研究分担者

・**他機関から委嘱された委員など**

Nomadic Peoples editorial board、Journal of Communication editorial board、Studies of Tribes and Tribals editorial board、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会副会長、ヒトと動物の関係学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営会議員、ビオストーリー編集委員（編集長）、コスモス国際賞選考専門委員会委員、食の文化フォーラム会員

・**非常勤講師**

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）、放送大学客員教授「フィールドワークと民族誌」（オンライン）

齋藤　晃［さいとう　あきら］――――――

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第５代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が碁盤目状に整然と区画された１千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、人文情報学のツールを活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究（A）「アンデスにおける植民地的近代――副王トレドの総集住化の総合的研究」（2015～2019年度、代表者：齋藤　晃）の一環として実施される。

・成果

７月16日、スペインのサラマンカ大学で開催された第56回国際アメリカニスト会議において、「トレドのレドゥクシオンへの新たな視線――間地域的・多分野的対話に向けて」と題する国際シンポジウムを実施した。このシンポでは、科研費による国際共同研究「アンデスにおける植民地的近代――副王トレドの総集住化の総合的研究」のメンバーが、論文集の刊行を視野に入れて、これまでの研究成果を発表した。齋藤はシンポの実行委員長として冒頭で趣旨説明をおこなった。

２月28日、総合地球環境学研究所において、科研費による国際共同研究のメンバーと共同で、「超域的スケールにおけるデジタル人文地理学」と題する英語の公開セミナーを実施した。このセミナーでは、ラテンアメリカと東南アジアを専門とする地理学者・考古学者・歴史学者が参加し、超域的な人間活動を研究するうえで人文情報学のツールがどう役立つかについて議論した。齋藤は副王トレドの総集住化のマクロ分析の成果を披露した。

◎出版物による業績

［論文］

齋藤　晃

2019 「紙の上の集住化――イエズス会ペルー管区モホス地方の洗礼簿の分析」吉江貴文編『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』（国立民族学博物館論集⑥）pp.129-159, 大阪：国立民族学博物館。［査読有］

［その他］

齋藤　晃

2018 「旅・いろいろ地球人　南米アマゾンの旅① 川を航行する」『毎日新聞』11月10日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　南米アマゾンの旅② 草原を横断する」『毎日新聞』11月17日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　南米アマゾンの旅③ 空を飛ぶ」『毎日新聞』11月24日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月16日　Simposio “Nuevas miradas sobre las reducciones toledanas: hacia un diálogo interregional y multidisciplinario”（国際シンポジウムの実行委員長：S.A. Wernkeと共同）, 56° Congreso Internacional de Americanistas, Universidad de Salamanca, Salamanca, España.

2018年７月16日　‘Presentación de la temática.’（趣旨説明）. Simposio “Nuevas miradas sobre las reducciones toledanas: hacia un diálogo interregional y multidisciplinario”, 56° Congreso Internacional de Americanistas, Universidad de Salamanca, Salamanca, España.

2018年７月16日　‘Contribution of the Digital Humanities Methods to the Construction of an Overall Picture of Francisco de Toledo’s *Reducciones*: An Experiment with the Resource Description Framework（研究報告：Y. Kondo、N. Mizota、T. Koyama と共同）.’ Simposio “Nuevas miradas sobre las reducciones toledanas: hacia un diálogo interregional y multidisciplinario”, 56° Congreso Internacional de Americanistas, Universidad de Salamanca, Salamanca, España.

・みんぱくゼミナール

2019年２月16日　「インカ帝国から先住民共同体へ――植民地期アンデスにおける先住民の集住化」第488回み

んぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年12月２日 「ボリビア・アマゾンの旅」第525回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年７月14日～７月20日―スペイン（第56回国際アメリカニスト会議におけるシンポジウムの開催）

2019年３月16日～３月21日―フィリピン（スペイン統治時代のフィリピンにおけるキリスト教的物質文化の調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代――副王トレドの総集住化の総合的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「近代ヒスパニック世界における文書ネットワークの成立・展開・変容（衰退）過程の究明」（研究代表者：吉江貴文（広島市立大学））研究分担者

關　雄二［せき　ゆうじ］――副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

上羽陽子［うえば　ようこ］――准教授

1974年生。**【学歴】**大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士前期課程修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士後期課程修了（2002）**【職歴】**大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）**【学位】**博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）**【専攻・専門】**民族芸術学、染織研究、手工芸研究**【所属学会】**民族藝術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

上羽陽子

2015 『インド染織の現場――つくり手たちに学ぶ』京都：臨川書店。

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼――ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

［論文］

上羽陽子

2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1-51。

【受賞歴】

2010　意匠学会作品賞

2007　第４回木村重信民族藝術学会賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現代インドにおける手工芸品のつくり手たちが、急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることが目的である。

本年度は、インド北東部アッサム地域において生態資源利用の視点からタケ利用と野蚕利用に関して調査・研究をすすめる。とりわけ、タケの伐採方法や加工具・加工技術を明らかにし、現生人類がどのように道具利用を発達させてきたかについて考察をおこなう。同時に、アッサム地域での野蚕の一種エリ蚕の飼養・生産・製糸・製織技術および生産構造を明らかにし、現在も野蚕利用をしつづける自然環境および社会構造などの要因を考察する。

本研究は、科学研究費補助金・新学術領域「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」による。

・成果

本年度は、上記外部資金をもちいておこなった調査成果として、カナダ、バンクーバーで開催された Textile Society of America's 16th Biennial Symposium "The Social Fabric: Deep Local to Pan Global" にて、"Unweaving Textiles, Disentangling Ropes: Exploration of "Lineware" as an Analytical Category"、The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia（会場：京都 総合地球環境学研究所）にて "The vital role of "cordage" in food acquisition and other aspects of human life" のタイトルで研究発表をおこない（中谷文美・金谷美和との共同発表）、線状物による道具（食糧獲得、衣・住生活、儀礼）製作と利用を事例に挙げ、グローバル化によって日常生活での天然素材による利用例が激減する紐製品のおかれた状況の中で、"lineware" という新たな概念を提案した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

上羽陽子・金谷美和・中谷文美

2019 「道具としての植物利用――インド北東部アッサム地域を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2018年度研究報告――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.5-9, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班。

上羽陽子

2018 「大量消費の行方――インド、繊維アパレル産業の今」映画『人間機械』（劇場用パンフレット）pp.58-62, 東京：アイ・ヴィー・シー。

2019 「ミラー刺繍をとりまく世界――手刺繍からミシン刺繍へ」宮内愛姫編『かわいいミラー刺繍』pp.119-125, 東京：誠文堂新光社。

Ueba, Y.

2018 From Line to Form. In National Museum of Ethnology（ed.）*National Museum of Ethnology Exhibition Guide,* pp.162-165. Osaka: National Museum of Ethnology.

［その他］

金谷美和・上羽陽子・中谷文美

2018 「道具としての植物利用――インド北東部アッサム地域を中心に」西秋良宏・野口淳編『パレオアジア文化史学第6回研究大会予稿集』p.86, 東京：東京大学総合研究博物館。

上羽陽子・金谷美和・中谷文美

2018 「タケ利用と『単純な』技術――インド北東部アッサム地域を事例に」藤本利之・北川浩之編『パレオアジア文化史学第5回研究大会予稿集』p.44, 東京：東京大学総合研究博物館。

Ueba, Y., M. Kanetani, and A. Nakatani

2018 Simple Techonologies and the Use of Bamboo in Assam, Northeast India. In T. Fujiki and H. Kitagawa（eds.）*The proceedings of the 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia,* pp.44-45. Tokyo: The University Museum, The University of Tokyo.

Nakatani, A., Y. Ueba, and M. Kanetani

2018 The Vital Role of "Cordage" in Food Acquisition and Other Aspects of Human Life. In Y. Nishiaki, S. Kadowaki and Y. Kondo（eds.）*PaleoAsia 2018 The International Workshop,* Program and Abstracts, pp.96-97.

Kanetani, M., Y. Ueba, and A. Nakatani
2018　The Use of Plant Resources for Tools in Assam, Northeast India. In Y. Nishiaki and A. Noguchi (eds.) *The 6nd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.87.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年11月３日　「線状物を生みだす人類の知恵」シンポジウム「バスケタリーと人類」国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2019年２月18日　「染色技術の戦略的選択――インド西部グジャラート州の女神儀礼用染色布から」『伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年４月24日　「天然と化学のはざま――インド・グジャラート州の女神儀礼用染色布の生産現場」第14回展「インド　木版更紗――村々で出会った文様の原形」関連講演会、岩立フォークテキスタイルミュージアム

2018年５月12日　「タケ利用と『単純な』技術――インド北東部アッサム地域を事例に」パレオアジア文化史学第５回研究大会、名古屋大学環境総合館

2018年10月20日　「糸やヒモのもつ見えない力――人類の繊維利用」小松市埋蔵文化財センター

2018年11月17日　「道具としての植物利用――インド北東部アッサム地域を中心に」パレオアジア文化史学 第６回研究大会、東京大学

2018年12月15日　'The Vital Role of "Cordage" in Food Acquisition and Other Aspects of Human Life.' PaleoAsia 2018 The International Workshop, Poster Presentation, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年２月３日　「はじめにヒモありき――人類の線状物利用」第532回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年８月18日～８月30日―インドネシア（「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」にかかる調査研究）

2018年９月17日～９月26日―カナダ（Textile Society of America's 16th Biennial Symposium（第16回アメリカ国際テキスタイル学会シンポジウム）での研究発表および参加）

2019年２月27日～３月13日―連合王国（インド手工芸文化に関する文献調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

卯田宗平［うだ　しゅうへい］――准教授

1975年生。**【学歴】**立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（2003）**【職歴】**総合研究大学院大学日本学術振興会特別研究員（2000）、千葉大学文学部非常勤講師（2004）、高崎経済大学地域政策学部非常勤講師（2004）、中央民族大学日本学術振興会海外特別研究員（2005）、中央民族大学民族学社会学学院訪問学者兼外籍講師（2005）、東京大学日本学術振興会特別研究員（2008）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構特任講師（2011）、東京大学東洋文化研究所汎アジア研究部門講師（兼任）（2011）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合

研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2003）**【専攻・専門】**環境民俗学・東アジア地域研究**【所属学会】**日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human Ecology（SHE）、生き物文化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

［単著］

卯田宗平

2014 『鵜飼いと現代中国――人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

［編著］

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門――東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

［論文］

卯田宗平

2015 「ポスト『北方の三位一体』時代の中国エヴェンキ族の生業適応――大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性――フィールドからのサスティナビリティ論』（研究双書 No.616）pp.73-108, 千葉：アジア経済研究所。

【受賞歴】

2010 第５回日本文化人類学会奨励賞

1998 学部長コース賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本年度の研究では、(1)日本の鵜飼文化を対象に、2014年から実施されているウミウの人工繁殖にかかわる４年間の記録をまとめ、人工繁殖と育雛の技術を明らかにする。そのうえで、(2)中国雲南省の鵜飼い漁におけるカワウの繁殖技術を明らかにし、日本の鵜匠によるウミウの繁殖技術と比較することで双方の特徴を導きだす。なお、本研究は科学研究費助成事業・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論――新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなう。

・成果

本年度は、まず京都府宇治市の宇治川の鵜飼を対象とし、2014年から2017年までの４年間の繁殖作業の調査記録をまとめ、ウミウの繁殖技術と繁殖生態の特徴を明らかにした。既存の鵜飼研究では、ウミウの繁殖技術に関わるものはない。それは、日本列島において鵜飼のウミウが産卵し、孵化したという事例がなかったからである。本年度の研究では、(1)繁殖作業前に巣材と巣箱を鵜小屋に配置することでウミウに巣造りを促し、そこで確実に産卵させる、(2)巣内の卵をすぐに取りだすことで親鳥にさらに産卵を促し、より多くの卵を確保する、(3)巣内におく偽卵の数を加減したり、巣材を取り除いたりすることでウミウの産卵行動を調整する、(4)孵卵器内部の温度設定や卵の冷却作業によって孵化率や育雛期の生存率を高める、(5)雛に対する給餌や温度管理の方法を確立させることで、晩成性の特徴をもつ雛を確実に成長させる、という技術を明らかにした。くわえて、本年度は、中国雲南省洱海の鵜飼も対象とし、漁師によるカワウの繁殖技術を記録したうえで、鵜飼が禁止された状況においても人工繁殖を続ける要因を明らかにした。

これらの一連の研究成果は、卯田宗平・澤木万理子・松坂善勝・江﨑洋子（2018）「鵜飼のウミウの繁殖生態と鵜匠による技術の安定化――宇治川の鵜飼における４年間の記録から」『生き物文化誌学会ビオストーリー』29：96-105、卯田宗平（2019）「カワウの人工繁殖をめぐる漁師の技法と生殖介入の動機――中国雲南省洱海における鵜飼い漁師たちの繁殖技術の事例から」『国立民族学博物館研究報告』43(4)：555-668. にまとめた。なお、以上の本研究は科学研究費助成金・基盤研究（C）「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論――新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなった。

◎出版物による業績

［論文］

卯田宗平・澤木万理子・松坂善勝・江﨑洋子

2018 「鵜飼のウミウの繁殖生態と鵜匠による技術の安定化――宇治川の鵜飼における４年間の記録から」『BIOSTORY』29：96-105。［査読有］

卯田宗平

2019 「カワウの人工繁殖をめぐる漁師の技法と生殖介入の動機――中国雲南省洱海における鵜飼い漁師たちの繁殖技術の事例から」『国立民族学博物館研究報告』43(4)：555-668。［査読有］

［その他］

卯田宗平

2018 「国立民族学博物館の所蔵品㊷ 持ち運びが便利な双胴船」『文部科学 教育通信』436：2。

2018 「想像界の生物相――カワウソ老いて河童になる？」『月刊みんぱく』42(10)：14-15。

2018 「ドメスティケーションが生起する条件――しない／できない事例から考える」『民博通信』163：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年３月22日 「司会進行『新しい文明研究を目指して』」『アンデス文明の起源を求めて――日本人研究60年の軌跡と展望』

・共同研究会での報告

2018年10月27日 「これまでのドメスティケーション研究会の成果と今年度の課題(5)」共同研究会『もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

2018年11月17日 「これまでのドメスティケーション研究会の成果と今年度の課題(6)」共同研究会『もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

2019年２月２日 「これまでのドメスティケーション研究会の成果と今年度の課題(7)」共同研究会『もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

2019年２月17日 「脱ドメスティケーションの人類学に関する成果報告」共同研究会『もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月８日 「なぜ日本の鵜匠はウ類をドメスティケートしないのか――中国の鵜飼との事例比較から考える」AA研共同利用・共同研究課題『「わざ」の人類学的研究――技術、身体、環境（「もの」の人類学的研究(3)）』2018年度第１回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2018年10月14日 「ウ類に対する働きかけの違いとその要因――日本と中国の鵜飼をめぐる事例から」第70回日本民俗学会年会、駒澤大学

2018年11月23日 「なぜ中国の鵜飼ではカワウをドメスティケートするのか――日本の鵜飼との事例比較から」人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業国際シンポジウム『動物資源をめぐる文化のデザイン』東北大学東北アジア研究センター

・研究講演

2018年９月15日 「中国の鵜飼について――日本と中国の鵜飼技術の違いから背景文化の違いを知る』第32回特別展示『中国の鵜飼――卯田宗平フォトコレクションから』岐阜市長良川うかいミュージアム

・展示

2018年９月５日～11月５日 「中国の鵜飼――卯田宗平フォトコレクションから」岐阜市長良川うかいミュージアム

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年５月27日 「失われつつあるものを、かき集めた――日本資料の紹介」第513回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年４月21日 「特別展における日本展示のストーリーと舞台裏」開館40周年記念特別展『太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料』ギャラリートーク、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2018年４月22日～４月30日―中華人民共和国（カワウの人工孵化・育雛技術の調査）

2018年５月30日～６月５日―中華人民共和国（カワウの人工繁殖における巣立ち雛数および育雛期死亡数の調査）

2018年６月17日～６月23日―中華人民共和国（中国江西省鄱陽湖の鵜飼および淡水漁撈の基礎調査）

2018年10月29日～11月６日―中華人民共和国（雲南省大理市にてカワウの巣立ち成功率の調査）

2018年11月30日～12月３日―中華人民共和国（中国東北部の生態人類学の動向調査および動植物相の書籍収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論――新たな人・動物関係論の構築と展開」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

岐阜県岐阜市長良川鵜飼習俗総合調査専門委員会委員、岐阜県関市小瀬鵜飼習俗総合調査委員会委員、生態人類学会理事

鈴木　紀［すずき　もとい］――――――

・研究の目的、内容

本研究は、文明論の視点から現代のラテンアメリカ地域の特徴を分析することを目的とする。ラテンアメリカ地域は先コロンブス時代にメソアメリカ文明やアンデス文明、その他の地域文明を育み、16世紀以降は西洋文明を受容した。したがって文明として現代のラテンアメリカを捉えるためには、先コロンブス時代の文明の継続／再解釈と、西洋およびその他の地域の文明の受容／再解釈、および両者の結果としての現代文明としてのラテンアメリカの普遍性／固有性の検討が必要になる。

本研究を推進するための方法論として、ラテンアメリカ地域の先住民族文化を展示する考古学・人類学・歴史博物館および美術館における展示手法の比較をおこなう。このために、科学研究費助成事業・新学術領域研究「植民地時代から現代の先住民文化」（研究代表：鈴木　紀）ならびに科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金「古代アメリカの比較文明論」（研究分担）を活用する。

・成果

以下の形で研究成果を発表した。

1）博物館展示の比較研究

① Suzuki, Motoi, 2018, “Para el ‘Renacimiento’ de las civilizaciones prehispánicas: un estudio comparativo de representación museográfica”. Slobodan S. Pajović and Maja Andrijević（eds.）América Latina y el mundo del siglo XXI: Percepciones, interpretaciones e interacciones. Tomo II, pp.245-251, Belgrado, Serbia: Universidad Megatrend.

② Suzuki, Motoi, 2018, “La diversidad en la representación de las civilizaciones prehispánicas: un estudio comparativo de la museografía”. Manuel Alcántara Sáez, Mercedes García Montero, and Francisco Sánchez López（eds.）Arte: memoria del 56o Congreso International de Americanistas, pp.256-258, Salamanca, Spain: Ediciones Universidad de Salamanca.

③ 鈴木　紀、2019、「明日の博物館　Museu do Amanhã／ブラジル」『月刊みんぱく』498：16-17.

①～③は、科学研究費助成事業・新学術領域研究「植民地時代から現代の先住民文化」（研究代表：鈴木　紀）の成果の一部である。

2）博物館展示の比較研究に関する研究発表

① 鈴木　紀、「文化遺産としての古代アメリカ文明――博物館展示の比較研究」日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学、2018年６月３日

② Suzuki, Motoi, “La diversidad en la representación de las civilizaciones prehispánicas: un estudio comparativo de la museografía”. 56o Congreso Internacional de Americanistas, Salamanca, Spain: Universidad de Salamanca, 2018年７月16日

③ Suzuki, Motoi, “¿Cómo se representan patrimonios prehispánicos?: un estudio comparativo de museos de antropología y arte popular en México y Perú”. Coloquio Internacional de México-Japón: Las sociedades mesoamericanas y los cambios culturales en su proceso histórico, Mexico: Universidad Nacional de Autónoma de México, 2018年８月22日

④ 鈴木　紀、「古代アメリカ文明の継承者は誰か――博物館展示から考える」古代アメリカ学会第23回研究大会、専修大学生田キャンパス、2018年12月２日

⑤ 鈴木　紀「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」科学研究費補助金・新学術領域「古代アメリカの比較文明論」領域会議、キャンパスイノベーション・センター東京、2019年２月17日

①～⑤は科学研究費助成事業・新学術領域研究「植民地時代から現代の先住民文化」（研究代表：鈴木　紀）および科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金「古代アメリカの比較文明論」（研究分担）の成果の一部である。

3）ラテンアメリカに関連するその他の研究

① 鈴木　紀　2018「寿司屋で振り返る日本文化――イーストサイド・寿司」『月刊みんぱく』42(11)：18-19。

② 鈴木　紀　2019「チョコレートとチョコラテ――カカオを楽しむ２つの伝統」『関西外国語大学イベロアメリカ研究センターニューズレター』8：7-12。

③ 鈴木　紀　2019「フェアトレードを支援する――文化人類学による研究と批判」『国立民族学博物館研究報告』43(4)：660-702。

◎出版物による業績

［分担執筆］

鈴木　紀

2018 「ロバート・チェンバース」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学――人物・古典・名著からの誘い』pp.251-256，京都：ミネルヴァ書房。

［論文］

鈴木　紀

2019 「フェアトレードを支援する――文化人類学による研究と批判」『国立民族学博物館研究報告』43（4）：660-702。［査読有］

Suzuki, M.

2018 Para el "Renacimiento" de las civilizaciones prehispánicas: un estudio comparativo de representación museográfica. In S.S. Pajović and M. Andrijević（eds.）*América Latina y el mundo del siglo XXI: Percepciones, interpretaciones e interacciones* II: 245-251. Belgrade: Universidad Megatrend and FIEALC.

2018 La diversidad en la representación de las civilizaciones prehispánicas: un estudio comparativo de la museografía. In M.A. Sáez, M.G. Montero, and F.S. López（eds.）*Arte: memoria del 56o Congreso International de Americanistas*, pp.256-258. Salamanca: Ediciones Universidad de Salamanca.

［その他］

鈴木　紀

2018 「寿司屋で振り返る日本文化――『イーストサイド寿司』」『月刊みんぱく』42(11)：17-18。

2018 「文化」国際開発学会編集『国際開発学事典』pp.24-25，東京：丸善出版。

2018 「開発と人類学」国際開発学会編集『国際開発学事典』pp.46-47，東京：丸善出版。

2018 「民族」国際開発学会編集『国際開発学事典』pp.308-309，東京：丸善出版。

2019 「チョコレートとチョコラテ――カカオを楽しむ２つの伝統」『イベロアメリカ研究センターニューズレター』8：7-12。

2019 「明日の博物館　Museu do Amanhã/ブラジル」『月刊みんぱく』43(3)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年６月３日　「文化遺産としての古代アメリカ文明――博物館展示の比較研究」日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学

2018年７月16日　'La diversidad en la representación de las civilizaciones prehispánicas: un estudio comparativo de la museografía.' 56o Congreso Internacional de Americanistas, Universidad de Salamanca, Spain

2018年８月22日　'¿Cómo se representan patrimonios prehispánicos?: un estudio comparativo de museos de antropología y arte popular en México y Perú.' Coloquio Internacional de México-Japón: Las sociedades mesoamericanas y los cambios culturales en su proceso histórico, Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico

2018年12月２日　「古代アメリカ文明の継承者は誰か――博物館展示から考える」古代アメリカ学会第23回研究大会、専修大学生田キャンパス

2019年２月17日　「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」科学研究費補助金・新学術領域「古代アメリカの比較文明論」領域会議、キャンパスイノベーションセンター東京

・研究講演

2018年４月７日　「文化遺産としての日本万国博覧会――人類の進歩と調和を再考する」千里文化財団、国立民族学博物館

2018年11月13日　「チョコレートとチョコラテ――カカオを楽しむ２つの伝統」関西外国語大学イベロアメリカ研究センター主催2018年連続講座、関西外国語大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年４月29日　「1960年代末のメキシコとコロンビア――EEM 中南米の旅」第509回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・**広報・社会連携活動**

2018年５月５日　「ギャラリートーク」開館40周年記念特別展『太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料』国立民族学博物館

◎調査活動

・**海外調査**

2018年５月14日～５月24日―ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマ（中米地域における先住民族文化の博物館展示の比較研究）

2018年７月13日～７月24日―スペイン、オーストリア、オランダ（国際アメリカニスト会議での研究発表、および古代アメリカ文明の博物館展示資料収集）

2018年８月17日～８月29日―メキシコ、カナダ（「日本―メキシコ国際会議：メソアメリカ社会とその歴史過程における文化変化」での研究発表、およびメキシコの先住民族文化の博物館展示に関する比較研究、ブリティッシュ・コロンビア大学附属人類学博物館で開催中の特別展「抵抗の技――ラテンアメリカの政治と過去」の資料収集）

2018年10月11日～10月22日―ブラジル、ウルグアイ、パラグアイ（南米地域における先住民族文化の博物館展示の比較研究）

2018年12月４日～12月15日―アルゼンチン（アルゼンチンにおける先住民族文化の博物館展示の比較研究）

2019年２月21日～３月４日―アメリカ合衆国、ドミニカ共和国、ジャマイカ、パナマ、キューバ（カリブ海地域における先住民族文化の博物館展示の比較研究）

2019年３月17日～３月27日―メキシコ（メキシコのアレブリヘ制作に関する情報収集）

◎大学院教育

・**指導教員**

主任指導教員（１人）、副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」（研究代表者：青山和夫（茨城大学））研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・**その他の社会活動・館外活動**

日本ラテンアメリカ学会理事

寺村裕史［てらむら　ひろふみ］――――――

University Press.

［論文］

寺村裕史

2017 「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」『国立民族学博物館研究報告』42（1）：1-47。［査読有］

【受賞歴】

2007　日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、ユーラシア大陸における東西交流（東洋と西洋）の結節点としての古代シルクロード都市の果たした役割と、それらの都市を介しておこなわれた人や文化の交流の実態を明らかにすることを目的として、ウズベキスタン共和国のサマルカンドに所在するウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所との国際共同研究を実施する。具体的には、ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所と連携して実施するカフィル・カラ遺跡などの都市遺跡の発掘調査や、ザラフシャン川中流域に点在する都市遺跡の分布踏査などを通じて、古代シルクロード都市の形成・発展過程ならびに、人と文化の東西交流の動態について国際的な議論を深め、成果を共同で発信する予定である。

なお、そうした共同研究を実施するために、2018年度科学研究費助成事業「国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））」（2018年11月下旬交付決定予定）に応募し、調査・研究のための資金獲得を目指す計画を立てている。

・成果

2018年９月に、ウズベキスタン共和国・サマルカンド近郊に所在する古代の都市遺跡であるカフィル・カラ遺跡での発掘調査を、ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所と日本隊の共同調査として実施した。その調査に、日本側調査団の一員として参加するとともに、今年度調査に関する成果を共有するため現地研究者とディスカッションをおこなった。

発掘調査の成果としては、カフィル・カラ遺跡のシタデル（城塞）地区の「王の間」と考えられる部屋から、８世紀頃のものとみられる金・銀製の装身具や、貴石が埋め込まれた装飾品などが出土した。カフィル・カラ遺跡はソグド王の離宮という説があり、これらの出土品は、シルクロードを通じた東西交易に活躍したソグド人の実態を探る上でも貴重な資料として、今後詳細な研究を進めていくことにしている。

こうした成果については、日本隊の共同研究者が所属する帝塚山大学において３月に記者発表がおこなわれ、新聞各社に記事として取り上げられた。さらに９月の調査時には、調査の様子についてNHKの取材を寺村が現地で受け、その取材の一部が2019年１月12日（土）に放映のBSプレミアム『シルクロード 謎の民 大峡谷に生きる』の中で使用された。

また日本においては、３月に開催された日本西アジア考古学会主催の「第26回西アジア発掘調査報告会」において、「シタデルを覆う火災層の調査――ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2018年）」という口頭発表を日本隊・ウズベク隊の共同発表（発表者・村上智見）としておこなった。

◎出版物による業績

［共著］

小池淳一・木部暢子・寺村裕史・西村慎太郎・窪田順平・奥村　弘

2019 『地域文化をはぐくむ』（新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol.7），人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」。

［分担執筆］

寺村裕史

2019 「遊び続ける子どもたち」笹原亮二編『子ども／おもちゃの博覧会』pp.210-211，大阪：国立民族学博物館。

2019 「保存科学を通した地域文化へのアプローチ――神恵院扁額の事例から」葉山茂・麻生玲子編『人間

文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット 新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol.7 地域文化をはぐくむ』pp.36-51，人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」。

［論文］

寺村裕史

2018 「GISを用いた横穴式石室の床面構造と遺物分布に関する空間分析」新納泉・三浦孝章編『二万大塚古墳』pp.193-202，岡山：二万大塚古墳発掘調査団。

［その他］

村上智見・ベグマトフ アリシェル・ベルディムロドフ アムリディン・ボゴモロフ ゲンナディー・寺村裕史・宇野隆夫・宇佐美智之

2019 「シタデルを覆う火災層の調査――ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2018年）」『第26回　西アジア発掘調査報告会報告集』pp.51-55，つくば：日本西アジア考古学会。

寺村裕史

2018 「旅・いろいろ地球人　バザールの風景① 人やモノが集まる場所」『毎日新聞』 6月9日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　バザールの風景② ドライフルーツ」『毎日新聞』 6月16日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　バザールの風景③ 青空市場」『毎日新聞』 6月23日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　バザールの風景④ 材木市場」『毎日新聞』 6月30日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年7月19日 「傾向面分析を用いた文化要素への生態学的アプローチ」国際シンポジウム『台湾および周辺島嶼地域を生態学的、文化的にとらえる』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年9月6日 「民博における『フォーラム型情報ミュージアム』プロジェクト」『展示論講座――博物館の展示』国立民族学博物館

2019年3月23日 「ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2018年）――シタデルを覆う火災層の調査」第26回西アジア発掘調査報告会、池袋サンシャインシティ文化会館

・展示

2018年9月13日～11月27日特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」国立民族学博物館

2019年3月21日～5月28日特別展「子ども／おもちゃの博覧会」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年2月17日 「カフィル・カラ遺跡（ウズベキスタン）におけるゾロアスター教関連の木彫り板絵の発見」第533回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年6月2日 「カフィル・カラ遺跡とゾロアスター教――発掘調査で出土した木彫り板絵から読み解く」第478回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2018年10月5日 「世界の文化を掘ってしらべる ①インド」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年10月12日 「世界の文化を掘ってしらべる ②ウズベキスタン」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・海外調査

2018年9月15日～10月3日―ウズベキスタン（フォーラム型情報ミュージアム「中央・北アジアの物質文化に関する研究」プロジェクトにおける現地情報の収集）

2018年12月14日～12月18日―台湾（国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」への参加）

2019年2月28日～3月6日―イラン（科研費「古代イランとメソポタミア――歴史地理学的アプローチ」に関わる現地調査および打合せ）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「古代イランとメソポタミア――歴史地理学的アプローチ」（研究代表者：前川和也（国士舘大学））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

岡山大学「博物館情報・メディア論 a/b」（集中講義）

藤本透子［ふじもと　とうこ］――――――

スラーム及びシャマニズムと伝統医療の布置について、科学研究費助成事業基盤C「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」に基づき、現地調査を継続する。

2) カザフ村落社会の形成・維持・変容のメカニズム

カザフ村落社会が遊牧民の定住化を経て成立したことを踏まえ、村落社会の維持と変容のメカニズムに関するこれまでの調査データを分析し、「経済活動と儀礼実践を通したコミュニティ維持――カザフ村落の事例から」（仮題）を執筆する。また、科学研究費助成事業新学術領域「パレオアジア文化史学」B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の分担者として、中央アジアにおける集団間接触と社会変容が物質文化に与えた影響に着目して、カザフスタンで調査研究を行う。北東アジア地域研究プロジェクトの一環として、中央アジアとシベリアの事例を比較するため、ロシアにおける短期調査も企画している。

・成果

今年度は諸事情から国外調査を行うことができなくなったため、国内での研究発表と原稿執筆を中心に行った。1) 伝統医療とイスラームの展開に関しては、科研基盤Cおよび北東アジア地域研究の成果として、「社会再編のなかのイスラーム――地域における生き方の模索」（『現代中央アジア――政治・経済・社会』第9章）が、5月に刊行された。この論文では、地域社会の再編とイスラームの関係について、聖者崇敬、人生儀礼、治療者の活動、改宗問題などに着目して分析した。このほか、「聖者（アウリエ）となった学者――カザフスタンにおける聖者崇敬をめぐる一考察」を執筆し、投稿した。また、「カザフスタンにおける伝統医療とエムシ（治療者）の活動」の初稿を執筆した。2) カザフ村落社会の形成・維持・変容のメカニズムについては、「中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持――カザフのアウルに着目して」を執筆し、出版申請へ向けての準備作業を行った。また、科研新学術領域「パレオアジア文化史学」の成果の一部として、「中央アジア草原地帯における人の移動と接触」を2018年度報告書に執筆した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

藤本透子

2018 「第9章 社会再編のなかのイスラーム――地域における生き方の模索」宇山智彦・樋渡雅人編『現代中央アジア――政治・経済・社会』pp.209-230, 東京：日本評論社。

藤本透子・岡奈津子

2018 「コラム1 ウズベキスタンのカザフ人」帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』pp.33-36, 東京：明石書店。

［その他］

藤本透子

2018 「カザフスタンの馬文化」『秋田魁新報』10月17日。

2019 「中央アジア草原地帯における人の移動と接触」『パレオアジア文化史学B01班2018年度研究報告』pp.31-36。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年6月30日 「国家体制の移行の中での人の移動と地域社会の再編――沖縄・座間味島の事例を中心として」京都大学東南アジア地域研究研究所共同研究『ミクロヒストリーから照射する越境・葛藤の共生の動態に関する比較研究』同志社大学

2018年10月6日 「カザフスタンにおける伝統医療の展開と女性治療者」京都大学東南アジア地域研究研究所共同研究『社会主義を経たイスラーム地域のジェンダー・家族・モダニティ』京都大学

2018年10月20日 「中央アジア草原地帯における集団接触と居住形態の変化」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学B01班研究会『中央アジアの集団接触に伴う社会変容と物質文化――人類学と考古学の接点から』、国立民族学博物館

2018年11月15日 「民族接触の過程における人口変動――カザフ草原の事例から」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第6回研究大会、東京大学

2018年12月16日 'Social Change and Behavior Patterns in the Course of Contacts between the Previous Inhabitant Group and Migrant Group: A Case Study from the Kazakh Steppe.' 文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学国際会議, 総合地球環境学研究所

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年11月４日　「カザフ伝統医療の世界」第522回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本中央アジア学会日本中央アジア学会報編集委員

グローバル現象研究部

信田敏宏［のぶた　としひろ］――部長（併）教授

1968年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）**【職歴】**東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2012）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2017）**【学位】**社会人類学博士（東京都立大学 2002）**【専攻・専門】**社会人類学、東南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

［単著］

信田敏宏

2013　『ドリアン王国探訪記――マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書１）京都：臨川書店。

2004　『周縁を生きる人びと――オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009　*Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia.* Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006　第４回東南アジア史学会賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）東南アジアの文化に関する人類学的研究

2）インクルーシブ社会に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

1）本研究は、マレーシアを含む東南アジアの文化に関わる諸現象について、グローバルな状況を視野に入れな

がら、その最新の動向を探ることを目的とする。具体的には、民族状況や親族制度、生業や食文化など、東南アジアにおける文化現象について情報の収集・整理を行ない、その全体像を把握する。

2) 本研究は、本館の文化資源プロジェクト「知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究」を中心として、知的障害者やその保護者や介護者などへのアンケートや聞き取りなどの手法を用いて、知的障害者をめぐる教育環境や社会状況の実態を探ることを目的とする。本研究の目的には、インクルーシブ社会実現に関する具体的な提言も含まれている。なお、同プロジェクトは科学研究費助成事業に申請中である。

・成果

1)『東南アジア文化事典』の刊行に向けて、編集作業を進めた。事典は、次年度に刊行予定である。本年度は、マレーシアの先住民オラン・アスリの民族状況、親族制度等に関する単著『家族の人類学』を執筆した（次年度に刊行予定）。そのほか、オラン・アスリの彫像に関するエッセイを執筆した。

2) 本研究に関連する成果として、単著『「ホーホー」の詩、それから――知の育て方』を刊行した。上記の文化資源プロジェクトについては、NHK 関西ニュース、NHK ハートネット TV ブログ等で紹介された。

◎出版物による業績

［単著］

信田敏宏

2018 『「ホーホー」の詩、それから――知の育て方』東京：出窓社。

［その他］

信田敏宏

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊸ オラン・アスリの彫像」『文部科学 教育通信』437：2。

2019 「想像界の生物相 龍に生まれ変わる」『月刊みんぱく』43(2)：14-15。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都女子大学「家族の人類学」

鈴木七美［すずき　ななみ］――――――

【受賞歴】

1998　第13回女性史青山なを賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ――世代間コミュニケーションと学びにむけて

・研究の目的、内容

超高齢社会において、すべての世代がどのように生活の基盤とウェルビーイングを構想できるのかに関心が集まっている。本研究は、高齢者のニーズを契機として全ての世代の生活環境を再考・開発するエイジ・フレンドリー・コミュニティ（AFC）に関する研究蓄積を生かし、語り合いやモノ作りなど多世代が参加する活動実践について、現地調査・成果公開を実施する。

米国における予備調査に基づき、多文化・多世代が認知症者を含む高齢者との交流にどのような経験を紡ぎ意義を見いだしているのか、またそうした場はいかにして実現できるのかについて現地調査と情報収集を行う（外部資金　基盤研究C「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」2018-2021　研究代表者：鈴木七美）。

モノと情報を素材として多世代・多文化に開かれた学びと交流の機会としてアーミッシュに関する企画展を実施し、関連する口頭発表・論考執筆を行う。アーミッシュは、スイス、ドイツ南部を中心に活動を始めた再洗礼派の一派で、18世紀以降迫害を逃れ北米に移住し、聖書に基づき非暴力や世俗から距離をおく生活を実践してきた。本展示では、(1)アーミッシュの信教に基づく生活実践とキルトの色・デザインの特徴、米国においてモダンアートとして注目されてきた経緯、(2)アーミッシュ・キルトにおいて表現されてきた生活世界、(3)アーミッシュ・キルトがより広くアメリカ一般社会や世界につながっていく現状を展示する（2018年度文化資源プロジェクト「企画展 アーミッシュ・キルトを訪ねて――そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」The World of Amish Quilts: Seeking Ways of living, Weaving the World　企画展プロジェクトリーダー：鈴木七美）。

・成果

Ⅰ　外部資金：基盤研究C「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」2018-2021 研究代表者：鈴木七美）に関連し、認知機能が低下する過程を含む高齢者のエイジング・イン・プレイス（居場所を得て生活する）に関わる論考をまとめた。

・Suzuki, Nanami. 2019. Creating an Age-friendly Community in a Depopulated Town in Japan: A Search for Resilient Ways to Cherish New Commons as Local Cultural Resources. In Philip B. Stafford（ed.）*The Global Age-friendly Community Movement: A Critical Appraisal*, pp.229-246. New York: Berghahn, 2019.

Ⅱ　2018年度文化資源プロジェクト「企画展 アーミッシュ・キルトを訪ねて――そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」The World of Amish Quilts: Seeking Ways of living, Weaving the World　プロジェクトリーダー：鈴木七美）を実施し（2018年８月23日～12月25日）、関連する研究成果を広く公開した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

鈴木七美

2019　Creating an Age-Friendly Community in a Depopulated Town in Japan: A Search for Resilient Ways to Cherish New Commons as Local Cultural Resources. In P.B. Stafford（ed.）*The Global Age-Friendly Community Movement: A Critical Appraisal*, pp.229-246. New York: Berghahn.［査読有］

［その他］

鈴木七美

2018　「アーミッシュ・キルトを訪ねて――ささやかなキルト・ドキュメンテーションへ」『みんぱく e-news』204。

2018　「国立民族学博物館の収蔵㊹ ともに生きる――アーミッシュ・キルトから考える」『文部科学 教育通信』438：2。

2018　「そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」特集「アーミッシュの生活と文化」『月刊みんぱく』

42(6)：2-3。

2018 「日々を暮らし世界を織り上げる――アーミッシュ・キルト」『季刊民族学』165：93-103。

2019 「アーミッシュにおける豊かな社会――インテンショナル・コミュニティの交流史から」『比較文明学会会報』70：10。

Suzuki, N.

2018 The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World, Thematic Exhibition, August 23 – December 25, 2018. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 47: 13.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年12月15日 「アーミッシュにおける豊かな社会――インテンショナル・コミュニティの交流史から」比較文明学会関西支部第40回例会、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2018年９月８日 「アーミッシュ・キルトを巡る旅――いくつもの人生物語へ」第482回みんぱくゼミナール

・展示

2018年８月23日～12月25日 企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて――そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年８月26日 「キルト・ストーリーが紡ぐ世界」第516回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年９月23日 「ワークショップ パッチワーク・キルトのある生活」国立民族学博物館

2018年12月７日 「『アーミッシュのウェルビーイング――日々の暮らしから考える』（講義 東北学院中学校・高等学校）」国立民族学博物館第３セミナー室

◎調査活動

・国内調査

2019年１月15日～１月18日―和歌山県西牟婁郡上富田町（特別養護老人ホームに関する現地調査）

2018年２月25日～２月27日―滋賀県守山市（生涯学習に関する現地調査）

・海外調査

2018年10月26日～11月７日―ドイツ（高齢者の諸交流と環境にかかわる研究調査）

2019年２月11日～２月21日―アメリカ合衆国（博物館・教育機関等における多世代協働コミュニティ教育の研究調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」研究代表者、国立民族学博物館2018年度文化資源プロジェクト「企画展『アーミッシュ・キルトを訪ねて――そこに暮らし、そして世界に生きる人びと』」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Anthropology & Aging（A＆A）: The Journal of the Association for Anthropology, Gerontology, and the Life Course（AAGE）Editorial Advisory Board

・その他の社会活動・館外活動

2018年11月17日 「2018年度日本文化人類学会次世代育成セミナー コメンテータ：研究発表『インドネシア・ジャワの家族と高齢者ケア――見舞いから看取りまでの社会的動態を中心に』（合地幸子）」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研））

西尾哲夫［にしお　てつお］――――――― 副館長（研究・国際交流・IR担当）、グローバル現象研究部教授

三尾　稔［みお　みのる］――――――――――――――――――――――――――――――――――― 教授

1962年生。**【学歴】**東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、東洋英和女学院大学国際社会学部助教授（2001）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館教授（2018）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）**【専攻・専門】**社会人類学・インドの宗教と社会**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

［共編］

Mio, M. and C. Bates（eds.）

2015　*Cities in South Asia.* London: Routledge.［査読有・書評有・民博共同研究の成果］（http://choiceconnect.org/webclipping/194400/e0bubfitramyrf7jwbc8s12r_hb62uv6swnu3wbhxn7ct2md3o）

三尾　稔・杉本良男編

2015　『現代インド６　環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

［論文］

三尾　稔

2017　「モノを通じた信仰――インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が25年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。この調査に必要な経費として、日本学術振興会科学研究費助成事業の獲得もめざす。

６年計画で進められている人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」は今年度で３年目を迎える。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの１つの実証的研究として各個研究を遂行する。

・成果

グローバル化の進展に伴う、人の移動の活発化や思想・信仰のトランスローカルな伝播が進む中で、異なる宗教伝統の共存に関する伝統的な知恵がどのように維持・強化されうるのかという観点から、調査成果に基づき、台湾成功大学で開催された国際シンポジウム“Religion, Violence and Multiculturalism: An Interdisciplinary Inquiry”で、*Formation and Avoidance of Identity Politics: Escaping Religious Subjectification and Violence in Diversity Driven Sacred Spaces in India*と題して研究発表を行った（2018年12月１日。シンポジウムには招待される形式で参加）。発表論文は、同大学から発行された同名のプロシーディングスに掲載された。

また情報テクノロジーの浸透がローカルな宗教実践にどのような影響を及ぼしつつあるのかという問題意識に基づく調査の成果を、2019年１月19日のみんぱくゼミナールで「インターネットで神さまと『ともだち』になる――当世ヒンドゥー教事情」と題して講演した。

◎出版物による業績

［論文］

三尾　稔

2018　Formation and Avoidance of Identity Politics: Escaping Religious Subjectification and Violence in Diversity-Driven Sacred Spaces in India. In Center for Multi-Cultural Studies（ed.）*Proceeding of International Conference of Religion, Violence and Multiculturalism: An Interdisciplinary Inquiry*, pp.275–288. Taiwan: National Cheng Kung University.

［その他］

三尾　稔

2018　「半人半獣のヴィシュヌ化身像」『月刊みんぱく』42(7)：14–15。

2019　「国立民族学博物館の収蔵品㊽ クリケット・ユニフォームとバット」『文部科学 教育通信』452：2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年12月１日　‘Formation and Avoidance of Identity Politics: Escaping Religious Subjectification of Violence in Diversity-Driven Sacred Spaces in India.’ International Conference of Region, Violence and Multiculturalism, College of Liberal Arts, National Cheng Kung University, Tainan City, Taiwan

・みんぱくゼミナール

2019年１月19日　「インターネットで神さまと『ともだち』になる――当世ヒンドゥー教事情」第487回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年11月11日　「ヒンドゥー教の『新年』？」第523回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年６月23日　「ヒンドゥー教祭礼の読み解き方」第123回国立民族学博物館友の会、モンベル渋谷店

2018年10月13日～10月22日　第92回民族学研修の旅「融合と共存の北西インドを行く――女神信仰とインド叙事詩の祭礼期間に訪ねる」同行講師、国立民族学博物館友の会、インド各地

◎調査活動

・海外調査

2018年８月７日～８月21日―インド（ラージャスターン州ウダイプル市にてインドの宗教実践の変容に関する現地調査）

2018年11月15日～11月18日―韓国（第２回 ACSAS（アジアにおける南アジア研究センターコンソーシアム）国際シンポジウムに出席）

2018年11月28日～12月３日―台湾（国際シンポジウム「Religion, Violence and Multiculturalism: An Interdisciplinary Inquiry」に出席）

◎大学院教育

・指導教員

特別共同利用研究員の研究指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」拠点代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学人部科学研究所京都大学人文科学研究所共同研究委員会委員、日本南アジア学会理事

森　明子［もり　あきこ］―――――――

学の新潮流」において、国内外の社会人類学の研究動向を、内外の研究者との面接による意見聴取と、海外主要専門誌の掲載論文のデータベース解析によって調査分析した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

森　明子

2018 「移民が語る都市空間――想像界と場所について」大場茂明・大黒俊二・草生久嗣編『文化接触のコンテクストとコンフリクト――環境・生活圏・都市』pp.141-168, 清文堂。

［その他］

森　明子

2019 「旅・いろいろ地球人　ドイツの保育園① キンダーラーデン」『毎日新聞』 1 月 5 日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人　ドイツの保育園② 多文化教育」『毎日新聞』 1 月12日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人　ドイツの保育園③ 学童保育」『毎日新聞』 1 月19日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人　ドイツの保育園④ 家賃高騰の影」『毎日新聞』 1 月26日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年 3 月 1 日　コメント「社会運動からみる歴史の展開」学術潮流フォーラムⅡ超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム『歴史のロジックと構想力――世界のフィールドから』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2018年12月 2 日　「研究紹介――最近の研究関心とこの共同研究への期待」『心配と係り合いについての人類学的探究』国立民族学博物館

2019年 1 月26日　「ケアが生まれる場をとらえる」『カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて』国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年 6 月10日　「亜麻筆笥の世界」第515回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年 9 月11日～10月 9 日―ドイツ、オーストリア（博物館の現代的展開と文化人類学のケア研究に関わる学術動向調査および EU 国境の展開に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本学術振興会委託研究「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向――文化人類学における理論的研究の新しい展開」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「変動する EU 国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘（東京学芸大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて」（研究代表者：内藤直樹）メンバー、国立民族学博物館共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西　真如）メンバー、JSPS 研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」（研究代表者：坂井一成（神戸大学））メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本民俗学会国際交流特別委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag（Köln, Weimar, Wien）研究顧問

相島葉月［あいしま　はつき］――准教授

【学歴】上智大学比較文化学部比較文化学科卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科社会人類学修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科イスラーム世界専攻博士課程修了（2011）**【職歴】**Zentrum Moderner Orient Visiting Research Fellow（2009）、Zentrum Moderner Orient Research Fellow（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部 Lecturer in Modern Islam（2012）、国立民族学博物

館先端人類科学研究部准教授（2016）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）**【学位】**博士（東洋学）（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、科学修士（社会人類学）（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）**【専攻・専門】**社会人類学、イスラーム学、中東研究**【所属学会】**日本中東学会、アメリカ人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris.

［分担執筆］

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares（eds.）*Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105–122. Santa Fe: School for Advanced Research Press.

［論文］

Aishima, H.

2017 Consciously Unmodern: Situating Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt. *Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal* 18(2): 149–164.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、エジプトの空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、都市中流層的な美的感覚と身体文化の関係性を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール（イスラーム法的に合法、倫理的）」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム（イスラーム法的に違法、非倫理的）」なのかという問いにある。ハラール／ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられた近代主義との関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享楽的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

本年度は研究分担者をつとめる「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」および「基盤研究（B）中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（代表者・西尾哲夫）」に加え、研究代表者をつとめる「若手研究（B）エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」より出張費を捻出して研究課題を進めていく。

・成果

「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」の事業として、2017年９月に上映したエジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』のセリフ集 *Reading Ali the Goat and Ibrahim in Arabic, English and Japanese*（Resources in Modern Middle East Studies 2）を３月末に刊行した。なお、同作品については『月刊みんぱく』６月号の「シネマＭ」と『毎日新聞』の「旅いろいろ地球人」にも寄稿し、エジプトの若者文化との関係において解説した。

「基盤研究（B）中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（代表者・西尾哲夫）」の研究分担者として、2019年２月４日から３月１日までマンチェスター大学の空手道部において、中東や南アジアからのムスリム移民の身体文化と美的感覚についての調査を実施した。これは、昨年度、NIHU 若手研究者海外派遣プログラムを利用してマンチェスターに滞在した際に開始したプロジェクトの追跡

調査であった。調査結果の概要は*NIHU Magazine*の３月号に「そうだ海外研究調査へ行こう――相島葉月准教授の場合」に掲載された。

研究代表者をつとめる「若手研究（B）エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」のために、2018年８月29日～９月１日まで沖縄に出張し、沖縄の空手家への聞き取り調査と道場での参与観察を実施した。沖縄空手会館の展示室については『月刊みんぱく』12月号の「新世紀ミュージアム」にて報告した。2018年10月22日～11月23日までカイロに滞在し、空手家コミュニティについての臨地調査を実施した。３月にエジプト伝統空手協会の会長が死去した後、コミュニティがどのように変容しているかを中心に聞き取りを行った。「若手（B）における独立基盤形成支援（試行）」を利用してアラビア語文献のデータベースAskZad Digital Libraryを購入するための交渉を一年間かけて行い、３月末に契約書を交わすことができた。本データベースはアラブ諸国の新聞、雑誌、および書籍を検索し、閲覧することができることから、臨地調査に出かけるのが困難な場合も、研究を進めるのに役に立つことが期待できる。

◎出版物による業績

［編著］

Aishima, H.（ed.）

2019 *Reading Ali the Goat and Ibrahim in Arabic, English and Japanese*（Resources for Modern Middle East Studies 2). Osaka: Center for Modern Middle East Studies at the National Museum of Ethnology.

［分担執筆］

相島葉月

2018 「第３章イスラーム復興――西洋モデルに依存しないイスラーム的近代の試み」小杉泰・黒田賢治・二ツ山達朗編『大学生・社会人のためのイスラーム講座』pp.41-54, 京都：ナカニシヤ出版。

［その他］

相島葉月

2018 「お前はモロヘイヤが好きで、俺はナダが好き。それだけだ」（シネ倶楽部M）『月刊みんぱく』42(6)：18-19。

2018 「旅・いろいろ地球人　エジプト映画の今① もしもし、こちら猿」『毎日新聞』８月４日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　エジプト映画の今② テレビ説教師」『毎日新聞』８月18日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　エジプト映画の今③ 誠のニッポン人」『毎日新聞』８月25日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　エジプト映画の今④ 若者２人とヤギの旅」『毎日新聞』９月１日夕刊。

2018 「沖縄空手会館資料室」（新世紀ミュージアム）『月刊みんぱく』42(12)：16-17。

2019 「そうだ海外調査へ行こう――相島葉月准教授の場合」『NIHU Magazine』36, ３月18日。

Aishima, H.

2018 Review of Shaping Global Islamic Discourses: The Role of al-Azhar, al-Medina and al-Mustafa, edited by M. Bano and K. Sakurai, 2015. *Die Welt des Islams* 58(4): 510-511.

2019 Expanding research horizons abroad: An interview with associate professor, Hatsuki Aishima. *NIHU Magazine,* vol.036, March 18.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年３月23日　「総合討論」第35回人文機構シンポジウム・レクチャーコンサート『中東と日本をつなぐ音の道』東大寺総合文化センター

・共同研究会での報告

2018年９月29日　「空手道に見るエジプトの社会階層とスポーツ実践」民博共同研究会『ネオリベラリズムのモラリティ』国立民族学博物館

2018年12月16日　「フェイスブック世代の若者とイスラーム――現代エジプトの都市中間層のメディア消費をめぐって」NIHU現代中東研究・若手公募研究『アラブ世界における近代的メディアとイスラーム』公立小松大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年３月３日　「現代イスラームと預言者ムハンマド」第535回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年10月14日　「現代エジプトにおける公共知識人とイスラーム」（大学共同利用シンポジウム2018～最先端研究大集合～）大学共同利用機関協議会、名古屋市科学館

◎調査活動

・海外調査

2018年10月22日～11月22日―エジプト（エジプトの空手家コミュニティに関する調査）

2019年２月４日～３月１日―連合王国（イギリスにおけるムスリム移民の身体文化についての臨地調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（研究代表者：西尾哲夫）研究分担者、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

河合洋尚［かわい　ひろなお］――准教授

1977年生。**【学歴】**関西学院大学社会学部卒（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程修了（2009）**【職歴】**中国嘉応大学客家研究所ビジティング・スカラー（2007）、中国嘉応大学客家研究院民族学分野専任講師（2008）、広東外語外貿大学継続学院非常勤講師（2009）、中国嘉応大学客家研究院客員准教授（2010）、中国国立中山大学社会学与人類学院助理研究員［講師相当］（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、流通科学大学総合政策学部非常勤講師（2012）、園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）**【専攻・専門】**都市人類学、景観人類学、漢族研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

［単著］

河合洋尚

2013　『景観人類学の課題――中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

［編著］

河合洋尚編

2016　『景観人類学――身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。

2013　『日本客家研究的視角与方法――百年的軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001　安田三郎賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1) ランドスケープおよびフードスケープの人類学的研究

2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌

・研究の目的、内容

①近年、景観人類学（ランドスケープの人類学）では、視覚を通じた景観の表象だけでなく、聴覚・嗅覚・触覚など他の感覚を通じた景観の捉え方に注目が集まるようになっている。したがって、これらの感覚と総合的

に関わるテーマとして食に着目し、とりわけ近年新たな学問領域として現れているフードスケープに関する研究を進める。

②漢族、特に中国南部から世界各地に移住している客家に焦点を当て、国境を越えた社会文化的ネットワークを明らかにする。漢族は、中国研究／華僑華人研究という枠組みで区切ることができず、より俯瞰的な視野から理解しなければならない対象である。したがって、環太平洋における客家の移動やネットワークを加味したうえで、中国華南地方および東南アジア、オセアニア、中南米の客家に関する調査研究をおこなう。また、12月には、このテーマに関連する国際シンポジウムも開催する。

・成果

①フードスケープ研究の導入および客家料理からの再検討を進めた。その成果は、『きざし』や『民博通信』でエッセイとして発表しただけでなく、国際アジア食学論壇（北京）、日中社会学会（杭州）、国立民族学博物館国際シンポジウム［特別研究］などで、口頭発表をおこなった。他方で、ランドスケープ研究の一環として時間や歴史に着目した。2019年３月に刊行された共編著『資源化される「歴史」』（長谷川清・河合洋尚編、風響社）では景観がサブ・テーマの１つとなっている。

②客家研究については、上記の客家料理を除き、主に２つの形で成果を刊行した。第一に、10年以上にわたりフィールドワークをおこなってきた広東省梅県の都市空間に関する研究成果を民族誌としてまとめた。特に空間論の視点から梅県における「故郷」の創出について考察し、いま出版助成金を申請している。第二に、客家の歴史や文化を一般向けに紹介する概説書『客家――歴史・文化・イメージ』を共同で執筆し、まもなく刊行される予定である。その他、12月15～16日に国立民族学博物館で「客家エスニシティとグローバル現象」と題する国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、環太平洋、環インド洋、アメリカ大陸を扱ったほか、客家エスニシティを再考するパネルを組んだ。

◎出版物による業績

［共著］

飯島典子・河合洋尚・小林宏至

2019 『客家――歴史・文化・イメージ』東京：現代書館。

［編著］

張維安・何金樑・河合洋尚編

2018 『博物館与客家』台北：桂冠図書公司。

長谷川清・河合洋尚編

2019 『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』東京：風響社。

［分担執筆］

河合洋尚

2018 「浅談全球客家研究与客家文化展覧」張維安・何金樑・河合洋尚編『博物館与客家』p.95-118，台北：桂冠図書公司。

2019 「歴史性と景観建設――寧化石壁客家祖地における時間と空間の資源化」長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』pp.417-442，東京：風響社。

2019 「聖地言説と信仰実践――中国梅州市の呂帝廟をめぐる『聖地』の複雑性」杉本良男・松尾瑞穂編『聖地のポリティクス――ユーラシア大国の比較から』pp.213-230，東京：風響社。

河合洋尚・呉雲霞

2019 「ベトナム客家の神祇祭祀と景観建設――ホーチミンの観音閣を事例として」韓敏編『家族・民族・国家――東アジアの人類学的アプローチ』pp.231-256，東京：風響社。

［論文］

河合洋尚

2019 「四川省における＜客家空間＞の生成――成都市東山地区の都市景観開発を中心として」愛知大学現代中国学会編『中国21』49：189-210。

呉雲霞・河合洋尚

2018 「越南艾人的田野考察分析――海寧客的跨境界流動与族群意識」『八桂僑刊』124：61-71。

［翻訳］

河合洋尚

2019 マイロン・コーエン著「清代台湾におけるエスニシティと郷紳エリート――1803年の孔子廟再建を事例として」韓敏編『家族・民族・国家――東アジアの人類学的アプローチ』pp.285-304，東京：

風響社［英語→日本語］。

［その他］

河合洋尚

2018 「祖母はよそ者？」『月刊みんぱく』42(4)：20。

2018 「日本客家研究の歩み」『日本関西崇正総会　創立50周年記念誌』pp.18-20。

2018 「潮州人と客家――差異と連続」（コラム）志賀市子編『潮州人――華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類学』pp.155-168，東京：風響社。

2018 「書評：松岡正子著『青蔵高原東部のチャン族とチベット族――2008汶川地震後の再建と開発』」愛知大学現代中国学会編『中国21』49：226-231。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年12月15日 「趣旨説明」国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象」国立民族学博物館（協定シンポジウム）

2018年12月15日 「秘魯客家的初歩報告」国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象」国立民族学博物館（協定シンポジウム）

2019年３月18日 'The "Birth" of Hakka Cuisine: A Case Study for the Formation of Ethnic Foodscapes in Southeast China.' International Symposium "Making Food in Human and Natural History." National Museum of Ethnology（特別研究）

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月14日 「『民族文化』のジレンマ――現代中国におけるグローバル化と生活実践」愛知大学国際問題研究所創立70周年記念国際シンポジウム『グローバルな視野とローカルの思考――個性とのバランスを考える』愛知大学

2018年10月１日 「生態博物館及其在中日的経験――空間論視角」国際シンポジウム「台三線生態博物館国際論壇」苗栗県立獅潭国民中学、台湾

2018年10月21日 「飲食景観視野下的大渓地『客家菜』」第８回アジア食文化会議「文化与文明」西国貿大酒店、北京、中国

・研究講演

2018年９月29日 「客家文化研究的空間論転換――人類学視角」第18回研究生客家学術論文研討論会、国立中央大学、台湾（基調講演）

2018年10月２日 「環太平洋地区的『客家文化』――多地点研究視野」国立中央大学客家学院特別講演会、国立中央大学、台湾

2018年10月22日 「風水的景観人類学分析――走向超越風水的風水研究」中国社会科学院第86回人類学論壇、中国社会科学院人類学・民族学研究所、北京、中国

◎調査活動

・海外調査

2018年８月30日～９月９日―ニューカレドニア、バヌアツ（ニューカレドニアおよびバヌアツにおける華人（客家）の食文化をめぐる調査研究）

2018年10月17日～10月23日―中国（第八回国際亜州食学論壇および中国社会科学院主催講演会での発表（北京））

2018年11月16日～11月19日―中国（浙江大学「民博文庫」の視察および国際シンポジウムでの発表）

◎大学院教育

・指導教員

特別共同利用研究員の研究指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（研究代表者：塚田誠之）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

全球客家研究（台湾）顧問

・他大学の客員、非常勤講師

愛知大学国際問題研究所客員研究員、大阪経済大学非常勤講師「民俗学」（前期）、京都市立芸術大学非常勤講師「アジア文化史Ⅰ」集中講義、香川大学「マルチサイトワーク――人類学者は海外でどのように調査するか？」臨時講義（2018年６月26日）

廣瀬浩二郎［ひろせ　こうじろう］――――――

点から実証した本書は、きわめてユニークである。この本は、2016年度から取り組んできた共同研究「『障害』概念の再検討」の成果報告書としても位置付けることができる。2019年度以降、各大学の一般教養科目の教科書として本書が採用されることを期待したい。2018年７月～12月の半年間、『日本経済新聞』夕刊に毎週、コラムを連載した。

単なるエッセーではなく、研究成果の発信という面を有する連載だったといえる。その他、2018年６月～９月には東京の無印良品の「さわる絵本展」に、2019年３月には京都大学総合博物館の「ないをたのしむ展」に協力し、2020年度に実施予定の民博の秋の特別展に向けて、人的ネットワークを拡充することができた。

◎出版物による業績

［編著］

嶺重慎・廣瀬浩二郎・村田淳編

2019 『知のスイッチ――「障害」からはじまるリベラルアーツ』東京：岩波書店。

［論文］

廣瀬浩二郎

2018 「『無障礙博物館』概念：展示觸覺文化的意義和可能性」国立台湾歴史博物館編『文化平權在亞洲：博物館教育新趨勢國際論壇』pp.79-82，台湾：国立台湾歴史博物館。

2019 「副音声と副触図」マンガミュージアム研究会編『マンガ展評論』3：4-12。

2019 「自分史と人類史の往還」東海大学課程資格教育センター編『思想史と人類学の対話』pp.30-41，平塚：東海大学課程資格教育センター。

2019 「盲人と海」京都国立近代美術館編『感覚をひらく――新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業平成30年度実施報告書』pp.33-40，京都：京都国立近代美術館。

Hirose, K.

2019 Hands of a Goze. In Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa (ed.) *Disability and Affect: Proceedings of Two International Symposiums about Art*, pp.7-14. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies.

［その他］

廣瀬浩二郎

2018 「梅棹忠夫『夜はまだあけぬか』を読み直す：障害研究と文化相対主義」特集「阻害で気づく、障害が築く」『月刊みんぱく』42(4)：2-3。

2018 「視覚障害者の絵画鑑賞――『副触図』の可能性」『民博通信』161：20-21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年11月15日 「触文化展示の意義と方法」文化平權在亞洲：博物館教育新趨勢國際論壇，国立台湾歴史博物館、台湾

・研究講演

2019年２月５日 'Tactile Culture in Japan.' Camberwell College of Arts, United Kingdom

2019年２月７日 'Hands of a Goze.' University of East Anglia, United Kingdom

2019年２月８日 'Universal Museum Design in Japan.' The Merton Equality Conversation 2019 "Disability in Academia" Merton College, Oxford University, United Kingdom

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年12月９日 「声の力――新聞連載を通じて考えたこと」第526回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年８月12日～８月17日―トルコ（「第１回トロイの木馬　世界盲人ホメロス朗読会」への参加）

2018年９月４日～９月11日―イギリス（英国の視覚障害者による演劇制作への協力及び英国の障害者福祉・障害者アートに関する情報収集）

2018年11月13日～11月17日―台湾（国際シンポジウム「アジアにおける博物館教育と文化的アクセシビリティ」への参加、基調講演）

2019年２月４日～２月12日―連合王国（英国の視覚障害者福祉、ユニバーサル・ミュージアムの最新動向に関する実地調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「共生の技法としてのユニバーサルツーリズムの理論と実践」（研究代表者：石塚裕子（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「インクルーシブアート教育論及び視覚障害等のためのメディア教材・カリキュラムの開発」（研究代表者：茂木一司（群馬大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」研究代表者

三島禎子［みしま　ていこ］――――――

他方、アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易はきわめて日常的経済活動にもなり、アフリカ各地からさまざまな人が参入している。このような今日的な現象を理解するためのあらたな視点が必要である。個別の課題に並行して、移動先でアフリカ商業民が集住できる条件や、宗教や民族の違い、故地での動向などの視点を取り入れた大きな枠組みについても長期的に考察してゆく。

・成果

民博の情報プロジェクトとして、2017年に映像取材をおこなったソニンケの民族文化祭について、みんぱく映像民族誌DVD１本とビデオテーク番組２本を制作した。また同様の内容について、論文を執筆中である。

◎出版物による業績

［その他］

三島禎子

2018 「ただいまオンエアー――みんぱく映像民族誌」『民博通信』163：25。

2018 「旅・いろいろ地球人　遠くて近い村① 冒険者の伝統」『毎日新聞』12月１日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　遠くて近い村② 送金システム」『毎日新聞』12月８日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　遠くて近い村③ 砂漠と海を越えて」『毎日新聞』12月15日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　遠くて近い村④ 離れた家族の存在」『毎日新聞』12月22日夕刊。

2019 「新世紀ミュージアム 地中博物館」『月間みんぱく』43(2)：16-17。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

三島禎子監修

2019 『ただいまオンエアー――ソニンケ民族による文化運動と地域ラジオ』（日本語・39分50秒）

2019 『ただいまオンエアー――ソニンケ民族による文化運動と地域ラジオ』（日本語・10分46秒）

2019 『グリオは語る――今と昔をつなぐなりわい』（日本語・７分37秒）

2019 『私たちが主役――ソンニケの文化週間を支えるソニンケの女たち』（日本語・６分57秒）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年５月13日 「1960年代のアフリカ」第511回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2018年５月12日 「二つの収集――1968年と2000年」ギャラリートーク、国立民族学博物館

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方データベースの構築」（研究代表者：飯田　卓）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Revue Européenne des Migrations Internationales 編集委員（アジア担当）

・その他の社会活動・館外活動

講義（大阪府高齢者大学校）

南 真木人［みなみ　まきと］――――――

【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

［共編］

南 真木人・石井　溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会――民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D.W. Haines, and J.S. Eades（eds.）

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D.N. Gellner, and K. Nawa（eds.）*Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ネパール地震後の社会再編に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、2015年４月に発生したマグニチュード7.8のネパール地震とその復旧・復興の過程で生起している、社会の再編の具体例を調査し、ネパール社会の包括的理解を深めることを目的とする。現地調査と文献調査から、本地震を契機として生まれた市民的な連帯や共助が、分断しがちであった社会を変えていくのかを考察する。調査研究は、科研費・基盤研究（B）（海外学術調査）「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」で実施する。

・成果

科研費・基盤研究（B）（海外学術調査）「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」により2019年２～３月に現地調査を実施した。調査地は被災以来、継続的に推移を見てきたヌワコート郡ビドゥールのシムタール避難キャンプ（訪問４回目）とキャンプ居住者の主な出身村サルメ、及びシンドゥーパルチョーク郡ビカダーダ（同３回目）である。何れにおいても、政府からの住宅再建補助金30万ルピー（約30万円）を利用した、耐震住宅の再建が完了しつつある。キャンプ居住者の場合、出身村に再建したが、物置や短期訪問時の寝場所として用いるのみで、約100戸がキャンプに留まる。その理由は郡庁所在地ビドゥールでの就業、就学、起業・土地購入等々であり、社会関係資本を持ち、地震が無かったとしても村を下りた可能性が高い人々が多い。他方、ビカダーダでは西ネパールのダン郡などの大工（技術者）約100人が３～４カ月滞在し、全68戸の住宅再建を請け負った。国内労働移動が被災地の復旧に大きく寄与していることが見えてきた。地震後のネパール社会は、災害レリジエンス（回復力、対応力）の個人差、支援金の桁が異なる海外との接続の有無などの要因により、地域間及び個人間の格差を助長する方向で再編が進んでいることが明らかになった。成果として論集の出版準備を進めており、2019年度内の刊行を目指している。

◎出版物による業績

［その他］

南 真木人

2018 「単調な構図が生む豊潤な沃野『マナカマナ――雲上の巡礼』（シネ倶楽部Ｍ）」『月刊みんぱく』42（4）：18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年４月22日 「インド・中近東収集から時代を読む」第508回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年11月20日～12月16日―ネパール（ネパール地震後の社会再編に関する現地調査）

2019年２月24日～３月６日―ネパール（フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクトに係る映像取材及び肖像権者からのウェブサイト掲載許諾の取得）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）、副指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

鈴木英明［すずき　ひであき］――助教

【学歴】学習院大学文学部史学科卒業（2001年）、慶応義塾大学大学院文学研究科修了（2003年）、東京大学人文社会系研究科単位取得退学（2010年）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員、長崎大学多文化社会学部准教授（2014-2018）を経て現職**【学位】**博士（文学 東京大学 2010）**【専攻・専門】**歴史学、インド洋海域史、グローバルヒストリー**【所属学会】**日本アフリカ学会、日本オリエント学会

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

沿岸部スワヒリ社会の世界史的位置づけについて

・研究の目的、内容

本研究は、沿岸部スワヒリ社会を世界史のなかに位置づけることを目的とする。現在のケニア、タンザニアの沿岸部を中心としてその南北にも広がる沿岸部スワヒリ社会は、これまで世界史の観点から一定程度の位置づけがされてきた。すなわち、それがアフリカ、インド、アラブといった地域世界の結節点として機能してきたという位置づけである。しかしながら、従来の研究では、インドやアラブ、また、欧米といった地域世界がこの社会に影響を及ぼす実態については比較的明らかにされてきたが、アフリカに関しては、十分な考察がなされてこなかった。本研究では、特に19世紀のヒトの移動に焦点を当て、この解明に取り組む。とりわけ、この世紀は奴隷交易が史上最も活発になった時代であり、アフリカ大陸の様々な地域から沿岸部スワヒリ社会へ人口が流入した。また、この社会を中継して、アフリカ大陸外へも人口が流出した。この実態の解明が本研究の目的である。

　本研究の遂行に当たっては、文献に依拠する狭義の歴史学の手法だけでは明らかな限界を有する。そこで、来年度以降に共同研究を立ち上げることを念頭に、その準備を今研究期間のあいだに進める。

・成果

本年度は、“Agency of Littoral Society: Reconsidering Medieval Swahili Port Towns with Written Evidence,” *The Journal of Indian Ocean World Studies* 2: 73-86を刊行した。また、第288回民博研究懇談会にて「沿岸部スワヒリ史の新たな可能性へ向けて――グローバルヒストリーの視点から」と題する報告を行った。加えて、３月にフランス・リヨンで開催された“Capture, Bondage, and Forced Relocation in Asia（1400-1900）”と題された会議に参加し、報告を行うとともに、特にアジア関連の奴隷に関する最新の研究動向を押さえる機会に恵まれた。

◎出版物による業績

［分担執筆］

鈴木英明

2018 「インド洋西海域と大西洋における奴隷制・交易廃絶の展開」島田竜登編『1789年――自由を求める時代』pp.229-272, 東京：山川出版社。

Hideaki Suzuki

2018 Kaiiki-Shi and World/Global History: A Japanese Perspective. In M.P. Garcia and L.D. Sousa (eds.) *Global History and New Polycentric Approaches*, pp.119-136. London: Palgrave Macmillan.［査読有］

［論文］

鈴木英明

2019 「世界史的共通体験としての奴隷廃止とそこにおけるリスク」『多文化社会研究』5：367-384。［査読有］

Suzuki, H.

2018 Agency of Littoral Society: Reconsidering Medieval Swahili Port Towns with Written Evidence. *The Journal of Indian Ocean World Studies* (2): 73-86.［査読有］

［その他］

鈴木英明

2019 「奴隷交易と海――アフリカ大陸西部の奴隷交易拠点で考える」『みんぱく e-news』：巻頭コラム。

2019 「庶民の足、ダラダラ」（◯◯してみました世界のフィールド）『月刊みんぱく』43(3)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2018年９月26日 「沿岸部スワヒリ史の新たな可能性へ向けて――グローバルヒストリーの視点から」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年11月24日 「プロセスとしての奴隷制――19世紀アフリカ東部沿岸スワヒリ社会の奴隷、自由、文明」第116回史学会大会公開シンポジウム

2018年12月17日 「奴隷交易からだれが利益を得たのか？――19世紀インド洋西海域世界における奴隷交易」第15回現代中東地域研究レクチャー・シリーズ

2019年１月19日 'The Rise of Nosy Be: Conjunction between Indian Ocean network and imperial expansion.' International Conference "Maritime Monsoon Asia in the Early Modern Period: Global Trade and Early European Colonial Cities", University of Tokyo

2019年３月９日 「20世紀初頭のペルシア湾におけるイギリス帝国と奴隷制――奴隷解放調書をめぐって」植民地国家建設の比較研究研究会、京都大学

2019年３月14日 'Bonded labour in the first half of the 20th century Persian Gulf: A quantitative approach.' Colloque international "Capture, Bondage, and Forced Relocation in Asia (1400-1900)", ENS de Lyon - Institut d'Asie orientale-IAO, Lyon, France

◎調査活動

・海外調査

2018年９月11日～９月23日―イギリス（20世紀前半ペルシア湾における「奴隷解放調書」に関する文献調査）

2018年10月11日～10月26日―ケニア（ケニアの博物館との研究打合せならびに漁村調査、資料収集）

2018年12月４日～12月10日―イタリア（GHC (Global History Collaborative)-Japan meeting への参加）

2018年12月22日～2019年１月14日―ガーナ、セネガル、ガンビア、サントメ・プリンシペ（西アフリカにおける奴隷関連遺跡踏査）

2019年２月４日～２月15日―タイ（タイにおける苦力労働者等渡海者の移動と定着に関する実地調査）

2019年２月15日～２月26日―ポルトガル（ポルトガル出身渡海者に関する博物館、および歴史街区における現地踏査）

2019年３月11日～３月17日―フランス（"Capture, Bondage, and Forced Relocation in Asia" Workshop への参加と発表）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（基盤研究（B））「地中海型奴隷制度の史的展開とその変容――隷属の多様性をめぐる比較史的研究」（研究代表者：清水和裕（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「植民地国家建設の比較研究――国家と情報の関係に焦点を当てて」（研究代表者：鬼丸武士（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「渡海者のアイデンティティと領域国家――21世紀海域学の史学的展開」（研究代表者：上田　信（立教大学））研究分担者

学術資源研究開発センター

林　勲男［はやし　いさお］――教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）**【職歴】**シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第４研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2012）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2018）**【学位】**文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**社会人類学　パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、オセアニア近代史の人類学的研究、自然災害への対応に関する人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences（IUAES）、Japan Anthropology Workshop（JAWS）

【主要業績】

［編著］

林　勲男編

2016　『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

2015　『アジア太平洋諸国の災害復興』東京：明石書店。

2010　『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ９）東京：明石書店。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

災害の想起における媒体の役割――遺構・モニュメント・語り継ぎ

・**研究の目的、内容**

大規模災害の被災地では、遺構や遺物の保存・公開、モニュメントの建立、被災体験の語り継ぎなどによって、被災経験を後世に継承していこうとの活動が生まれる。その一方で、こうした活動は、被災の苦悩や悲痛さを喚起するものとして、反対もしくは距離を置く人びとも存在する。本研究は、大規模災害の集合的記憶を、物を介して保存・伝承（物象化）したり、言葉により語り継いだりしていく（物語化）活動をプロセスとして、それぞれの地域社会の動態の中で捉える。今年度は、記憶と物質性と語りの関係について先行研究を整理するともに、現地調査を東日本大震災と新潟県中越地震の被災地で予定している。調査には、科研費（基盤Ａ）「災害の想起における媒体の役割――遺構・モニュメント・語り継ぎ」（研究代表：林勲男）を当てる予定である。

・**成果**

2018年度科研（基盤Ａ）「大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育」で、2018年11月にニュージーランドのクライストチャーチにて、2011年２月に発生した地震災害被災地における復旧・復興状況、追悼施設やモニュメントの設置などについて現地調査を実施した。地震災害のシンボルともなっている市街中心にある大聖堂の修復計画やその進捗状況を周辺のフェンスにパネルで示したりしていることが、観光客を含めた

来訪者にとっての重要なスポットとなっていることについて、日本国内では類例を見ないもので強い関心をもった。中越地震被災地である長岡市木籠集落に保存された水没家屋や、東日本大震災の東北太平洋岸津波被災地の遺構の保存を巡る問題とは、重要な宗教施設であるという点で大きく異なるが、かなりの近距離で現物を公開し、パネルで情報を提供するというこのプロジェクトについての情報収集を今後おこなっていくこととした。

研究成果としては、人類学と隣接科学における災害外研究において東日本大震災の持つ意味に、『民博通信』161号に評論展望として「東日本大震災以降の災害研究――人類学と他分野との協働に向けて」を執筆した。また、2019年１月に東北大学国際科学研究所で開催された2018年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「震災記録を伝える――自然災害と防災教育」（主催：東北大学災害科学国際研究所・国立国会図書館）で「災害記録の発展的継承を考える」と題した発表をおこなった。

◎出版物による業績

［論文］

林　勲男

2018 「東日本大震災以降の災害研究――人類学と他分野との協働に向けて」『民博通信』161：4-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年６月15日　‘Remembrance and Recording of the Great East Japan Earthquake Disaster.’ 23rd Science in Japan Forum, the Rasmuson Theater, the Smithsonian National Museum of the American Indian（NMAI), Washington, United States

2019年１月11日　「災害記録の発展的継承を考える――国立民族学博物館（みんぱく）の活動を通じて」2018年度東日本大震災アーカイブシンポジウム『震災の記録を伝える――自然災害と防災教育』東北大学災害科学国際研究所

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年１月13日　「岩手県の鹿踊り」第529回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2018年６月13日～６月18日―アメリカ合衆国（日本学術振興会ワシントン研究連絡センター主催「The 23rd Science in Japan Forum Memory and the Museum」に出席し発表を行う。）

2018年８月５日～８月14日―サモア、ニュージーランド（コレクション情報の共有化に向けた博物館ネットワーク拡充に関する打ち合わせ）

2018年11月18日～11月25日―ニュージーランド（カンタベリー大学での研究集会での発表と、2011年カンタベリー大地震の遺構とモニュメントに関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育」研究代表者

飯田　卓［いいだ　たく］――教授

1969年生。**【学歴】**北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻准教授（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2018）**【学位】**博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）**【専攻・専門】**生態人類学　漁撈社会、技術と知識、物質文化、文化人類学　視覚メディア、文化遺産、日本人類学史**【所属学会】**生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会、地域漁業学会、日本島嶼学会、環境社会学会、Association of Critical Heritage Studies

【主要業績】

［単著］

飯田　卓

2014 『身をもって知る技法――マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌――マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

［編著］

飯田　卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010　第22回日本アフリカ学会学術研究奨励賞（日本アフリカ学会）

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカにおける有形遺産のインタンジビリティと無形遺産のマテリアリティ

・研究の目的、内容

マダガスカルでの現地調査を基礎としてこれまでおこなってきた無形文化遺産の研究を拡大し、有形の文化遺産についての研究との接合をはかる。具体的には、民博に収蔵されている多数の標本資料がさまざまな知識や技能にもとづいて製作され使用されてきたことをふまえながら整理をおこない、無形文化遺産である祭礼や芸能、技術などがさまざまな道具やメディアを駆使しつつ継承されていることと比較する。そのうえで、知識や技能が情報として、あるいは道具やメディアが商品として流通する現代において、文化の一体性をどのように考えればよいかを理論的に考察する。

有形遺産についての調査は、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」（プロジェクトリーダー：飯田　卓）の一環としておこなうこととし、無形文化遺産についての調査は、分担者として参加している科研・基盤研究Ａ「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）の一環としておこなう。

・成果

有形・無形の調査項目のうち有形遺産については、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの進展と歩調を合わせ、民博が収蔵する標本資料を網羅的に整理するという成果に加え、個々の標本資料にまつわる文化的コンテクストなども明らかにできた。とりわけ、報告者自身が担当したカメルーンとケニアについては、現地を拠点に活動する研究者とのディスカッションをふまえ、一般の人たちと共有しうる学術的な情報を得ることができた。これらの情報は、フォーラム型情報ミュージアムのデータベースのコンテンツとして、プロジェクトが終了する2021年に公開する。

無形文化遺産については、マダガスカルの調査地を訪問して追跡調査をおこない、文化的価値と経済的価値のせめぎ合いと解釈できる事例を観察した。また、有形遺産に関連して訪問したケニア海岸部において、小さな地理的範囲（ラム島）におけるアイデンティティと広域（スワヒリ）におけるアイデンティティの相克ともいえる事例を観察した。いずれもまだ報告段階には至っていないが、今後の調査研究課題として継続的に調査を重ねる予定である。

有形遺産にせよ無形文化遺産にせよ、有形的な側面と無形的な側面を一体的に継承していくことが理想であることは、報告者が委員として関わっている文化遺産国際協力コンソーシアムにおける議論などでも強く感じる。文化行政が不要になるわけではまったくないが、文化行政の役割を補ってさまざまな文化要素を一体として担っていくグループの創造が、今後重要になってくると思われる。こうした知見は、しばらくの間暖めておき、独立した著書において論じていく予定である。

◎出版物による業績

［編著］

飯田　卓編

2019 『財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）関係人名の研究』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集）大阪：国立民族学博物館。［査読有］

［分担執筆］

飯田　卓

2018「マダガスカル島と海域アジアを結ぶネットワーク」小野林太郎・長津一史・印東道子編『海民の移動誌――ネットワークの地域間比較』pp.66-84，京都：昭和堂。［査読有］

2018「渋沢敬三と日本民族学協会」川島秀一編『渋沢敬三 小さき民へのまなざし（やま かわ うみ別冊）』pp.18-24，東京：アーツアンドクラフツ。

Iida, T.

2019 Traveling and Indwelling Knowledge: Learning and Technological Exchange among Vezo Fishermen in Madagascar. In K. Omura, S. Satsuka, G.J. Otsuki, and A. Morita（eds.）*The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, pp.190-204. London and New York: Routledge.

［その他］

飯田　卓

2019「前衛的文化運動としての『奄美遺産』プロジェクト、そしてそれを率いた中山清美さん」『中山清美と奄美――中山清美氏追悼論文集』p.612，瀬戸内：奄美考古学会。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月19日「写真が築くグローバル・ネットワーク――DiPLASが目ざすもの」シンポジウム「写真データベースが拓く学術活動の未来――蓄積された資料をいかに活用するのか」一橋講堂中会議場、東京

2018年５月27日「地理的束縛からの脱出――アフリカニストとアフリカ人のための博物館をめざして」日本アフリカ学会第55回学術大会、北海道大学、札幌

2018年９月４日 ‘Authentic Change: A Heuristic Concept.’ 4th Biannual Conference of ACHS, Zhejiang University, Hangzhou

◎調査活動

・海外調査

2018年８月31日～９月８日―中華人民共和国（ACHS（クリティカル・ヘリテイジ・スタディーズ学会）への参加と研究発表）

2018年10月８日～11月12日―エストニア、ケニア、マダガスカル（国際博物館会議民族誌博物館委員会年次大会への参加、ケニアの博物館との研究打合せならびに漁村調査、マダガスカルの文化遺産の調査）

2018年12月14日～12月18日―台湾（国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」への参加）

2019年３月２日～３月11日―ケニア、連合王国（ケニアの博物館との研究打合せおよびイギリスのアフリカ関係民族誌資料・アーカイブズ資料の調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アフリカ漁民文化の比較研究――水域環境保全レジームの構築に向けて」（研究代表者：今井一郎（関西学院大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究――イワシをめぐる韓国の民俗変化」（研究代表者：松田睦彦）連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：Peter Matthews）連携研究者、科学研究費（基盤研究（S））「『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服――人類の未来を展望する総合的地域研究」（研究代表者：松田素二）連携研究者、国立民族学博物館共同研究「呪術的実践＝知の現代的位相――他の諸実践＝知との関係性に着目して」（研究代表者：川田牧人）メ

ンバー、国立民族学博物館共同研究「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」（研究代表者：岡田浩樹）メンバー、国立民族学博物館共同研究「確率的事象と不確実性の人類学――『リスク社会』化に抗する世界像の描出」（研究代表者：市野澤潤平）メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」（研究代表者：中生勝美）メンバー、国立民族学博物館共同研究「文化人類学を自然化する」（研究代表者：中川　敏）メンバー、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日髙真吾）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館企画展示「海がつなぐ日本と韓国（仮称）」展示プロジェクト委員、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会「民間ユネスコ活動助成のための補助事業」審査委員、日本文化人類学会理事、日本文化人類学会評議員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、ICOM（国際博物館会議）京都大会運営委員、京都大学東南アジア研究所 CIRAS センター（京都大学地域研究情報統合センター）共同研究課題選考委員、文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、マダガスカル研究懇談会世話役

・他大学の客員、非常勤講師

静岡県立大学国際関係学部「国際社会論」（集中講義）、神戸大学大学院国際文化学研究科「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）

岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］―――― 教授

1958年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マギル大学人類学部人類学科博士課程退学（1989）**【職歴】**早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学教育学部函館校助教授（1992）、国立民族学博物館第一研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2017）、人間文化研究機構本部理事（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（併任）（2018）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学　カナダ・イヌイットの社会変化、都市在住のイヌイットの民族誌的研究、先住民による海洋資源の利用と管理、アラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットの捕鯨、環北太平洋先住民文化の比較研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会、生き物文化誌学会、函館人文学会

【主要業績】

［単著］

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

［編著］

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J.M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food – Sharing Practices among Hunter – Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341–358.

【受賞歴】

2007　第18回カナダ首相出版賞

1998　第９回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカ先住民社会における捕鯨の歴史と現状に関する比較研究

・研究の目的、内容

北アメリカ大陸において、アラスカのイヌピアットとユピート、カナダ北西海岸地域のヌーチャーヌヒ、米国ワシントン州のマカー、カナダのイヌヴィアルイットとイヌイットらの先住民が、ホッキョククジラやコククジラ等の大型鯨類の捕獲を行っていたことが歴史的に知られている。しかし、政治的、歴史的かつ環境的な理由で、現在、大型鯨類の狩猟を行っているのは、アラスカのイヌピアットとユピートおよびカナダのイヌイットのみである。本研究では、北アメリカ先住民社会における捕鯨の歴史と現状を比較検討し、現代における先住民捕鯨の社会・文化・経済・歴史的な意義を解明する。また、気候変動や動物保護運動や環境保護活動が現在の先住民捕鯨に及ぼしている諸影響と先住民捕鯨者の対応についても研究する。

本年度は夏季に米国ワシントン州オリンピック半島の先住民マカー社会において彼らの捕鯨文化について現地調査を実施する。そのデータおよび2015年度から2017年度まで科研費基盤研究（A）「グローバル時代の捕鯨文化に関する人類学的研究――伝統継承と反捕鯨運動の相克」（代表者：岸上伸啓）によるカナダ・米国調査によって収集してきたデータを分析し、研究成果を取りまとめる。

・成果

（1）2018年度科研・基盤研究（A）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究――伝統継承と反捕鯨運動の相克」で2018年８月に米国ワシントン州ニア・ベイ保留地にてマカーの捕鯨文化に関する現地調査を実施し、マカーがコククジラ猟の再開を熱望している一方で、国内法「海獣保護法」に関連する環境影響評価の結果が出ていないことや環境・動物保護団体による法的訴訟が行われていることによって、国際法的には承認されているコククジラ猟が中断しており、再開のめどが立っていないことが明らかになった。

（2）2018年６月３日に弘前大学で開催された日本文化人類学会第52回研究大会で「カナダ北西海岸地域における先住民によるホエール・ウォッチング・ビジネス　その可能性と問題点」や2018年６月23日に立正大学石橋湛山記念講堂（品川キャンパス）で開催された生き物文化誌学会第16回学術大会で「ホッキョククジラとアラスカ先住民イヌピアット」を口頭発表した。このほか、国際学会や国際シンポジウムで北アメリカの先住民捕鯨について研究報告を行った。

（3）科研・基盤研究（A）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究――伝統継承と反捕鯨運動の相克」と共同研究「捕鯨と環境倫理」の成果発表として2018年11月30日～12月２日に国立民族学博物館において国際シンポジウム“Whaling Activities and Issues in the Contemporary World”と一般公開講演会「世界の捕鯨を考える」を実行委員長として開催した。この中で、総論として世界の捕鯨の歴史と現状に関して日英で発表した。

（4）上記の科研プロジェクトの成果論文集として『世界の捕鯨文化―現状、歴史、地域性』を編集するとともに、同論文集に所収するために論文「世界の捕鯨と捕鯨に関する最近の研究動向」と「北アメリカ先住民の捕鯨の現状と課題」を執筆した。同成果論文集は『国立民族学博物館調査報告（SER）』から2019年度に出版予定である。このほか、『人文論究』から「人間とクジラの関係の歴史的変化に関する一考察――アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラの関係を中心に」を出版した。

◎出版物による業績

［編著］

岸上伸啓編

2018　『はじめて学ぶ文化人類学』京都：ミネルヴァ書房。

［分担執筆］

岸上伸啓

2018　「アルフレッド・R・ラドクリフ＝ブラウン」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学』pp.34-39，京都：ミネルヴァ書房。

2018　「ジュリアン・H・スチュワード」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学』pp.75-80，京都：ミネル

ヴァ書房。

2018 「狩猟採集社会」桑山敬己・綾部真雄編『詳論　文化人類学』pp.31-43，京都：ミネルヴァ書房。

［論文］

岸上伸啓

2019 「人間とクジラの関係の歴史的変化に関する一考察――アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラの関係を中心に」『人文論究』88：57-66。［査読有］

［その他］

岸上伸啓

2018 「はじめに」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学』pp.i-iii，京都：ミネルヴァ書房。

2018 「カナダ北西海岸地域における先住民によるホエール・ウォッチング・ビジネス　その可能性と問題点」『日本文化人類学会第52回研究大会発表要旨集』p.135，京都：日本文化人類学会第52回研究大会実施事務局。［査読有］

2018 「ホッキョククジラとアラスカ先住民イヌピアット」『生き物文化誌学会第16回学術大会（東京大会）要旨集』pp.8-9，熊谷：生き物文化誌学会第16回学術大会実行委員会。

2018 「出版物　はじめて学ぶ文化人類学――人物・古典・名著からの誘い」『民博通信』162：26。

2018 「絶滅危惧生物と人の交わり――捕獲、鑑賞、保全を中心に」『国立民族学博物館友の会ニュース』248：8。

2018 「問われる人間と動物の関係」特集「動物福祉と動物倫理『月刊みんぱく』42(11)：2-3。

2019 「想――商業捕鯨の再開」『中国新聞SELECT』 2月21日。

2019 「カナダ研究への期待と課題」『日本カナダ学会ニューズレター』112：1-2。

Kishigami, N.

2018 Inupiat Dance and Embodied Memories. *Twenty-Third "Science in Japan" JSPS Forum: Memory and the Museum,* p.12. Washington DC: Japan Society for the Promotion of Science Washington Office.

2018 Humanity on the Move. *National Museum of Ethnology Exhibition Guide,* pp.186-189. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年11月30日 'History and Contemporary Situations of Whaling in the World.' International Symposium "Whaling Activities and Issues in the Contemporary World", 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年４月12日 「環北太平洋沿岸地域における環境変動と先住民社会の変化に関する比較研究」第１回北極環境研究コンソーシアム（JCAR）北極域研究計画ワークショップ、国立極地研究所

2018年５月23日 「北アメリカ極北地域および北太平洋沿岸地域における文化人類学・考古学の研究動向――人文学と自然科学の融合の可能性」2018年度北極環境研究コンソーシアム（JCAR）全体集会、幕張メッセ国際会議場

2018年６月３日 「カナダ北西海岸地域における先住民によるホエール・ウォッチング・ビジネス　その可能性と問題点」日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学

2018年６月３日 「分科会10 肉のポリティックス――人獣関係における産業化・権力・宗教の発表に対するコメント」日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学

2018年６月15日 'Inupiat Dance and Embodied Memories.' JSPS Forum: Memory and the Museum, National Museum of the American Indian, Washington DC, United States

2018年６月23日 「ホッキョククジラとアラスカ先住民イヌピアット」生き物文化誌学会第16回学術大会（東京大会）、立正大学石橋湛山記念講堂（品川キャンパス）

2018年７月６日 'Bowhead Whale Hunts as a Cultural Core among the Contemporary Inupiat in Barrow, Alaska, USA.' Slavic-Eurasian Research Center 2018 Summer International Symposium "On Land, Water and Ice: Indigenous Societies and the Changing Arctic", Sapporo

2018年10月６日 「進歩したデジタル化技術を通じた文化的概念と実践の共有――多様な利用者のための多機能アーカイブズとインターフェースに向けて（Erich Kasten）へのコメント」第33回北方民族文化シンポジウム網走『環北太平洋地域の伝統と文化（3）カムチャツカ半島・千島列島』網

走市オホーツク・文化交流センター

2018年12月８日　「特別講演『環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学的研究の歴史と現状』」日本北方言語学会第１回研究大会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2018年12月19日　「世界の捕鯨の現状と諸課題」共同研究集会『現在気候下におけるグリーンランド氷床質量変動メカニズム解明』セッション「捕鯨・生業」、北海道大学低温科学研究所

2018年12月21日　「環北太平洋地域の先住民族に関する研究史――日本人による研究を中心に」第６回公開研究会『日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールドサイエンスの史的展開』神奈川大学日本常民文化研究所

・研究講演

2018年９月１日　「絶滅危惧生物と人の交わり――捕獲、鑑賞、保全を中心に」第480回国立民族学博物館友の会講演会、千里文化財団、国立民族学博物館

2018年10月27日　「アラスカ先住民社会における捕鯨文化の現状――米国アラスカ州バロー村のイヌピアットの事例を中心に」第10回北極クラブ例会、東京資源会館

2018年12月２日　「総論――世界の捕鯨の歴史と現状」一般公開講演会『世界の捕鯨を考える』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2018年６月13日～６月16日―アメリカ（国立アメリカ・インディアン博物館において開催された日本学術振興会・民博共催の The 23rd “Science in Japan” Forum に参加・発表）

2018年８月７日～８月22日―アメリカ、カナダ（アメリカワシントン州ニア・ベイ保留地にてマカーの捕鯨文化に関する調査および、同ニア・ベイ、カナダ国ブリティッシュ・コロンビア州ビクトリアとバンクーバーにおける博物館調査）

2019年２月19日～２月24日―カナダ（カナダ・バンクーバー島先住民伝統技能継承者と地域博物館の伝統文化保全・振興ネットワークに関する調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

講義「比較社会研究特論Ⅰ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究――伝統継承と反捕鯨運動の相克」研究代表者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本カナダ学会副会長、日本文化人類学会第28期評議員、Journal of Anthropological Research Associate Editor、北極環境研究コンソーシアム（JCAR）第４期運営委員、民族藝術学会理事、ArCS 北極域研究推進プロジェクト評議会委員、北極域研究共同推進拠点運営委員会委員（北海道大学北極地域研究センター）、日本カナダ学会理事、『カナダ研究年報』編集委員

笹原亮二［ささはら　りょうじ］――――――

【主要業績】

［単著］

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

［編著］

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化――文字の民俗学　声の歴史学』京都：思文閣出版。

［論文］

笹原亮二

2005 「用と美――柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294，京都：思文閣出版。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民俗文化としての子どものおもちゃと遊びの諸相

・研究の目的、内容

明治時代以降、子どもは、大人とは異なる存在として、学校を初めとする全国一律・一元的な近代的な制度を通じ、その時々の十全な社会の維持に益する一員となることを目指し、一定の強制力を持って生活の技術や知識や意識の獲得が図られてきた。本研究は、そうした明治時代から現在に至る子どもたちが日々用いてきたおもちゃや、それらを用いて行ってきた遊びに注目する。そして、その時々の社会の影響を受けつつも、学校などの近代的な制度から時には逸脱し、時には対立しつつ、絶えることなく繰り広げられてきた、そうした制度の枠内にとどまらない子どもの生活世界の実態について考察することを目的とする。

具体的には、明治時代以降、商品として大量生産され、全国的に広く流通して多くの子どもたちの手に渡った様々なおもちゃを初め、それ以外の子どもに関する多種多様な資料から構成される民博所蔵の時代玩具コレクションや、各地の博物館や資料館などが所蔵する同様の資料などの子どもに関わるモノの調査・分析を行う。そして、それらを通じ、特定の階層や時代や地域に限定されるのではなく、全国各地の多くの子どもたちに共通に見られる広がりを有し、また、明治時代以降、為政者や識者や教育者が提示してきた観念的、理念的な子どもの理解とも一線を画す、子どもたちが生活の場で実際に行ってきた具体的な生活の様相、即ち、民俗文化としての子どものおもちゃと遊びの世界を明らかにすることを試みたい。

・成果

本研究では、民博所蔵の多田コレクション（時代玩具コレクション）の資料約１万数千件（約５万数千点）、及び、関係諸機関や個人が所有する関連資料について精査し、それぞれの資料について、素材・年代・使用法・製造元・用途などの基本的な情報の集積と整理を行った。その結果を基に、2019年３月から開催の特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を特別展示場において実施した。同展では、明治時代から昭和40年代までを中心とした玩具の展示を通して、明治時代・大正時代・昭和前期・第二次製大戦の敗戦後のそれぞれの時代の大人や社会の子どもに対する認識を展観した。特に、明治以降第二次世界大戦の敗戦前までの、天皇中心の忠臣愛国思想・軍国主義・良妻賢母育成の３点にほとんどの玩具の内容が収斂する状況から、敗戦後の、めまぐるしく推移するマンガやテレビのキャラクターなどの流行を反映した多様性に富む玩具が現れる開放的な状況へという、子どもと玩具の関係の大きな変化を、玩具という具体的なモノを通じて明らかにすることができた。とはいえ、いずれの時代も玩具は大人や社会によって製造され、子どもに与えられるので、基本的には大人や社会の統制下にあったことは否めない。メンコやビー玉などの賭け事遊びのように、まれにそうした統制から子どもが逸脱して玩具で遊ぶこともあったが、その場合は即座に大人や社会の干渉が発動し、子どもの玩具や遊びはその統制下に復した。そうした歴史を踏まえ、明治以降の玩具に見られた階級差や男女差や過度の大人や社会の干渉に制限されない、よりよい子どもと玩具と遊びの将来的な関係を、観覧者に考える場を提供した。

また、同展の展示図録『子ども／おもちゃの博覧会』（笹原編・国立民族学博物館発行）を出版した。

同展及び同図録は、民博の共同研究「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究――国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」（研究代表者 是澤博昭・研究期間2014-2018年）の成果の一環である。

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海的海域における民俗芸能の研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者

寺田吉孝［てらだ　よしたか］――――――

族誌映画の形態をとる必要はなく、様々な利用法が存在すると考えられ、個別事例に沿って何が各々の目的にとって有効であるかを具体的に検討したい。

2) 南アジアは弦楽器の宝庫であり、古典音楽から宗教音楽、民俗音楽から映画音楽まで幅広いジャンルで演奏されてきた。その用途も主奏、伴奏、持続音の演奏と幅広く、演奏法や形態も極めて多様である。南アジアの弦楽器は、中央アジアや西アジアから伝えられた楽器が改良され定着したものが多く、また、そのいくつかは南アジアでの変容を経て東南アジア、東アジアにも伝えられた。このように、南アジアはユーラシアにおける楽器の伝播に重要な役割を果たしてきた。しかし、1960年代以降の音楽研究では、楽器や音楽の広域的な分布や伝播についての関心は薄れ、特定地域における詳細な民族誌的研究に力が注がれてきた。各地域における詳細なデータの蓄積が見られる一方で、それらを統合する研究は進展していない。本課題では、近年の音楽研究では重視されていない巨視的な視点をあえて提示することで、この種の研究の可能性を示したい。

・成果

1) 映像音響メディアを活用した複数のプロジェクトを並行して進めた。

①消滅の危機に瀕する伝統音楽の継承プロジェクト

カンボジアとフィリピンを事例とした民博の取組みに関する論文を刊行した。

Terada, Yoshitaka. 2018. “Audiovisual media and performing arts in danger.” In *Music as Heritage: Historical and Ethnographical Perspectives*, edited by Barley Norton and Naomi Matsumoto, 61–78. London: Routledge.

②ネパールを事例とした映像音響資料の返還・共有プロジェクト

ソースコミュニティを対象とした上映会をネパールで実施するとともに、以下の論文を刊行した。

Terada, Yoshitaka. 2018. “Visiting Nepal after 34 years.” *Asian-European Music Research E-Journal*（AEMR-EJ）1: 29–36.

また、2017年度に南 真木人と共同監修した日本語番組「ネパール楽師の村 バトレチョールの現在」の英語版を完成させた。

③在日コリアンの音楽に関するプロジェクト

国際学会（オーストリア）で研究発表を行うとともに、2017年度に完成した映像番組「アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽」の上映会を国内で計10回開催し、映像番組の活用に関する議論を深めた。また、同番組の英語、韓国語字幕版を完成させ、海外での上映会の可能性を模索した。

④『みんぱく映像民族誌』を３巻刊行した。

第30集『ネパールの楽師ガンダルバ』（南真木人と共同監修）

第32集『アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽』（高正子と共同監修）

第33集『フィリピン周縁地域の音楽』（ウソパイ・カダー、米野みちよと共同監修）

2) 企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」（2018年２月21日～2019年５月７日）の準備と連動させて研究を進めた。展示の実行委員とともに民博収蔵資料の熟覧、文献資料の精読を行い、楽器や音楽の広域的な分布や伝播についての研究の現況を整理した。その成果は企画展で展示した楽器の伝播地図に集約的に反映されている。また、『季刊民族学』166号（2018年10月刊行）と『月刊みんぱく』第43巻２号（2019年２月刊行）に企画展関連の特集を組み、研究成果の一部を一般公開した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

Terada, Y.

2018 Audiovisual Media and Performing Arts in Danger. In B. Norton and N. Matsumoto（eds.）*Music as Heritage: Historical and Ethnographic Perspectives*, pp.61–78. London: Routledge.［査読有］

［論文］

Terada, Y.

2018s Visiting Nepal after 34 years. Asian-European Music Research E-Journal（AEMR-EJ）1: 29–36.

［その他］

寺田吉孝

2018 「ネパール音楽博物館」新世紀ミュージアム『月刊みんぱく』42(4)：16–17。

2018 「南アジア、弦の響き（特集『旅する楽器』）」『季刊民族学』166：4–9。

2019 「国立民族学博物館の収蔵品㊼ タゴールさんのインド楽器」『文部科学 教育通信』451：2。

2019 「遥かなる弦楽器の旅」特集「南アジア、弦の響き」『月刊みんぱく』43(2)：2–3。

2019 「南インドのゴットゥヴァーティヤム」『月刊みんぱく』43(2)：9。

2019 「人をつなぐ技法としてのパフォーミング・アーツ――共生のためにできること」『民博通信』164：4-9。

小日向英俊・田森雅一・寺田吉孝

2018 「タゴール家とインド音楽――サンディップ・タゴールインタヴュー」（特集『旅する楽器』）『季刊民族学』166：10-19。

Terada, Y.

2018 Negotiating intangible cultural heritage. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 46: 8-10.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

南 真木人・藤井知昭・寺田吉孝監修

2019 『みんぱく映像民族誌　第30集 ネパールの楽師ガンダルバ』（日本語・107分）

髙正子・寺田吉孝　監修

2019 『みんぱく映像民族誌　第32集 アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽』（日本語・75分）

ウソパイ・カダー・米野みちよ・寺田吉孝監修

2019 『みんぱく映像民族誌　第33集 フィリピン周縁地域の音楽』（日本語・74分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

2019年１月12日 「太鼓と周縁化されたコミュニティ――新しい社会運動の模索」民博共同研究会『音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月25日 ‘Reclaiming self and history: Music making in Zainichi Korean community in Japan.’ 国際伝統音楽学会「音楽とマイノリティ」研究グループ 第10回国際シンポジウム、ウィーン大学、ウィーン、オーストリア

2018年11月30日 ‘Charumera and the representation of the Other in Japan.’ 国際伝統音楽学会 第26回国際コロキウム『シルクロードのダブルリード楽器――古代から今にいたる理論と実践の往還』Double Reeds of the Silk Road: The Interaction of Theory and Practice from Antiquity to Contemporary Performance. 上海音楽院、上海、中国

・みんぱくゼミナール

2019年３月16日 「チャルメラ――過去から響く音」第489回みんぱくゼミナール

・研究講演

2018年11月２日 「アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽がつたえるもの」国立民族学博物館、日本経済新聞社、日経ホール（東京）

・研究公演

2019年３月２日 「薫り立つインド宮廷の華――弦楽器サロードの至芸」国立民族学博物館、ホテル阪急エキスポパーク多目的ホール（オービットホール）

・展示

2019年２月21日～５月７日 「旅する楽器――南アジア、弦の響き」国立民族学博物館本館企画展示場

・広報・社会連携活動

2018年11月16日 「世界に広がる和太鼓――社会正義と共生」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年12月７日 「チャルメラ――過去から響く音」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」国立民族学博物館

・その他

［映像番組上映］

2018年５月12日 『アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽』（2018年制作）国際高麗学会日本支部 人文社会研究部会 立命館大学梅田キャンパス（大阪）

2018年７月15日 『アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽』（2018年制作）御幸森小学校 地元上映会（大阪）

2018年11月23日 *Revisiting Batulecaur after 34 Years: A Village of Musicians in Nepal*（2018年制作）第８回国際民俗音楽映画祭（ネパール、カトマンズ）

2019年１月２日 *Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music*（2018年制作）マドラス大学（イン

ド、チェンナイ）

2019年２月９日　『アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽』（2018年制作）「みんぱく映像民族誌シアター」シアターセブン（大阪）

2019年２月16日　『アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽』（2018年制作）大阪人権博物館（大阪）

2019年２月24日　『アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽』（2018年制作）らいとぴあ21 箕面市萱野中央人権文化センター（箕面）

◎調査活動

・海外調査

2018年７月４日～７月８日―タイ（チュラーロンコーン大学（タイ・バンコク）で開催された国際シンポジウム（７月５日）への参加および国伝統音楽学会理事会（７月６日～７日）に出席。）

2018年７月21日～８月２日―オーストリア（国際伝統音楽学会「マイノリティと音楽」および「音楽とジェンダー」研究グループ合同シンポジウムへの出席と研究発表）

2018年11月20日～11月26日―ネパール（フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクトに係るデータベースの説明と肖像権者からのウェブサイト掲載許諾の取得）

2018年11月28日～12月２日―中国（上海音楽学院（中国・上海市）で開催された国際コロキアム “Double Reeds of the Silk Road: The Interaction of Theory and Practice from Antiquity to Contemporary Performance”（2018年11月29日～12月１日）への出席、研究発表）

2018年12月25日～2019年１月３日―インド（特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」国際シンポジウム開催準備のため。）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究」（研究代表者：田森雅一）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

・他の機関から委嘱された委員など（総研大以外での博士論文審査委員も含む）

国際伝統音楽学会International Council for Traditional Music理事、学会誌 Yearbook for Traditional Music映画・ビデオレビュー編集委員、Asian Music 誌（アメリカ合衆国）編集助言委員、Etnografie Sonore/Sound Ethnographies誌（イタリア）国際学術委員、Musicologist誌（トルコ）編集評議委員、国立文化財機構外部評価委員、アジア太平洋無形文化遺産研究センター助言組織構成員、大阪教育大学・非常勤講師（集中講義、民俗芸能研究）

野林厚志［のばやし　あつし］――教授

1967年生。**【学歴】**東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程退学（1996）**【職歴】**国立民族学博物館第３研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授・センター長（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2015）、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長（2015）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）**【学位】**博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）**【専攻・専門】**フォルモサ研究 原住民族研究、博物資源学、民族考古学 狩猟園芸農耕民研究、通文化モデル研究、人類学 生業研究、先住民族研究、食文化研究**【所属学会】**日本台湾学会、日本文化人類学会、The American Anthropological Association、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学――台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

［編著］

野林厚志編

2018 『肉食行為の研究』東京：平凡社。

順益台湾原住民研究会・野林厚志主編

2014 『台湾原住民研究の射程――接合される過去と現在』北京：順益台湾原住民博物館。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、人類が生態資源の獲得に使用してきた道具の特徴を、(1) 形態上の要素、(2) 機能上の要素の２点に注目して分析し、(1)と(2)について、通文化的に比較可能な指標の抽出を試みることである。オズワルト（1983［1976］）の導入した「技術単位」に発想を得ながらも、自然環境への適応と文化伝達の課題を念頭におきながら、道具の機能形態論へ展開させることをねらいとしている。

台湾、フィリピン、インドネシア等で、野外調査、博物館資料の熟覧調査を行い、生業活動、生産活動に際して活用される生態資源（動物、植物、鉱物、水等）を獲得するための道具のインデックスを作成する。そのうえで、自然環境への適応、集団接触による文化変容を切り口とした道具の機能形態論を考察する。

同時に民族誌データの定量分析を数理モデルの研究者と共同で進め、環境と文化要素との相関に関する分析的研究を進める。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施する。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、インドネシア・ハルマヘラにおいて、漁労技術の変容、食生活の変化についての予備的調査を行った。この調査では、約40年前に石毛直道元民博館長を中心として実施された調査記録を活用し、40年間の時間経過による人間の生活や生業資源の獲得行動の変化を中心にフィールド調査を実施した。同地域では人口が約10倍に増加しているものの、ムスリムとキリスト教徒の構成比は維持されており、それぞれの集団のなかで実施される生業行動の体系に大きな変化が見られないことが予見として得られた。特に生業行動に関する新たな技術導入は各集団の中で完結し、集団間での技術交渉が見られない点は、集団間接触による行動変化を考えるうえで重要な示唆を与える知見であった。

これらの調査は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」によって遂行した。

民族誌データの定量分析については、生業行動と環境指標との相関を、Binford (2001) のでデータセットを中心に行った。生業依存度（狩猟、漁労、採集）と集団の移動パターンや社会集団の属性に関する相関関係等の議論を行い、次年度に本格的な分析を進めていくうえでの予備的な考察が得られた。この成果については、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の研究大会等で、成果の一部を発表した。

◎出版物による業績

［編著］

野林厚志・松岡格編

2019 『台湾原住民の姓名と身分登録』（国立民族学博物館調査報告147）大阪：国立民族学博物館。

野林厚志編

2019 『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2018年度 研究報告――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班。

［分担執筆］

野林厚志

2018 「民族文化を伝える手法と課題――国立民族学博物館における取り組み」湯浅万紀子編『ミュージアム・コミュニケーションと教育活動』pp.209-219，東京：樹村房。

2019 「序――台湾原住民の名刺とエスニシティとの関係を考える」野林厚志・松岡格編『台湾原住民の姓名と身分登録』（国立民族学博物館調査報告147）pp.1-13，大阪：国立民族学博物館。

［論文］

野林厚志

2018 「エスニシティを可視化する手段としての衣服――台湾原住民族サキザヤ族の民族認定を事例として」『国立民族学博物館研究報告』42(4)：379-409。［査読有］

2019 「日本統治時代の資料からみた台湾原住民族の『疾病』観と食を通した健康」『日本健康学会誌』85(1)：6-13。

Nobayashi, A.

2018 The Authentic Change of Material Culture of the Indigenous People in Taiwan. *Proceedings of State Governance and Identity Politics: Perspectives from Taiwanese Indigenous People, The 3rd World Congress of Taiwan Studies.* Taipei: Academia Sinica.

［その他］

野林厚志・門脇誠二

2018 「中部旧石器時代から上部旧石器時代にかけての狩猟具の小型化の行動論的考察――民族誌からの予察」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第6回研究大会』pp.6-7，東京：東京大学。

野林厚志・池谷和信

2018 「民族学からみる狩猟採集・農耕社会の接触と交替」『日本考古学協会第84回総会研究発表要旨（2018.5.26-27）明治大学』pp.118-119，東京：日本考古学協会。

野林厚志

2018 「イヌとヒト――人類史と民族誌から考える」『さざなみ』37：1-8。

2018 「旅の読書室80　五感を駆使する探究旅行」『まほら』95：50-51。

2018 「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史① 旧人から新人へ」『毎日新聞』4月7日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史② 石器文化の境界線」『毎日新聞』4月14日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史③ 運搬具と人類の移動」『毎日新聞』4月21日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史④ 魂と通じる道具」『毎日新聞』4月28日夕刊。

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊶ EEM（日本万国博覧会世界民族資料調査収集団コレクション）」『文部科学 教育通信』435：2。

2018 「みんぱく研究者めくり」『hokcier（ホクシェル）』10：16-17。

2018 A ‘Tower of the Sun’ Collection：Expo’70 Ethnological Mission. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 46: 13.

2018 「生き物と民博　生き物文化誌博物館構想」『BIOSTORY』29：40-45。

2018 「新世紀ミュージアム 国立台湾大学人類学博物館」『月刊みんぱく』42(6)：6-17。

2018 Evoking the Memory and Creating a New Lineage in the Museum: Handicraft of Taiwan Indigenous Peoples. *Memory and the Museum The Twenty-Third “Sciences in Japan” Forum, Smithsonian National Museum of the American Indian, Washington, DC, June 15, 2018,* pp.16-17. Washington: JSPS Washington Office.

2018 「研究成果の公開 民族誌コレクションの役割とその未来――人間の理解にむけた博物館の挑戦」『民博通信』161：26。

2018 「食の選択の文化的背景を考える」『福音と世界』73(9)：24-29。

2018 「プラットフォームとしてデータベースの活用――台湾でのワークショップの経験から」『民博通信』162：10-11。

2018 「旅の読書室82　ダークツーリズム」『まほら』97：52-53。

2018 「編著者に聞く 肉食行為の研究」『日本農業新聞』10月7日朝刊。

2018 「探尋照片檔案的可能性――内田勣蔵品所刻畫的臺灣風景」張淑卿・陳怡宏編『南方共筆』pp.24-

31，台南：国立台湾歴史博物館。

2018 「写真アーカイブスの可能性を探る――内田勣コレクションに刻まれた台湾の風景」張淑卿・陳怡宏編『南方共筆』pp.32–39，台南：国立台湾歴史博物館。

2018 「定量分析のための民族誌データセット――Binford（2001）を考える」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第6回研究大会』pp.42–43，東京：東京大学。

2018 「人類と肉食」『大阪保険医雑誌』46(626)：4–7。

2018 The Human and Natural History in Food Production. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 47: 1.

2019 「台湾における民主主義と同性婚」『月刊みんぱく』43(1)：18–19。

2019 「研究の目的と概要」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2018年度 研究報告』東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016–2020年度 計画研究B01班。

2019 「民族誌データの定量分析と考古学への援用――帰納モデルと投射（projection）」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2018年度 研究報告』pp.23–29，東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016–2020年度 計画研究B01班。

池谷和信・野林厚志

2018 「民族学からみる狩猟採集社会同士の接触と交替」『日本考古学協会第84回総会研究発表要旨（2018.5.26–27）明治大学』pp.120–121，東京：日本考古学協会。

中村光広・野林厚志

2018 「新人文化の鍵となる文化要素とその伝達様式――東南アジア・データベースの分析を中心に」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第6回研究大会』pp.22–23，東京：東京大学。

中村光宏・野林厚志

2018 「東南アジア大陸・島嶼・ウォーレス線境界と文化項目の相関の定量的検証」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第5回研究大会』pp.6–7，愛知：名古屋大学。

Nobayashi, A. and Y. Peng

2018 Cross-cultural perspective of the technology and technique for hunting and gathering from the ethnographic data. *Panel "Comparative studies of hunter-gatherers in Asia: from nomadic to sedentary lifestyles for long-term periods" CHAGS12,* p.118. Penang: Universiti Sains Malaysia.

Nobayashi, A.

2018 Beads for Islanders-Austronesian Perspectives. *Ecological and Cultural Approaches to Taiwan and Neighboring Islands, Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World, The Spotlight Taiwan Project, International Symposium,* p.11. Osaka: National Museum of Ethnology.

2018 Social and Cultural Change in the Indigenous Population after Contact with Colonizers: Historical Ecology of Taiwan's People in the 18th–20th Century. *PaleoAsia 2018 The International Workshop "Cultural History of PaleoAsia-Integrative Research on the Formative Processes of Modern Human Cultures in Asia,* pp.36–37. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年7月20日 'Beads for Islanders-Austronesian Perspectives.' "Ecological and Cultural Approaches to Taiwan and Neighboring Islands" Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World, The Spotlight Taiwan Project, National Museum of Ethnology, Japan

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年5月12日 「東南アジア大陸・島嶼・ウォーレス線境界と文化項目の相関の定量的検証」パレオアジア文化史学第5回研究大会、名古屋大学

2018年5月27日 「民族学からみる狩猟採集・農耕社会の接触と交替」日本考古学協会第84回総会、明治大学

2018年5月27日 「民族学からみる狩猟採集社会同士の接触と交替」日本考古学協会第84回総会、明治大学

2018年6月15日 'Evoking the Memory and Creating a New Lineage in the Museum: Handicraft of Taiwan Indigenous Peoples.' "The Twenty-Third 'Sciences in Japan' Forum Memory and the Museum", Smithsonian National Museum of the American Indian, Washington D.C., United States

2018年７月25日　‘Cross-cultural Perspective of the Technology and Technique for Hunting and Gathering from the Ethnographic Data.’ CHAGS12 Panel “Comparative Studies of Hunter-Gatherers in Asia: from Nomadic to Sedentary Lifestyles for Long-term Periods”, Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia

2018年９月６日　‘The Authentic Change of Material Culture of the Indigenous People in Taiwan.’ “Proceedings of Session A6 State Governance and Identity Politics: Perspectives from Taiwanese Indigenous People, The 3rd World Congress of Taiwan Studies”, Academia Sinica, Taipei, Taiwan

2018年11月17日　「中部旧石器時代から上部旧石器時代にかけての狩猟具の小型化の行動論的考察――民族誌からの予察」パレオアジア文化史学第６回研究大会、東京大学小柴ホール

2018年11月17日　「新人文化の鍵となる文化要素とその伝達様式：東南アジア・データベースの分析を中心に」パレオアジア文化史学第６回研究大会、東京大学小柴ホール

2018年11月18日　「定量分析のための民族誌データセット――Binford（2001）を考える」パレオアジア文化史学第６回研究大会、東京大学小柴ホール

2018年12月９日　「新規性と保守性という観点から台湾原住民族の道具と行動との関係を考える」第22回常民文化研究講座・国際研究フォーラム『アジア民具研究の可能性――民具体系と生活構造の比較から』、神奈川大学横浜キャンパス

2018年12月15日　‘Social and Cultural Change in the Indigenous Population after Contact with Colonizers: Historical Ecology of Taiwan’s People in the 18th － 20th Century.’ PaleoAsia 2018 The International Workshop “Cultural History of PaleoAsia-Integrative Research on the Formative Processes of Modern Human Cultures in Asia”, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto

・みんぱくゼミナール

2018年４月21日　「EEMという『運動』」第479回みんぱくゼミナール

・展示

2018年３月８日～５月29日　「国立民族学博物館開館40周年記念特別展　太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料」

2018年10月２日～2019年４月14日　「南方共筆――継承される台南風土描写特別展」國立臺灣歷史博物館

・広報・社会連携活動

2018年４月14日　「のこされたミッション――EEM（万博資料収集団）からみんぱくへ」第122回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル御徒町店

2018年４月20日　「万博から民博へ――万博資料収集団のドラマ」吹田歴史文化まちづくり協会、吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷

2018年４月28日　「あつまれ！みんぱく資料調査収集団 EEM収集ミッションに迫る！」みんぱくワークショップ、国立民族学博物館

2018年５月21日　「太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料見学会」日本ミュージアム・マネージメント学会（JMMA）近畿支部会、国立民族学博物館

2018年８月27日　‘Research on Cultural and Social Change in Halmahera: Preliminary Ideas.’ Universitas Hein Namotemo, Indonesia

2018年９月25日　「台湾――民族のモザイク」大阪府立春日丘高等学校、茨木市福祉文化会館オークシアター

2018年11月15日　「台湾――民族のモザイク」滋賀県立膳所高等学校、滋賀県立膳所高等学校

2018年12月13日　「台湾――民族のモザイク」大阪府立芥川高等学校、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2018年６月13日～６月18日―アメリカ合衆国（日本学術振興会ワシントン研究連絡センター主催「The 23rd Science in Japan Forum Memory and the Museum」に出席・発表）

2018年７月23日～７月26日―マレーシア（CHAGS 12（12th International Conference on Hunting and Gathering Societies）に参加・発表）

2018年８月20日～８月30日―インドネシア（インドネシア ハルマヘラでの野外調査）

2018年９月６日～９月９日―台湾（2018第11回台日原住民族研究論壇への参加と、世界台湾研究会議への参加・

発表）
2018年９月30日～10月４日―台湾（フォーラム型情報ミュージアムへ構築したプラットフォームの活用についての懇談）
2019年２月14日～２月17日―台湾（博物館ネットワークにもとづく、台湾の歴史記録の共同利用の可能性の調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（５人）、副指導教員（５人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

アジア太平洋フォーラム・淡路会議アジア太平洋研究賞選考委員、味の素食の文化センター食の文化フォーラム会員、奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキアム運営委員

◎学会の開催

2018年7月19日～7月20日　'Ecological and Cultural Approaches to Taiwan and Neighboring Islands' Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World, The Spotlight Taiwan Project, International Symposium, National Museum of Ethnology, Osaka
2018年3月18日～3月20日　'Making Food in Human and Natural History' Minpaku（National Museum of Ethnology）Special Research Project Series 2 'Human and Natural History in the System of Food Production' National Museum of Ethnology, Osaka, Japan

伊藤敦規［いとう　あつのり］―――― 准教授

1976年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部社会学卒（2000）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学修士課程修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2009）**【職歴】**国立民族学博物館特別共同利用研究員（2007）、三重大学人文学部非常勤講師（2008）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員（2008）、A: shiwi A: wan Museum and Heritage Center Visiting Researcher（2009）、立教大学兼任講師（2009）、日本学術振興会特別研究員 PD（2009）、国立民族学博物館外来研究員（2009）、三重大学人文学部非常勤講師（2010）、東北大学東北アジア研究センター共同研究員（2010）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員（2010）、国立民族学博物館2010年度文化資源プロジェクト共同研究員（2010）、国立民族学博物館若手共同研究員（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2011）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2012）、Museum of Northern Arizona Research Associate（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、東北大学大学院文学研究科非常勤講師（2019）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2011）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）**【専攻・専門】**社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学**【所属学会】**日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association、デジタルアーカイブ学会

【主要業績】

［編著］

伊藤敦規編

2019　『天理大学附属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧――ソースコミュニティと博物館資料との「再

会」2』大阪：国立民族学博物館。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画（2016～2020年度）で実施する。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、調査対象機関を、松永はきもの資料館（広島）、柏木博物館（長野）、豊島みみずく資料館（東京）、猪熊源一郎現代美術館（香川）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）などとする。また、資料調査対象とする民族集団は、ホピを中心とする。

日本国内での博物館調査研究を進める。また、現在リニューアルオープンに向けて休館中の柏木博物館の資料熟覧の受入体制が整い次第、ソースコミュニティ（ホピの人びと）を招聘して資料熟覧を行う。さらに、米国南西部先住民の保留地に赴き、地元の多様な人々との調査成果の共有を図り、今後に向けた資料管理の要望などに関する聞き取り調査を実施する。加えて、以下二つの展示会で成果を発表する。一つ目は2018（平成30）年４月に開催予定の天理大学附属天理参考館第81回企画展『大自然への敬意――北米先住民の伝統文化』、二つ目は2018（平成30）年３月に開催した国立民族学博物館の特別展『太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料』である。成果出版に関しては、これまでに実施してきたホピ製資料熟覧の記録をまとめ、国立民族学博物館調査報告（SER）など民博の刊行物としての出版を引き続き目指す。なお、外部資金として2015年度に採択された科研プロジェクト（国際共同研究強化）と連動させる。

・成果

2018年度は、これまでに実施した資料熟覧調査の成果公開に向けた作業を行った。全年度の研究計画に記したように、二つの展示会での成果発表が実現した。それ以外の研究出版物や口頭発表を数字にまとめると、２つのシンポジウムでの発表、招待講演や学会等での口頭での研究発表（９本）、米国１機関の収蔵資料を対象とする直接熟覧調査、１冊の編著の刊行、２本の短文エッセイの執筆、数百本の資料熟覧映像作品の編集・監修を行った。映像作品の20点は、2019年４月26日開幕予定のニューメキシコ州立大学附属博物館（米国）での展示会のために貸出を行った。

なお、本研究の実施にあたり、以下の研究助成の一部を使用した。①科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）（JSPS KAKENHI Grant Number JP15KK0069）」、研究代表者：伊藤敦規）。本研究の成果は、研究機関が終了している以下の民博の共同利用型研究プロジェクトの成果の一部でもある。②国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト、開発型プロジェクト（「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、研究代表者：伊藤敦規）、③国立民族学博物館共同研究（「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」、研究代表者：伊藤敦規）

◎出版物による業績

［編著］

伊藤敦規編

2019 『天理大学附属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧――ソースコミュニティと博物館資料と「再会」2』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集２）大阪：国立民族学博物館。

［論文］

梅谷昭範・伊藤敦規

2019 「天理大学附属天理参考館収蔵北米先住民資料の来歴」伊藤敦規編『天理大学附属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧――ソースコミュニティと博物館資料との「再会」2』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集２）pp.17-25，大阪：国立民族学博物館。

伊藤敦規

2019 「序」伊藤敦規編『天理大学附属天理参考館収蔵24点の「ホピ製」資料熟覧――ソースコミュニティ

と博物館資料との「再会」2』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集２）pp.1–7, 大阪：国立民族学博物館。

Ito, A.

2019 Preface. In A. Ito（ed.）*Collections Review on 24 Items Labeled "Hopi" in the Tenri University Sankokan Museum: Recollecting Source Communities with Museum Collections 2*（Info-Forum Museum Resources 2), pp.9–16. Osaka: National Museum of Ethnology.

Umetani, A and A. Ito

2019 A Brief History of the Native North Americans Collections in the Tenri University Sankokan Museum. In A. Ito（ed.）*Collections Review on 24 Items Labeled "Hopi" in the Tenri University Sankokan Museum: Recollecting Source Communities with Museum Collections2*（Info-Forum Museum Resources 2), pp.27–37. Osaka: National Museum of Ethnology.

［その他］

伊藤敦規

2018 「先住民ホピによる大地を慈しむための銀細工制作」『第81回企画展 大自然への敬意――北米先住民の伝統文化』p.15, 奈良：天理大学出版部。

2018 「『神聖な資料』広がる非公開」『読売新聞（関西版）』４月16日夕刊。

2019 「民族誌資料のデジタルアーカイブ化にかかる諸問題」『デジタルアーカイブ学会誌』3(2)：91–94。［査読有］

Ito, A.

2018 Reconnecting Source Communities with Museum Collections: A Minpaku Info-Forum Museum Project. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 46: 3–5.

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CD などの制作・監修

伊藤敦規監修

2019 「学術資料マネジメントの基礎『第２回 標本資料とデータベース』（総合研究大学院大学 文化科学研究科 特別教育プログラム）」（日本語・31分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年９月28日 「ソースコミュニティと博物館資料との『再会』」国立民族学博物館国際シンポジウム『ミュージアムの未来――人類学的パースペクティブ』グランフロント大阪 北館４階ナレッジシアター

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年４月21日 「米国南西部先住民ホピと天理参考館所蔵資料との『再会』」天理大学附属天理参考館第81回企画展『大自然への敬意――北米先住民の伝統文化』記念講演会、天理大学

2018年７月14日 「民族学博物館の諸活動におけるソースコミュニティとの協働――コメントにかえて」南山大学人類学研究所公開シンポジウム『博物館活動におけるソースコミュニティとの協働の可能性と課題』、南山大学

2018年７月14日 「趣旨説明」南山大学人類学研究所公開シンポジウム『博物館活動におけるソースコミュニティとの協働の可能性と課題』南山大学

2018年11月30日 'Revitalizing Community: From Representation by Others to Self-presentation.' KAKENHI Project meeting（15KK0069), Shungopavi Community Building, Arizona, United States

2018年12月18日 'Minpaku Collections from Northeastern Woodlands of the United States: Reconnecting Source Community with Museums.' KAKENHI Project meeting（15KK0069), National Museum of Ethnology

2019年２月11日 'Fake and Imitation Hopi Jewelry.' Hopi Arts Trail, Moenkopi Legacy Inn & Suites, Arizona, United States

2019年２月23日 'Reconnecting Source Communities with Museum Collections.' 3rd Annual Research Associate Dinner, Museum of Northern Arizona, United States

2019年３月16日 「民族誌資料のデジタルアーカイブ化にかかる諸問題」『第３回デジタルアーカイブ学会研究大会』京都大学

・展示

2018年３月８日～５月29日　国立民族学博物館開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料」国立民族学博物館本館特別展示場

2018年４月４日～６月４日　天理大学附属天理参考館第81回企画展「大自然への敬意――北米先住民の伝統文化」天理大学附属天理参考館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年３月24日　「民族学博物館におけるカルチャル・センシティビティへの配慮」第536回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2019年３月９日　「米国先住民ホピの暮らしと世界観」第125回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル御徒町店、東京

◎調査活動

・海外調査

2018年10月８日～12月９日―アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館などでの資料調査等）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

東北大学大学院文学研究科・非常勤講師、北海道大学アイヌ・先住民研究センター・客員研究員、東北大学大学院文学研究科「博物館人類学（文化人類学各論、文化人類学特論Ⅰ）」（集中講義）

齋藤玲子［さいとう　れいこ］――准教授

1966年生。**【学歴】**北海道大学文学部行動科学科卒（1989）**【職歴】**北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）**【専攻・専門】**文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸**【所属学会】**日本文化人類学会、北海道民族学会

【主要業績】

［編著］

齋藤玲子編

2015　『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010　『極北と森林の記憶――イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

［論文］

齋藤玲子

2012　「アイヌ工芸の200年――その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60，札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

本テーマは、当館の共同研究やフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトなどを関連させながら、2014年度

から続けており、2019年度まで継続予定である。アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、明治・大正・昭和と時代を経るにつれて独自の文化の継承は次第に困難になった。しかし、現在も形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、物質文化と芸能に注目し、研究を続けている。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

本年は、民芸運動や古美術品市場とアイヌ工芸品の関係について調査をおこない、おもに昭和期の日本の美術史におけるアイヌ工芸品の位置づけとその変化について研究する。

また、科学研究費（基盤B）「アイヌ民族の衣文化交流――博物館資料から北東アジア史を見直す」（佐々木史郎代表・2017～2019年度）の研究分担者としてアイヌの織物技術の調査を進め、博物館資料の比較研究をおこなう。

・成果

北東アジア地域研究経費を利用し、アイヌの首飾り（タマサイ）に関する調査をおこない、近現代におけるタマサイのあり方について論集に寄稿した（査読中）。

科研費でサハリン州立郷土博物館所蔵の衣類と皮製品、および当館の収蔵資料の調査をおこない、報告書の準備を進めるとともに、同科研とその前の科研で調査をしたアイヌはじめシベリア先住民の織物製品についてまとめた「アイヌ・北方民族テクスタイル データベース」作成に加わった。

また、特別客員研究員および共同研究員とともに収蔵資料の調査をおこない、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトで作成予定のデータベース（試験運用版）の情報を充実させた。

◎出版物による業績

［分担執筆］

齋藤玲子

2018 「ハルニレの子と火の女神」植　朗子編、阿部海太絵『はじまりが見える世界の神話』pp.120-125, 大阪：創元社。

［その他］

齋藤玲子

2018 「特別インタビュー『北海道平取町二風谷、産地が守るアイヌ伝統工芸　多様化する社会環境と先住民族の文化継承』」帝国データバンク資料館編『地場産業――伝統と革新の軌跡』（別冊 Muse2016-2018 特大号）：70-81, 東京：帝国データバンク史料館。

2018 「明治期収集のアイヌ資料」『文部科学 教育通信』444：2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年９月28日 「エスノグラフィとエイジェンシー――博物館におけるアイヌ民族との協働」国際シンポジウム『ミュージアムの未来――人類学的パースペクティブ』グランフロント大阪 北館４階ナレッジシアター

・広報・社会連携活動

2018年５月26日 「講話『北海道アイヌの文化と現在』」願得寺・御堂塾、門真市

2018年６月８日 「テレビ取材『ほっとニュース北海道（NHK 札幌放送局）』『イランカラプテプロジェクトコーナー』」

2018年９月11日 「講義『アイヌ民族の歴史と文化』」大阪 YMCA 学院天王寺校舎

2018年11月６日～11月19日 「北海道アイヌ協会　工芸者技術研修（外来研究員）受け入れ」

2018年11月８日 「ミンパク オッタ カムイノミ」国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2018年７月23日～７月25日―北海道札幌市、八雲町（アイヌの古文献の調査およびイチャルパ（先祖供養）における参与調査）

2018年８月23日―北海道札幌市（アイヌの古文献に関する調査）

2018年10月12日～10月13日―北海道平取町、浦河町（タマサイ（首飾り）に関する調査）

2018年11月９日―奈良県天理市（アイヌ衣類の熟覧調査）

2019年３月６日～３月８日―北海道浦河町、札幌市（アイヌの工芸家への聞き取りおよび同氏作品に関する映像等の調査）

・海外調査

2019年１月12日～１月19日―ロシア（サハリン州ユジノサハリンスク市にてアイヌ衣類の調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流――博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」研究代表者、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」（研究代表者：寺田吉孝）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用――日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築」（研究代表者：日高　薫）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・その他の社会活動・館外活動

吹田市立博物館協議会委員（吹田市立博物館）、公益財団法人アイヌ民族文化財団評議員（札幌市）、北海道立北方民族博物館研究協力員（網走市）

佐藤浩司［さとう　こうじ］――――――

• 科研「伝統的生産システムによる保存手法の研究――熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究」（代表：上北恭史・筑波大学）により９月13日～９月22日の日程でインドネシアのニアス島およびスマトラ島西スマトラ県のミナンカバウ集落の木造建築の現状について、また10月20日～11月10日の日程でインドネシアのティモール島、東インドネシアで木造家屋の調査をおこなった。
• 東京大学生産技術研究所所長裁量経費「モンスーンアジア地域における近代木造建築に関する研究」（代表：林　憲吾）により2019年２月16日～３月３日の日程でインドネシア・スマトラ島ランプン県および南スマトラ県において木造家屋の調査をおこなった。

以上の成果は申請者ホームページにて逐次公開している。
http://www.sumai.org/index.html

◎調査活動

・海外調査

2018年９月13日～９月22日―インドネシア（インドネシアにおける木造建築物の保存手法に関する調査研究）
2018年10月20日～11月10日―インドネシア、東ティモール（インドネシアにおける木造建築物の保存手法に関する調査研究）
2019年２月16日～３月３日―インドネシア（モンスーンアジア地域における近代木造建築に関する研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「伝統的生産システムによる保存手法の研究――熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究」（研究代表者：上北恭史（筑波大学））研究分担者

山中由里子［やまなか　ゆりこ］――――――

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

驚異と怪異の比較文明論――想像界と自然界の相関

・研究の目的、内容

常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類・異音）をめぐる人間の心理と想像力の働きをこの「驚異」と「怪異」をキーワードに、比較文明論的な視点から考察する。自然界のどのような現象が「驚異」や「怪異」として認識され、どのような言説や視覚表象物が現れたのか、その背景にはどのような自然観があるのか、知識体系に接点はあるのかといった点に注目し、ユーラシアにおける人間と自然の相関関係の歴史的変遷を多元的視点から究明する。ユーラシア三大文明圏における生態系と人間の想像力と表象物の相関関係を明らかにし、その基層にある自然思想――「異」なるものへの視線に内包される自己と他者、自己と宇宙の境界認識――の歴史的変遷を、本年度は特に異形の植物に焦点をあてて解明する。

本研究は、科学研究費基盤Ａ「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」（代表：山中由里子）の補助金、科学研究費新学術領域研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（代表：野林厚志）および科学研究費基盤Ｃ「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承――中東および古代・近世との関わり」（代表：大沼由布）と関連付けて上記の内容の各個研究を実施する。

・成果

本年度は、科学研究費基盤Ａ「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」（代表：山中由里子）の補助金、科学研究費新学術領域研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（代表：野林厚志）および科学研究費基盤Ｃ「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承――中東および古代・近世との関わり」（代表：大沼由布）と関連付けて上記の内容の各個研究を実施した。

マンドラゴラ伝承に関する論文 “How to Uproot a Mandrake: Reciprocity of Knowledge between Europe, the Middle East, and China” を、ソルボンヌ大学出版会から刊行予定の論文集に寄稿した。現在印刷準備中である。

新学術領域「パレオアジア文化史学」全国大会においてポスター発表「旅するマンドラゴラ伝承」（名古屋大会、2018年５月12日-13日）、「世界地図と水の怪物」（東京大会2018年11月17日-18日）、‘Complexity and “Environmental Adaptability” of Imaginary Creatures’（京都大会2018年12月15日-18日）を行った。

映像民族誌番組「常ならざる音――耳を通して異界とつながる」を監修し、編集を完了させた。

勉誠出版の「アジア遊学シリーズ」から2019年度に刊行予定の論文集『この世のキワ――＜自然＞の内と外』（仮題）の原稿がほぼ集まり、印刷準備中である。

◎出版物による業績

［分担執筆］

山中由里子

2018 「博物館で学ぶ世界各地のイスラーム文化」小杉泰・黒田賢治・二ッ山達明編『大学生・社会人のためのイスラーム講座』pp.19-21，京都：ナカニシヤ出版。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

山中由里子監修

2019 『常ならざる音――耳を通して異界とつながる』（ビデオテーク　番組番号7247）（日本語・33分）

◎調査活動

・海外調査

2018年６月12日～６月25日―フランス、ドイツ（ケー・ブランリ博物館における妖怪展示調査、成果発表打合せ（パリ）、マンドラゴラに関する文献資料調査（ドイツ））

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人

類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承――中東及び古代・近世との関わり」（研究代表者：大沼由布（同志社大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「日本文化の対話的発展の比較文学的研究――世界のポップ・テクストをめぐって」（研究代表者：平石典子（筑波大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

国際研究統括室

西尾哲夫［にしお　てつお］――― 室長（併）、副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

池谷和信［いけや　かずのぶ］――― 兼：人類文明誌研究部教授

卯田宗平［うだ　しゅうへい］――― 兼：人類文明誌研究部准教授

河合洋尚［かわい　ひろなお］――― 兼：グローバル現象研究部准教授

野林厚志［のばやし　あつし］――― 兼：学術資源研究開発センター教授

山中由里子［やまなか　ゆりこ］――― 兼：学術資源研究開発センター准教授

八木百合子［やぎ　ゆりこ］――― 兼：人類基礎理論研究部助教

IR 室

西尾哲夫［にしお　てつお］――― 室長（併）、副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

梅棹資料室

飯田　卓［いいだ　たく］――― 併：学術資源研究開発センター教授

機関研究員

大澤由実［おおさわ　よしみ］――― 機関研究員

【学歴】ケント大学大学院人類学部修士課程修了（2005）、ケント大学大学院人類学・保全学研究科博士課程修了（2011）**【職歴】**欧州大学院大学歴史・文明学研究科研究員（2012）、チェンマイ大学社会科学部・社会科学と持続可能な開発のための地域センター特別研究員（2013）、京都大学学術研究支援室 URA（2014）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）**【学位】**Ph.D.（民族生物学）（ケント大学 2012）、MSc（民族植物学）（ケント大学 2005）**【専攻・専門】**食の人類学、民族植物学 味の文化的認識と表象、味のグローバル化

【主要業績】

［分担執筆］

Osawa, Y.

2018 “We Can Taste but Others Cannot”: Umami as an Exclusively Japanese Concept. In N.K. Stalker（ed.）*Devouring Japan: Global Perspectives on Japanese Culinary Identity*, pp.118–132. Oxford: Oxford University Press.

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［分担執筆］

Osawa, Y.

2018 “We Can Taste but Others Cannot”: Umami as an Exclusively Japanese Concept. In N.K. Stalker（ed.）*Devouring Japan: Global Perspectives on Japanese Culinary Identity*, pp.118–132. Oxford: Oxford University Press.

［その他］

大澤由実

2018 「ハニーホテル」『月刊みんぱく』42(12)：20。

Osawa, Y.

2018 Authenticity, Soft Power and the Japanese Food Boom. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 47: 5–7.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年３月18日 ‘Creation of Taste: Quest for Deliciousness.’ International Symposium “Making Food in Human and Natural History”, National Museum of Ethnology

◎調査活動

・海外調査

2018年８月30日～９月13日―タイ（食の選択と価値観に関する調査）

2018年11月15日～11月30日―タイ（タイにおける食の認識体系とその変容についての調査）

2019年２月５日～２月15日―デンマーク、イギリス（デンマーク及びイギリスにおける、食の人類学的研究及び民族植物学的研究の最新研究動向及び学際的共同研究の調査）

2019年２月21日～３月12日―タイ（タイにおける食の認識体系とその変容についての調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究活動スタート支援）「食の認識体系とその変容――タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶」研究代表者

神野知恵［かみの　ちえ］――機関研究員

1985年生。**【学歴】**国際基督教大学教養学部卒（2008年）、東京藝術大学大学院音楽文化研究科修士課程修了（2011年）、東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了（2016年）**【職歴】**東京藝術大学音楽学部助手（2016年）、東京藝術大学大学院音楽研究科専門研究員（2017年）、東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員（2017年）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018年）**【学位】**博士（音楽学）（東京藝術大学大学院音楽研究科 2016）、修士（音楽学）（東京藝術大学大学院音楽文化研究科 2011）**【専攻・専門】**民族音楽学、韓国民俗音楽、日本民俗芸能**【所属学会】**東洋音楽学会、民俗芸能学会、韓国・朝鮮文化研究会、映像民俗学の会、南道民俗研究会（韓国）、国際伝統音楽学会（ICTM）

【主要業績】

［単著］

神野知恵

2016 『韓国農楽と羅錦秋――女流名人の人生と近現代農楽史』（アジアを学ぼうブックレットシリーズ）東京：風響社。

［論文］

神野知恵

2018 「韓国音楽学者李輔亨による湖南右道農楽録音資料の比較考察」『国立民族学博物館研究報告』43(3)：443-483。［査読有］

［学位論文］

神野知恵

2016 「韓国農楽における個人演奏者論――羅錦秋名人の芸術世界とその継承」東京：東京藝術大学大学院音楽研究科。

【受賞歴】

2012 韓国外交通商部・アリランTV主催外国人対象映像コンテスト大賞受賞

2011 東京藝術大学大学院アカンサス音楽賞（修士論文優秀賞）

2008 国際基督教大学FOI学術奨励賞長清子アジア研究学術奨励賞（卒業論文優秀賞）

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［共著］

キムホンソン・ソンギテ・パクヘヨン・クォンウニョン・神野知恵・モヒョンオ・ファンジュヨン

2018 「고창농악의 전통과 생명력（高敞農楽の伝統と生命力）」高敞農楽保存会著『「고창농악 전수교육의 어제와 오늘（高敞農楽の伝授教育の昨日と今日）』pp.160-184，ソウル：民俗苑。

［論文］

神野知恵

2018 「小豆島の民俗と伊勢大神楽」東京文化財研究所無形文化遺産部編『無形文化遺産研究報告』12：67-100。

2018 「韓国音楽学者李輔亨による湖南右道農楽録音資料の比較考察」『国立民族学博物館研究報告』43(3)：443-483。

［その他］

神野知恵

2018 「現代に生き続ける門付け芸能」特集「門付け再考――家を訪ねる芸能の諸相総論」『月刊みんぱく』42(10)：2-3。

2018 「海外研究動向　現場と研究者をつなぐ――韓国農楽の2010年代の研究動向」『民博通信』163：24。

2018 「国立民族学博物館の収蔵品㊸　愛され続ける伊勢大神楽の獅子頭」『文部科学 教育通信』457：2。

2018 「風の暮らし土の暮らし　伊勢大神楽と現代日本を歩く④」『全日本郷土芸能協会会報』94：16。

2018 「風の暮らし土の暮らし　伊勢大神楽と現代日本を歩く⑤」『全日本郷土芸能協会会報』93：9。

2019 「風の暮らし土の暮らし　伊勢大神楽と現代日本を歩く⑥」『全日本郷土芸能協会会報』94：16。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年3月21日　国立民族学博物館現代中東地域研究拠点主催　現代中東レクチャー・シリーズ・スペシャルレクチャー「内なる深い呼吸を求めて――尺八と空手道を通じたマインドフルネスとは」（カイル・カマル・ヘロウ氏との対談、ファシリテーター担当）

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年6月16日　「im/pulse: 脈動する映像」映像作品出展、関連イベント「韓国打楽器のリズムを用いた実験的パフォーマンス」解説・演奏、京都市立芸術大学@kcua

2018年7月26日～7月27日　韓国高敞農楽主催公演「アジアの民俗舞踊」、岩手県指定無形文化財舞川鹿子躍保存会＋東京鹿踊のコーディネート・司会解説、全羅北道高敞郡高敞農楽伝授館

2018年10月３日～10月６日　韓国無形文化遺産院主催公演『2018人類無形文化遺産招聘公演 アジアの伝統人形劇』国立文楽劇場による文楽公演の通翻訳・司会解説、全羅北道全州市、韓国
2018年10月20日　松下国際スカラシップフォーラム特別シンポジウム登壇『フィールドから見た音楽』東京大学
2019年１月27日　文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス登壇『魅惑の韓国音楽世界――農楽、巫楽、民謡、流行歌まで』下北沢コムカフェ音倉
2019年２月24日　文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス登壇『魅惑の韓国リズム世界――チュジャ島の農楽村祭り直送レポート』神戸モダナーク

・研究講演
2018年５月25日　特別講義「アジアの伝統芸能と身体」立教大学学部統合科目、立教大学
2018年６月１日　特別講義「アジアの伝統芸能と身体」立教大学学部統合科目、立教大学
2018年６月７日　特別講義「日本と韓国の民俗音楽」ソウル大学芸術大学国楽科、ソウル市
2018年８月16日　「한일 지역전통예능의 비교 및 한일 교류 현장에서 본 농악의 활용가능성（日韓の地域伝統芸能の比較および日韓交流の現場から見た農楽の活用可能性）」筆峰農楽シンポジウム、全羅北道任実郡筆峰農楽伝授館、韓国
2018年10月27日　「「이세다이카구라의 걸립을 통해서 본 세토나이카이쇼도시마의 생활과 민속（伊勢大神楽の回檀を通じて見た瀬戸内海島嶼部のくらしと民俗）」木浦大学島嶼文化研究所国際シンポジウム、全羅南道木浦市、韓国

・民博研究懇談会
2019年１月23日　「家廻り芸能はなぜなくならないのか――伊勢大神楽の神楽師の多重的価値観からの考察」国立民族学博物館

・通訳
2018年６月４日　福岡正太講演、神野知恵通翻訳「国立民族学博物館における民族音楽学資料のフォーラム型情報ミュージアム構築」ソウル大学東洋音楽研究所フォーラム海外研究者招聘公演、ソウル大学中央図書館

◎調査活動

・国内調査
2018年４月14日―三重県（伊勢大神楽講社伊勢神宮奉納）
2018年５月１日―滋賀県（湖南市・石部春祭り）
2018年５月４日―大阪府（伊勢大神楽講社山本勘太夫社中大阪城総舞）
2018年５月５日～５月６日―京都府（亀岡市・伊勢大神楽講社森本忠太夫社中回檀）
2018年６月14日―福井県（越前市・伊勢大神楽講社山本源太夫社中福井県越前市住吉町八幡神社総舞）
2018年７月６日～７月８日―青森県（八戸市・白銀神楽）
2018年７月11日―大阪府（大阪市・生國魂神社夏祭獅子舞）
2018年７月14日―京都府（京都市・祇園祭）
2018年７月21日―大阪府（大阪市城東区今福・蒲生夏祭りだんじり曳行）
2018年８月１日～８月２日―青森県（八戸市・三社大祭）
2018年８月３日―岩手県（北上氏・北上みちのく芸能まつり）
2018年８月４日～８月７日―岩手県（大船渡市・大船渡越喜来浦浜念仏剣舞盆行事）
2018年８月27日～９月７日―香川県（伊勢大神楽講社森本忠太夫社中香川県塩飽諸島回檀（櫃石島、本島、広島、瀬居町））
2018年９月12日～９月13日―香川県（伊勢大神楽講社森本忠太夫社中香川県塩飽諸島回檀（岩黒島））
2018年９月16日―大阪府（岸和田市・岸和田だんじり祭り）
2018年９月16日―徳島県（阿波木偶箱まわし保存会）
2018年９月22日～９月23日―岩手県（盛岡市・黒川さんさ踊り門付け行事）
2018年10月１日～10月２日―香川県（伊勢大神楽講社森本忠太夫社中小豆島土庄町回檀）
2018年10月11日～10月12日―大阪府（伊勢大神楽講社山本源太夫社中大阪狭山市・堺市回檀）
2018年10月14日～10月15日―香川県（小豆島土庄町秋祭り）
2018年10月16日～10月18日―岡山県（伊勢大神楽講社森本忠太夫社中犬島・石島回檀）
2018年11月３日―鹿児島県（曽於市大隅町弥五郎どん祭り）

2018年11月21日～11月23日―岡山県（浅口市・伊勢大神楽講社山本勘太夫社中回檀）
2018年12月２日～12月３日―兵庫県（丹波篠山市・伊勢大神楽講社森本忠太夫社中回檀）
2018年12月22日～12月25日―三重県（伊勢大神楽講社桑名市太夫総舞、資料調査）
2019年１月１日～１月５日―滋賀県（伊勢大神楽講社加藤菊太夫社中、森本忠太夫社中、山本勘太夫社中（滋賀県東近江市、湖南市、大津市））
2019年１月12日～１月13日―岩手県（宮古市・黒森神楽巡行）
2019年１月15日～１月16日―岩手県（大船渡市・吉浜スネカ行事、吉浜権現様巡行）
2019年１月31日～２月１日―滋賀県（近江八幡市・伊勢大神楽講社山本源太夫社中回檀）
2019年２月24日―滋賀県（近江八幡市・伊勢大神楽講社山本源太夫社中沖島回檀）
2019年３月１日～３月３日―滋賀県（東近江市・伊勢大神楽講社加藤菊太夫社中回檀）

・海外調査

2018年11月27日～12月３日―モーリシャス（ユネスコ無形文化遺産政府間会議陪席（文化庁同行））
2019年２月２日～22日―韓国（全羅北道高敞郡、慶尚南道機張郡、済州道楸子島にて旧正月行事調査）
2019年３月７日～18日―イギリス（民族音楽学の最新研究動向および学際的共同研究の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究）「近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷――伊勢大神楽と韓国農楽を中心に（課題番号18K12594）」研究代表者

末森　薫［すえもり　かおる］――――――

Mori, N., T. Higo, K. Suemori, H. Suita and Y. Yasumuro

2018 Visualization of the Past-to-Recent Changes in Cultural Heritage Based on 3D Digitization. In M. Ioannides, E. Fink, R. Brumana, P. Patias, A. Doulamis, J. Martins, M. Wallace（eds.）*Digital Heritage. Progress in Cultural Heritage: Documentation, Preservation, and Protection*（*7th International Conference, EuroMed 2018, Nicosia, Cyprus, October 29–November 3, 2018, Proceedings, Part I*）1: 3–14. New York: Springer.［査読有］

Suemori, K., Y. Yue, T. Li, Q. Ma, G. Dong, T. Matsui and H. Yagi

2019 Optical Photographic Examination of Mural Paintings in Cave 127 of the Maijishan Grottoes, Tianshui, China. In Society for Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Center for Land and Cultural Resources Research, Fudan University and China Association for Conservation Technology of Cultural Heritage（eds.）*Traditional Techniques and Modern Technology: The Proceedings of the Sixth Symposium of the Society for Conservation of Cultural Heritage in East Asia*, pp.569–580.

Zhou Y., T. Matsui, K. Suemori, Y. Yue, G. Dong, Q. Ma and X. Li

2019 Portable XRF Study for the Pigments Applied in the Wall Paintings of the Caves in Bei Wei Period at the Maijishan Cave-Temple Complex. *Traditional Techniques and Modern Technology: The Proceedings of the Sixth Symposium of the Society for Conservation of Cultural Heritage in East Asia*, pp.629–643.

［学位論文］

末森　薫

2018「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏図の研究」筑波大学大学院。

［その他］

末森　薫

2019「公開シンポジウム『文化財を伝える――デジタル技術の応用と管理』に参加して」『文化財保存修復学会通信』163：4–5。

2019「国立民族学博物館の収蔵品⑫ チベットの版木とデジタル版画」『文部科学　教育通信』456：2。

2019「外から見える収蔵庫」『月刊みんぱく』43(4)：8。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2018年６月13日「エジプトにおける考古系博物館の成り立ちと現在」第13回 現代中東地域研究レクチャー・シリーズ／現代中東地域研究国立民族学博物館拠点「文化遺産とミュージアム」研究班研究会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2019年２月８日「オランダにおける収蔵庫再編成の動向」研究会『博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年６月16日「米原曳山祭『松翁山』の保存修復事例――地域密着型の保存体制の構築を目指して」文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月17日「エジプト・サッカラ地域、イドゥートのマスタバ古代壁画の保存修復――国際プロジェクト15年間の成果と課題」文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月17日「バーレーン王国・バルバル神殿遺跡に見られる経時変化――古写真との比較および三次元モデルの活用」文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月17日「古代エジプト 壁画の剥ぎ取り保存――布海苔を用いた表打ち技法の応と評価」文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年７月７日「3Dスキャナーを活用した津波碑の文字情報取得についての検証――高知県　地震津波碑の事例から」日本文化財科学会第35回大会、奈良女子大学

2018年７月７日「バーレーン王国、バルバル神殿遺跡の保存・活用を目的とした調査」日本文化財科学会第35回大会、奈良女子大学

2018年７月７日「中国天水・麦積山石窟壁画片の高精度炭素年代測定」日本文化財科学会第35回大会、奈良女子大学

2018年９月10日　‘Continuous Efforts over 10 Years for Storage Re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan.’ The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC）2018 Turin Congress – Preventive Conservation: The State of the Art, Turin, Italy

2018年10月24日　「敦煌莫高窟富有規律的千仏図像視覚特征研究」『敦煌壁画：形式与風格”学術研討会』敦煌研究院、敦煌、中国

2018年10月29日　‘Visualization of the Past-to-Recent Changes in Cultural Heritage based on 3D Digitization.’ EuroMed 2018: Digital Heritage. Progress in Cultural Heritage: Documentation, Preservation, and Protection, Nocosia, Cyprus

2018年10月31日　「麦積山石窟調査報告――光学調査与放射性炭素年代測定」麦積山石窟芸術研究所研究会、天水、中国

2018年11月10日　‘Visualization of the Past-to-Recent Changes in Archaeological Heritage based on 3D Digitization.’ Visual Heritage 2018（CHNT 23), Vienna, Austria

2019年１月24日　「遺跡保存における古写真と3D情報の活用」文化財保存修復学会・公開シンポジウム『文化財を伝える――デジタル情報の応用と管理』山梨県防災新館

2019年３月14日　「文化財維持管理のための３次元計測を介した経時変化の定量的観測システム」情報処理学会第81回全国大会、福岡大学

2019年３月15日　「建築的空間から見た中国の石窟寺院――敦煌莫高窟・天水麦積山石窟を中心として」武庫川女子大学トルコ文化研究センター研究会、武庫川女子大学

◎調査活動

・海外調査

2018年８月19日～８月24日―中国（遼寧省義県・奉国寺における壁画の光学調査）

2018年９月８日～９月16日―イタリア（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC、国際文化財保存学会）2018年大会での研究成果発表）

2018年10月22日～11月２日―中国（敦煌莫高窟および天水麦積山石窟における壁画の調査）

2018年11月11日～９月２日―オーストリア、オランダ（Visual Heritage 2018（CHNT 23）における文化遺産・博物館分野におけるデジタル技術の最新研究動向調査・オランダにおける博物館環境に関する共同研究および民族資料の保存・活用の実践的活動の調査）

2018年12月14日～12月18日―台湾（国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」への参加）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（A））「中国甘粛仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日髙真吾）研究分担者

古川不可知［ふるかわ　ふかち］―――― 機関研究員

【学歴】埼玉大学教養学部人類学コース卒（2006）、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（2012）、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了（2018）**【職歴】**一般企業SE（2006）、ネパール・トリブバン大学社会学／人類学部客員研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2014）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）、関西大学社会学部非常勤講師（2018）、関西学院大学文学部非常勤講師（2018）、神戸女学院大学文学部非常勤講師（2018）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学 2018）、修士（人間科学）（大阪大学 2012）**【専攻・専門】**文化人類学、ヒマラヤ地域研究　ネパール・ソルクンブ郡における山岳観光と「道」に関する人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会、観光学術学会、日本山岳文化学会

【主要業績】

［共訳］

奥野克巳・近藤祉秋・古川不可知

2018　レーン・ウィラースレフ著　『ソウル・ハンターズ――シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』東京：亜紀書房。

［論文］

古川不可知

2018「インフラストラクチャーとしての山道――ネパール・ソルクンブ郡クンブ地方、山岳観光地域における『道』と発展をめぐって」『文化人類学』83(3)：423-440。

2017「ネパール・ソルクンブ郡、エベレスト南麓地域における荷運びの苦痛と希望――『ローカル・ポーター』の分析を中心に」『南アジア研究』29：144-177。

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［共訳］

奥野克巳・近藤祉秋・古川不可知

2018　レーン・ウィラースレフ著　『ソウル・ハンターズ――シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』東京：亜紀書房。

［論文］

古川不可知

2018「インフラストラクチャーとしての山道――ネパール・ソルクンブ郡クンブ地方、山岳観光地域における『道』と発展をめぐって」『文化人類学』29：144-177。

［その他］

古川不可知

2018「書評：左地亮子『現代フランスを生きるジプシー――旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』」『コンタクトゾーン』10：375-380。

2018「〇〇してみました 世界のフィールド シェルパの村とトレッキング観光」『月刊みんぱく』42(8)：10-11。

2018「研究手帖――山中を歩くこと、道があるということ」『現代思想』46(17)：230。

2019「シェルパの村の冬――ネパール」『みんぱく e-news』211：巻頭コラム。

2019「想像界の生物相　ヒマラヤの雪男イエティ」『月刊みんぱく』43(1)：14-15。

2019「インフラストラクチャーをめぐる人類学的研究の動向」『民博通信』164：25。

村橋　勲・古川不可知共訳

2018　ヤニス・ハミラキス著「強制移動と非正規移動の考古学」『現代思想』46(13)：81-100。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2018年７月11日　「『シェルパ』と道の人類学――ネパール東部、エベレスト南麓地域における山岳観光と移動する身体をめぐって」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年８月１日　「ネパール・ソルクンブ郡、エベレスト南麓地域の山岳観光と流動する人々」2018年度南アジアセミナー、国立民族学博物館

2019年３月24日　「人類学とインゴルドの『あいだ』」インゴルドと「あいだ」のシンポジウム、立教大学

◎調査活動

・海外調査

2018年８月31日～９月18日―ネパール（ネパール・ソルクンブ郡におけるネパール大地震の影響調査）

2018年12月25日～2019年１月５日―インド（インド・ダージリンにおける輸送インフラとネパール移民社会についての予備調査）

2019年１月27日～２月９日―連合王国（英国における道路とモビリティ研究の最新動向調査、および生の人類学をめぐる学際的共同研究の調査）

2019年２月18日～３月15日―ネパール（ネパール・ソルクンブ郡ソル地方における車道建設の状況調査および

クンブ地方の民族誌的調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究活動スタート支援）「ヒマラヤ東部地域における輸送インフラの発展と移動する身体に関する人類学的研究」研究代表者

プロジェクト研究員

石原　和［いしはら　やまと］―― プロジェクト研究員

【学歴】立命館大学文学部人文学科日本史学専攻卒（2011）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程前期課程修了（2012）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程修了（2017）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員 DC2（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部プロジェクト研究員（2017）、立命館大学授業担当講師（2018）**【学位】**博士（文学）（立命館大学大学院 2017）**【専攻・専門】**日本史学 思想史、宗教史、宗教学**【所属学会】**日本歴史学会、日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本思想史学会、日本宗教学会

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［分担執筆］

石原　和

2018 「民衆宗教」大谷栄一・菊地暁・永岡崇編『日本宗教史のキーワード 近代主義を超えて』pp.229–235, 東京：慶應義塾大学出版会。

［その他］

石原　和

2018 「民衆宗教の世界観を歩く」『月刊みんぱく』42(6)：10–11。

2018 「神仏分離から『国家神道』へ」『京都民報』 9 月 2 日。

2018 「書評：神田秀雄著『如来教の成立・展開と史的基盤』」『宗教研究』92(3)：91–97。

2019 「書評：鵜飼秀徳『仏教抹殺――なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』」『京都民報』 3 月31日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年 7 月21日 「月見里神社史料に見る長澤雄楯と稲荷講社」日本新宗教史像の再構築第 1 回公開研究会、京都大学人文科学研究所

2018年 6 月23日 「如来教の「近代教団」化――石橋智信の研究から」幕末明治研究会、京都大学

2018年 8 月26日 「月見里神社史料に見る長澤雄楯と稲荷講社」科研「日本新宗教史像の再構築」公開講演会『鎮魂帰神法と大本教、再考――新発見の資料に基づいて』静岡市・清水テルサ

2018年11月 6 日 「長澤雄楯と稲荷講社――月見里神社史料からみる活動認可過程と社会的意義」日本思想史研究会、立命館大学

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本思想史学会 監事、日本思想史学会「思想史の対話」研究会運営委員

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学「キャンパスアジア日本研究 LA」「日本史Ⅱ（L）」「日本史特殊講義（LD）」

石山　俊［いしやま　しゅん］―― プロジェクト研究員

【学歴】名古屋大学大学院文学研究科満期退学（2006）**【職歴】**大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員

(2014)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2015)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員（2017)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2017）**【学位】**博士（文学）（名古屋大学大学院 2015）**【専攻・専門】**文化人類学、環境人類学、アフリカ、中東乾燥地文化研究、農耕社会研究**【所属学会】**日本アフリカ学会、日本中東学会、日本文化人類学会、日本沙漠学会

【主要業績】

［編著］

石山　俊編

2017 『サーヘル内陸国チャドの環境人類学――貧困・紛争・「砂漠化」の構造』名古屋：名古屋大学大学院

［共編］

石山　俊・縄田浩志編

2013 『ポスト石油時代の人づくり・モノづくり――日本と産油国の未来像を求めて 地球研叢書16』京都：昭和堂

2013 『ナツメヤシ アラブなりわい生態系シリーズ２』京都：臨川書店。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

1. 中東乾燥地オアシス（サウジアラビア）における最近50年の社会・文化・生業の変化の研究を、画像アーカイブと現地調査によっておこなった。
2. ミャンマー中央乾燥地域において、農業を中心とした生業の研究をおこなった。
3. ラオス、サワナケート県山岳地域における焼畑農耕社会の生業、環境、保健に関する研究をおこなった。

◎出版物による業績

［分担執筆］

石山　俊

2019 「オアシスからの便り――サウジアラビア、ワーディ・ファーティマ」田中樹・宮嵜英寿・石本雄大編『フィールドで出会う風と人と土４』pp.84-91，京都：総合地球環境学研究所。

［論文］

石山　俊

2019 「石油経済下50年間のサウジアラビア農業動態」『AFRO-EURASIAN Inner Dry Land Civilizations アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』7：55-69。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月26日～27日 「ミャンマー中央乾燥地における生計向上と村落開発の研究」日本沙漠学会第29回学術大会、石巻専修大学

2018年９月19日 「地域研究画像デジタルライブラリにおけるデータベース協働構築の実際」第１回 SPARC Japan セミナー2018『データ利活用ポリシーと研究者・ライブラリアンの役割』国立情報学研究所

2018年12月１日 「ミャンマー中央乾燥地における生計向上と村落開発の研究」2018年度鳥取大学乾燥地研究所共同研究発表会、鳥取大学

2018年12月３日 「サハラ・オアシスの文化――灌漑とナツメヤシ」2018年度日本沙漠学会乾燥地農学分科会講演会、東京大学

2019年２月22日 「オアシス農耕の現在――食への農学的アプローチ」2018年度人間文化研究機構 現代中東地域研究 国立民族学博物館拠点・秋田大学拠点シンポジウム、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A）（海外））「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析――「近代世界システム」との相克」（研究代表者：嶋田義仁（中部大学））研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（海外））「アフリカ食文化研究の新展開――食料主権論のために」（研究代表者：藤本　武（富山大学））研

究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（海外））「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」（研究代表者：縄田浩志（秋田大学教授））研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

特定非営利活動法人森のエネルギーフォーラム理事、一般財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団理事、特定非営利活動法人緑のサヘル理事

・他大学の客員、非常勤講師

京都府立大学教養教育科目非常勤講師「現代の食糧問題」

河村友佳子［かわむら　ゆかこ］――――――

化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと
2018年６月16日　「米原曳山祭『松翁山』の保存修復事例――地域密着型の保存体制の構築を目指して」文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと
2018年７月７日　「3Dスキャナーを活用した津波碑の文字情報取得についての検証――高知県地震津波碑の事例から」日本文化財科学会第35回大会、奈良女子大学

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）
2018年11月21日　「3Dデジタル技術を応用した民俗文化財の活用の可能性」京都造形大学

小林直明［こばやし　なおあき］――プロジェクト研究員

1971年生。**【学歴】**大阪外国語大学外国語学部日本語学科卒（1994）、大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻修士課程修了（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士後期課程単位取得退学（2002）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2002）、国立民族学博物館文化資源研究センター外来研究員／日本学術振興会特別研究員（PD・文化人理学）（2003）、大阪大学世界言語研究センター特任研究員（2008）、龍谷大学社会学部実習助手（2011）、国立民族学博物館人類文明誌研究部プロジェクト研究員（2016）**【学位】**修士（大阪外国語大学大学院 1998）**【専攻・専門】**文化人類学・民俗学 民族誌映像、図書館情報学・人文社会情報学 デジタルアーカイブ、地域研究 アフリカ **【所属学会】**日本アフリカ学会、日本映像民俗学の会、デジタルアーカイブ学会

【2018年度の活動報告】
◎社会活動・館外活動
・他大学の客員、非常勤講師
同志社女子大学「デジタルアーカイブス」、同志社女子大学大学院「メディアリテラシー特論」、近畿大学「博物館情報・メディア論」、近畿大学「情報処理専門演習」、龍谷大学「異文化研究」

橋本沙知［はしもと　さち］――プロジェクト研究員

【学歴】同志社大学文学部文化学科・美学及び芸術学専攻卒（2004）**【職歴】**国立民族学博物館情報管理施設情報企画課技術補佐員（2004）、公益財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）**【専攻・専門】**保存科学**【所属学会】**文化財保存修復学会、日本文化財科学会

【2018年度の活動報告】
◎出版物による業績
［その他］
河村友佳子・日髙真吾・園田直子・末森　薫・橋本沙知・和髙智美・日尾紀暁・余語珠未・山本彩乃
2018「3Dスキャナーを活用した津波碑の文字情報取得についての検証――高知県地震津波碑の事例から」日本文化財科学会第35回大会事務局編『日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集』pp.328-329。［査読有］
河村友佳子・日髙真吾・園田直子・和髙智美・橋本沙知
2018「ハンディ型3Dスキャナーによる大型民俗文化財の形状記録とその検証――大津祭曳山『神功皇后山』からくり岩の事例から」文化財保存修復学会第40回大会実行委員会編『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.172-173。［査読有］
橋本沙知・河村友佳子・日髙真吾・園田直子・和髙智美・岡岩太郎・川勝頌大
2018「展示期間と温湿度環境が掛け軸装絹本絵画に与える影響についての検証」文化財保存修復学会第40回大会実行委員会編『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.118-119。［査読有］
日髙真吾・園田直子・末森　薫・橋本沙知・和髙智美・河村友佳子
2018「米原曳山祭『松翁山』の保存修復事例――地域密着型の保存体制の構築を目指して」文化財保存修復学会第40回大会実行委員会編『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.132-133。［査読有］

園田直子・日髙真吾・小関万緒・西澤昌樹・橋本沙知・和髙智美・河村友佳子

2018 「生物被害の予防措置を目的とした低酸素濃度環境下での封入保管」文化財保存修復学会第40回大会実行委員会編『文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集』pp.108-109。［査読有］

Sonoda N. and S. Hashimoto

2019 Characterization of Asian paper using Py-GC/MS: Application of the method at the Nationl Museum of Ethnology, Osaka. *Development of a new analytical method using pyrolysis and comprehensive two-dimensional gas chromatograph mass spectroscopy* (*Py-GCxGC/MS*) *for the characterization of Japanese paper, washi* = 和紙の特性づけのためのPy-GCxGC/MSによる新規分析法の開発：JSPS/CNRS bilateral joint research, pp.116-141. 東京：Tokyo University of the Arts & The Center for Research on Preservation (CRC).

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年２月８日 「低酸素濃度環境での資料保存実験の進捗状況」研究会『博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年６月16日 「ハンディ型3Dスキャナーによる大型民俗文化財の形状記録とその検証――大津祭曳山『神功皇后山』からくり岩の事例から」文化財保存修復学会 第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月16日 「展示期間と温湿度環境が掛け軸装絹本絵画に与える影響についての検証」文化財保存修復学会 第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月16日 「生物被害の予防措置を目的とした低酸素濃度環境下での封入保管――アシ舟の事例から」文化財保存修復学会 第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年６月16日 「米原曳山祭『松翁山』の保存修復事例――地域密着型の保存体制の構築を目指して」文化財保存修復学会 第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと

2018年７月７日 「3Dスキャナーを活用した津波碑の文字情報取得についての検証――高知県地震津波碑の事例から」日本文化財科学会 第35回大会、奈良女子大学

2018年11月16日 「アジア紙のPy-GC/MSのよる繊維分析――国立民族学博物館における適用例」国際シンポジウム（日本学術振興会二国間交流事業共同研究）『アジア紙のPy-GC/MSによる繊維分析』東京藝術大学

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2018年10月10日 「保存と活用の両立を目指した民族文化財の収納方法」京都造形大学

彭　宇潔［ほう　うけつ］――プロジェクト研究員

【学歴】北京外国語大学日本語学部卒（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻５年一貫制博士課程修了（2016）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2016）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2012）**【専攻・専門】**文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究**【所属学会】**日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、英国王立人類学協会、国際民族生物学会

【主要業績】

［単著］

彭　宇潔

2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

［論文］

彭　宇潔

2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, pp.83-93. Tokyo: Springer.

2016　The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95.

【受賞歴】

2012　英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition「Runner-up 賞」

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［その他］

彭　宇潔

2018「アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民とたばこ」『月刊みんぱく』43(7)：131-133。

2018「狩猟採集民に見られる道具利用の通文化的研究――アジアとアフリカの森林地帯を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2018年度研究報告――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.43-47，文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月12日「熱帯地域の狩猟採集民にみられる道具利用の比較研究」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第５回研究大会、名古屋大学

2018年５月26日「狩猟採集民バカに見られる景観情報の共有――集団採集活動を事例に」日本アフリカ学会第55回学術大会、北海道大学

2018年７月24日 Peng, Y. 'Cutting: from Play to Work among Baka Children in Southeastern Cameroon.' 12th Conference of Hunting and Gathering Societies, University Sains Malaysia, Penang, Malaysia.

2018年７月25日 Nobayashi, A. and Y. Peng. 'Cross-Cultural Perspective of the Technology and Techniques for Hunting and Gathering from the Ethnographic Data.' 12th Conference of Hunting and Gathering Societies, University Sains Malaysia, Penang, Malaysia.

2018年７月27日 Kricheff D., M. Buenafo-Ze, Y. Musharbash, C. O'Meara, Y. Peng, G. Warren. 'Closing Plenary: What Have We Learnt?' 12th Conference of Hunting and Gathering Societies, University Sains Malaysia, Penang, Malaysia.

2018年11月17日「道具利用行動に関する定量化の試み――狩猟採集民バカの切る行動を事例に」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第６回研究大会、東京大学

2018年12月16日 'An Exploratory Quantitative Analysis of Tool Use Behaviors: In the Case of Cutting among Baka Hunter-Gatherers.' The International Workshop "Cultural History of Paleo Asia, Research Institute for Humanity and Nature", Kyoto.

◎調査活動

・海外調査

2018年７月20日～７月29日―マレーシア（第12回国際狩猟採集民研究学会（CHAGS12）への参加及び研究発表）

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善［からしま　ひろよし］――研究員

1974年生。**【学歴】**慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了（2001）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2008）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー（2008-2013）、北

海道大学スラブ研究センター非常勤研究員（2013-2014）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員（2014-2015）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員（2015-）**【学位】**博士（学術）（東京外国語大学 2011）**【専攻・専門】**日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES（International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）

【主要業績】

［論文］

辛嶋博善

2017 「家業を起業する――モンゴル牧畜社会における牧夫の自立」（特集：市場化・脱生業化時代の生業論――牧畜戦略の多様化を例に）『文化人類学』82(1)：35-49。

2016 「拡張する柔軟性――モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』81(1)：44-61。

［学位論文］

辛嶋博善

2010 「衝突する未来――ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティー県ムルン郡の牧畜社会を事例として」東京外国語大学。

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

Karashima, H.

2018 Continually Changing Pastoral Society in Modern Mongolia. *The International Symposium on International Specialization and Sustainable Utilization of Resources in Northeast Asia and the 16th Annual Meeting of the Northeast Asia Academic Network*（*NAAN by Central South University of Forestry and Technology, Kangwon National University, and University of Toyama*）pp.87-92.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年９月22日 ‘Movement of Local Products in Modern Northeast Asia.’ Regional Structure and Its Change in Northeast Asia: In Search of the Way to Coexist from the Point of View of Transborderism, National Museum of Ethnology, Osaka, Japan（人間文化研究機構基幹研究プロジェクト地域研究事業「北東アジア」主催シンポジウム『北東アジアにおける地域構造の変容』）

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年11月10日 ‘Continually Changing Pastoral Society in Modern Mongolia.’ The 16th Annual Meeting of the Northeast Asia Academic Network（NAAN）, 富山大学五福キャンパス

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治［くろだ　けんじ］――――――

究科研究員（2015-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（2016）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院 2011）**【専攻・専門】**中東地域研究、イスラーム研究**【所属学会】**宗教と社会学会、日本文化人類学会、日本中東学会、IUAES

【主要業績】

［単著］

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家――現代シーア派の実相』京都：ナカニシヤ出版。

［論文］

黒田賢治

2017 Pioneering Iranian Studies in Meiji Japan: Between Modern Academia and International Strategy. *Iranian Studies* 50(5): 651-670.

［学位論文］

黒田賢治

2011 『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究――イスラーム指導体制下の宗教と政治をめぐって』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［共著］

椿原敦子・黒田賢治

2018 『「サトコとナダ」から考えるイスラム入門――ムスリムの生活・文化・歴史』東京：星海社。

［編著］

小杉泰・黒田賢治・二ツ山達朗編

2018 『大学生・社会人のためのイスラーム講座』京都：ナカニシヤ出版。

Kuroda, K. and T. Nishio（eds.）

2019 *Research Source Guide for Museums in the Middle East: Islamic Republic of Iran*. Osaka: Center for Modern Middle Eastern Studies at the National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2018年６月13日 「コスモポリタン都市に生きるシーア派ムスリムとコミュニティ形成――「ムンバイ」におけるイラン系住人を中心に」2018年度MINDAS「社会変動と親密圏」班第１回研究会、国立民族学博物館。

2018年12月22日 「イランにおける博物館の成り立ちと2000年代以降の発展」第13回 現代中東地域研究レクチャーシリーズ／現代中東地域研究国立民族学博物館拠点「文化遺産とミュージアム」研究班研究会、国立民族学博物館。

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年11月18日 「聖地の物質性――現代イランにおける工芸と「伝統」に関する研究」第10回日本・イラク学術合同会議『日本とイラクの教育制度――比較の視座から』、早稲田大学。

2019年３月31日 「再発見／消費される伝統と手工芸産業の展開――みんぱく『グラック・コレクション』の追跡調査を手がかりに」2018年度第38回イラン研究会、東京外国語大学。

・研究講演

2019年３月10日 ‘Introduction to MINPAKU and the Center for Modern Middle East Studies.’ International Symposium “Perspective on Material Culture and Middle Eastern Turn”, National Museum of Iran, Tehran, Iran

2019年３月10日 ‘Farhag va Motale’at khavar Miyane Modern.’ Islamic Azad University, Tehran Campus, Tehran, Iran

◎調査活動

・海外調査

2018年12月26日～2019年１月14日―イラン・イスラーム共和国（テヘラン市にて科研研究課題についての調査）

2019年３月８日～３月16日―イラン・イスラーム共和国、アラブ首長国連邦（フォーラム型データベースプロジェクト〔代表：西尾哲夫〕にかかるテヘラン市での国際シンポジウムの開催ならびにシャルジャ首長国における片倉コレクションの調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究）「現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

竹村嘉晃［たけむら　よしあき］――研究員

【学歴】日本大学芸術学部演劇学科卒（1995）、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了（2001）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2012）**【職歴】**独立行政法人日本学術振興会特別研究員（DC2）（2005）、大阪大学国際企画推進本部特任研究員（2008）、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師（2009-2013）、国立民族学博物館外来研究員（2010-2014）、奈良大学社会学部非常勤講師（2011-2012）、国立民族学博物館共同研究員（2011-2014）、関西大学文学部非常勤講師（2012-）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学大学院 2012）、修士（人間科学）（大阪大学大学院 2003）、修士（音楽学）（沖縄県立芸術大学大学院 2001）**【専攻・専門】**芸能人類学、南アジア地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族藝術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

【主要業績】

［単著］

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界――南インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：風響社。

［論文］

竹村嘉晃

2015 「踊る現代インド――グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」三尾　稔・杉本良男編『現代インド６　環流するインドの文化と宗教』pp.159-179, 東京：東京大学出版会。

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者――「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250, 東京：明石書店。

田中鉄也［たなか　てつや］――研究員

1979年生。**【学歴】**関西大学文学部哲学科卒業（2004）、関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（2006）、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了（2014）**【職歴】**関西大学マイノリティ研究センターリサーチアシスタント（2009-2010, 2012-2013）、日本学術振興会特別研究員（DC）（2013-2014）、日本学術振興会（PD）（2014-2016）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー（2016-2017）、日本学術振興会海外特別研究員（2017-2018）、デリー大学社会学科臨時研究員（2017-2018）、ロンドン大学東洋アフリカ研究所客員研究員（2018）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教（2018-）**【専攻・専門】**博士（文学）（関西大学大学院 2014）

【主要業績】

［単著］

田中鉄也

2014 『インド人ビジネスマンとヒンドゥー寺院運営――マールワーリーにとっての慈善・喜捨・実利』東京：風響社。

［論文］

田中鉄也

2016 The State and the Transformation of Religion: Marwari Merchants and Hindu Temple Management. *FINDAS Research Paper* 4: 1–33.

2015 「現代インドにおける『公益の仕事』としてのヒンドゥー寺院運営――マールワーリー商人にとってのラーニー・サティー寺院」『南アジア研究』27：46–67。

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

田中鉄也

2018 「コミュニティの実体化と女神巡行――インド・カルカッタのカースト団体を事例に」『宗教と社会』24：33–47。

［その他］

田中鉄也

2019 「ベンガルのラスグッラー」『月刊みんぱく』43(3)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年４月８日 「現代インドのマールワーリー企業家による家族祭礼――故郷への社会貢献とコミュニティの実体化」、日本南アジア学会30周年記念連続シンポジウム第１回、神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ。

2018年７月26日 ‘Family Matters: Marwari Family Festivals in the Homeland of Rajasthan.’ National Seminar on Third Gender, Concubines and Slave, Mahila PG Mahavidyalaya, India

2019年２月17日 「受託者・国家・ステークホルダー――ラージャスターン州のヒンドゥー寺院を事例に」2018年度 MINDAS 第１回「宗教」班研究会、国立民族学博物館。

2019年３月８日 「故郷と家族を描き出す――マールワーリー企業家による族譜編纂と家族祭礼」2018年第３回 RINDAS 研究会、龍谷大学深草キャンパス。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

菅野美佐子［かんの　みさこ］――研究員

【学歴】総合研究大学院大学博士後期課程修了（2007）**【職歴】**国立民族学博物館外来研究員（2007–2010）、日本学術振興会・特別研究員（RPD）（2010–2013）、青山学院女子短期大学・非常勤講師（2012–2016）、東京福祉大学講師（2016–2017）、総合人間文化研究推進センター研究員・国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教（2017）**【専攻・専門】**文化人類学、南アジア地域研究、ジェンダー

【主要業績】

［論文］

Kanno, M.

2017 Dynamics of Working Housewives in Contemporary Rural Uttar Pradesh. In T. Awaya and M. Muzuki（eds.）*Women's Work in South Asia in the Age of Neo-Liberalism*, pp.9–23. Tokyo: The

Center for South Asian Studies and Tokyo University of Foreign Studies.

菅野美佐子

2017 「親密圏と公共圏のはざまにある仕事――北インド農村の女性の暮らしと福祉事業」『多民族社会における宗教と文化』20：3-15.

【2018年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

粟屋利江・菅野美佐子

2018 「政治と開発」粟屋利江・井上貴子編『南アジアジェンダーハンドブック』pp.13-31，東京：東京外国語大学出版会。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2018年３月 'Negotiating with destiny: Rural development and women's agency in neo-liberal India.' ICSSR—JSPS Seminar "Everyday Lives of Gender and Religious Aspect", Delhi, India.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年７月 'Rethinking Generational Differences: Women's Social Participation in Contemporary Rural India.' The 25th European Conference on South Asian Studies, Paris, France

客員教員

■人類基礎理論研究部

宇陀則彦［うだ　のりひこ］――教授

【学歴】図書館情報大学図書館情報学部卒（1989）、図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了（1991）、筑波大学大学院博士後期課程工学研究科修了（1994）**【職歴】**図書館情報大学図書館情報学部助手（1994）、図書館情報大学総合情報処理センター講師（1999）、図書館情報大学図書館情報学部助教授（2001）、筑波大学図書館情報学系助教授（2002）、筑波大学図書館情報メディア系准教授（2011）**【学位】**博士（工学）（筑波大学 1994）**【専攻・専門】**図書館情報学・知識情報学**【所属学会】**情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

［共著］

宇陀則彦

2017 「世界の知識に到達するシステム」逸村　裕・田窪直規・原田隆史編『図書館情報学を学ぶ人のために』pp.214-224，京都：世界思想社。

［論文］

森　彩乃・松村　敦・宇陀則彦

2019 「分類動作を取り入れたウェブ検索支援システムの構築」『情報処理学会第81回全国大会講演論文集』pp.419-420，東京：情報処理学会。

Uda, N., C. Mizoue, S. Donkai and S. Ishimura

2018 Information Seeking Behaviors of Older Adults in a Public Library in Japan. LIBRES 28(1): 1-12.

【受賞歴】

2007 情報知識学会論文賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の人文社会情報学的研究――高度情報化とデータベースの連携

・研究の目的、内容

昨年度に引き続き、ドキュメント中心に展示を行う新しい展示手法「ドキュメント展示」について検討する。ここでいうドキュメントとは、図書、雑誌、ポスター、パンフレット、図録、データベース等、知識が記述されたもの全般を指す。ドキュメント展示の手法を確立するために、展示として成立するドキュメントのタイプの特定、博物館資料との組み合わせ方法、展示空間における配列方法、モノの展示とデジタル展示の選択等、多面的に検討する。今年度はスマートグラスを用いたAR（Augmented Reality：拡張現実）技術の応用についても検討する。

・成果

今年度はARを用いてドキュメントに情報を付与する方法と効果について検討を行った。ARはビジョンベース型とロケーションベース型に大別され、ビジョンベース型はさらにマーカー型とマーカーレス型に分けられる。本研究ではマーカー型を採用し、図書の表紙画像をマーカーとして認識させ、図書に関する情報を追加した。スマートホンを図書にかざすと、図書に関する情報が画面に表示される。展示として考えた場合、展示物である図書に確実にスマートホンをかざす必要があり、移動しながら鑑賞するにはやや難があった。そこで、スマートホンではなく、スマートグラスを用いた応用の可能性を検討したところ、移動の問題は解消されそうであるが、顔とのフィット具合が課題となることが明らかになった。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

原　大介［はら　だいすけ］――教授

1965年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部卒業（1989）、国際基督教大学大学院教育学研究科修了（1991）、シカゴ大学大学院言語学科修了（2003）**【職歴】**愛知医科大学看護学部専任講師（2000）、愛知医科大学看護学部助教授（2004）、愛知医科大学看護学部教授（2007）、豊田工業大学工学部教授（2010）**【学位】**博士（言語学）（シカゴ大学大学院、2003）**【専攻・専門】**音韻論、形態論、手話言語学**【所属学会】**日本言語学会、日本手話学会、電子情報通信学会

【主要業績】

［論文］

Hara, D.

2016　An Information-based Approach to the Syllable Formation of Japanese Sign Language. In M. Minami (ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457–482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原　大介

2010　「手話言語研究はどうあるべきか――捨象と抽象」『手話学研究』19：29–41。

2009　「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域II』（シリーズ朝倉「言語の可能性」2），pp.72–98，東京：朝倉書店。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話では、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の３つのカテゴリに属する要素と「掌の向き」、「指先の方向」、「利き手の接触」等も音節構成要素として関与している。各カテゴリにはそれぞれ有限個の要素が存在するが、カテゴリ間の要素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不適格な音節と判定される。本研究では、どのような要素結合が適格な日本手話音節形成を可能にし、どのような要素結合が日本手話音節の不適格性の原因となるのかを明らかにすることを目的とする。目的達成のため、適格音節・不適格音節のそ

れぞれを収録したデータベース（以下DB）を作成した。適格音節DBは、全日本聾唖連盟出版局の「日本語・手話辞典」に収録されている語を利用した。（掲載されている語を構成する音節の適格性に関しては事前に日本手話母語話者（以下、ろう者）に確認し、不適格と判断されたものは排除した。）「日本語・手話辞典」では、語を基本単位として手話が収録されているため、初めにすべての語を音節に分解し、次にそれらの音節を最大約40個の音節構成要素に分解し、最終的に音節を音節構成要素の束（＝記号列）として記述した。不適格音節は一般的な言語使用状況では使われないため、特定の単語集（全日本ろうあ連盟が出版する「新しい手話」シリーズ：これらは不適格音節を一定割合で含むことが知られている）に掲載された手話語を音節に分解し、各音節をろう者の協力を得て動画撮影し、その動画を約20名のろう者に提示し、各音節の適格性の判定を行った。その結果、ろう者の過半数が不適格と判定した音節を本研究で扱う不適格音節と定めた。これらの不適格音節は、適格音節と同様の方法によって、音節構成要素の記号の列としてDBに記録した。2018年度の研究開始時点において、適格音節DBに約2500個、不適格音節DBに約600個の音節がそれぞれ登録された。2018年度は(1) 両DBの精緻化・拡充化作業、(2) 両DBを利用した音素配列論の検討、(3) 音節適格性条件検討を支援するための機械学習を行った。(1)では、過去に不適格音節判定に携わったろう者に、上記で作成した動画を再度提示し、あらためて各音節の適格性判定を行った。また、前回の適格性判定に携わっていないろう者複数名に対しても、動画に収録された音節の適格性判定を依頼した。これらの判定結果は、翌年度以降、不適格音節の不適格性の精度を高めるに利用する。また、上記の動画とは別に、新たに約150個の音節動画を複数のろう者に提示し、各音節の不適格性判定を行った。翌年度以降、新たに不適格と判定された音節を不適格音節DBに登録しDBを拡充する。(2)では、不適格音節DBに記録されている音節を観察・検討し、不適格性の原因とる可能性が高い音節構成要素の結合を抽出し、それらを適格音節DBに登録された音節の要素結合とクロスチェックすることで、不適格音節の直接的な原因となる要素結合を複数特定した。(3)では、畳み込みニューラルネットワーク（Convolutional Neural Network: CNN）を行い、人による観察では気づきにくい不適格性に関与する要素結合を発見するための補助手段として活用した。

・成果

上記(2)および(3)の作業を通して、現在までに、タイプ３と呼ばれる音節に関して音節構成要素の要素結合制約が複数発見された。タイプ３音節とは、両手の手型が異なり、利き手は動き、非利き手は静止しているタイプの音節であり、日本手話音節の中では、関与する音節構成要素が一番多いタイプである。不適格音節DBを用いてタイプ３音節の位置要素を調べた結果、左右の手の位置が異なる音節（例えば、利き手位置が頭、非利き手位置が胸など）は不適格音節と判定されることが分かった。これらの不適格性をもたらす要素結合を適格音節DBに記録されている音節の要素結合とクロスチェックした結果、僅かながら左右の手の位置が異なっていても適格音節と判定される音節が存在することが分かったが、それらはすべて複数の形態素を含むか、対象物を模倣する身振りから派生した音節であることが分かった（以下、複数形態素・模倣系音節）。タイプ３音節は、両手が同一の位置にある場合でも、その位置が顎より上位の場合は不適格音節となることが分かった（たとえば、両手がこめかみの位置にある音節など）。ただし、複数形態素・模倣系音節はこの制約は免れていた。さらに、タイプ３音節の左右の手が顎より下の位置、すなわち、胴体（TK）またはNS（ニュートラル・スペース）にある場合、前者では適格音節を形成するためには左右の手がお互いに接触することが義務的であり、両手接触が伴わない場合、不適格となることが分かった。両手がNSにある場合は、両手接触は随意的であった。以上をまとめると以下のように表すことができる。

１．２つ（またはそれ以上）の異なった位置を持つタイプ３音節は不適格

２．顎よりも高い位置を持つタイプ３音節は不適格

３．両手がお互いに接触しない胴体位置のタイプ３音節は不適格

注：上記１～３に従わないタイプ３音節は、複数形態素・模倣系音節である。

上記１～３の制約は、左右の手の位置や接触等の複数の構成要素が相互に作用し音節適格性に関与していることを示している。これら以外にも、４～６に示したようなタイプ３音節にかかわる制約も見つかっている。

４．利き手ｏ手型、非利き手１手型の組み合わせは不適格

５．３つの異なる動き要素の組み合わせ（＝超重音節）は不適格

６．利き手ａ手型、非利き手１手型の組み合わせは不適格

上記の研究成果（またはその一部）は、以下の研究費助成を受けている。

１．文部科学省科学研究費（基盤研究（B））2018年度～2021年度（予定）「音節構成要素の組み合わせに基づいた日本手話音節の適格性について」（課題番号：18H00671：研究代表者：原大介）

２．公益財団法人三菱財団　平成29年度助成金人文科学研究　2017年10月～2018年９月「日本手話音節の適

格性の解明――言語学・機械学習からのアプローチ」研究代表者：原大介

3. 文部科学省科研費（基盤研究（S））2017年度～2021年度（予定）「多用途型日本手話言語データベース構築に関する研究」（課題番号17H06114：研究代表者　工学院大学・長嶋祐二教授）

4. 文部科学省科研費（基盤研究（C））2017年度～2019年度「日本手話における文末指さしの指示対象に関する統語研究」（課題番号17K02691：研究代表者　日本大学・内堀朝子教授）

5. 文部科学省科研費（基盤研究（B））2016年度～2018年度「学術手話通訳養成システムの開発――認知・言語的アセスメントに基づいたアプローチ」（課題番号16H03813：研究代表者　大阪大学・中野聡子講師）

6. 文部科学省科研費（挑戦的萌芽研究）2015年度～2018年度「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて」（課題番号16K13229：研究代表者　国立民族学博物館・相良啓子特任助教）

◎出版物による業績

［論文］

長嶋祐二・原　大介・堀内靖雄・酒向慎司・渡辺桂子・菊澤律子・加藤直人・市川　熹

2018「多様な研究分野に利用可能な超高精細・高精度手話言語データベースの開発」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3：148-155。［査読有］

原　大介・米田拓真・中野聡子

2018「手話通訳者は日本手話音節の不適格性をどの程度認識できるか」『日本通訳翻訳学会第19回年次大会　JAITS 2018』pp.26，東京：日本通訳翻訳学会。［査読有］

長嶋祐二・酒向慎司・渡辺桂子・原　大介・堀内靖雄・市川　熹

2018「手話の語彙構造・文法解明に供する 3D 超高精度 DB の開発」『日本音響学会2018秋季研究発表会予稿集』pp.1471-1473，東京：日本音響学会。

2019「日本手話の多用途・3 次元高精度データベースの開発」『電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report：信学技報』118(440)：71-75。

原　大介・中野聡子・米田拓真

2018「日本手話通訳者は日本手話の不適格音節を正しく判定することができるか」『日本手話学会第44回大会予稿集』pp.6-7，東京：日本手話学会。［査読有］

2018「日本手話学習者・日本手話通訳者による日本手話音節の（不）適格性判定能力について」『HCG シンポジウム2018論文集』p.HCG2018-C-1-6，東京：電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーショングループ。

高藤朋史・三輪　誠・佐々木裕・原　大介

2019「深層学習を用いた日本手話音節の適格性解析」『言語処理学会第25回年次大会発表論文集』pp.486-489，京都：言語処理学会。

中野聡子・後藤　睦・原　大介・金澤貴之・細井裕子・川鶴和子・楠　敬太・望月直人

2019「学術手話通訳における原語借用の分析」『通訳翻訳研究への招待』20：141-158。

Nagashima, Y., D. Hara, S. Sako, K. Watanabe, Y. Horiuchi, R. Kikusawa, N. Kato and A. Ichikawa

2018 Constructing a Japanese Sign Language Multi-Dimensional Database. *The 7th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics* (*SSLL2018*), pp.1-2. Osaka: National Museum of Ethnology. ［査読有］

Hara, D. and M. Miwa

2018 What makes syllables well-formed or ill-formed in Japanese Sign Language. *The 13th High Desert Linguistics Society Conference* (*HDLS13*), pp.49-50. New Mexico: University of New Mexico. ［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年 6 月17日　原大介・三輪誠「コーパスを通してみる日本手話音節の（不）適格性」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）時限研究専門委員会第11回研究会、霧島国際ホテル

2018年12月 9 日　Hara, D. ‘A Remark on the Well-formedness of Syllables in Japanese Sign Language.’ Evolinguistics Meets Signed Language Symposium, Nihon University, Tokyo

2018年12月28日　原大介「日本手話の音節の適格性」Tossl 東京手話言語学研究会、東京女子大学

・広報・社会連携活動

2018年７月１日　「講座１　手話言語学の始まり１（二重分節性、音素の抽出）」「講座２　手話言語学の始まり２（手話言語の音素と異音）」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんぱくで手話言語学を学ぼう！」』国立民族博物館

2018年７月８日　「講座３　手話言語の音素とその組み合わせ（音素配列論）」「講座４　手話言語の形態素とその組み合わせ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんぱくで手話言語学を学ぼう！」』国立民族博物館

2018年７月15日　「講座９　手話言語の動詞の種類とその成り立ち」「講座10　手話言語の文のつくり＆まとめ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんぱくで手話言語学を学ぼう！」』国立民族博物館

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

大阪大学文学研究科「国語学講義　手話の世界と世界の手話言語☆入門」、関西学院大学「手話言語学基礎」岐阜聖徳学園大学「日本手話」（集中講義）、手話教師センター「日本手話の音節」

特別客員教員

■人類基礎理論研究部

高野明彦［たかの　あきひこ］―――― 教授

1956年生**【学歴】**東京大学理学部教学科卒（1980）**【職歴】**㈱日立製作所入社（1980）、東京大学大学院理学系研究科非常勤講師（1996）、国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授（2001）、東京大学大学院情報理工学系研究科教授（2002-）、国立情報学研究所情報学資源研究センター長（2005）、特定非営利活動法人連想出版理事長（2005-）、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授（2006-）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター長（2006-2013）、立命館大学アートリサーチセンター客員教授（2012-2016）、㈱出版デジタル機構最高技術顧問（2012-2014）、（一社）タイムマップ理事（2015-）**【学位】**博士（理学）（東京大学大学院理学系研究科2000）**【専攻・専門】**連想情報学、関数プログラミング、プログラム変換**【所属学会】**ACM、デジタルアーカイブ学会、日本ソフトウエア科学会、情報処理学会、言語処理学会

【主要業績】

［監修・共著］

高野明彦監修

2015　『検索の新地平』（角川インターネット講座第８巻）東京：KADOKAWA。

高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也

2012　『311情報学――メディアは何をどう伝えたか』東京：岩波書店。

高野明彦・太田光・田中裕二

2008　『検索エンジンは脳の夢を見る――連想情報学』東京：講談社。

【受賞歴】

2013　岩瀬弥助記念書物文化賞「デジタル技術による書物文化の開発」

2011　科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）「連想情報技術による自発的学びのための情報理解増進」

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フォーラム型情報ミュージアムにおける情報の統合と発信に関する研究

・研究の目的、内容

フォーラム型情報ミュージアムの実現へ向けて、収蔵資料に関する情報を研究者からだけでなく、他のミュージアムやソースコミュニティからも収集して、多様な視点からの分析を可能にする情報システムが備えるべき基本機能について検討する。

・成果

「地域研究画像デジタルライブラリ」のプラットホーム提供を題材に、研究コミュニティにとって有意義で持続性のあるデジタルライブラリの構築・活用のために、どのようなメタデータやタグデータの整備が有効であるかについて検討した。

具体的には、DiPLAS プロジェクトを通じてデジタル化を進めているデジタル画像データを対象に、各研究者や研究コミュニティにとって、研究者自らがメタデータを付与しやすい環境を構築し、さらに画像内容を分析して付与すべきタグを自動生成する AI 機能の有効性について検討した。試作中のメタデータ編集支援システムを画像データ提供者に提供して、メタデータ編集環境の使い勝手や自動付与タグの妥当性についてフィードバックをもらった。

◎出版物による業績

［論文］

高野明彦

2018 「図書館、未来の書棚、連想」特集「図書館の未来」『現代思想』46(18)：159-171。

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年５月31日 「QUESTIONING（疑問を生んでいく）とは何か」第11回ホロス2050未来会議、御茶ノ水デジタルハリウッド大学

2018年６月13日 「パネル討論：出版における AI 活用の現状と AI がもたらす未来」電子出版制作流通協議会研究会、JCII ビル

2018年６月30日 「文化資源のつなぎ方――デジタルアーカイブの可能性」清泉女学院大学人間学部講演会『岐路に立つ長野の文化資源』長野市生涯学習センター TOiGO

2018年８月２日 「本の文化を記憶する。神保町アーカイブは可能か？ 仲俣暁生×高野明彦」神保町トークライブ、神保町ブックセンター

2018年８月31日 「自発的な学びを育む知の結節点としての大学図書館」第79回私立大学図書館協会総会・研究大会、龍谷大学

2018年９月７日 「日本で生まれた連想検索」松岡正剛企画・縁座4-4

2018年10月19日 「デジタルアーカイブ社会の実現に何が必要か？」2018年度国立大学図書館協会シンポジウム、神戸大学百年記念館（神大会館）六甲ホール

2018年10月31日 「海外の画像活用の現状（Europeana、IIIF、さらにデジタルアーカイブジャパンについて）」Art Museum Annuale、パシフィコ横浜ホール D

2019年１月12日 「検索から連想へ――あなたは検索に操られていませんか？」都立戸山高等学校 情報学講演会、都立戸山高等学校

2019年２月５日 ‘How to Bridge the Isolated Silos of Knowledge Using Associative Search?’ Workshop on Digital Catalogues. Towards Interoperability, ENS, Paris, France

2019年２月８日 ‘From Search to Association.’ LIRIS Seminar, Lyon, France

2019年２月22日 「デジタルアーカイブ利用技術とフェイクニュース」文字情報技術促進協議会年次特別講演会、品川フロントビル会議室

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「脚本クロニクル」サイト構築とその教育活用および国際発信」（研究代表者：藤田真文（法政大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「プレ－ポストオリンピック期東京における世界創造都市の積層と接続に関する比較社会学」（研究代表者：吉見俊哉（東京大学）研究分担者、NII 受託研究（国立映画アーカイブ）「歴史的映像資料のデジタル発信に関する研究」研究代表者、NII 受託研究（国立美術館）「“想―IMAGINE” による国立美術館４館横断検索サービスの研究」研究代表者、NII 共同研究（日本科学協会）「生命科学テキスト利用環境の研究」

研究代表者、NII共同研究（NHK放送文化研究所）「放送文化アーカイブ」の構築に関わる研究」研究代表者、NII共同研究（角川文化振興財団）「複合型ミュージアムサービスのための情報融合技術の研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

内閣府知的財産戦略本部 デジタルアーカイブジャパン実務者検討委員会座長、著作権情報センター 書籍検索サービスに係るガイドライン調査委員会委員、国立文化財機構文化財防災ネットワーク有識者会議委員、立命館大学アートリサーチセンター運営委員、電子出版制作・流通協議会特別会員、デジタルアーカイブ学会理事、技術部会長、論文誌編集委員、デジタルアーカイブ学会第2回研究大会委員長、第一学習社『情報』教科書編集委員、日本科学財団『人間の生命科学』編集委員、東京文化資源会議 幹事

下道基行［したみち　もとゆき］―― 准教授

【学歴】武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業（2001）、東京綜合写真専門学校研究科（2003）**【職歴】**テレビ番組制作リサーチ会社オフィスHIT（2001-2007）、美術研究所アトリエフラン裸婦絵画コース／陶芸コース講師（2001-2005）、東北芸術東北芸術工科大学ゲスト講師（2012-2016）**【学位】**学士**【専攻・専門】**写真映像、平面表現、現代美術

【受賞歴】

2015年　さがみはら写真新人奨励賞
2014年　第1回鉄犬ヘテロトピア文学賞
2013年　第6回岡山県新進美術家育成『I氏賞』大賞
2012年　韓国・光州ビエンナーレ2012 NOON芸術賞（新人賞）

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究

・研究の目的、内容

写真家／美術家の視点から、国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵する写真や動画資料の創造的な活用法やアーカイブのありかたについて、民博に所属する研究者との議論をベースに考案し、提案を行う。

　また近年、アートと人類学の協働による人文学の新地平の開拓がさけばれるが、人類学における、非言語メディアを用いた研究とアートのフィールドワークのあり方を比較検討し、互いの方法論の援用についての可能性を探る。

・成果

2018年度の成果のひとつに、雑誌、美術手帖6月号における、『アートと人類学』特集が挙げられる。報告者は、民博の川瀬慈准教授とともに、本特集の企画、構成の考案に関わった。本特集では、アートと人類学の方法論の類似点や差異、さらには協働の可能性について、民博の資料の保管に関わる個人的な調査、さらには川瀬と共同で行ってきた研究に立脚し報告した。また、2018年12月に開催された京都人類学研究会シンポジウム『人類学とアートの協働』において、民博・川瀬、さらに秋田公立美術大学の石倉敏明准教授等との議論を通して、第58回ヴェネツィアビエンナーレ国際美術展（2019年5月－11月に開催）において、自身が、人類学的な知のありかたをどのように咀嚼し、展示企画を構想していくかを報告した。

辻　邦浩［つじ　くにひろ］―― 教授

1965年生**【学歴】**京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了（1994）**【職歴】**Kunihiro Tsuji Design代表（1996-現在）、未来社会をデザインする会（2025年万国博を考える会）代表（2018-現在）、東京大学空間情報科学研究センター協力研究員（2018-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2018-現在）**【学位】**博士（理学）**【専攻・専門】**サービスデザイン、音響空間デザイン、環境デザイン、デザイン人類学**【所属学会】**ヒューマンインターフェイス学会

【主要業績】

辻　邦浩

2010　上海万博大阪館（Water Speaker 展示）

2008　スペイン・サラゴサ万博日本政府館（音響デザイン・Water Speaker 展示）

2007　ミラノサローネ　Water Speaker 個展

2006　ミラノサローネ　MODAL Speaker 個展

2002　フランス・ビエンナーレ「Biennale Internationale Design Saint-Etienne」（日本代表選出）

【受賞歴】

2016　ヒューマンインターフェイス学会研究会賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

次世代型展示案内システムの構築

・研究の目的、内容

現状の電子ガイドシステム及びビデオテークを全面改訂するための、次世代型展示案内システムの構築。現状の問題点を改善し、加えて「博情館」概念をより実現するために、最先端技術を用いて来館者視点からの多様なニーズ（常設展示物及びその背景をより能動的に深く知ることや、各地域展示間の関連づけ、観覧履歴の取得によるビデオテークゾーンとの関連づけ、多言語化、シームレスな障害者誘導など）に対応できるコンテンツデザインを行い、みんぱく内 WG にてインターフェース仕様を策定する。

コンテンツとの有効なインタラクションを実現するための、基本要素技術を選定、検証しそれらの技術統合した仕様を策定する。

・成果

4月～7月　次世代電子ガイドサービスの仕様検討するために前年度に検証実験をした基礎要素技術を再検証しサービス実現のための統合検討を行った。加えてビデオテーク仕様検討を始めた。

8月　合検討の結果、次世代電子ガイドのサービス全体の仕様決定を行いその仕様を実検証するためのプロトタイプ仕様決定を行った。

8月～12月　次世代電子ガイドプロトタイプ設計を行うと同時に、ビデオテーク仕様決定も決定した。

1月～3月　完成したプロトタイプ実験及び検証を行った。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

武居　渡［たけい　わたる］――教授

1971年生【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒業（1994）、筑波大学大学院心身障害学研究科中途退学（1999）【職歴】金沢大学教育学部講師（1999）、金沢大学教育学部助教授（2002）、金沢大学教育学部准教授（2007）、金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授（2008）、金沢大学人間社会研究域学校教育系（2014-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2017-現在）【学位】博士（心身障害学）（筑波大学2004年）【専攻・専門】発達心理学・聴覚障害心理学【所属学会】日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本手話学会、日本コミュニケーション障害学会、日本聴覚言語障害学会

【主要業績】

武居　渡

2016「聴覚障害児教育をめぐる環境の変化とろう学校の課題（特集 特別支援学校における現状と教育要求）」『障害者問題研究』44(1)：26-31。

2012「言語を作り出す力――ホームサイン研究・手話研究を通じて見えてくるもの」『ENERGEIA』37：1-15。

2008「手話研究の現状と展望――手話研究が言語獲得研究に貢献できること」『認知科学』15(2)：289-301。

【受賞歴】

2010　博報児童教育振興会第４回ことばと教育　研究助成事業　優秀賞

2002　日本発達心理学会第11回論文賞

2001　日本特殊教育学会研究奨励賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

高等教育機関・学術機関における学術手話通訳者養成のしくみの研究

・研究の目的、内容

本研究は、学会や大学の講義など高度な専門的知識を日本語から手話、または手話から日本語へと通訳できる手話通訳者の養成プログラムを開発し、実施することを通してそのプログラムの妥当性を検証するものである。その中でも、通訳者の手話能力を客観的に測定するテストは現在我が国に存在していない。そこで、今年度は、学術手話通訳者養成のスクリーニングや手話学習者の手話能力を客観的に測定できる方法を開発するための基礎資料を得ることを目的とし、手話評価法の開発を行った。

・成果

2018年度に行った研究の概要は以下の通りである。

第一に、様々な文法事項を含んだ日本手話文を被験者に即時模倣させ、どの程度再現されており、どのような誤りがみられるかについて分析することで、被験者の手話能力を評価できることを明らかにした。その際、刺激文のどこを評価するのかをチェックリスト形式にしていくことでより使いやすい評価法になると考えられる。

第二に、音声言語で用いられているWFT（Word Fluency Test）を改変し、手話語彙力を簡潔に評価できる評価法を開発した。具体的には、意味流暢性課題と音韻流暢性課題をそれぞれ３問ずつ作成した。意味流暢性課題とは、「スポーツの名前を１分間でできるだけたくさん挙げてください」のような課題を３問課し、何語表出できたかによって得点化するものである。音韻流暢性課題とは、「両手の手の形が異なる手話単語を１分間でできるだけたくさん挙げてください」のように、手型や運動など手話単語を構成する要素に着目させ、単語を想起させる課題であり、音韻流暢性課題についても３課題用意し、何語表出できたかについて得点化する。これらの合計から、手話の語彙力を測定する評価法である。今後は、手話版WFTを実際にネイティブサイナーに実施し、標準値を得たうえで、手話学習者に実施して、手話語彙力を測定できる尺度になりうるかどうかについて検討していくことが課題である。

本研究では、科学研究費基盤研究（C）聴覚障害児の手話力を評価する総合的アセスメントパッケージの開発（課題番号 17K04930　代表者：武居　渡）の助成を得て行われた。

◎出版物による業績

［論文］

杉本寿史・広瀬みずき・永井理紗・波多野都・瀧口哲也・武居　渡・安田健二・伊藤真人・吉崎智一

2018 「石川県における難聴児支援体制」『小児耳鼻咽喉』39(3)：327-332。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年８月11日～８月13日　夏期集中講座『みんぱくで手話通訳士を目指そう！』アドバイザー、国立民族学博物館

2018年８月19日　連続講座『みんぱくで手話言語学を学ぼう』講師、国立民族学博物館

2018年９月22日～９月24日　「聴覚障害児のオノマトペ理解――聴幼児との比較から」日本特殊教育学会第56回大会、ポスター発表、大阪国際会議場

2018年12月８日　‘Seeking the missing link between home signs and sign languages.’ Evolinguistics Meets Signed Language Symposium at Tokyo. Nihon University, Tokyo

◎調査活動

・海外調査

2019年３月７日～３月16日―スウェーデン（手話教育調査）

■グローバル現象研究部

縄田浩志［なわた　ひろし］ 教授

1968年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部史学科東洋史学専攻卒業（1992）、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所民俗学科ディプロマ課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程修了（2003）**【職歴】**鳥取大学乾燥地研究センター講師（2004）、国立民族学博物館特別客員准教授（2007）、総合地球環境学研究所客員准教授（2007）、鳥取大学乾燥地研究センター准教授（2007）、総合地球環境学研究所准教授（2008）、秋田大学教授新学部創設準備担当教授（2013）、秋田大学国際資源学部教授（2014）、秋田大学大学院国際資源学研究科教授（2016）**【学位】**博士（人間・環境学）（京都大学 2003）**【専攻・専門】**資源管理学、文化人類学、社会生態学、地域研究（中東・アフリカ）、乾燥地研究、環境影響評価、村落開発、人間・家畜関係論**【所属学会】**日本沙漠学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本中東学会、日本ナイル・エチオピア学会、国際社会・自然資源学会（The International Association for Society and Natural Resources、アメリカ）

【主要業績】

［共編著］

縄田浩志・篠田謙一

2014 『砂漠誌――人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』神奈川：東海大学出版部。

［編著］

Nawata, H.（ed.）

2015 *Human Resources and Engineering in the Post-oil Era: A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East*（Arab Subsistence Monograph Series 3). Kyoto: Shokado.

2013 *Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation*（Arab Subsistence Monograph Series 2). Kyoto: Shokado.

【受賞歴】

2015 大同生命地域研究奨励賞

2003 日本沙漠学会奨励賞

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東における自然資源の管理と物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、アラビア半島の沙漠のオアシスでおよそ半世紀前に片倉もとこ（文化人類学者／地理学者、本館名誉教授）が実施・収集した（1968-2008）現地調査資料（写真・地図・スケッチを含む）のデータベース作成による学術情報基盤形成の作業を通じたデータの再検証を軸として、中東の５つの異なるオアシス（アラビア半島、サハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、イラン）を比較検討することにより、自然資源の管理方法と物質文化の変容の動態を明らかにすることにある。

現代の土地利用、生業形態、水管理と比較しつつ、グローバル化後の生活空間の変動を具体的に追って行くことにより、特に中東地域においてドラスティックな現象として観察される生活様式や資源利用形態の「世代間ギャップ」を浮き彫りにしつつ、未来世代にとっての研究資料としての活用を地域住民との共同作業により行い、文化資源と知識資源の共有が可能となる。

なお、現地調査と共同研究、また研究成果の発信に関しては、以下の関連プロジェクトと連携しながら推進する。

(1)人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」（国立民族学博物館中心拠点代表者：西尾哲夫、秋田大学国際資源学部拠点研究代表者：縄田浩志、2016～2021（予定））

(2)科学研究費助成事業基盤研究（B）（海外学術調査）「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」（研究代表者：縄田浩志、2016～2019（予定））

(3)片倉もとこ記念沙漠文化財団「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金」(評議委員会議長：片倉邦雄、2015～2019)
(4)国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」(申請者：縄田浩志、2016～2019(予定))
(5)【今年度継続申請検討中】新学術領域研究（研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(課題番号16H06281、中核機関：国立民族学博物館）の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ（略称DiPLAS)」
(6)国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」(代表者：西尾哲夫、2017～2018年（予定))

・成果

①2019年度における国立民族学博物館企画展ならびに巡回展（片倉もとこ記念沙漠文化財団と横浜ユーラシア文化館の共催。海外巡回展はアラムコの協力事業）を通じた研究成果の発信に向けて、テーマと中心的な展示品について最終的に定めた。②片倉もとこ記念沙漠文化財団所蔵資料のデータベースと、民博の片倉もとこ収集資料データベースと統合しつつ、サウジアラビアの現地社会や海外研究者との情報共有化を図り、上記企画展のためのキャプションを日本語・英語・アラビア語でまとめた。③「地域研究画像デジタルライブラリ（略称 DiPLAS)」を通じてデジタル化を行った片倉もとこ中東関連写真資料の公表に際して、地域文化とイスラーム社会の関連からの具体的な課題をサウジアラビア現地にて関係者と検討した結果、最終的には写真一枚一枚について被写体本人もしくはその家族から利用許諾の承諾書にサインをもらう方法を採用することとした。④アラビア半島サウジアラビアのワーディ・ファーティマ・オアシスにおける現地調査に基づき景観と物質文化の変容の分析を進め、企画展の研究解説書『サウジアラビア、オアシスに生きる女性の50年』(2019年６月出版予定、河出書房新社）の編集・執筆を行った。

◎出版物による業績

［論文］

縄田浩志

2018 「スーダンの侵略的外来植物メスキートの生理と生態」(依田清胤・齊藤忠臣・辻　渉・安田　裕との共著)『日本緑化工学会誌』43(4)：586-589。［査読有］

Nawata, H.

2019 Teleconnection of Rainfall Time Series in the Central Nile Basin with Sea Surface Temperature. (Yasuda, H., S.N. Panda, Mohamed A.M. Abd Elbasit, T. Kawai, T. Elgamri, A.A. Fentaとの共著) *Paddy and Water Environment* 16(4): 805-821.［査読有］

［その他］

縄田浩志

2018 「認識人類学 ハロルド・コリヤー・コンクリン」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学――人物・古典・名著からの誘い』pp.99-105, 京都：ミネルヴァ書房。

2018 「認識人類学コラム 福井勝義」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学――人物・古典・名著からの誘い』pp.106-107, 京都：ミネルヴァ書房。

2018 「コーヒー文化から、移動戦略を浮き彫りにする」『民博通信』161：22-23。

2018 「アラビア半島オアシス生活の半世紀――片倉もとこ「アラブ社会」コレクション」特集「デジタルライブラリ DiPLAS」『月刊みんぱく』42(8)：7-8。

2019 「ワーディ・ファーティマで本格的に再調査――国を豊にする“文化”資源の可能性」『季刊アラブ』166：23-24。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年５月19日 「アラビア半島オアシス生活の半世紀――現地社会への成果還元に向けて」地域研究画像デジタルライブラリ「デジタル写真データベースが拓く学術活動の未来――蓄積された学術資料をいかに活用するのか」一橋大学一橋講堂

・共同研究会

2018年８月７日 「ワーディ・ファーティマで撮影された半世紀前の写真からわかること」『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』

2018年10月１日 「“見られる女”より“見る女”――サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」(郡司みさお、藤本悠子との共同発表)『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦

略に関する比較研究』

2019年２月22日　「コーヒー文化の起源・伝播・拡散――適応への人文学的アプローチ」『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』と人間文化研究機構「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点・秋田大学拠点シンポジウム沙漠への適応と生活世界の形成――文理共創的視点から考える現代中東地域研究」との共催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年４月22日　「紅海沿岸における黒サンゴ採取の現状と課題――エジプト、サウディ・アラビア、スーダンの事例から」第27回日本ナイル・エチオピア学会学術大会、東京外国語大学

2018年５月３日　‘Archives of the Motoko Katakura Middle East Collections.’ Special Lecture, Social Development Center, Jumum, Kingdom of Saudi Arabia

2018年５月７日　‘Archives of the Motoko Katakura Middle East Collections.’ Special Lecture, King Abdelaziz Center for World Culture（Ithra), Dhahran, Kingdom of Saudi Arabia

2018年５月８日　‘Archives of the Motoko Katakura Middle East Collections.’ Special Lecture, King Faisal Center for Research and Islamic Studies, Riyadh, Kingdom of Saudi Arabia

2018年５月13日　「サウディ・アラビア紅海沿岸ジッダで販売される黒サンゴ製の数珠について」日本中東学会第34回年次大会、上智大学

2018年５月27日　「衛星画像と地図資料の比較によるサハラ・オアシスにおける半世紀の景観変化」（渡邊三津子、石山俊、遠藤仁との共同発表）日本沙漠学会第29回学術大会、石巻専修大学

2018年６月６日　‘Local Craftsmen’s Understanding of Imported Varieties of Black Corals for Muslim Prayer Beads in Cairo, Egypt: “Natural Black Coral from the Red Sea, and Cultured Black Coral from Chinese Islands”.’ 4th Asia-Pacific Coral Reef Symposium 2018 “Coral Reefs of the Asia-Pacific: Working Together Amidst Contemporary Challenges”, Marco Polo Plaza, Cebu, Philippines

2018年６月20日　‘Environmental Conservation with Foreign Workers: A Case Analysis of Nature Reserve Management in Saudi Arabia.’ International Symposium on Society and Resource Management（ISSRM）“Landscape Legacies and Global Trajectories”, International Association for Society and Natural Resources, Snowbird Ski and Summer Resort, Utah, United States

2018年７月23日　「数珠としての琥珀――イスラーム教、キリスト教、仏教をつなぐ、先史と近代をつらぬく」第４回アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態シンポジウム『西洋海洋中心文明のグローバル化とアジア・アフリカ社会』中部大学リサーチセンター

2018年10月14日　「半世紀前の現地収集資料と研究内容の社会的活用と共有化のプロセス――アラブ・イスラーム社会における“弱い社会的紐帯の強さ”の実践として」沙漠誌分科会研究会／人間文化研究機構「現代中東地域研究」秋田大学拠点「サウディアラビア、ワーディ・ファーティマ半世紀前の記録とその活用に向けた方法論の検討」大東文化会館。

2018年10月26日　「マングローブ林におけるヒトコブラクダ対策の課題――スーダン東部紅海沿岸における持続的な生計活動と環境保全の両立に向けて」草炭緑化協会講演会、早稲田大学理工学部大久保キャンパス

2018年11月１日　「砂漠の族長に学ぶ、リーダーシップ像――資源の少なさ、不安定さ、争いをどう乗り越えるか？」東北地域産業技術連携推進会議事務局『2018年度工業系支援機関ネットワーク研修会 in 東北』、中小企業大学校仙台校

2018年11月14日　‘Using GIS and Remote Sensing to Identify Seasonal Movements, Habitat Preference, and Diet Selection of One-humped Camel in a Coastal Plain, South of Port Sudan, Red Sea Coast of Sudan.’（Tani, K., Gaiballa, AK., Gaiballa, AK., Mohammad, AB. and Hoshino, B.との共同発表）The 5th Conference of the International Society of Camelid Research and Development, Laâyoune, Morocco

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」秋田大学国際

資源学部拠点研究代表者、科学研究費助成事業基盤研究（B）（海外学術調査）「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」研究代表者、新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（課題番号16H06281、中核機関：国立民族学博物館）の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ（略称 DiPLAS）採択プロジェクト研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本沙漠学会沙漠誌分科会会長、日本沙漠学会評議員、日本沙漠学会編集委員、日本ナイル・エチオピア学会評議員、片倉もとこ記念沙漠文化財団代表理事、国連砂漠化対処条約専門家（日本、人類学・社会学分野）、秋田市環境審議会委員

■学術資源研究開発センター

中生勝美［なかお　かつみ］―― 教授

1956年生。**【学歴】**中央大学法学部法律学科卒（1979）、明治大学法学研究科博士前期課程修了（1981）、上智大学文学研究科博士後期課程満期退学（1989）**【職歴】**外務省嘱託専門調査員（在香港日本国総領事館）（1987）、日本学術振興会特別研究員（1989）、宮城学院女子大学・短期大学助教授（1992）、和光大学人間関係学部助教授（1995）、大阪市立大学文学研究科助教授（2002）、東洋英和女学院大学教授（2005）、桜美林大学教授（2007）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2016）**【学位】**論文博士（京都大学人間・環境研究科 2014）**【専攻・専門】**社会人類学、中国地域研究 **【所属学会】**日本文化人類学会、日本民俗学会、アジア政経学会、現代中国学会、比較家族史学会

【主要業績】

［単著］

中生勝美

2016 『近代日本の人類学史――帝国と植民地の記憶』東京：風響社。

1990 『中国村落の権力構造と社会変化』東京：アジア政経学会。

［編著］

中生勝美編

2000 『植民地人類学の展望』東京：風響社。

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「民族学研究アーカイブズ」に基づく日本人類学史の研究

・研究の目的、内容

長年続けていた日本人類学史の研究を、2016年３月に『近代日本の人類学史――帝国と植民地の記憶』（風響社）として刊行した。一昨年度より、民博の共同研究「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」が採択され、学史研究を深めている。アーカイブを用いた日本の人類学史を再構築することを目的に研究を進めている。

・成果

人類学の歴史解明のための基礎研究をつづけ、図書館に所蔵している『台湾日日新報』のマイクロフィルムの資料、瀬川孝吉の寄贈した台湾総督府関係の資料を活用して、「統治初期の台湾原住民調査」の原稿を完成し、松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』思文閣、2019年３月、141-192で公表できた。

国立民族学博物館共同研究会（一般）に応募して一昨年採択され、「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」というテーマで、総勢12人の共同研究を運営し、研究会を４回開催した。第３回は、国立国語研究所との共催で研究会を組織し、インテリジェンスに関して、加藤哲郎一橋大学名誉教授から貴重なコメントをもらい、研究会にたいして貴重な示唆を得ることができた。一昨年度、上記の民博共同研究に応募し、科研Ｂを申請し、「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとイ

ンテリジェンスに関する人類学史」が採択された。

映像・音響資料部に保管されている小林保祥資料の研究を、昨年から引き続き進めている。著作権処理に関する手続きをするため、著作権者を探して手続きを進め、民博として資料公開できる基礎作業を行った。この研究を基礎に、須藤健一代表の科研A「「ネットワーク型博物館学の創成（2015-2019）科学研究費助成事業による研究プロジェクト」の研究協力者として台湾をフィールドワークし、資料の解明に努めた。

平井康之［ひらい　やすゆき］ 教授

1961年生。**【学歴】**京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）**【職歴】**コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）**【学位】**博士（芸術工学）（九州大学 2016）、修士（英国王立芸術大学院 1992）**【専攻・専門】**デザイン専攻**【所属学会】**日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

［共著］

平井康之・藤　智亮・野林厚志・真鍋　徹・川窪伸光・三島美佐子
　2014 『知覚を刺激するミュージアム――見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池　禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら
　2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

朝廣和夫・尾方義人・古賀　徹・近藤加代子・谷　正和・田上健一・冨板　崇・平井康之
　2012 『デザイン教育のススメ――体験・実践型コミュニケーションを学ぶ』東京：花書院。

【受賞歴】

2014　2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）
2014　第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）
2013　「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）
2013　The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞
2013　IAUD アウォード2013　入賞「みんなの美術的プロジェクト」
2010　第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）
2009　2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）
2009　第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
2008　2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
2008　第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
2003　三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
2002　富山プロダクトデザインコンペティション入選
2002　2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
1996　1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
1996　海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
1996　1996年度レッド・ドット賞＜ドイツ・エッセンデザインセンター＞（インタープレイスシリーズ）
1994　1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
1993　第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
1993　コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
1992　1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）

1991　1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ユニバーサルミュージアム構築の理論と実践

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアム構築にむけて、障がい者をはじめとする外国人や高齢者、その他鑑賞が難しい多様な来館者を対象に研究を進める。展示空間におけるサイン計画の可能性の調査と、情報部会と共同で「来館者視点からの情報化」をテーマにデジタル触地図の展示室への設置を進める。

・成果

今年度は、引き続き情報部会と共同でユニバーサルミュージアム構築のための「来館者視点からの情報化」をテーマに、展示空間におけるサイン計画の情報化を進めた。

具体的には、継続テーマであるデジタル触地図の展示室への設置計画を進めた。今年度は既に展示室への設置している機器のアップグレードと新規機器の設置を目指した。

筐体の設計は前年度に終わり、前年度に１台目の設置は完了している。機器のアップグレードはFLASHのバージョンアップによる改修を目指し、設置済みの機器についてはFLASHのアップデートを行った。

しかし９月に当初計画時点で中心的であったFLASHから現在主流となっているHTML5へ、基本システムを根本的にアップグレードすることとしその開発のため今年度は新たな機器の設置はおこなわず、HTML5の開発をおこなった。２月の検証で次年度の実装に向けた課題を整理した。

北原　モコットゥナシ　次郎太［きたはら　もこっとぅなし　じろうた］――――――

ついて詳細に検討した。それらの成果も踏まえつつ、アイヌ文化におけるシャマニズムとシベリアとの類似性について「トゥスクル――アイヌのシャマンはどう祈る」と題して「2018年度アイヌ文化普及啓発セミナー」（主催（公財）アイヌ民族文化財団）において講演した。

◎出版物による業績

［監修］

北原モコットゥナシ・蓑島栄紀

2019 『アイヌ　もっと知りたい！ くらしや歴史』東京：岩崎書店。

［論文］

北原モコットゥナシ

2019 「人格神の習合を考える――アイヌ・朝鮮の類話を手がかりに」『口承文芸研究』42：1-15。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年６月３日 「人格神の習合を考える――アイヌ・朝鮮の類話を手がかりに」第42回日本口承文芸学会大会、関西福祉科学大学

・展示

2018年11月24日～2019年１月23日 （公財）アイヌ民族文化財団2018年度工芸品展「キムンカムイとアイヌ――春夏秋冬」企画委員

◎調査活動

・国内調査

2018年２月16日―東京都台東区（東京国立博物館においてアイヌ民具調査）

・海外調査

2018年10月14日～10月16日―ロシア（ペテルブルグにおいてアイヌ民具調査）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

小樽商科大学非常勤講師（2018年前期）、札幌大谷大学非常勤講師（2018年後期）

田森雅一［たもり　まさかず］――――――

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と南アジア音楽文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、グローバル化された“地続きの世界”における南アジアと欧米・日本という、より拡大された空間における「音楽文化と宗教・社会関係・ジェンダー」の動態について検討することにある。より具体的には、ヒンドゥーとイスラームが共生する南アジア社会、特にインドとパキスタンの国境の砂漠地帯のラージャスターンをルーツとする音楽芸能カーストのローカルな社会組織と、音楽家たちのトランス・ローカルな活動・ネットワーク形成を調査・検討することで、近代における音楽伝統・社会組織の再生産およびグローバル化のあり方について明らかにすることにある。

・成果

ラージャスターン地方の村落に生活の基盤を置き、支配カーストの人生儀礼や村落の祭礼において音楽演奏を生業としてきた世襲楽師たちは、インド独立にともなう藩王制度の廃止とともにパトロンとの間に築き上げてきた持続的な関係を失った。彼らの多くは演奏機会を求めて都市に移住し、その技芸を存続させてきたが、音楽教師やラジオ局付音楽家といった職業のポストは限られ、一回限りのコンサートやホテルでの観光客相手のイベントへの出演で安定した生計を立てるのは困難であった。そのような状況が変化したのは、1980年代からのインドの経済開放というグローバル化の流れのなか、個人的なネットワークを頼って海外に演奏機会を求める者たちが増加してからである。

本研究ではこのような実態をとらえるために、ラージャスターン州の州都ジャイプルからフランスに渡って成功をおさめた伝統的楽師一族に対する継続的な調査を行っている。本調査は、「南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点MINDAS」の資金援助によって行なわれた2014年からの一連のもので、複数のインフォーマントへのインタビューにより、インドのグローバル化の流れの中で、彼らがどのようなネットワークを築き上げ、音楽演奏の機会を見いだしてインドとヨーロッパを往来して今日に至っているのかという課題のもと、本年度も継続して調査を行った。

また、インドにおける音楽芸能カーストの形成に、大きな影響を与えたと考えられる英領インド帝国期の民族誌や国勢調整について検討し、MINDAS音楽芸能斑の第１回研究会で発表した。この研究会は、当方が研究代表を務める科研費「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究」との共同研究として行われた。さらに、「南アジア地域研究・東京外国語大学拠点FINDAS」の研究会においては、ラージャスターンの絵解き語り師であるボーパが用いる叙事詩絵画の空間について分析し発表した。

なお、2018年度は南アジアの音楽文化の可視化という視点から、国立民族学博物館・企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」（会期2019年２月21日～５月７日）の企画運営委員（委員長：寺田吉孝）として、開催準備を行ない、２つの論文等をまとめ、みんぱく研究公演「薫り立つインド宮廷の華――弦楽器サロードの至芸」では、解説者を務めた。

＜論文等＞

2018 「サロード誕生の秘密」『季刊民族学』166号、27-34頁、千里文化財団

2019 「インド弦楽器サロードとの出会い」『月刊みんぱく』２月号、４頁、国立民族学博物館

＜口頭発表＞

1)「英領インド帝国期の音楽芸能カーストの結晶化とその余波――北インドのミーラースィーとタワーイフを中心に」、南アジア地域研究国立民族学博物館拠点MINDAS「音楽・芸能」班2018年度第１回研究会、共同開催：科研基盤（C）「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究（研究代表：田森雅一）」2018年10月13日、国立民族学博物館第１演習室

2)「ラージャスターンのボーパと絵解き語り――叙事詩空間におけるラーマ物語との関係性を中心として」、南アジア地域研究東京外国語大学拠点2018年度第５回FINDAS研究会、共同開催：科研基盤（B）「南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承」（研究代表：水野善文）、2019年２月２日、東京外国語大学本郷サテライトオフィス８階セミナー室

3) みんぱく研究公演「薫り立つインド宮廷の華――弦楽器サロードの至芸」解説、2019年３月２日、ホテル阪急エキスポパーク多目的ホール（国立民族学博物館・企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」（会期 2019年２月21日～５月７日）の関連研究公演）

＜MINDASによる海外調査＞

調査主旨：フランスにおけるインド音楽の動向およびラージャスターン出身インド音楽家の活動と社会関係・グローバル・ネットワークに関する追跡調査

調査地域：フランス・パリ市

調査期間：2018年８月２日～９日（８日間）

調査概要：ラージャスターン州ジャイプル市出身で音楽芸能グループを率いてフランスなどヨーロッパで活動する代表者３名及びラージャスターン出身民謡歌手などにインタビューし、彼らのネットワークや出身地域における親族関係・社会組織・パトロン等に関する聞き取り調査を行い有益な知見・情報を得た。

＜その他の民博関連の活動＞

国立民族学博物館・企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」（会期 2019年２月21日～５月７日）の企画運営委員（委員長：寺田吉孝）として、開催準備を行った。

◎出版物による業績

［論文］

田森雅一

2018 「サロード誕生の秘密」『季刊民族学』166：27-34。

［その他］

田森雅一

2019 「インド弦楽器サロードとの出会い」特集「南アジア、弦の響き」『月刊みんぱく』968：16-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年10月13日 「英領インド帝国期の音楽芸能カーストの結晶化とその余波――北インドのミーラースィーとタワーイフを中心に」南アジア地域研究国立民族学博物館拠点MINDAS「音楽・芸能」班2018年度第１回研究会、共同開催：科研基盤（C）「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究（研究代表：田森雅一）」国立民族学博物館

2019年２月２日 「ラージャスターンのボーパと絵解き語り――叙事詩空間におけるラーマ物語との関係性を中心として」南アジア地域研究東京外国語大学拠点2018年度第５回FINDAS研究会、共同開催：科研基盤（B）「南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承（研究代表：水野善文）」東京外国語大学

・研究公演

2018年４月14日 「薫り立つインド宮廷の華――弦楽器サロードの至芸」解説、企画展『旅する楽器――南アジア、弦の響き』（会期2019年２月21日～５月７日）の関連研究公演）国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2018年８月２日～８月９日―フランス（フランスにおけるインド音楽の動向およびラージャスターン出身インド音楽家の活動と社会関係・グローバル・ネットワークに関する追跡調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科研基盤（C）「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究」研究代表者

外国人研究員

ARAKAWA, Fumiyasu［荒川　史康］―― 准教授

任期：2017年11月１日～2018年６月30日

研究課題：ミンブレス土器資料を対象とした先住民との協働解釈調査

【学歴・学位】アイダホ大学人類学部（1996）、アイダホ大学大学院人類学部修士課程修了（2000）、ワシントン州立大学大学院人類学部博士課程修了（2006）**【職歴】**ワシントン州立大学人類学部講師（2007）、ワシントン州立大学

人類学部助教（2011）、ニューメキシコ州立大学附属博物館館長（2015）、ニューメキシコ州立大学人類学部准教授（2016）**【学位】**博士（ワシントン州立大学 2006）、修士（アイダホ大学 2000）**【専攻・専門】**考古学・先史学

【主要業績】

［共著］

Arakawa, F., D. Gonzales, N. McMillan, and M. Murphy

2016 Evaluation of Trachyte Tempered Pottery Sherds from Chaco and Chaco Outlier Sites in the American Southwest. *Journal of Archaeological Science: Report* 6: 115–124.

Arakawa, F., M. Varien, and T. Kohler

2016 American Southwest. In Chapter 8 Special Issue on North American Archaeology, *Cultural Antiqua*, translated and edited by K. Sasaki.

Gonzales, D., F. Arakawa, and A. Koenig

2015 An Application and Appraisal of Different Methods to Determine the Source of Sanidine-Bearing Pottery Temper, Four Corners Region, U.S.A. *Geoarchaeology* 30: 59–73.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ミンブレス土器資料を対象とした先住民との協働解釈調査

・研究の目的、内容

1.「フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト」への貢献

民博招聘に先立ち、2017年８月28日から９月２日の６日間にわたり、民博のフォーラム型情報ミュージアム・プロジェクトが主催する国際ワークショップを米国ニューメキシコ州で開催した（国際ワークショップ「博物館とディセンダントコミュニティおよびソースコミュニティとの協働――米国ニューメキシコ州 Mimbres 遺跡出土資料熟覧と遺跡実見を介したアート作品制作と展示計画」）。このワークショップでは、荒川氏が館長を務めるニューメキシコ州立大学附属博物館が収蔵するシンブレス遺跡出土土器と同州トュルースオアコンシクエンシーズ市のジェロニモ・スプリングス博物館収蔵土器資料の合計37点を先住民ホピが熟覧を行った。

民博滞在中に、そのワークショップ時に熟覧者が発した土器解説コメントを分析した。これはソースコミュニティに協力を仰ぐことによって民族学博物館が収蔵する民族誌資料の文化的な生命力の蘇生を目指す当プロジェクトにおいて、対象を考古学資料にも応用した初の試みであり、シンブレス土器を対象とする米国南西部考古学の分野においてもこれまでほとんどなされてこなかったアプローチであった。

2. 国際連携展示の企画を含めた研究成果の国際発信・教育利用

「1」で得られたデータの一部は、民博研究懇談会（2018年５月16日、第285回研究懇談会）や米国コロラド州コロラド大学で口頭発表を行った。また英文編著としてまとめている最中である。さらに、今後も、例えば『American Antiquity』、『Kiva』といった学術雑誌への投稿や以下の米国内・国際学会等での口頭発表も計画している（Joint Seminar of the Research Department, American Anthropological Association, Society for American Archaeology, Mogollon conferences）。

2019年４月には、国際連携展示として荒川氏が館長を務める NMSU 附属博物館での展示を計画している。展示会の名称は『Living in Sacred Continuum』である（会期：2019年４月26日～2019年12月15日）。当館は日本でいう小学校一年生から大学四年生までを対象とした、展示場における教育活動を重視しているため、国際連携展示という形式での成果発信だけでなく、教育活動利用にも努める。

3. 民博収蔵米国南西部先住民関連の土器資料の同定作業（先史考古学者による資料熟覧）

2018年６月21日、22日、25日に、民博１階展示準備室にて、民博が収蔵する米国南西部先住民関連の土器資料35点について、資料熟覧を行い、米国南西部考古学に準じた分析と解説を行った。

これらの35点の土器資料は、1979年にニューヨーク州のプルーム交易会社付設インディアン博物館から一括で購入したものだが、受入当初から資料情報が僅少で、展示利用の可能性が極めて低かった。そういった状況に対して、ソースコミュニティ（ズニ族とホピ族）ならびにこの地域を専門とする考古学者による見解を付したことで、資料情報の厚みが加わったばかりか、今後、分析視点の異なる両者の見解を併置して展示・提示することも可能となった。

・成果

「1」の成果として、荒川・伊藤編の『Alternative Narratives: A Singular Case Study of the Mimbres Pottery Workshop』として初稿を書き上げ、今後は改稿を重ね、2019年もしくは2020年に米国アリゾナ大学出版会に投稿して刊行を目指している。また、資料熟覧コメントの部分に関しては日本語訳も行い、当プロジェクトで構築したデータベース『RECONNECTING Source Communities with Museum Collections』(http://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）にもデータを移行し、公開する予定である。

「2」の成果として、民博研究懇談会（2018年５月16日、第285回研究懇談会）と米国コロラド州コロラド大学での口頭発表がある。また、2019年４月には、国際連携展示として荒川氏が館長を務めるNMSU附属博物館で展示を開催した（『Living in Sacred Continuum』）。

「3」に関しては、今回熟覧した35点の土器資料の中で16点の「Zuni」製資料は、2009年７月に元ズニ博物館長のJim Enoteが民博にて資料熟覧を行っており（『国立民族学博物館研究報告』35(3) として刊行済み）、それ以外の19点の「Hopi」製土器資料も2015年11月に２名のホピによって民博にて熟覧が行われている。そこで語られた内容はフォーラム型情報ミュージアムの国際発信プログラムとして刊行した。収蔵機関である民博が保持してきた資料情報、この数年で行ってきたソースコミュニティ（ズニ族とホピ族）による資料解説といった二種類の情報に対して、当該土器資料が制作された地域を専門とする先史考古学者による資料解説を新たに付すことは、資料情報の厚みを加えられるばかりか、今後、分析視点の異なる三者の見解を併置して展示・提示することが可能となった。

HOFER, Theresia［ホーファー　テレジア］ 講師

任期：2018年９月23日～2018年11月30日

研究課題：現代ラサ（チベット）における手話言語使用とコミュニティーへの帰属意識

【学歴・学位】ウィーン大学社会・文化人類学専攻Magister（学士および修士前半に相当）、ブルネル大学医療人類学専攻MSc（修士）（2005）、ロンドン大学医療人類学・医療史PhD（博士）（2011）**【職歴】**ロンドン大学文化人類学・医療史学部リサーチフェロー（2005）、スイス赤十字社外部コンサルタント（2006）、ダートモスカレッジ文化人類学部リサーチアシスタント（2007）、オーストリア科学アカデミー社会人類学研究所リサーチアソシエイト（2008）、ロンドン大学文化人類学・医療史学部非常勤講師（2009）、ルービン美術館客員学芸員（2010）、オスロ大学医療人類学部医療社会学科客員研究員（2010）、オスロ大学医療人類学部医療社会学科非常勤講師（2010）、オスロ大学医療人類学部医療社会学科マリー・キュリーポスドク研究員（2012）、オックスフォード大学・ウェルカムリサーチフェロー（2016）、オックスフォード大学リサーチアソシエイト（2016）、ブリストル大学文化人類学科講師（2016）**【学位】**博士（ロンドン大学医療人類学・医療史PhD 2011）、修士（ウィーン大学社会・文化人類学専攻Magister（学士および修士前半に相当）、ブルネル大学医療人類学専攻MSc 2005）**【専攻・専門】**社会・医療人類学

【主要業績】

［単著］

Hofer, H.

2018 *Medicine and Memory in Tibet: Amchi Physicians in an Age of Reform* (Studies of Ethnic Groups in China). Edited by S. Harrell. Seattle: University of Washington Press.

2016 *Medicine on the Margins: Memory, Agency and Reform in Tibet* (Studies of Ethnic Groups in China). Edited by S. Harrell. Seattle: University of Washington Press.

［論文］

Hofer, H.

2016 Is Lhasa Tibetan Sign Language（TSL）Emerging, Endangered, or Both? Notes on TSL's History, Linguistic Vitality and Tibetan Signers in the Tibet Autonomous Region. *International Journal of the Sociology of Language*. Berlin: De Gruyter.［査読有］

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代ラサ（チベット）における手話言語使用とコミュニティーへの帰属意識

・研究の目的、内容

Theresia Hoger 先生には、部門関連の招聘として、以下の三点を中心に研究活動を行っていただいた。

1) 日本における手話関連機関への訪問と講演

2) 2021年言語展示の手話部分に関し、受け入れ教員および部門メンバーと共同で検討

3) 国内のチベット研究関係者との交流により、ご自身のチベット手話に関する研究を推進。

・成果

滞在期間中、民博で主催した「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2018」での基調講演、慶応義塾大学言語学コロキアムでの招待講演、京都大学共同研究「チベット文明の継承と史的展開の諸相」での招待講演、大阪大学リレー講義における授業をご担当いただくなど、みんぱく手話部門の研究事業に積極的に関わり、貢献していただいた。また、期間中は定期的に菊澤および他の部門のメンバーと打ち合わせの場を持ち、2021年の言語関連の特別展の段取りおよび内容に関する検討を進め、むこう 3 年間の予定を立てることができた。

海外の美術館等で展示コーディネーターの経験を持つ Hofer 先生に入っていただいたことで、短時間でより具体的な内容をつめることができた。また期間中は、明晴学園、京都ろう学校など、日本のろう教育関係の機関を訪問・交流され、ご自身の研究に役立てられると同時に、特別展示での協力機関の可能性についても検討していただくことができ、部門のメンバーが持っているリソースを一歩、広げる役割を担っていただくことができ、ありがたく思っている。

KADOI, YUKA［カドイ　ユカ］―― 准教授

任期：2018年 9 月 1 日～2019年 2 月28日

研究課題：中東地域民衆文化資料コレクションの情報高度化

【学歴・学位】立命館大学東洋史専攻文学学士課程（1996）、立命館大学東洋史専攻文学修士課程（2000）、立命館―エジンバラ交換留学、エジンバラ大学（1999）、エジンバラ大学美術史専攻文学修士（M.Sc. by Research）（2000）、エジンバラ大学美術史専攻文学博士（Ph.D）（2005）**【職歴】**爾依美術館（Liang Yi Museum、香港）客員学芸員（2016）、アル・サバーハコレクション（クエート）客員研究員（2014）、レバノン・アメリカン大学（ベイルート）客員教授（2015）、国立美術館芸術高等研究所（CASVA、ワシントン）客員研究員（Ailsa Mellon Bruce Visiting Senior Fellow）（2015）、エジンバラ大学イスラーム・中近東研究所研究員（2012）、シカゴ美術館アジア部門学芸員（Andrew W. Mellon Curatorial Fellow）（2008）、イスラーム美術館（ドーハ、カタール）学芸員（2007）、ロンドン大学ウォーバーグ研究所客員研究員（Albin Salton Fellow）（2005）、イスタンブールイスラーム研究所（ISAM）客員研究員（2005）、エジンバラ大学人文学部・高等研究所（IASH）客員研究員（2005）、エジンバラ大学美術・建築学科非常勤講師（2005）**【学位】**博士（エジンバラ大学 2000）、修士（エジンバラ大学 2005）**【専攻・専門】**イスラーム美術史

【主要業績】

［単著］

Kadoi, Y. and I. Szántó

2013 *The Shaping of Persian Art: Collections and Interpretations of the Art of Islamic Iran and Central Asia*, Newcastle-upon-Tyne: Cambridge Scholars Publishing.

［編著］

Kadoi, Y (ed.)

2017 *Persian Art: Image-making in Eurasia*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

2016 *Arthur Upham Pope and A New Survey of Persian Art* (Studies in Persian Cultural History 10). Leiden: Brill.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東地域民衆文化資料コレクションの情報高度化

・研究の目的、内容

当初の来日予定の日に、台風のため関西空港が閉鎖となり、さらにリスケジュールしたフライト予約を航空会

社が無断にキャンセルしたためチケットが発券されず、着任が延期された。また、当初の受け入れ予定であった菅瀬准教授が病気療養に入ったため、山中が門井氏との共同研究を主に行うこととなった。

招へい期間中は、イラン・イスラーム革命以前（1960年代後半～70年代）の近現代イラン工芸の制作現場に関る情報と、ジェイ・グラフィックの伝記的な情報を調査しつつ、西日本のペルシア美術コレクションを蔵する美術館・博物館を調査し、フォーラム型情報データベースを充実させる研究を行った。

・成果

当館が所蔵する中東地域民衆文化資料コレクション、特にフォーラム型情報データベースプロジェクト（2017.4–2019.3　代表：西尾哲夫）の対象となっているグラフィック・コレクション、および標コレクションの中東関係の資料情報の高度化に携わり、データベース上の情報の精査を行った。データベースは近日中公開予定である。

西日本のペルシア美術コレクションと、当館所蔵のイラン工芸コレクション調査の成果は、2019年３月10日にイラン国立博物館で開催されるワークショップ（みんぱくと同博物館の学術協定に基づく）で、門井氏が発表する予定であり、門井氏は本共同研究の国際展開にも寄与している。

KUDAISYA, Gyanesh［クダイシャ　ギャネーシュ］―― 教授

任期：2018年５月14日～2018年６月13日

研究課題：南アジアにおける「地域」の再想像

【学歴・学位】デリー大学文学部（インド）卒業（1979）、ジャワーハルラール・ネルー大学歴史学研究科（インド）修士課程修了（1981）、ジャワーハルラール・ネルー大学歴史学研究科（インド）M. Phil 課程修了（1985）、ケンブリッジ大学歴史学研究科（イギリス）博士課程修了（1992）**【職歴】**インド歴史学研究機構（インド）助教（1993）、ネルー記念博物館現代史研究部門（インド）研究員（1994）、ナンヤン技術大学文学部（シンガポール）講師（1998）、シンガポール国立大学文学部（シンガポール）講師（1999）、シンガポール国立大学文学部（シンガポール）准教授（2006）**【学位】**博士（ケンブリッジ大学 1992）、M.Phil 学位（ジャワーハルラール・ネルー大学 1985）修士（ジャワーハルラール・ネルー大学 1981）**【専攻・専門】**インド現代史

【主要業績】

［単著］

Kudaisya, G.

2017　*A Republic in the Making, India in the 1950s.* New Delhi: Oxford University Press.

［論文］

Kudaisya, G.

2016　The “Regional” Turn in the Writing of modern Indian History: Some Notes on the State of the Field. *South Asia: Journal of South Asian Studies* 39(1): 271–285.

2016　‘Azadi Batwara or Vibhajan’: What Happened on 14–15 August 1947 in the Indian Subcontinent? In B. Sekhar（ed.）*Decolonisation and the Politics of Transition on South Asia,* pp.23–78. New Deli: Orient BlackSwan.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南アジアにおける「地域」の再想像

・研究の目的、内容

国立民族学博物館図書館や大阪大学図書館所蔵の図書資料等を活用、また国立民族学博物館の南アジア研究者との意見交換などに基づき、南アジア、特に独立後から現代にいたるインドにおける「地域」概念の形成過程を政治史や社会史と関連づけながら解明する研究を継続した。その成果の一端は２に記すセミナーで発表したほか、今後著書や論文として刊行する計画である。

「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点がハブとなって構築した「アジアにおける南アジア研究センターコンソーシアム」には、報告者はシンガポール国立大学の代表として参画している。今回の滞在では同拠点の代表（三尾　稔教授）や構成員らとこのコンソーシアムの今後の発展に関して意見交換を行った。また開催校

の都合から来年度シンガポール国立大学で開催することとなった同コンソーシアムの国際シンポジウムのテーマや構成についても意見交換を行い、シンポジウム開催の準備を進めた。

・成果

＜口頭発表＞

‘Cartographies of the Nation and Region-Making: India in the 1950’s’

「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点2018年度第１回国際セミナー

2018年５月29日　国立民族学博物館大演習室

＜論文＞

‘Engendering Diplomacy: Claire and Walter Crocker in New Delhi in Nehru’s India’, in David Lowe and Eric Meadows（eds.）, *Australian Diplomacy in India: Reflections on Seventy Years*, Canberra, ANU Press, forthcoming

POST, Jennifer Campbell［ポスト　ジェニファー　キャンベル］――――――

ADAMA, Ousmanou［アダマ　ウスマヌ］―― 准教授

任期：2018年11月15日～2019年２月15日
研究課題：国立民族学博物館カメルーン資料の歴史人類学的研究
【学歴・学位】ンガウンデレ大学（カメルーン）歴史学部卒業（2003）、ンガウンデレ大学（カメルーン）歴史学部修士課程修了（2004）、ンガウンデレ大学（カメルーン）歴史学部D.E.A.取得（2005）、ンガウンデレ大学（カメルーン）歴史学部博士課程修了（2006）**【職歴】**ライデン大学アフリカ研究所（オランダ）助教研究員（2006）、マルワ大学（カメルーン）歴史学部上級講師（2013）、バーゼル大学アフリカ研究センター（スイス）准研究員（2014）、ライニプ現代東洋センター（ドイツ）准研究員（2017）**【学位】**博士（ンガウンデレ大学 2009）、D.E.A.（ンガウンデレ大学 2005）、修士（ンガウンデレ大学 2004）**【専攻・専門】**歴史学

【主要業績】
［単著］
Adama, O.
2016 *Islam, Ethnicité et Pouvoir dans le bassin du Lac Tchad de 1960 à 2000, étude comparative du Cameroun, du Nigeria et du Tchad*. Düsseldorf: Presse Académique Francophones.
［論文］
Adama, O.
2018 Boko Haram's E-Jihad: Interpretative of Videoanalysis of a Sociopolitical Situation in Northern Cameroon and Nigeria. *International Journal of Research without Boundaries* 5: 53–77.［査読有］
2016 Historizing Ethnicity: Critical Theme in Cameroonian Studies. *International Journal of Research without Boundaries* 2: 21–43.［査読有］

【2018年度の活動報告】
◎各個研究
・研究課題
国立民族学博物館カメルーン資料の歴史人類学的研究
・研究の目的、内容
西アフリカに関して本館が有する図書資料・映像音響資料・アーカイブズ資料を渉猟してその所在と有用性を確認した。映像音響資料についてはとりわけ端信行コレクションを、アーカイブズ資料についてはとりわけ江口一久アーカイブの閲覧（視聴）に時間をかけ、その利用可能性について検討を進めた。
　標本資料の熟覧の機会はかぎられていたが、受入期間中に受入担当教員がモデレイトしたワークショップ「日本におけるカメルーン民族誌資料の再生」の運営を補助することをとおして、カメルーンから集められた標本資料の付帯情報の検討に参画した。
・成果
受入期間中は、本館の非公式な研究会のほかに、３つの機関・大学において研究発表をおこない、カメルーンにおけるアフリカ研究の現状を紹介した。また、３本の研究論文（「資料」カテゴリーに該当するものを含む）を準備した。そのうちの一本は、本館が所蔵する江口一久アーカイブに関するもので、刊行されれば、本館のアーカイブズ資料の学術水準の高さを示すことになる。また、刊行をきっかけとして、アーカイブズ資料の国際的な利用が徐々に進んでいくものと期待できる。

RAGAZZI, Rossella［ラガッツィ　ロッセラ］―― 准教授

任期：2018年４月16日～2018年６月30日
研究課題：マイノリティの移動と文化変容に関する映像人類学研究
【学歴・学位】ローマ・ラ・サピエンツァ大学（イタリア）哲学科卒業（1988）、フランス国立社会科学高等研究院（フランス）D.E.A.取得（1994）、パリ第一大学（フランス）文化科学部修士号取得（2000）、ダブリン工科大学（アイルランド）社会科学研究科博士課程修了（2005）**【職歴】**トロムソ大学映像文化研究科社会人類学研究所（ノルウェー）専任講師（1998）、ベルリン自由大学（ドイツ）メディア・映像人類学修士課程客員講師（2009）、トロムソ大学博物館（ノルウェー）文化科学部准教授（2010）、ミュンスター大学（ドイツ）メディア・映像人類学、ド

キュメンタリー実践修士課程客員講師（2016）**【学位】**博士（ダブリン工科大学 2005）、修士（パリ第一大学 2000）
【専攻・専門】映像人類学・博物館人類学

【主要業績】
［論文］
Ragazzi, R.
2014 Challenging Our View of Temporality. *Asia Pacific Journal of Anthropology* 15(5): 57-461.［査読有］
2014 Il cinema etnografico transculturale. I film e la riflessione teorica di David MacDougall. *Visual Ethnography* 3(2): 68-91.［査読有］
2013 Liberating Mimesis: Between Art and Anthropology, *Critical Arts. A Journal for Cultural Studies* 27 (6): 801-808.［査読有］

【2018年度の活動報告】
◎各個研究
・研究課題
マイノリティの移動と文化変容に関する映像人類学研究
・研究の目的、内容
約２カ月半にわたる日本での滞在期間、ラガッツィ氏は以下の場において研究報告、さらに自作の民族誌映画の上映を行った。
口頭発表『ノルウェー・ラップランドにおけるアートと映画――文化遺産へのはたらきかけと新たな形成』、第286回民博研究懇談会（６月13日、民博）
民族誌映画『受け継ぐ人々／Firekeepers』（Rossella Ragazzi 監督、2007年）の上映・討論、
展覧会「im/pulse: 脈動する映像」関連上映会（６月７日）、京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA）
報告『欧州における映像人類学系オンラインジャーナルの運営状況』、みんぱくオンラインジャーナルに関する検討会（５月29日、民博）
口頭発表『先住民サーミのパフォーミング・アーツとその変容』民博特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」に関わる研究会合（５月18日、民博）
以上のなかで、ラガッツィ氏は主に文化遺産が、過去から受け継がれた存在としてとらえられているだけではなく、現在の暮らしの中でその担い手たちにどのようにみなされ、実践され、そして修正されてゆくのかを先住民サーミの移動や物質文化の人類学的調査、サーミの文化変容に関する民族誌映画制作を事例に報告し、受け入れ教官の川瀬をはじめ、研究関心を共有する国内外の人類学者等と積極的に意見交換を行った。川瀬は映像人類学研究、民族誌映画製作の立場から、ラガッツィ氏による先住民サーミの文化変容やその表象（映画、博物館展示）の方法論に関する助言を行った。
・成果
以上の場で行ったラガッツィ氏の報告は、マイノリティ、先住民研究を重要な課題として掲げる当館にとって示唆に富む有意義なものであったことは間違いない。しかしながら今後は、当館とのかかわりのなかで、主に以下の二点においてラガッツィ氏の積極的な関与を期待したい。
今回、ラガッツィ氏は当館が1980年代に購入した先住民サーミに関する Harry B. Ely collection（サーミの物質文化を中心に約400点によって構成される）と、当資料に付随する文書の調査を行った。これらの資料の具体的な内容や収集地域、さらに資料が当館にいきついた由来については今まで不明瞭な点が多かった。ラガッツィ氏は当資料について庄司博史名誉教授等のサポートを得て、今後も継続的に調査を行いその内容について解明を目指す予定である。
ラガッツィ氏は欧州社会人類学者協会（EASA）の運営するオンラインジャーナル Anthrovision をはじめ、欧米のオンラインジャーナルの編集委員、査読の経験が豊富である。当館主体のオンラインジャーナルの運営を検討する上では、適宜アドバイザーとして関わっていただく予定である。

SHELTON, Anthony Alan［シェルトン，アンソニー・アラン］―――― 講師

任期：2018年１月４日～2018年６月29日
研究課題：フォーラム型情報ミュージアム構築のための方法論的研究：ブリティッシュコロンビア大学人類学博物

館の互恵的調査ネットワーク（RRN）の応用

【学歴・学位 】B.A.（Hons.), Upper Second in Sociology and Social Anthropology, Hull University, UK,（1976)、M. Litt., Social Anthropology, Oxford University, UK（1978)、 D. Phil., Social Anthropology, Oxford University, UK（2002）**【職歴】**Tutor, Interlingua（full-time), Ciudad Satelité Naucalpan, Mexico（1982)、Headmaster, Centro Escolar Tolteca（full-time）Atotonilco, Hidalgo, Mexico（1983)、 Institute Assistant, Institute of Social Anthropology, Oxford University, UK（1986)、 Curator, American Collections, British Museum, Department of Ethnography（Museum of Mankind), London, UK（1991)、 Keeper, Non-Western Art and Anthropology & Founding Director, The Green Centre for Non-Western Art and Culture, The Royal Pavilion, Art Gallery and Museums, Brighton, UK（1995)、 Keeper and Head of the Anthropology Collections and Research Group, The Horniman Museum, London, UK（1998)、 Head of Collections, Research and Development, The Horniman Museum, London, UK（2001)、 Professor, Department of Social and Cultural Anthropology, Co-ordinator, Research Group in Material, Visual and Performative Cultures, University of Coimbra, Portugal（2004)、 Professor, Department of Anthropology University of British Columbia, Vancouver, Canada（2004-）**【専攻・専門】**人類学

【主要業績】

［著書］

Shelton, A.A.

2015 *Heaven, Hell and Somewhere in Between: Portuguese Popular Art.* Vancouver: Vancouver Figure 1 Publishing and UBC MOA.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フォーラム型情報ミュージアム構築のための方法論的研究：ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館の互恵的調査ネットワーク（RRN）の応用

・研究の概要

シェルトン教授は、外国人研究員としての在任中、ブリティッシュコロンビア大学の人類学博物館（MOA）が、民族学的研究資料とその関連情報、とりわけソースである様々な民族や世界中のコミュニティの学術的・一般的情報の共同利用を目的として構築してきた「互恵的調査ネットワーク（RRN)」の知識・経験、方法論研究を生かし、本館のフォーラム型情報ミュージアム構築に貢献した。データベースの管理運営に関して岸上教授と意見交換を行い、アメリカ展示チームがこれから立ち上げるデータベース構築に協力にすることに合意した。

鈴木　紀、山中由里子両准教授らとともに収蔵庫でメキシコ仮面関連の標本資料の熟覧を行い、データベースに蓄積すべき研究情報のサンプルを提供した。熟覧した資料に関するエッセーを、『月刊みんぱく』（42巻11号及び42巻12号）の「想像界の生物相」にも寄稿した。

鈴木　紀准教授らとともに準備を進め、６月末に民博で開催予定であった世界博物館学ワークショップは、残念ながら震災の影響のために延期となってしまったが、民博創立の背景とその発展について得た知見を、英仏、北米における人類学と民族誌資料コレクションの歴史に照らし合わせ、民博を世界の博物館史の中に位置づけた論文を『研究報告』43巻１号に寄稿した。その他にも、ロンドンで開催された「美術、物質文化、表象」の国際会議において、神戸大学の窪田幸子氏とパネルを共同企画し、「クリティカル・ミューゼオロジー」の分野において成果発表を行った。

在任中には、民博の標本資料や図書資料を活用しながら、メキシコ仮面と仮面劇に関するこれまでの調査研究を総括した研究書の原稿も執筆し、来年刊行の予定である。民博のメキシコ仮面コレクションが想像以上に充実した、世界的にも有数のものであることが判明したため、将来、標本資料の精査を希望する。

・成果

＜研究業績＞

Shelton, A.A.

2018 Museums and the Anthropological Imagination: Positioning the National Museum of Ethnology, Osaka on its Fortieth Anniversary. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 43(1): 83-114.

2018　Baroque, Modernity, Critique and Indigenous Epistemologies in Museum Representations of the Andes and Amazonia. In *Curatopia: Museums and the Future of Curatorship*. Chapter DOI: https://doi.org/10.7765/9781526118202.00017（Online Publication）Manchester: Manchester University Press.

◎調査活動

・海外調査

2018年４月８日～４月15日―カナダ（カナダ博物館協会年次研究大会・博物館関連先住民委員会への出席およびブリティッシュコロンビア大学人類学博物館所蔵のメキシコの仮面の調査）

2018年５月５日～５月20日―カナダ（ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館の特別展示「The Arts of Resistance」のメキシコの仮面展示の演示実践と展示に関する調査）

2018年５月30日～６月６日―イギリス（大英博物館／ロンドン大学主催「Art, Materiality and Representation」国際会議参加、会議での共同司会、論文発表）

SIMON, Scot Eliot［サイモン，スコット・エリオット］―――― 講師

任期：2017年８月１日～2018年７月27日

研究課題：日本と台湾における人間と動物との関係の物質環境学

【学歴・学位】インディアナ大学文学部卒（1988）、アイオワ大学大学院宗教学部卒（1990）、マギル大学大学院人類学部修士課程修了（1994）、マギル大学大学院人類学部博士課程修了（1998）**【職歴】**台湾文藻大学英語学部助理教授（助教）（1999）、台湾中央研究院社会学研究所PD研究員（2001）、オタワ大学社会学部助手（アシスタント・プロフェッサー）（2004）、オタワ大学社会学部准教授（2014）、オタワ大学社会学部教授（2014-）**【学位】**Ph.D.（マギル大学）、修士（マギル大学）**【専攻・専門】**人類学

【主要業績】

［単著］

Simon, S.

2012　*Sadyaq Balae! L'autochtonie formosane dans tous ses états*. Québec: Presses de l'université de Laval.

［論文］

Simon, S.

2015　Real People, Real Dogs, and Pigs for the Ancestors: The Moral Universe of "Domestication" in Indigenous Taiwan. *American Anthropologist* 117(4): 983-709.

Simon, S. and A. Mona

2015　Indigenous Rights and Wildlife Conservation: The Vernacularization of International Law on Taiwan. *Taiwan Human Rights Journal* 3(1): 3-31.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本と台湾における人間と動物との関係の物質環境学

・研究の目的、内容

オタワ大学社会学部サイモン・スコット教授は受入期間中に、研究課題である日本と台湾における人間と動物との関係物質環境学に関わる調査、研究に従事するとともに、本館で進めているフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトの推進に努めた。

前者においては、日本における人間と動物との関係なかでも、鳥を結節点とする人間関係の動態に関する調査、研究を、日本の探鳥愛好家で構成される野鳥の会の諸活動に参加し、人間の社会関係を探究する新たな切り口を見出すことになった。

後者においては、受入教員である野林が代表を務める「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」の推進に尽力し、野林とともに国際シンポジウムの開催を行った。また、野林とともに、フォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトに関わる台湾におけるフィールド調査に共同で従事するとともに、海外の国際学会等での発表、講演を実施した。

・成果

1）国際シンポジウム“Ecological and Cultural Approaches to Taiwan and Neighouring Islands” held at Minpaku, July 19–20, 2018. 報告書を野林と共編でSES等で出版を計画している。

2）雑誌論文３本、国際会議発表等11本（招待講演含）、書評２本、その他。

◎調査活動

・海外調査

2018年６月18日～６月27日―イギリス（SOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）における学術発表および資料調査）

SIRONVARL, Margaret［シロンヴァル　マルガレット］―― 教授

任期：2018年９月１日～2018年10月１日

研究課題：アラビアンナイト仏語訳者 J.C.マルドリュス遺贈コレクションの研究

【学歴・学位】社会科学高等研究院（フランス）修士課程修了、パリ第３大学博士課程修了**【職歴】**フランス国立科学センター研究員（1985–2005）、国立民族学博物館外国人研究員（2004）**【学位】**博士（パリ第３大学）、修士（社会科学高等研究院）**【専攻・専門】**アラブ文学

【主要業績】

［単著］

Sironval, M.

2018　*Les Mille et Une Nuits, de Kay Nielsen*（*illustrateur danois*）. Paris: Taschen.

2011　*Les Mille et Une Nuits*. Paris: Citadelles et Mazenod.

［論文］

Sironval, M. et L. Daïf

2013　Marges et espaces Blancs dans le Manuscrit arabe des *Mille et Une Nuits* d'Antoine Galland. In C. Müller et M. Roiland-Rouabah（eds.）*Les non-dits du nom, Onomastique et documents en terres d'Islam. Mélanges offerts à Jacqueline Sublet*, pp.85–126. Damas et Beyrouth: Presses de l'Ifpo.

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アラビアンナイト仏語訳者 J.C.マルドリュス遺贈コレクションの研究

・研究の目的、内容

アラビアンナイトはガラン訳以降ヨーロッパの好みに合うような構成の写本に収斂していき、最終的に標準エジプト系物語集が誕生、その後ヨーロッパ化された文学伝統の中で標準化が進行したと仮設的に推定される。本研究では、出所不明の非標準物語を含む創作まがいのいかがわしい寄せ集め編集版とされてきたマルドリュス版の形成過程を解明するために、自筆原稿を含む未公開マルドリュス遺贈コレクションのデジタル化作業を受入担当教員と招聘研究者を含むチームで、この10年間で進めてきた。この調査成果をもとにカタログを編纂し、アラブとヨーロッパの文学伝統の邂逅によって誕生した正当な文学作品としてのマルドリュス版を再評価し、同版成立の謎を解明する。

・成果

アラビアンナイトのフランス語訳で知られるマルドリュス（Joseph-Charles Victor Mardrus, 1868–1949）は、19世紀終わりから20世紀はじめにかけて活躍した作家・医師で、マラルメやジッドといった当時の多くの著名な作家や芸術家、文化人と交流があり、彼らに大きな影響を及ぼした。しかし、彼の生涯や、アラビアンナイト以外の作品についての研究はほとんど行われていない。マルドリュス遺贈コレクションの中には、翻訳の自筆原稿をはじめ、執筆に利用した文献やノート類、未発表の原稿、さらには私的なドキュメントや著名な文人からの私信が多数含まれている。『アラビアンナイトのフランス語翻訳者、ジョセフ・シャルル・マルドリュスの遺贈コレクション目録』の編集作業を共同でおこなった。2020年度中に*Catalogue de Fonds Josephe-Charles Mardrus, traducteur des Mille et une Nuits*としてパリのLa Librairie Abencerage出版社より刊行する。

SOMFAI, David Istvan［ショムファイ デイビッド イシュトヴァン］―――――――――――――――――――――― 講師

任期：2018年11月１日～2019年９月30日

研究課題：モンゴルと北東アジアのシャーマニズムに関する博物館フィールドワーク――過去と現在

【学歴・学位】B.A., Mongolic Studies and Turkic Studies, ELTE Budapest University, Hungary（1999）、M.A., Mongolic Studies and Turkic Studies, ELTE Budapest University, Hungary（2000）、Ph.D, Altaic Linguistics, ELTE Budapest University, Hungary（2007）**【職歴】**Assistant Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary（2007）、Lecturer, Department of Inner Asia, ELTE Budapest University, Hungary（2009）、Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary（2009）、Visiting scholar, Department of Central Eurasia Studies, Indiana University, USA（2010）、Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary（2010-）**【専攻・専門】**Turkic and Mongolic Philology, Inner Asian Folklore, Shamanism

【2018年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルと北東アジアのシャーマニズムに関する博物館フィールドワーク――過去と現在

・研究の目的、内容

シャーマニズムの語源シャマン（サマン）が満洲語であることに象徴されているように、シャーマニズム研究にとって北東アジアは中核的地域であり、また北東アジアにとってシャマニズムは重要な要素である。そのため本館でも中央アジア・北アジア展示においてシャマニズム関係資料は点数も多く、かなりの面積を占めている。一方、ハンガリーはヨーロッパにおいて独特の言語を有することからアジア研究とりわけミハーイ・ホッパールに代表されるようにシャマニズム研究が盛んであり、現在でも学術誌“Shaman”が刊行されている。そこで、民博に収蔵・展示されている中央アジア・北アジア・東アジア（アイヌ）などの地域に関連する民博のシャマニズム関連資料について、ハンガリー人研究者バラートンらによる調査資料と照合することによって、詳細な学術情報を付加することを目的とした。

20世紀初頭の現地調査に関するハンガリー語旅行記（本館所蔵）と照合することにより、データベース用として詳細な学術情報を付加するとともに、従来のデータベース上の記載の誤りを訂正することができた。また、詳細不明だったモンゴル資料を中心に、本館コレクションの重要性が上述誌で紹介された。

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトにとって、シベリア少数民族のように危機言語の場合は、ソースコミュニティそのものが消滅の危機にあるため、過去の学術調査記録が極めて有益である。過去の学術調査記録を活用して情報を得るばかりでなく、ソースコミュニティへの還元も果たすことができた。